

579
122

579-122



1200501521197

箕輪町史考

全

Kodak Gray Scale



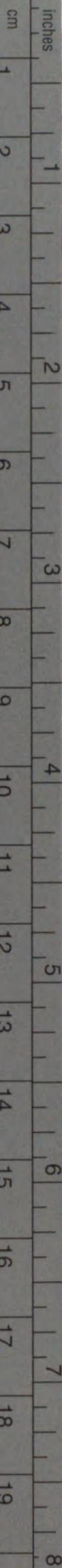
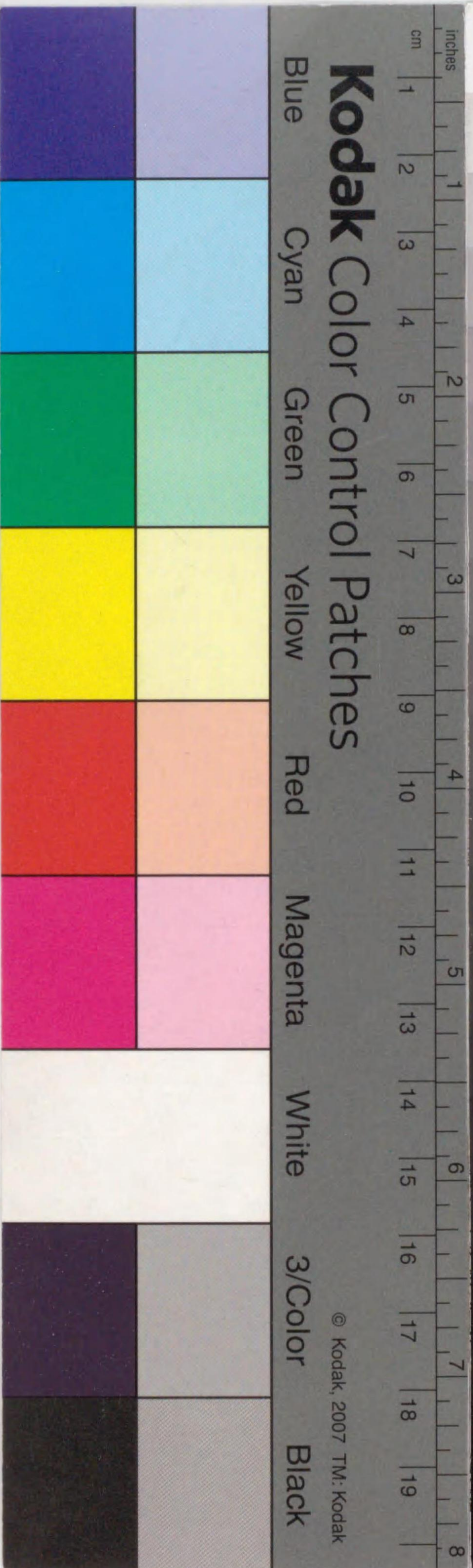
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

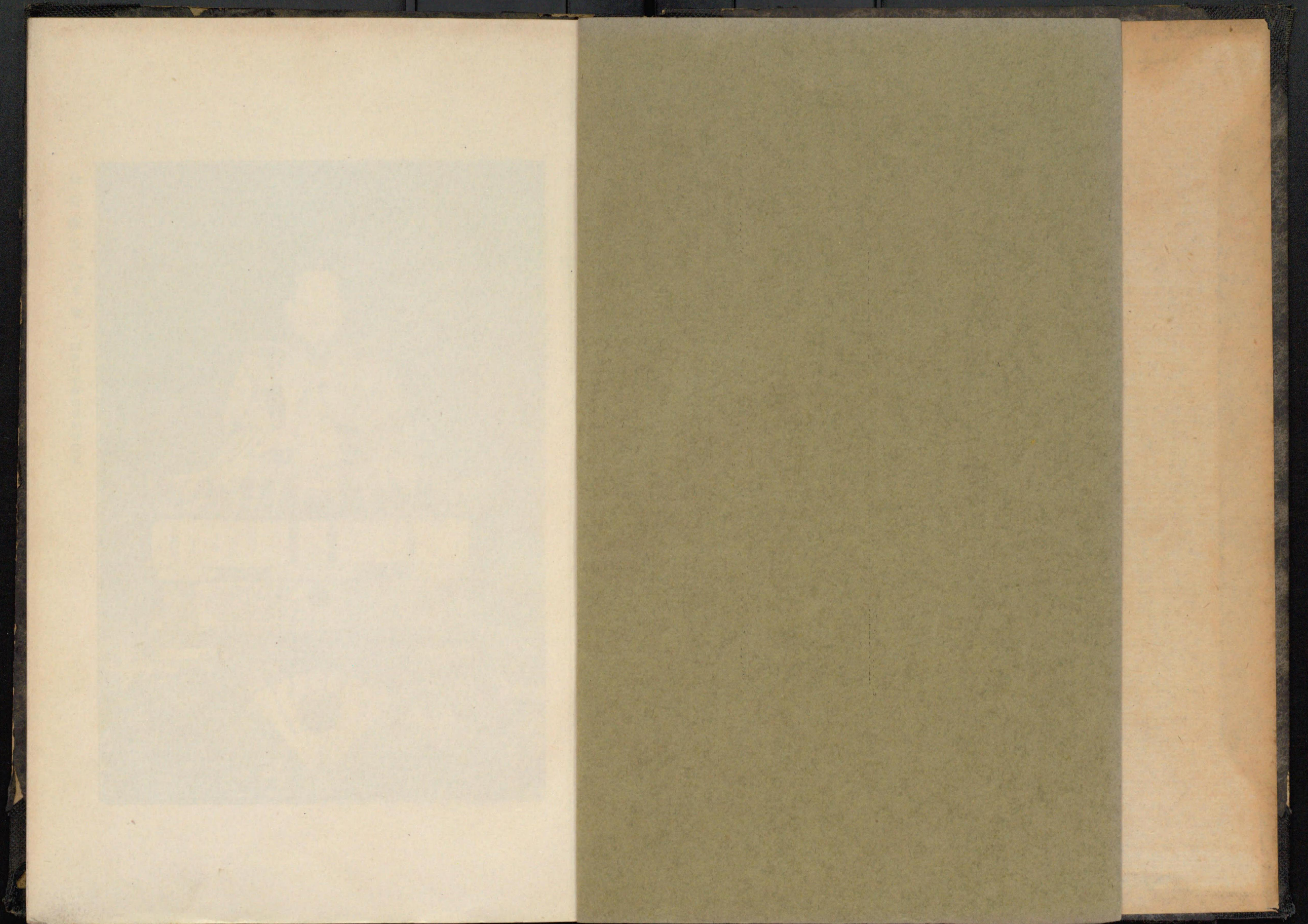
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



箕輪町史考

1166

全



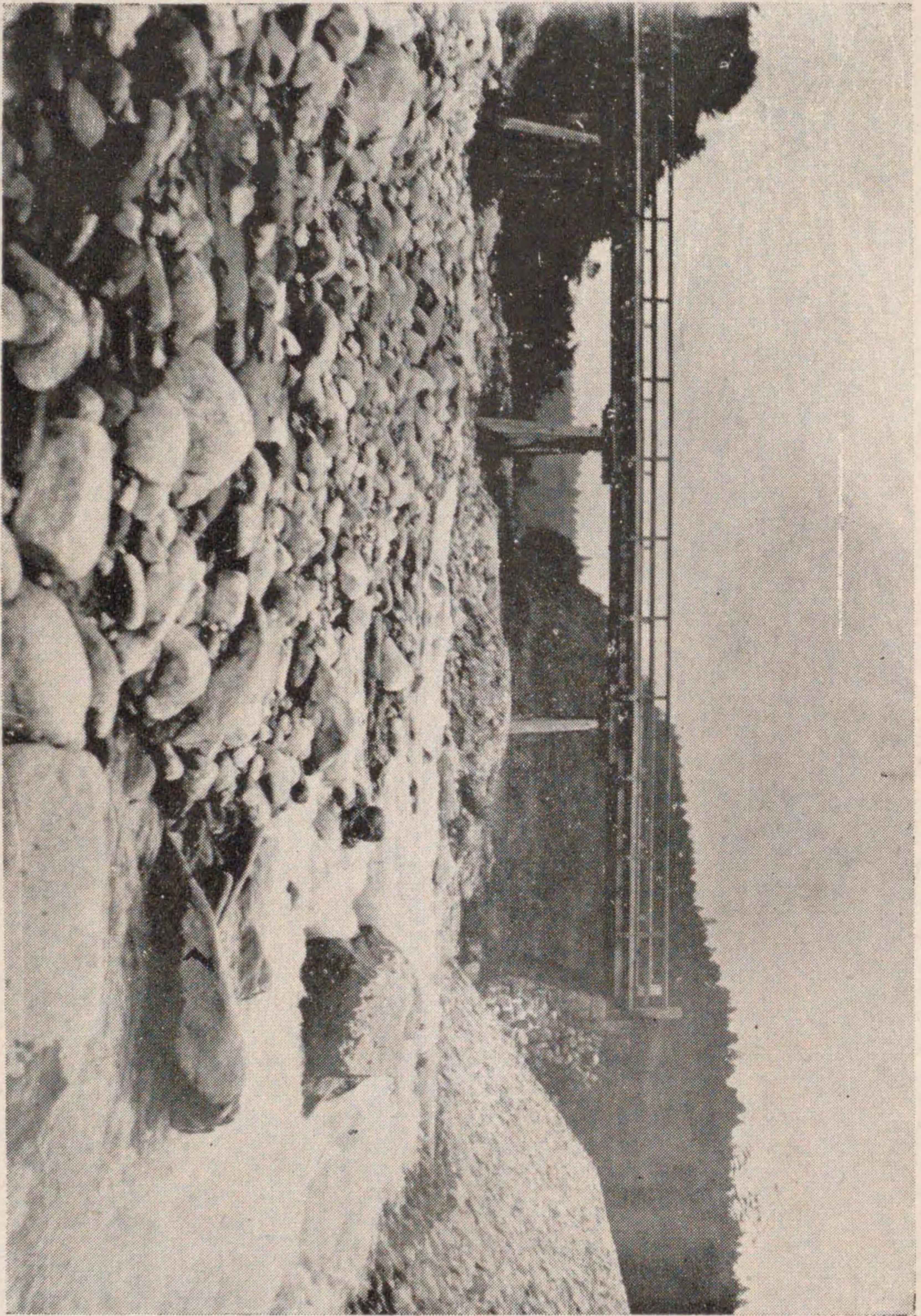
長野業政公の木像
(富岡村宇原山長純寺安置)



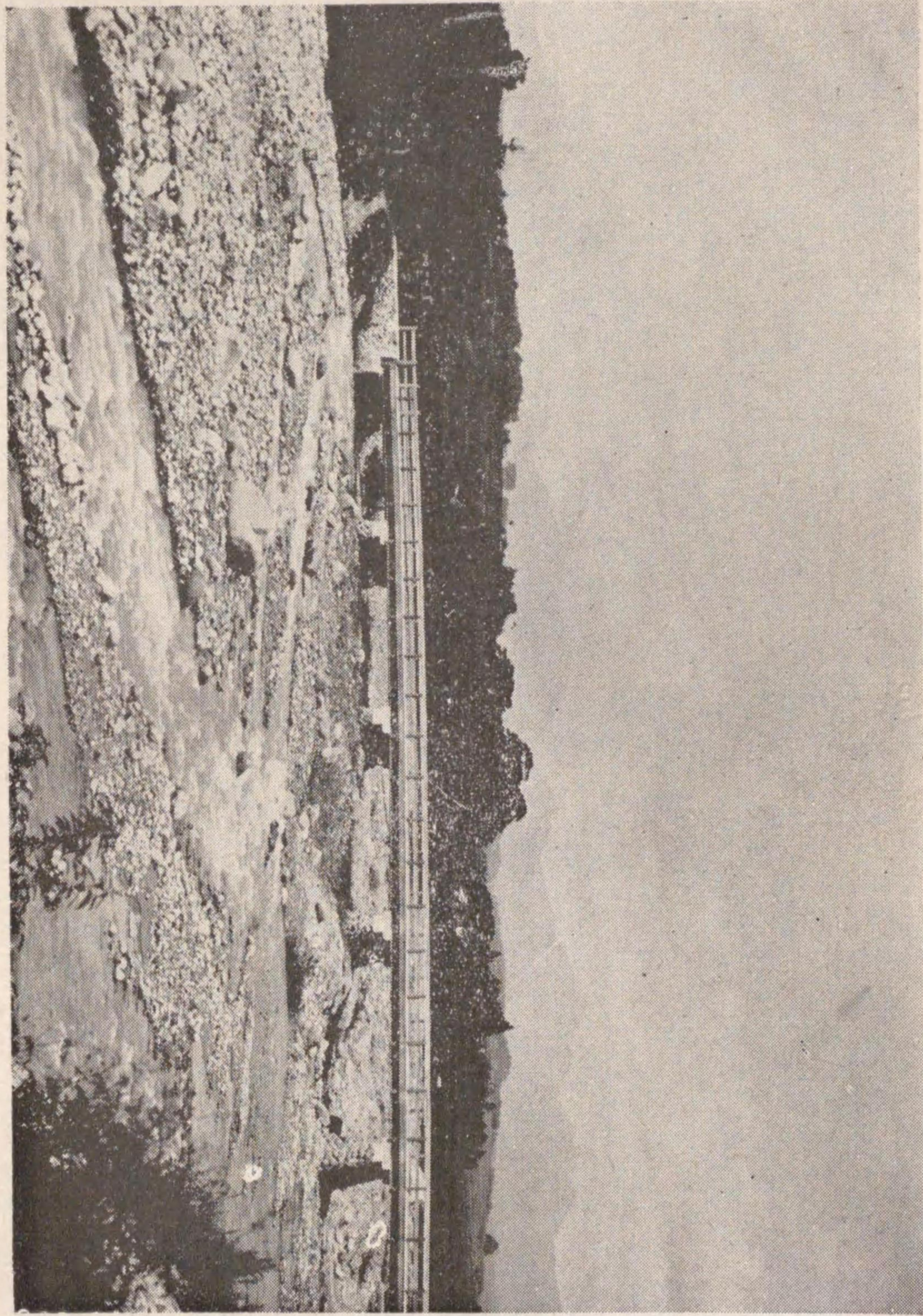
長野伊豫守憲業立願狀の陰刻
(原本は棒
名神社蔵)

大元伊豫守憲業立願狀の陰刻
の六百及下地
標右油切願狀の
表文可奉書
巫作
承正十自四月廿日
長野伊豫守
憲業立
奉懸 巖殿寺

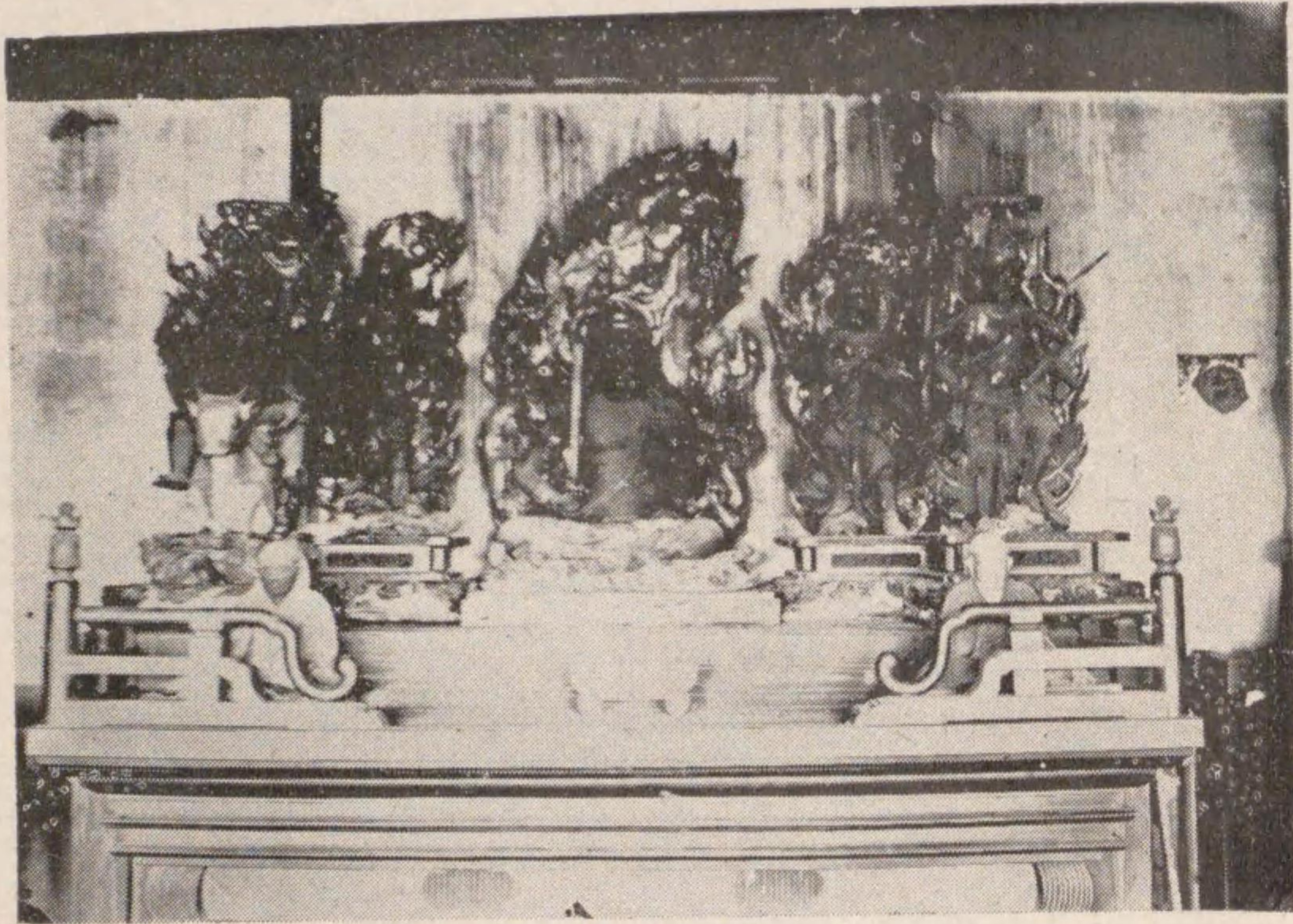
箕輪城址、城見橋より望む
(橋下を流るゝ白川
の南方を流るゝは城山)



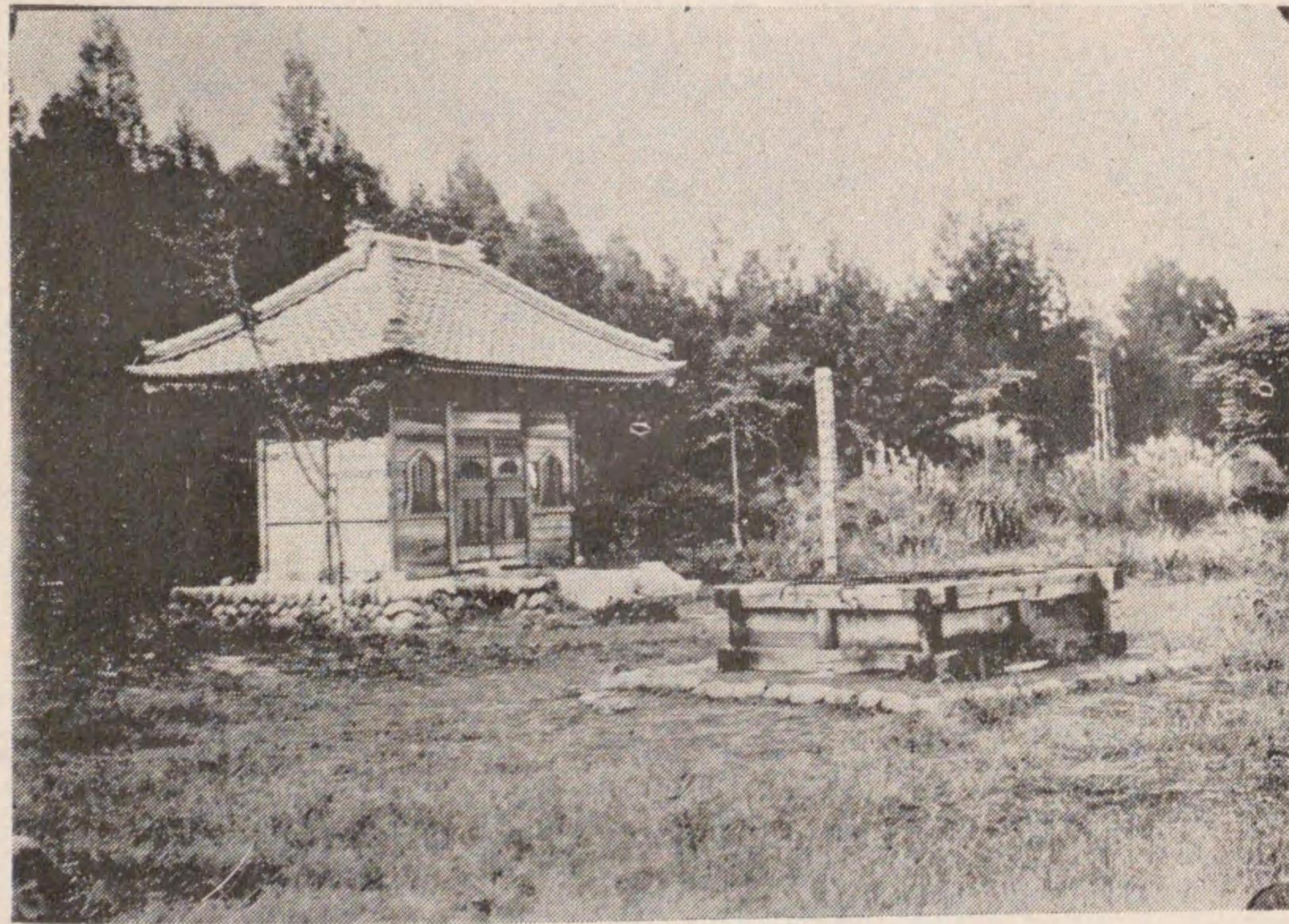
箕輪城外郭、築橋より望む



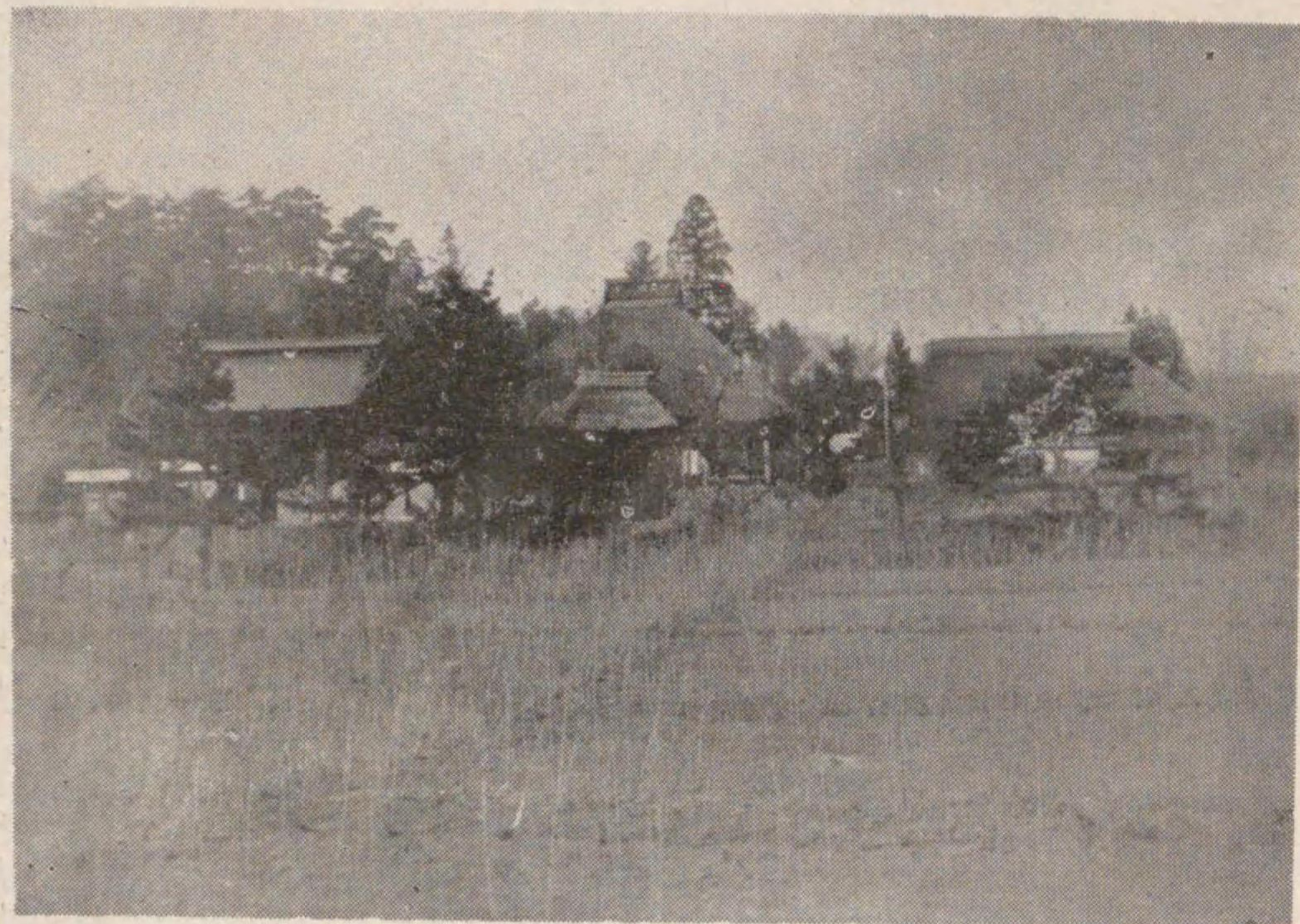
石上寺安置の五大尊像



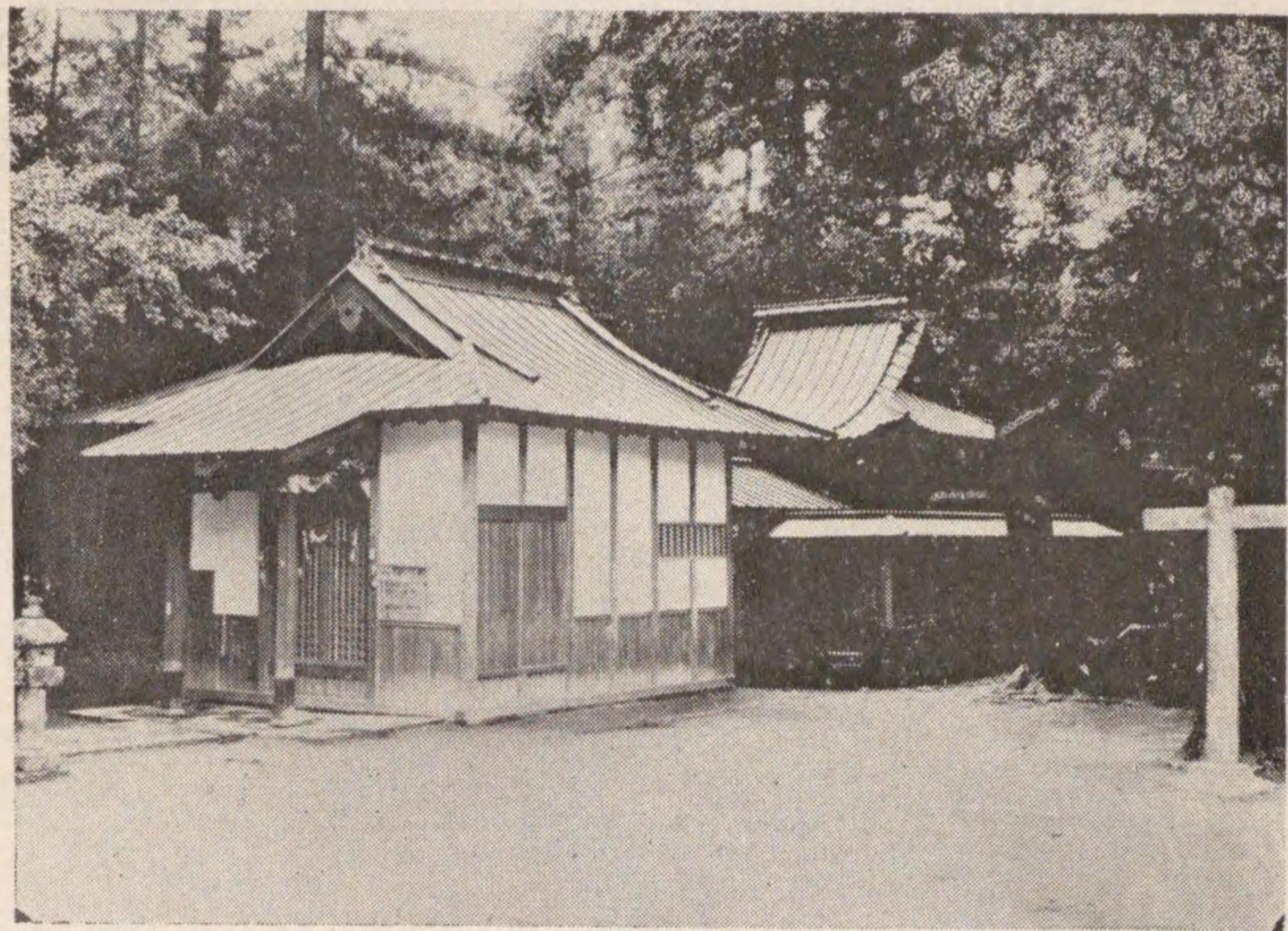
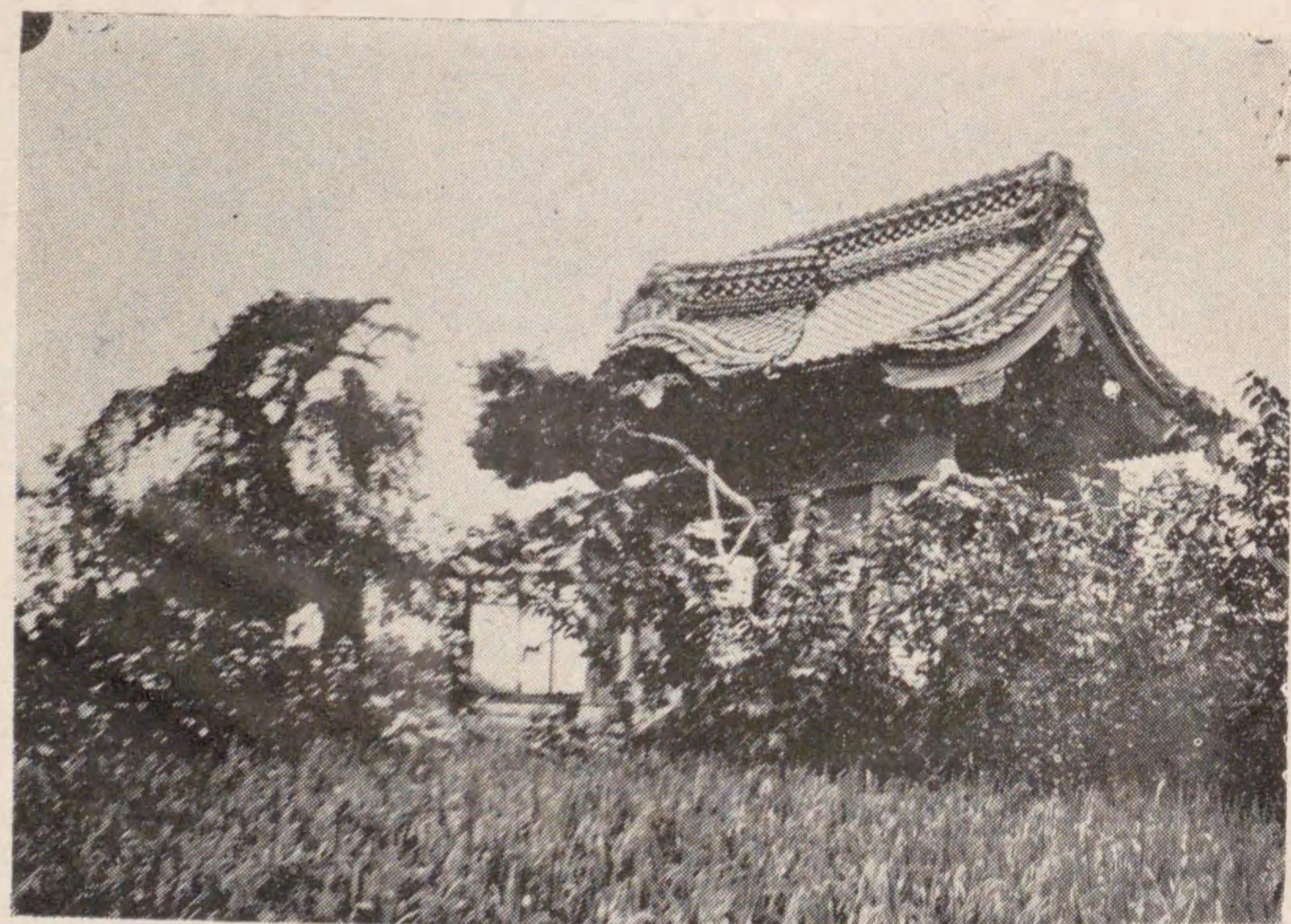
御前曲輪の古井戸と新築の御堂



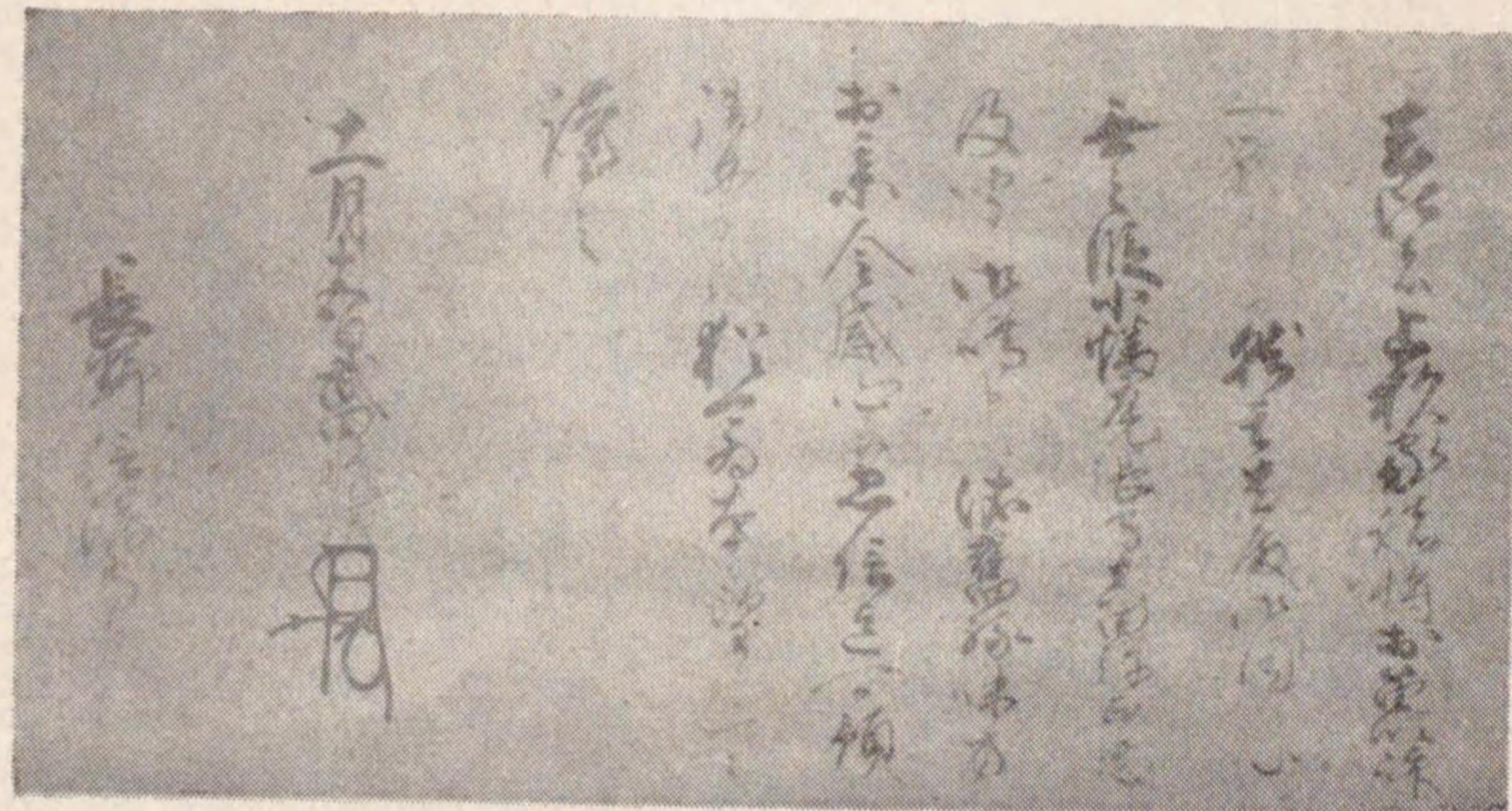
長野氏中興開基の長純寺全景



井伊直政開基の龍門寺惣門



箕輪八幡宮 (境内には文明六年
記年の石燈籠あり)



武田信玄の文書 (長野信濃守宛のもの)

(藏所氏作源野長岡豊在崎高は本原)

箕輪町史考の序

凡そ郷土なるものは、嘗て其の祖先々人が、茲に生誕し、茲に起居し、茲に活動し、終に茲に骨を埋めて居るのである。則ち土地其物が既に祖先以來の血や肉や骨やであつて、やがて我等及び子孫も同じを繰り返して行くのであるから、我等は此の郷土とは切つても切れぬ關係を有つて居るのである。況んや其の土地に於ける史蹟をや、名勝をや、遺物をやである。本會の創立されし所以は、全くなかる見地から來たのである。

昨昭和二年八月、我が古城址御前曲輪から偶然の機會に古井戸を發見し、其内から奇蹟的に夥多の古石塔を掘出し、而も夫れが當地方開拓の祖とも稱すべき長野氏一家の墓石であることを確め得た刹那、我等の追憶は數百年の昔に馳せ、築城當年の事、其の勢威の隆々たりし時代、又は甲軍のため攻落されし當時、若くは爾後の變遷等の事に及ぶ時は、實に無量なる感慨に耽るのである。特に況んや其の裔孫たる人々今尙ほ多きに於てをやである。即ち本會が期せずして、町民各位の賛同を得て成立を告げたのも、全く其の主因は茲にあるのだ。



堀部安兵衛築造の下田家庭園の一部

於その後上毛郷土史研究會幹部の人々、及び本縣に於ける史學の權威者等は、俱に來つて親しく實地の調査研究に従はれ、其の結果は『上毛及上毛人』誌上に、各號を重ねて發表されたとは、我等の大に感銘し且つ深謝する所であります。今回其の資料を集めて別に一冊子と爲し、これを我が同志に頒ち、且つ後世子孫に諭げて愈々愛郷心を培養し、苟も祖先々人に對しては報恩の事を忘れず、進んでは益々尊皇愛國の志念を助長せしめんを期する次第である。聊か來由を叙して、本書刊行の主旨を宣明すと云爾。

昭和三年十月 箕輪史蹟保存會

其の内
全
箕輪史蹟保存會
昭和三年十月
其の内
全

箕輪町史考の部

箕輪町史考目次

□寫眞銅版の部

- 一、長野業政公木像（長純寺安置）
- 二、長野伊豫守憲業立願狀の陰刻（榛名神社藏）
- 三、箕輪城址、城見橋より望む
- 四、箕輪城外郭、榮橋より望む
- 五、石上寺安置の五大尊像
- 六、御前曲輪の古井戸と新築のお堂
- 七、箕輪八幡宮と文明記年の石燈籠
- 八、武田信玄より長野信濃守宛の文書
- 九、長野氏中興開基の長純寺全景
- 十、井伊直政開基の龍門寺惣門
- 十一、堀部安兵衛築造の下田家庭園

□石版摺地圖の部

- 第一圖、長野氏城砦配置圖
- 第二圖、箕輪城址略測圖
- 第三圖、永祿頃の箕輪城推定圖
- 第四圖、箕輪城山築城以前の地形推定圖

第五圖、長野尙業時代の箕輪城推定圖
第六圖、伊井氏時代の箕輪城圖

□本文記事の部

一、序文二篇

(一) 箕輪町史考の序

右は本書發刊について其の主旨の存する所を述べ、以て同會の立場を明かにしたものである。

箕輪史蹟保存會

(二) 箕輪町史考刊行に就て

右は本書刊行に就て、編者の自序とも申すべきもので、刊行の動機又は目的等に就て述べたのである。

豊國覺堂

二、箕輪城址梗概

群馬縣廳文書

此の一篇は箕輪城又は長野氏等に就て、總叙的に略述したもので前橋圖書館所藏の縣廳文書の一である。特に大正天皇が未だ皇太子にあらせらるゝ時代、鶴駕を本縣に廻らせ給うた際に、時の関山知事より恭しく台覽の爲、奉呈したもので、其の名の如く事の梗概を知るには誠に適當のものと申すべきだ。

三、箕輪城考(上下二篇)

福島武雄

從來世上に流布されて居る箕輪城並に長野氏關係の文獻は箕輪軍記を創作的のものとす外、箕輪記又は長野記と稱する數種の異本はあるが、其の内容は殆ど大同少異て根本は同一のものから出て居ると思はれる。此他當時の戦記類十餘種あるけれど、最初の箕輪軍記以上のものは全く無いのである、況んや後世のものに至りては是等の書よりあらを取り、こちらを差し加へなどして、所謂補綴を試みたに過ぎぬのであるが、本篇に至りては全然其趣きを異にし、一般の築城學又は戰術上より箕輪城及び長野氏の行動乃至周圍の聯繫せる物柄事柄を、科學上の見地から批判するとに努めたのである。而も從來の文獻にも精通して居り、隨處に採用を怠らない即ち其の考察は犀利なる觀察力と周到なる實査とを以てして居る點に於て、恐らく空前絶

後とも稱すべき一大雄偉の文字を構成してゐると思はれる、此點は編者の深く福島兄に謝し且つ自負して讀者に告ぐる所である。

四、長野野記

清水潔水

筆者は現在縣會議員―縣參事會員である、堂々たる縣下の政治家中、未來ある奮闘家であるが、大正の初年頃は新聞記者今でも同様であるが―として眞面目なる學究者であつた、殊に其の郷里が群馬郡室田町である所から長野氏の事蹟研究に腐心し、あらゆる文獻を經とし、長年寺や長純寺又は來迎寺などに存する文書と物件、其他の證據調べを緯として本篇を纂述し、當時筆者の關係して居た上州新報に掲出したものを更に校訂し、吾が『上毛及上毛人』第四號より九號までに分載(大正五年十一月以下、六年五月號までに)したのであるが、今回又々重ねて校訂を加へ、本書に收めたのである。

本篇の終末の處、業政の後嗣の名・普通業盛て通つて居る名を、特に氏業としたとは少しく注目に値するが、之れは長年寺系圖や長野氏血族に傳はる系圖書に、氏業と書いてあるのを尊信して、右の如くせられたのであるとを諒承して頂きたい。

五、長野野業正

名將言行錄所載

業政公の言行を叙し、其の爲人を知るに於て、最も簡にして要を得たるもの、著者は明治維新當初に於ける本縣館林藩の老學者である、いま同書第二卷より拔萃す。

その標題の如く、箕輪―長野氏―の事を記述したるあらゆる文獻の表題、又は其の内容の大体を擧ぐ、筆者は此の種の事に尤も造詣深く、且つ幾多の便宜を有する前橋圖書館司書の職に在り。

箕輪地方並に附近の長野氏關係の文書を寫し集めたるもの、參考に資すべきもの多し、筆者は箕輪史蹟保存會の幹事である。

八、長野氏の裔孫に就て
 その末葉である菅谷長野の福田氏、越後高田の長野氏、下仁田の長野氏等に就て述べたのである。中に就て天保九年八月、徳川幕府の命に依り、白井雙林寺が主体となつて調査した系譜書はなか／＼手数を要しただけに、相當に信據すべきものである。

九、上泉伊勢守秀綱及び父武藏守信綱

右は上野人物志、其他の關係書類又は編者や長島氏の調査になるものを集め、其の門弟等の事にまで及んで居る。上泉氏は長野氏家臣中の名門なるのみならず、本邦劔道の開創者としての一大權威者たるを以て、特に其の事蹟を本書中に収録に及んだ。

十、堀部安兵衛かたみの庭園

小茂田青水

下田家の庭園は箕輪の史蹟として的一名勝なるを以て、簡略ながらこゝに掲ぐることにした。

十一、箕輪城址本丸御前曲輪古井出土の五輪塔等について

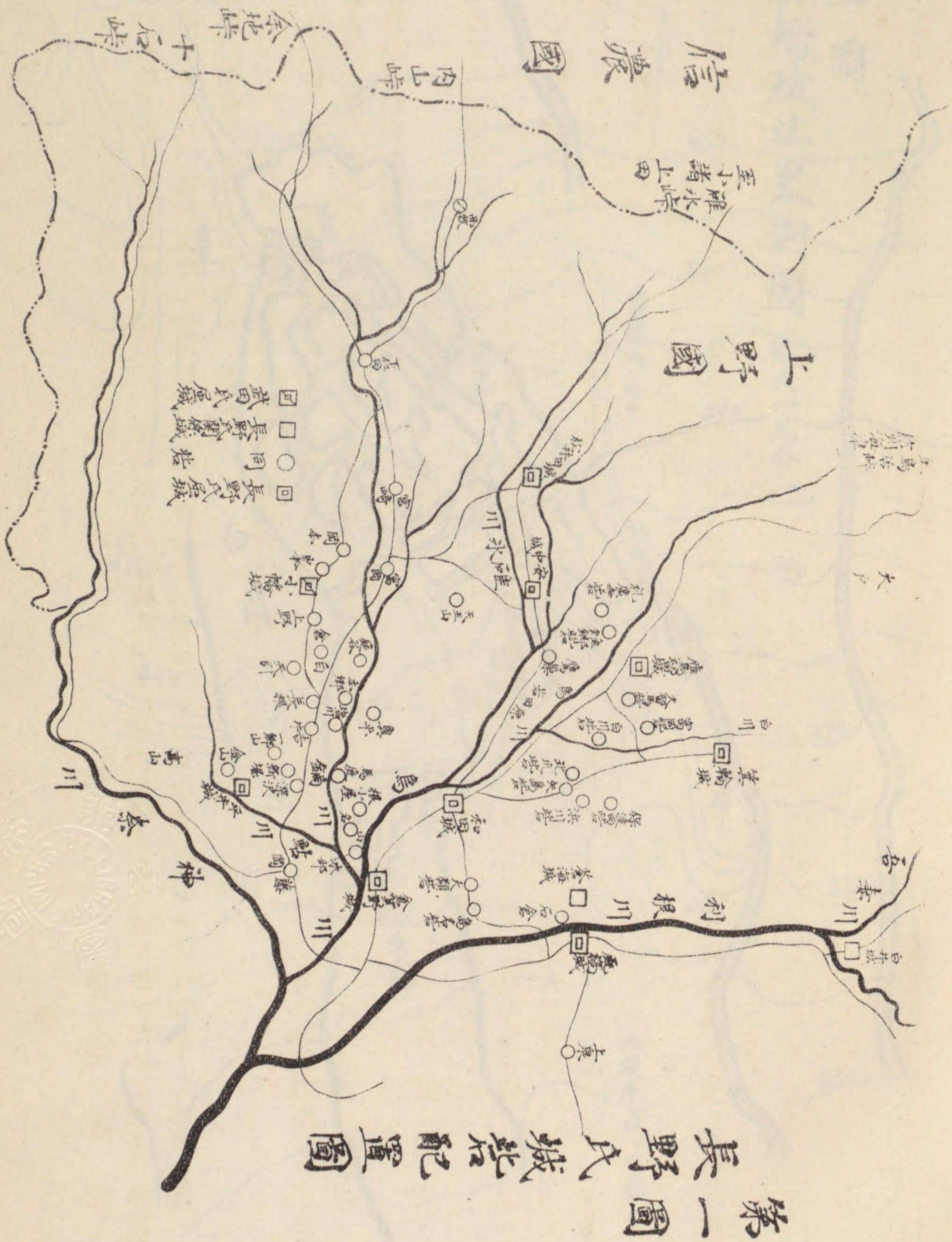
内山留一郎

右は昭和二年八月中、御前曲輪の古井戸より五輪塔の切石百數十個を掘出した顛末を報道し、彫刻の文字等について記述したもので、箕輪史蹟保存會の主因動機となつた事柄で、嘗て一たび上毛及上毛人に記載したものである。

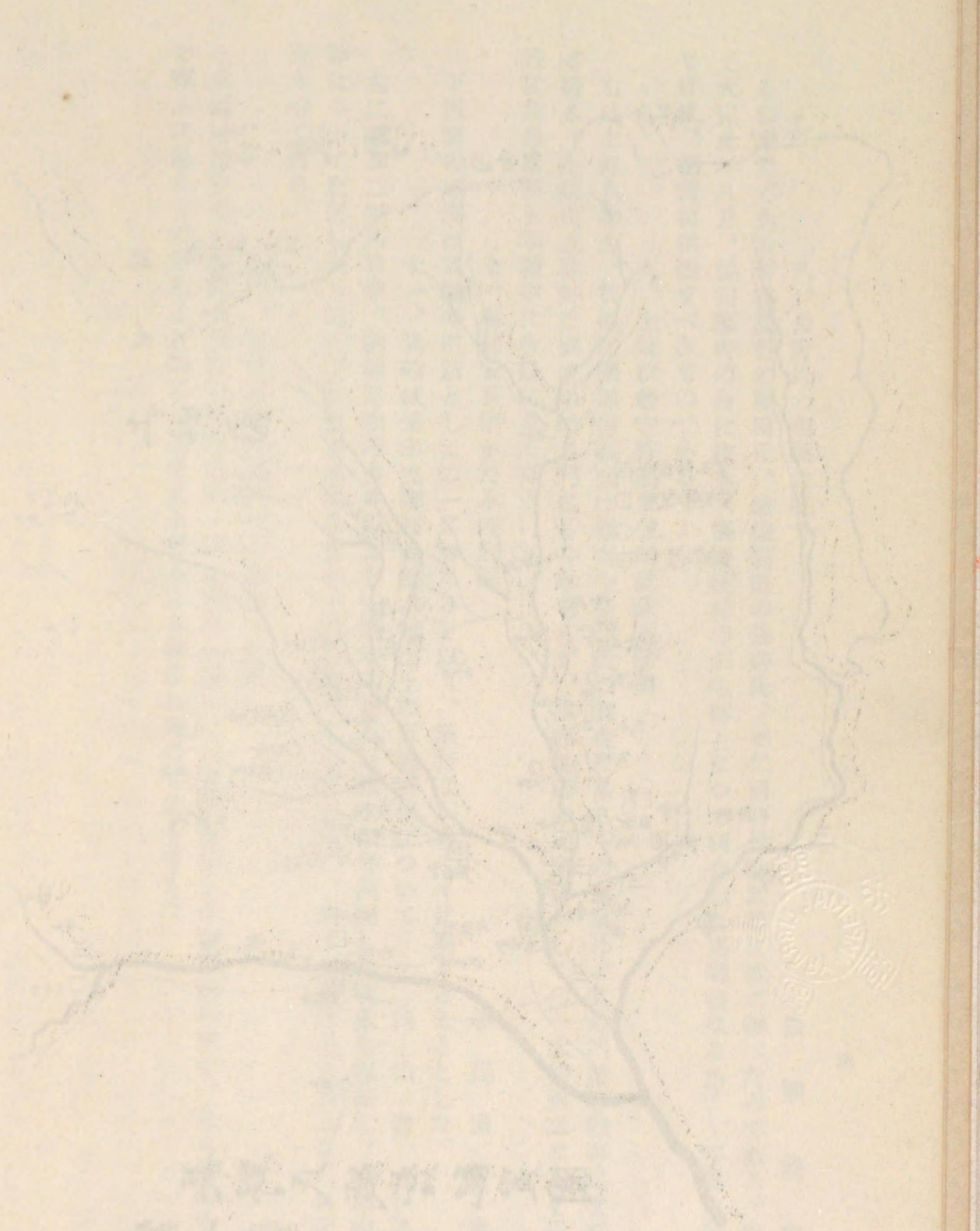
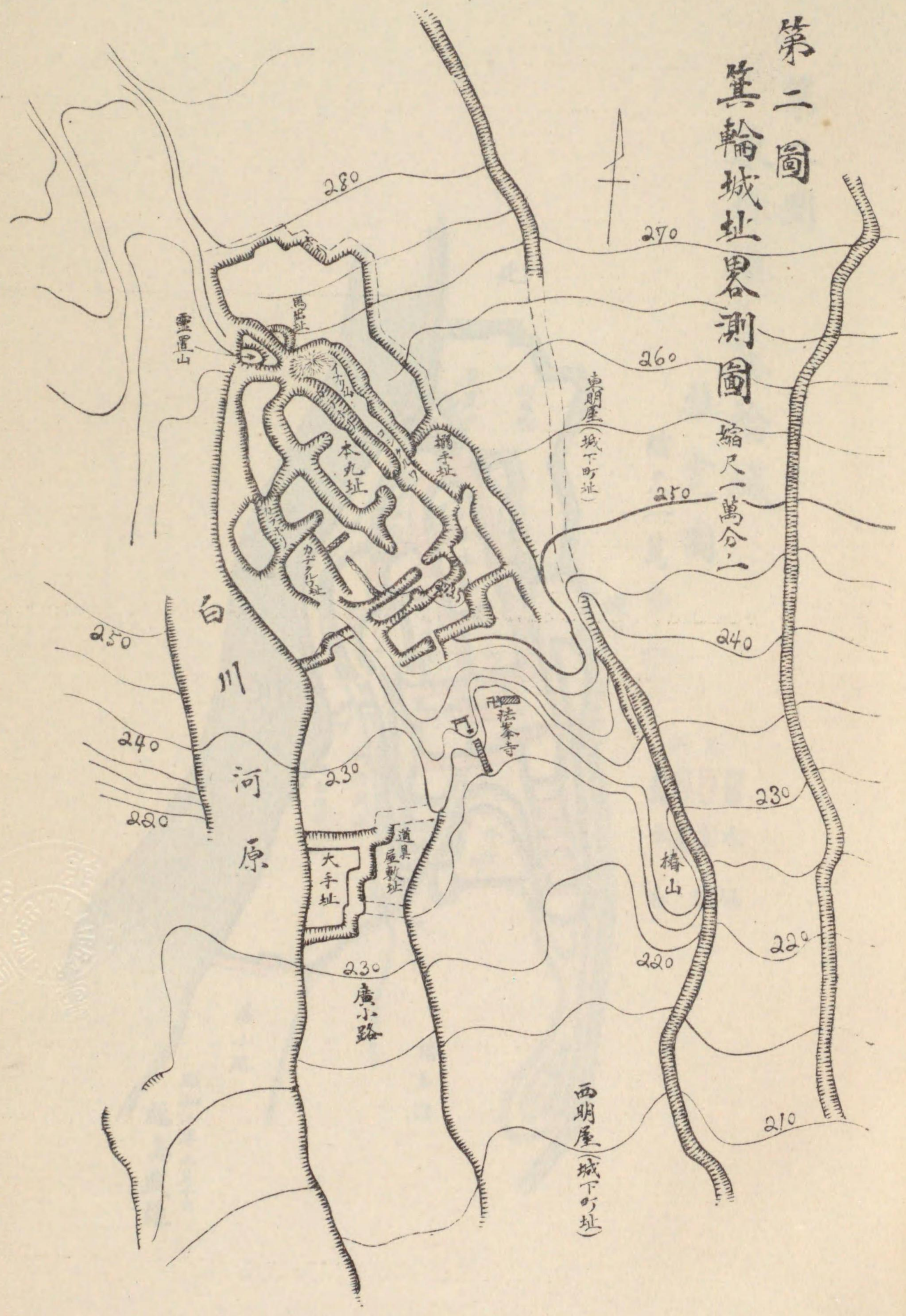
十二、箕輪城址(古井戸出土の五輪塔)其他一巡記

本篇は該古井戸の出土品等見學の爲め、同志數名相携へて同地に出張した時の紀行文で、稍々當時の状況を窺ふに足るものがあると信じ、上毛及上毛人より轉載したのであります。

以上

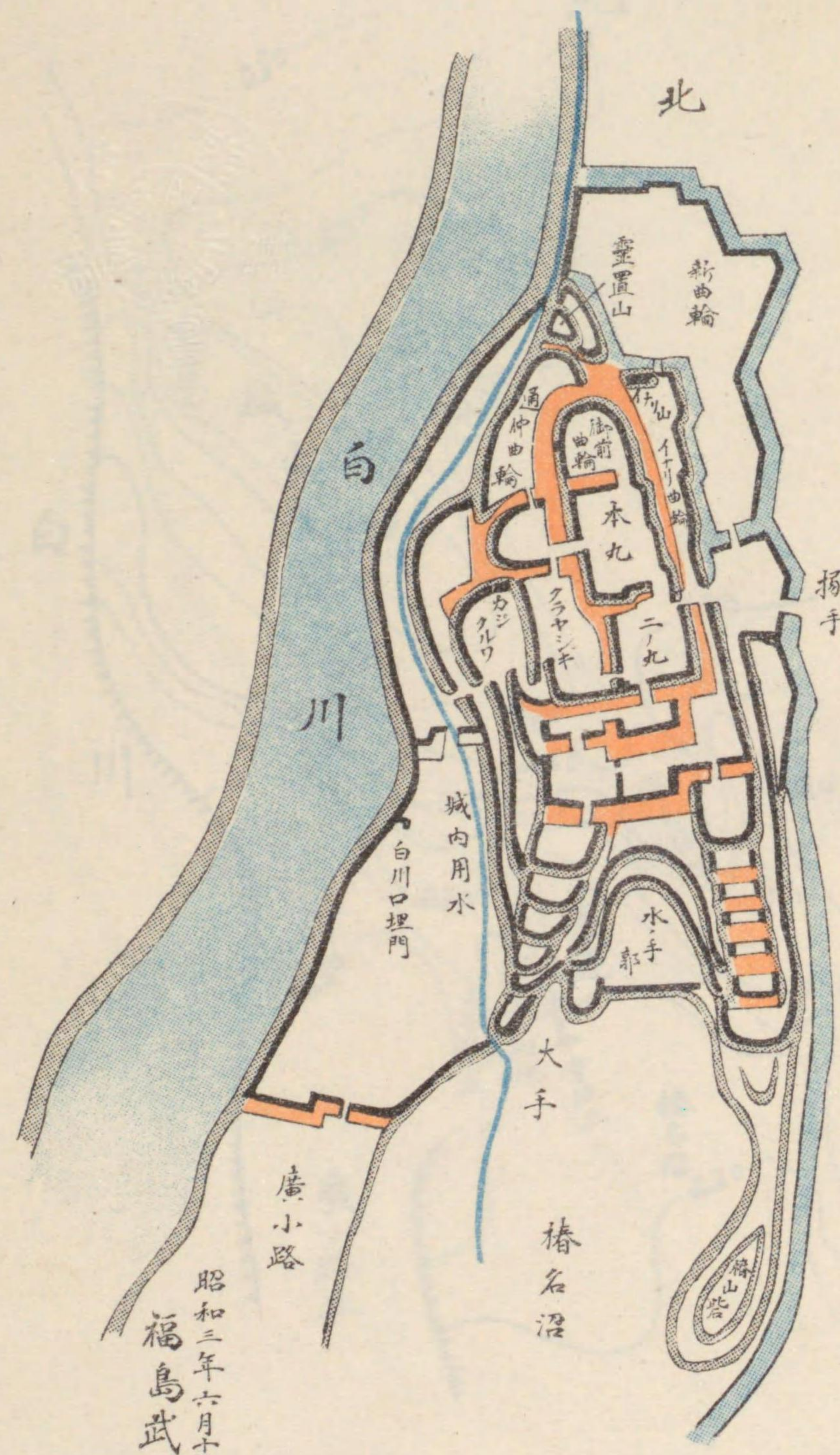


第二圖
箕輪城址畧測圖
縮尺一萬分之二



第三圖
永祿頃ノ箕輪城

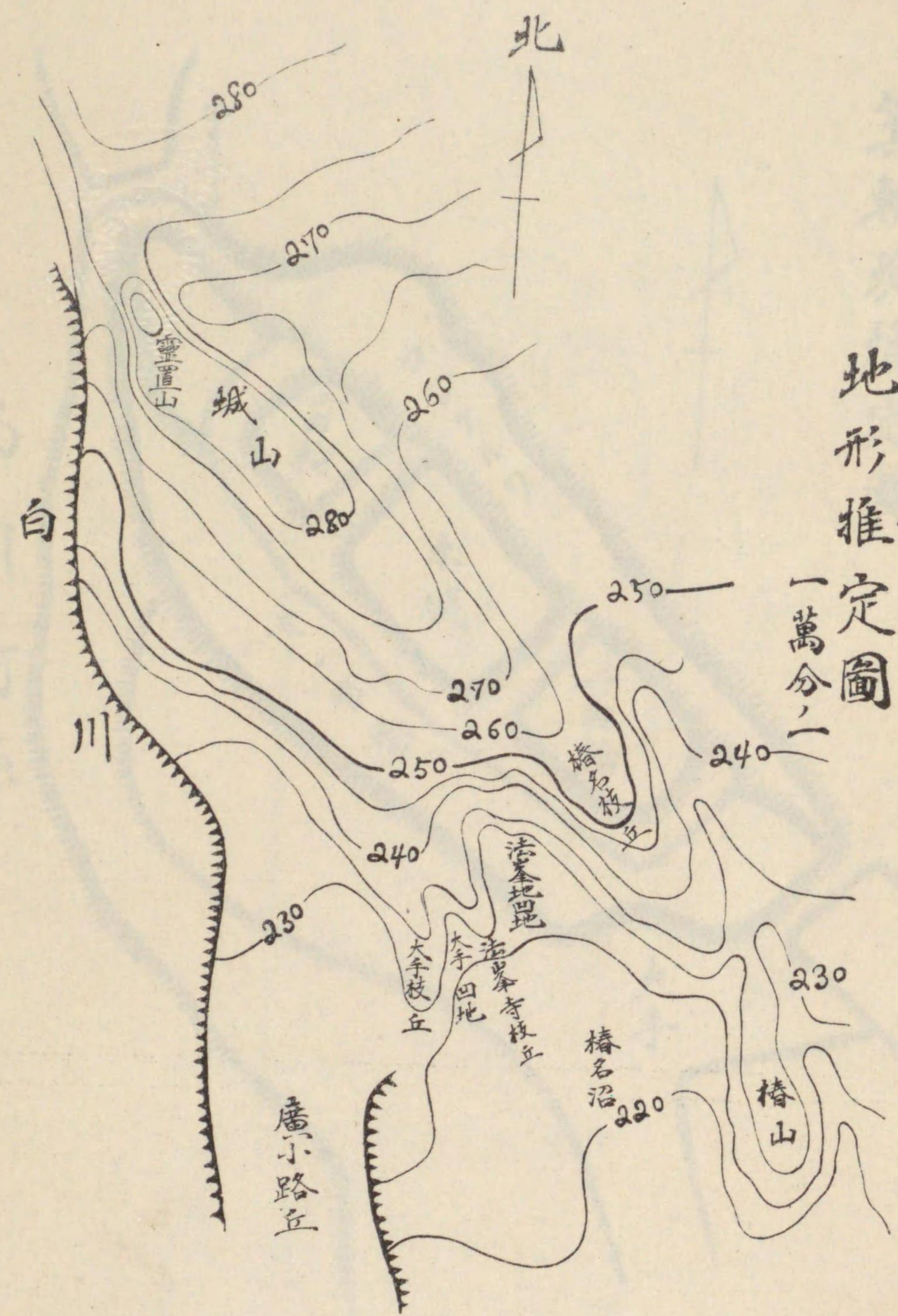
雅定圖
縮尺一萬分の一



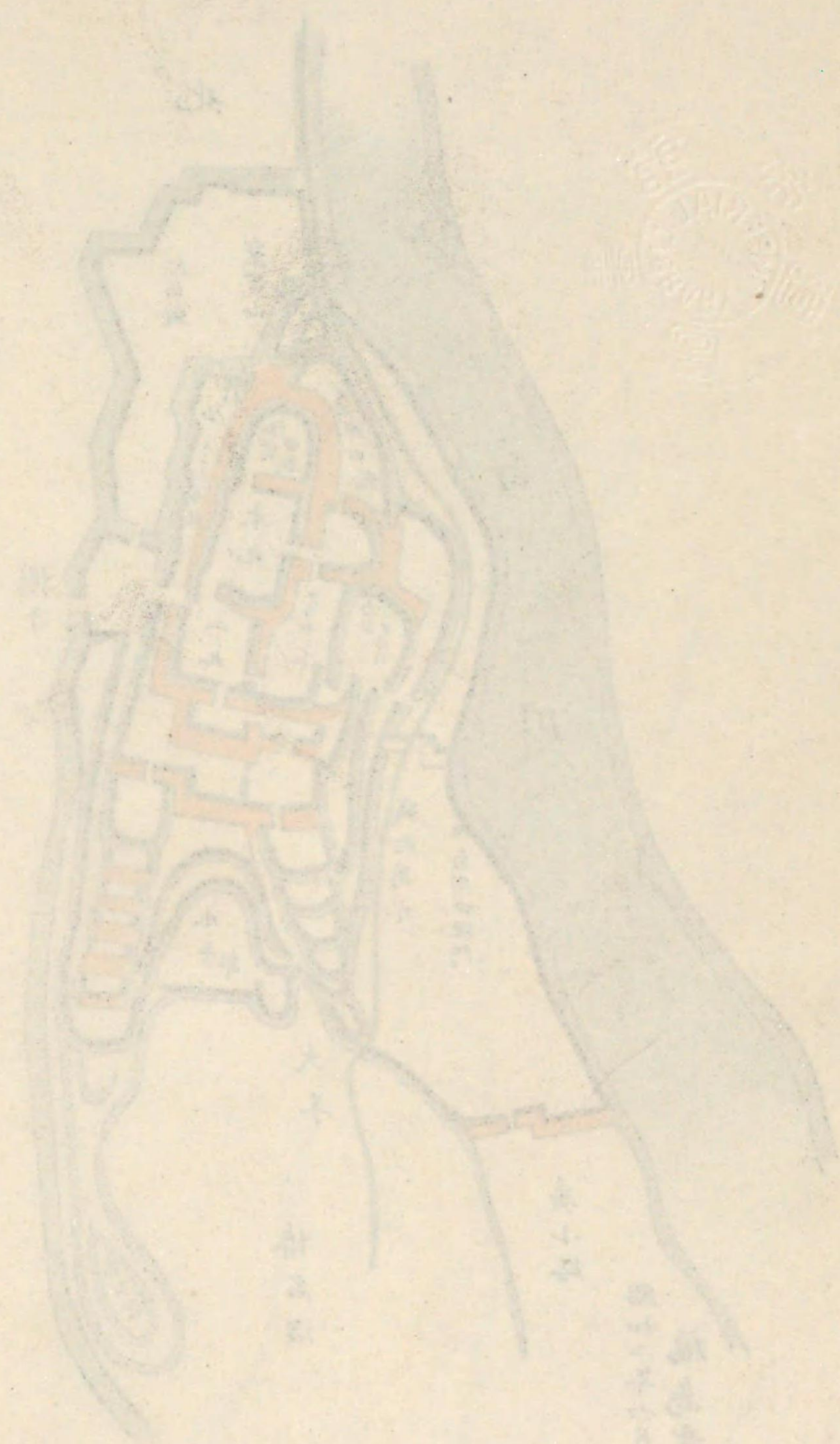
凡例
 ■ 土居
 ■ 崖
 ■ 空堀
 ■ 水堀

昭和三年六月十日
福島武雄

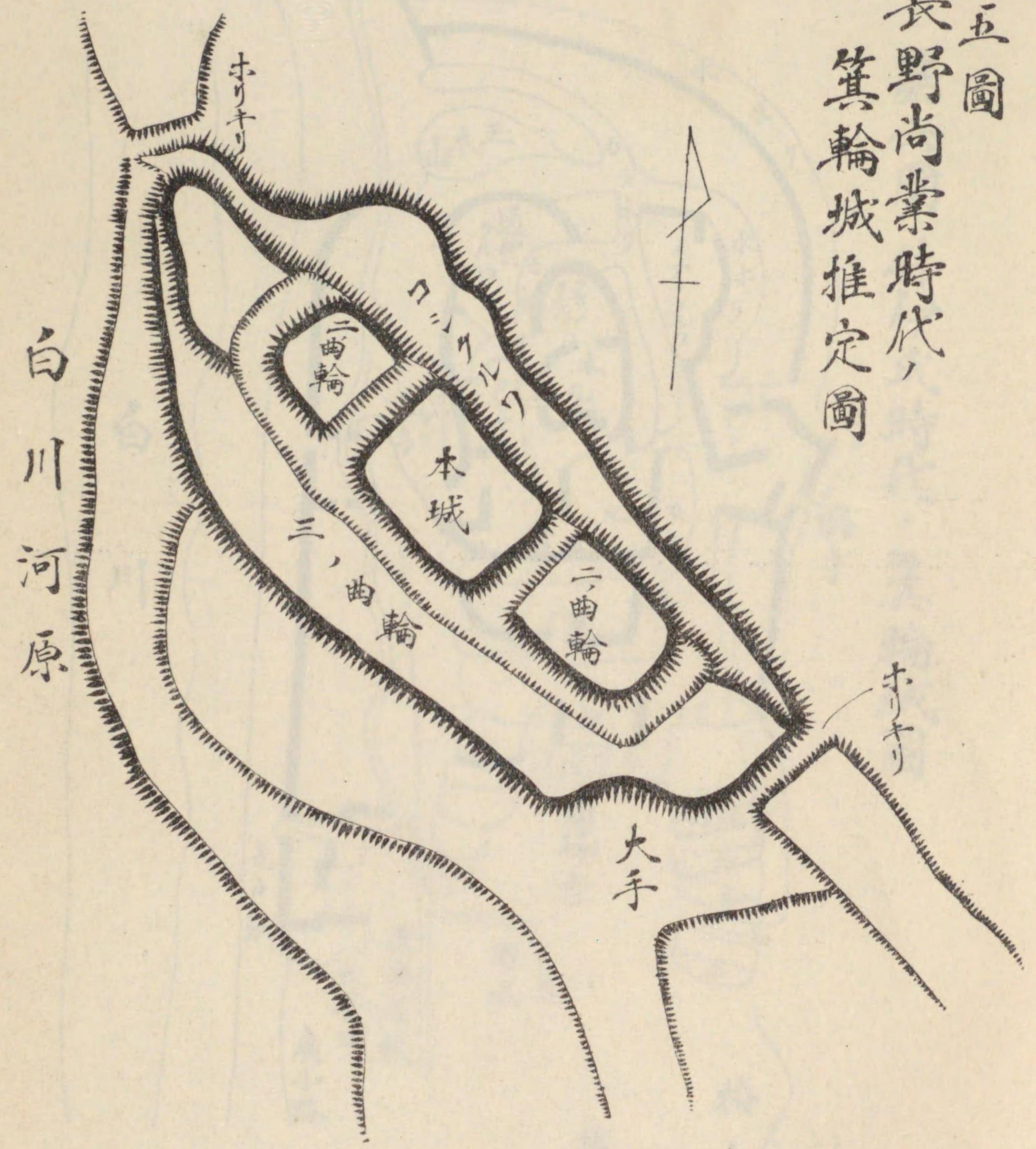


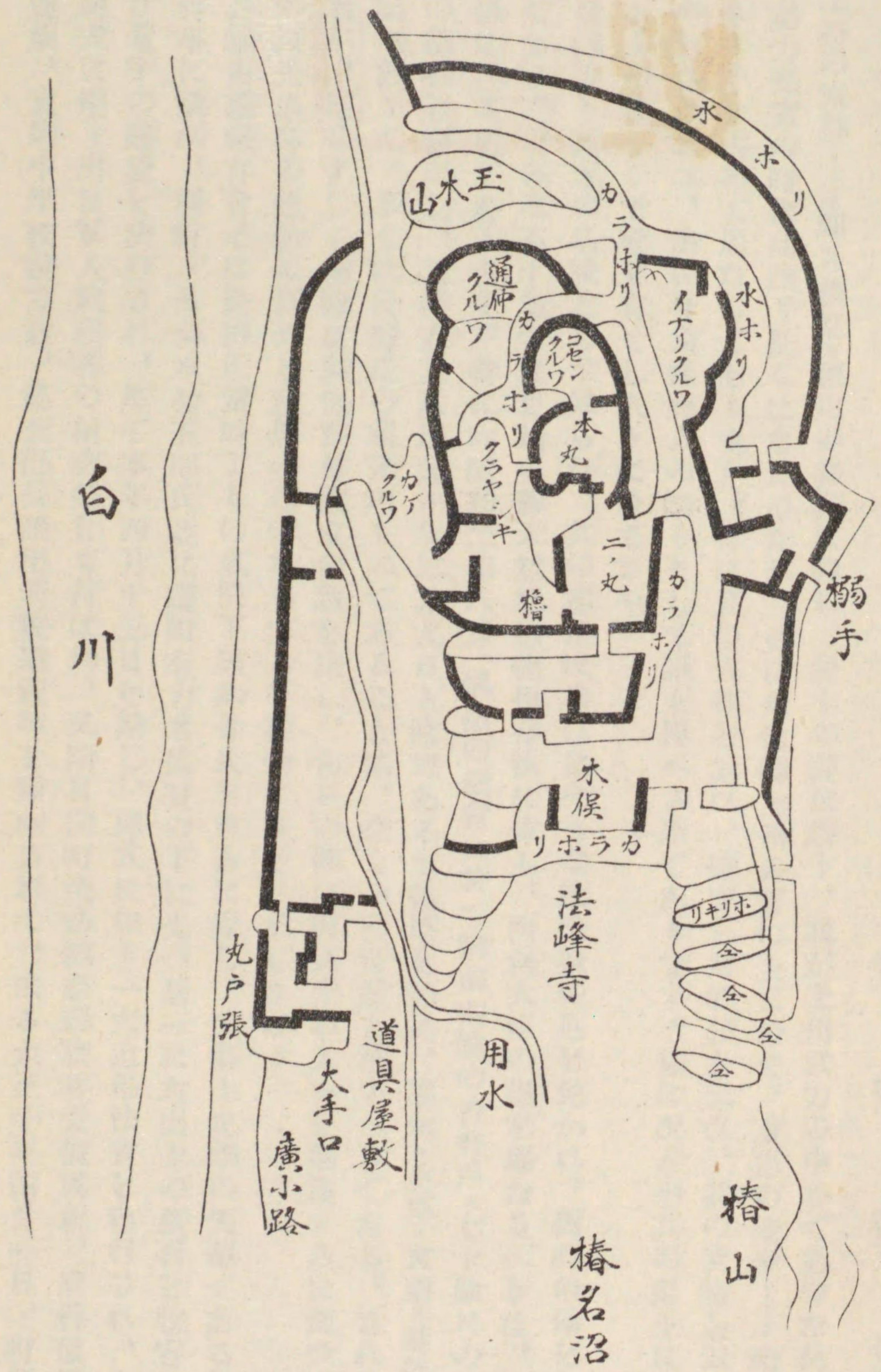


第四圖
 箕輪城山築城以前，
 地形推定圖
 一萬分之二



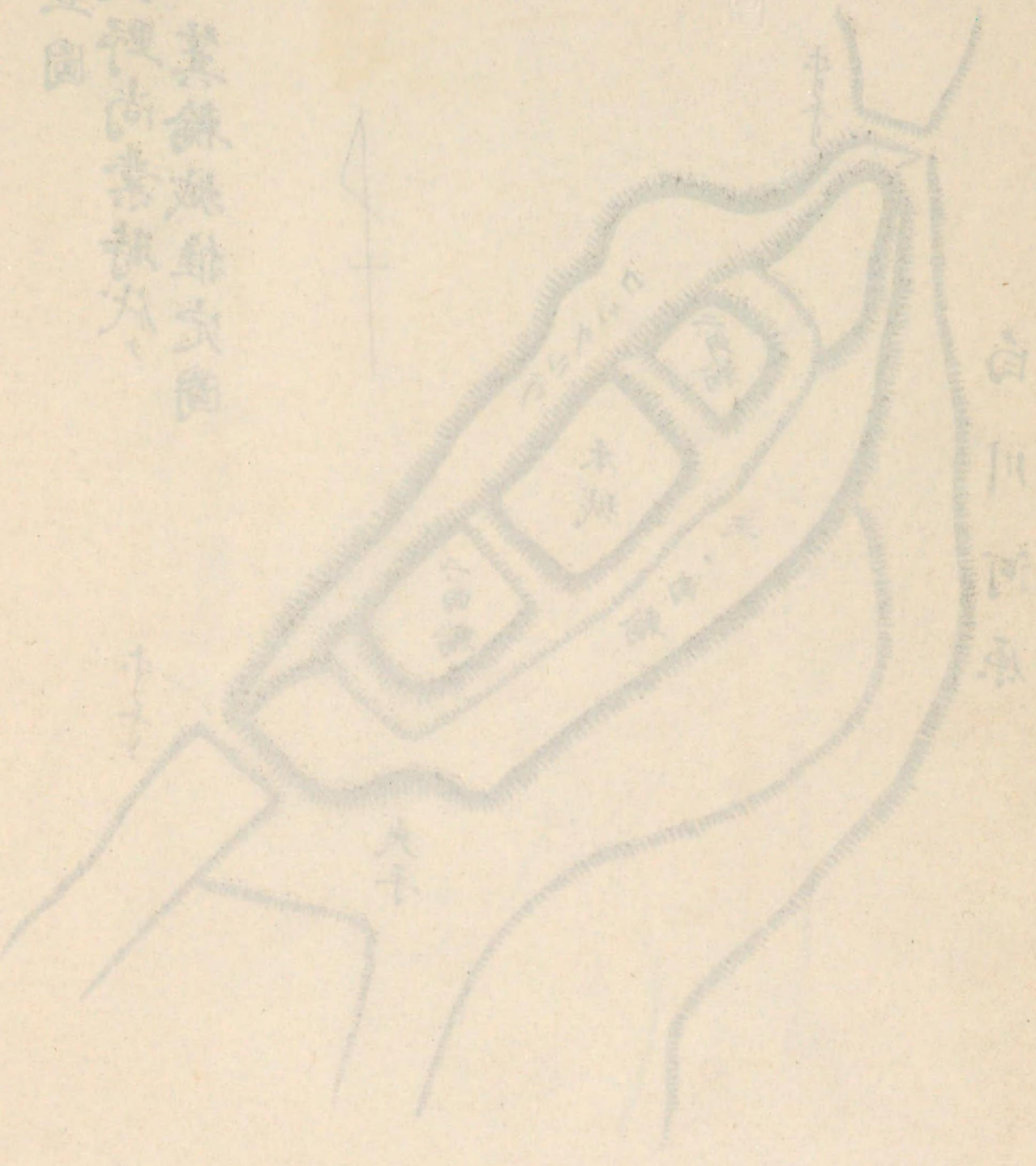
第五圖
 長野尚業時代、
 箕輪城推定圖





第六圖 井伊氏時代ノ箕輪城圖

其跡地跡地
其跡地跡地
其跡地跡地
其跡地跡地
其跡地跡地



『箕輪町史考』刊行に就て

上毛郷土史研究會主幹

豊國覺堂

北條・上杉の末期——即ち豊臣・徳川の初期に際し、數十年間に涉り、我が上州武力の中心であつた長野氏は、其の勢力充實の時代は餘り長くはなかつたが、兎に角當時上州各藩の上に於て、重要な地歩——殆ど總獨頭の如き——を占めて居たのであります。特に其の人物と云ひ、據守した城郭と云ひ、其の武略と云ひ、最期の花やかさと云ひ、俱に今尚ほ州人の誇りとして語り傳へる所であります。殊に況んや其の郷土に於て而も祖先々人の親しく干繫を有せし人々に於ておや。

箕輪城は固より關東の名城として知られ、其の遺址は幸ひに今もなほ破壊の厄を免かれ、舊時の倂を窺ふに足るのである、のみならず追ては史蹟名勝天然紀念物保存法に依り、内務大臣の指定地たるべきは、吾等の信じて疑はざる所でありませう。特に昨昭和二年八月、偶然の機會に於て御前曲輪の古井戸・七十餘尺の地下より多數の墓石を掘出し、其の古きは康元々年二月九日と陰刻ある五輪塔を始め、應永・永享・文明・延徳・天文などの紀年ありて、多くは長野氏の祖先のものであることは、全く一の奇蹟と稱すべきである。されば土地の有志者が、期せずして箕輪史蹟保存會設立の議を決し、旬日の間に町大半の人々を網羅するに至つたことは、その祖先崇拜の觀念に富める意思の尋常ならざるを推知することができる。

爾後、箕輪史蹟保存會では長野氏當時よりの名門下田恭介氏を會長に推し、又郷土史學の先輩である長島類藏氏を幹事に撰び、同町々長清水初五郎氏並に闔町有力者協賛の下に先づ第一に右出土の墓石を收容して保存すべき堂宇の建設を決行され、尋て本年四月十三日を期し、佛式に依り一大追弔法會を執行され、之れと同時に神式に則り出征軍人戦歿者の招魂祭をも行はれ、又同日同町消防組表彰旗拜受披露祝、府縣道箕輪前橋間開通祝、實業中學校設立祝、巡查部長派出所設置祝等を兼修されて、去る大正十年四月一日、町制施

行當時の祝賀にも勝るの大祭を舉行され、縣知事大森佳一氏を首め、縣内有力なる官民有志等の参加を得て莊重且つ懇懃なる式典を擧げられたことは、洵に慶賀の至りて、坐るに又芭蕉翁の『夏草やつはものどもの夢の跡』の句碑に對し、今更ながら印象を新たにしたことであつた。

之より先き、昭和二年十一月二十一日、前述の御前曲輪出土の石塔などを一覽すべく前縣史編纂の八木昌平氏、前前橋圖書館長であつた櫻井菊次郎翁、同現司書佐藤錠太郎氏、勢多郡誌編纂主任原田龍雄氏、及び我國築城學に於て新進の權威者である福島武雄氏等と、其行を共にしたことは頗る好都合であつて、前記の下田・長島兩氏並に該地所の所有者で發掘を遂行した石川種次郎氏、並に役場吏員等の東道を得て、その出土の碑碣のみならず、同町史蹟の大體を巡覽し得たことは、誠に仕合せの次第であつた。此際、一行の要求に因り福島氏から箕輪城構築の大體に就て説明があり、且つ相携えて實地の踏査をも爲し、同町の史蹟其他に就て稍々要領を得たやうに感じられた。

是等の事が動機となつて、先づ福島氏を煩はして『箕輪城考』の執筆を得、佐藤司書氏にも援助を請ひ又現縣參事會員である清水儀平氏が往年執筆された『長野記』を校訂して之を掲げ、外にも二三の關係記事を加へて『箕輪町史考』と命名し、茲に刊行することゝ成つたのであります。

福島氏は早稻田大學で初めて出した理學士で、最も礦物學に精しく、考古學方面にも亦造詣深く、特に本邦の、築城學乃至・戰術等については全國に於ても有數の篤學者であることは、此の『箕輪城考』が雄辯に之を物語つて居ると信じます、全く本考は氏多年の蘊蓄を傾けて成つたもので、恐らく箕輪城に關する文獻としては空前であり亦た絶後のものと謂つて好からうと思ふ。其他清水氏の『長野記』また勿論努力の結晶でありこの外の諸篇の如きも元より夫れ／＼の使命の下に執筆されたのであつて『箕輪町史考』編成の上にも有用の資料たることは申す迄も無いことゝ存じます。讀者幸ひ本書の刊行に依りて長野氏及び箕輪城の史實に關し其の綱領に通曉せらるゝと俱に、現在の同町民諸氏が、その祖先々人若くは遺跡遺物に對して、如何に敬虔追慕の信念に富み且つ厚さを推知せらるゝを得ば、則ち我等の企望は達せらるゝのであります。聊か來由を述べて、世の志を同する君子に諒ぐと云爾。(昭和三年七月念一日)

箕輪城址梗概

群馬縣廳文書

本文は明治四十一年十一月、近衛機動演習の際、大正天皇未だ皇太子にあらせられ、鶴駕を本縣に廻らせ給ふ、時の知事神山岡次氏・松村琴莊氏に囑して之を撰せしめられ、恭しく台覽に供し奉る、其際本傳へて前橋市立圖書館に藏するものを今回借寫して茲に掲ぐるもの也。

箕輪城址は群馬縣群馬郡箕輪村(大正十年四月一日より町制施行)大字西明屋及東明屋村に存してあり、是れ鎌倉九代記に箕輪城は椿名明神山の尾崎に在りと云ふ地なるべし、城址は椿名山麓の漸く上に向ふて隆起せんとする邱頭に尋ねられ、空濤三層石壁一帶、東北の地を牙城としたりものなるべく、西方に門址あり、地勢は西方に高く、山之れに當りて峙ち、川之れを繞つて流れ、内廓の間に殘礎二三基を存す、其の箕輪の名ある所以のものは、當時此の城は、邱頭を開鑿して濠を設け壁を築きし爲め、其の形狀宛も旗に屬する箕の柄に似たるに原くものなりとか今や老杉鬱蒼、亂艸縱橫、間ま桑田あり麥圃ありて、物換はり星移るの感に堪へず、其の戰國時代に於ける關東の驍將が、主家の餘業を支持し威を以つて西上州の諸城を從へ、延いて權を武州の諸城に示し、相繼二州の北條氏に備へ、甲信二州の武田氏と争ひし鎧略に伴ふ規模を窺ふに由なしと雖、亦俯仰憑弔の間に、城の形勝の宜しきを得たるものを憶はずんばならず、豈戰の成敗を以つて之を論ずるに忍びんや。

抑も箕輪城を築きしものは其の誰なるやを問ふに、遠く之れを古史の文に徴せざるべからず、日本後記に云ふ天長三年太政官府の上總・常陸・上野の三國を以つて、親王の任國と爲し、其の守を太守と曰ふと、續日本後記に云ふ、平城天皇の皇子三品阿保親王は、承和元年を以つて葛井親王並に明日香親王に次いで、上野太守と爲られたまふと、固より當時は任國に赴きたまふことなく、其の介若しくは權介をして、吏務を執らしむるに過ぎずと雖、阿保親王と上野國とは、如何なる深き縁故を來たせたまひしにや、其の子業平朝臣の故あつて東國を歴遊するに際し、特に上野國群馬郡箕輪村並に室田村等に駕跡を留めらるゝものあり、故に箕輪村に石上寺あり、其の石上は大和國に在りて朝臣の生地なり、室田村に火影碑あり、碑は朝臣の寵されし侍婢の墳墓と稱せり、斯くの如くして朝臣の子業重、始めて上野國に來り、吾妻郡長野原に假寓を構へ、爾後其の父業平に賜はりし姓・在原を頭銜するの外、更に假寓の地名に據り長野を氏とす。後に業重の孫業國・上野守に任ぜられて、新たに石上の姓を賜はる、其の十五世の孫は即ち康業なり。是に至つて葛井氏在原と新姓石上とを廢し、遠祖業重より氏としたる長野を冒行し、曾玄も亦之れに倣ひ、且つ耳孫の末に至るまで濱川の地に在りしもの妙からざりしが、之れを遠裔信業に傳ふるに至り、關東の騷擾已むことなく、其の濱川の居るべき所にあらざるを識り、始めて城を箕輪に築きたり。是より先き、長野氏は鎌倉の管領山内上杉氏の長臣たりしが、信業の子業政に至り、其の主上杉憲政の復た昔日の如き威武なく、頗る軍氣の沮喪するを慨し、數ば之を諫むれども納れられず、其の憲政の上野國平井の居城を、北條氏康の爲めに陥落せられ越後國に奔るや、信業は己むを得ずして、憲政の依りて其の氏を授けし上杉謙信に屬すと雖、業政は毎に上杉氏の舊業を復せんことに努め、忠武遙かに他に勝れ、節義あり鎧略あり、士氣凜然として犯すべからず。相州兵亂記に云ふ、上杉の長臣上州箕輪の城主長野信濃守業政は、武勇威勢ありて近國無雙の良將なり(中略)今上杉氏衰へたりと雖、猶ほ武州に岩槻の太田美濃守資正入道三樂あり上州箕輪に長野信濃守業政あつて威を振ふ、爲めに甲州の武田信玄・箕輪を攻めんとして出馬すること五年の長きに及ぶと雖、遂に一たびも籐を武田氏に輸せず、信玄も亦攻むるに術なくして退くと、當時の敵國として業政を視ること此くの如し。長野氏は箕輪を牙城として、別に其の族をして室田の鷹留城を築きて之に居らしむ、業政に至り更に和田・長尾・小幡・木部の諸氏に其の女を嫁し、自ら岳父を以つて居り、中には上杉氏の裨將等も之れあるべきも、能く西上州十一城主の首として、家臣六百二十人を統督す、家臣の中には執權あり四家あり四臣あり、各軍政と農

政と力を盡し、殊に祖先より心を水利の道に潜め、長野堰なるものを創製して年々田畝に灌漑の便を謀り、民をして稼穡の業を勵ましむ、ために箕輪城は兵給り糧足るの概あり。是を以つて北條氏は之を略取せんとして措かず、數ば武田氏と謀を通じ、武田氏をして之を攻めしむ、武田信玄は當時に於ける兵法の大家なり、世一たび機山の名を聞けば、忽ち其の兵を用ゐること鬼神の如きを想ひ、怯將は往々氣死するに至るあり、而して業政は信玄の弘治三年並に永祿四年を以つて、二たびまでも萬餘の精兵を引率し、甲州流の兵法を把つて能く之を攻むと雖、業政の守る所は金城鐵壁の如く、加ふるに兵強く糧に富み、復た術の施すべきものなきのみならず、却つて信玄は敗を取つて將卒を失ふこと多くして退くと、此の間業政は絶えて謙信の援を求めしことなく、好し謙信の偶ま兵を信州に出すありて信玄に對することあるも、固より業政の關知する所にあらず。吁乎業政は實に皇族の遠裔として、上州出身の良將として、節義あり韜略あり、士氣凜然として犯すべからず、一片主家の舊業を復せんと欲する赤誠は、其の兵を用ゐること鬼神の如き信玄も、前後十餘年間、一業政の爲めに志を西上州に得る能はざりしは、洵に上州歴史の精華にして、後の史家たるもの箕輪城址を記するに方り、大に力を出さざるべからざるものなり。惜ひかな業政病を以つて永祿四年六月に卒す、其の終りに臨み言を兒業盛に遺して曰はく、我れ多年身命を顧みず、敵を四面に受けて屈せざりしは、上杉氏を再興せんと欲してなつて歸となさば、孝養之れに過ぐるなしと。嗚呼後の此の言を開くもの、誰れか業政が忠魂義魄を具ふるに泣かざるものあらんや。

業盛右近之進と稱す、是に至つて父の信濃守を冒す、乃ち執權藤井友忠と議し喪を發せず、信玄之れを聞き喪に乘じて攻めんと欲し、永祿六年春、兵一萬五千を引卒し、先づ西上州の諸城の中に就き、特に國峰城を陥れ、兵を三道に分ち、松井田・安中・箕輪・三城を攻む、既にして松井田・安中二城陥り、兵盡く箕輪一城に集まる、業盛驍將の器なること之れを父に承く、況んや父が遺言の心に銘じて忘れざるに於いておや、善く拒き善く戰ふと雖、敵衆勝れて破竹の勢を示し、城兵寡うして之れに敵せず、日々死傷多く、且つ業盛の其の亞父とも目すべき、藤井友忠の椿名沼畔(今法峯寺深田の邊)に於いて、信玄の兒勝頼に刺さるゝあり、是に於いて業盛自ら其の死を潔うせんと、城門を開いて突出し、看るゝ敵二十八騎を斬り、人馬血を蒙むること雨の如し、笑つて城に歸り持佛堂に入り、父の靈牌を拜し、佛號を三唱し、

春風に梅も櫻も散り果て、

名のみ残れる箕輪の山里

なる國風一首の辭世を遺して屠腹す、時に年十九、蓋し業政の兒たるに愧ぢずと謂ふべし、其の臣白川某以下三十餘名之に殉ず。業盛の妻は後村上天皇の末葉と稱し、最も姿色あり、業盛の死後虜はれて甲州に至る、信玄數ば之れを脅かすと雖、貞節を守りて聽かず、遂に殺さる、業盛一男あり時に年僅に二歳、藤井青柳之れを懐いて吾妻郡に奔る、後終る所を知らず、其の他遺臣の里巷賦畝の間に潜伏して、再び長野氏を興さんと欲するもの多く、彼の長野業通・同業固の如きは、應留城の陥りし後、或は祖宗の發祥地たる吾妻郡長野原町に隠れ、再び長野氏を興さんに隠れ、祖宗の業を恢復するに努めしが、與に志を得ずと云ふ、悲むべきかな。是に至つて遺臣は二主に仕ふるを辱しとせずして歸農するもの多く、現に群馬郡稻荷臺の藤井氏は、長野氏執權の系に屬し、箕輪村の下田氏は長野氏四家の系に屬す、其の他北甘樂郡下仁田町、群馬郡車郷村、同郡長野村、及滋賀縣犬上郡正法寺村、新潟縣高田市等に、今も尚ほ長野氏の系に屬す、其の他北甘樂郡下仁田町、群馬盛死後の箕輪城は、武田氏に屬して其の臣内藤友昌之を領し、次いで織田氏に屬し、澗川一益之れを領し、更に北條氏に屬し、内藤某之れを領せしが徳川氏の幕府を江戸に開くに際し、其の名臣井伊直政に此の城を賜はりしも、直政は慶長三年徳川氏の命を以つて、箕輪城を高崎に移すありて、是より箕輪城下の繁華は高崎城下に轉じ、當時高崎城大門の梁上に其の事を記するの外は今も尚ほ箕輪村に其の城址の空濠殘壁と一掃に過ぎず、若し之れを詳悉するに至つては、或は一部の書を成すに餘あり而も世は唯だ箕輪軍記と關八州古戦録の一節とを知るのみ、頼襄の日本外史之れを闕き飯田武彦の野史幸にして僅に長野業政を傳ふるあり稍や群馬縣人の意を強うするに足る。(明治四十一年十一月稿)

箕輪城考(上)

福島 武雄

第一章 總論

第一項 箕輪城の價值

群馬郡箕輪町の北方に箕輪城がある。榛名山の東南麓に在つて、關東平野に臨む丘の南端を利用して造つた「丘城」に屬する物である。地形の複雑、繩張りの妙、城地の擴大なる事或は城下町の整美せる事、縣下稀に見るの城地である。殊に其攻守に當つて多數の屬城を利用し、當時築城及戰術に於て最も進歩した所謂甲州流の本山たる「武田信玄」を向ふに廻し、數十年の久しきに亘り、故主上杉氏の爲によく孤忠を完ふした點は別として、單に戰術、築城術上から見ると實に興味深い物である。

箕輪城は城自身に優秀なる築城眼を以て築かれてゐる點で縣下屈指の堅城である。然し當城は單に「城堅固の城」であるのみでなく、東は保渡田、濱川、南は白岩、鷹巢、西は富岡、鷹留の諸城に依り、北は榛名山の險を利用して一の防禦區域とした。即ち『所堅固の城』としての箕輪城は正に之である。更に當城は城主と血縁關係ある諸城主を利用した。否當時の進歩した築城戰術上から判斷をして、血族關係を結んだ其最も著しい例は信濃守業政で、其子女十二人は何れも要地の城主の元へ嫁してゐる。例へば厩橋、高崎、倉ヶ野、木部、安中、國峰、松井田、板鼻、鷹留、大戸等で、之等に血縁關係のある白井及び總社の長尾氏の本城及び屬城を加へる時は、群馬郡を中心とした周圍の數郡を合せた擴大なる防禦線となる。然も其各城の配列は唯漫然と指定されたのでなく、後章に記するようになつて充分なる注意の下に撰定された物である。斯く本城を中心として周圍に砦を多數設ける事は、當時の大城郭にしばしば利用された事で、白井城、平井城、金

山城等は縣下で著しい例であるが、其價值より見て（即ち國堅固の城としては）箕輪城に及ぶ物はない。又當城を歴史的に考へてもかなりの變化が認められる。今迄箕輪城は大永六年に築城されたと信じられてゐた。然し當城の築かれたのは、後に記す様に戰國時代ではなく、少くも足利時代初期、或は鎌倉時代に迄溯り得るかも知れない。之が後に幾多の改築増補が行はれ、永祿落城の大試練を経て、武田氏の改造、井伊直政の増築となつた。現在の箕輪城は慶長三年井伊直政が高崎の和田城に移つた當時の城址で、世に箕輪城圖と傳へる物も井伊氏時代の物である。従つて此圖に依て長野氏の永祿の合戦等を批評する事は考へねばならぬ。然らば武田氏、長野氏時代の箕輪城は推考する事が不可能であらうか。否或程度迄は各時代の繩張りの変遷、推移を考へる事も出来得やう。

昨年九月、城内の最要部たる「御前曲輪」に舊井戸址が発見され、其底から多數の墓石が発掘された、而してそれ等多數の墓石中には年號、戒名等の記入されてあるものも數個あつて、長野氏累代の墓碑中の一部である事が證せられた。其後此墓石發見に刺戟され、全町一致を以て墓石其他長野氏關係の遺跡、遺物の保存から長野氏遺業の調査及び其發表を目的とする『史蹟保存會』が設立された。現町長清水氏を初め下田氏・長島氏・石川氏等其急先鋒として、目的の遂行に努力する事となつた。而して不肖余輩にも箕輪城に關し一文を草する様依頼があつた。即ち余が此處に一稿を草し、以て余の見た「箕輪城考」を公にする所以である。

縣下の古城址中最も有名なのは箕輪城であらう。野戦に攻城に幾多の物語を残してゐる。又平時も上泉伊勢守等を中心として、劍客の物語も傳へられてゐる。そして城主長野氏が數世に亘り近隣に雄視し、外攻内治共に大いに上毛男子の爲に氣を吐く所があつた。そして長い華々しい歴史の最後は悲壯な永祿の落城に依つて彩られてゐる。多數の戰記物語が箕輪城の爲に費されたのも當然であらう。箕輪記、箕輪軍記を初めとして、十數種の大同少異の戰記類はそれ自身に依り、又は之等を原本とする講談本等に依て、箕輪城は廣く世に紹介された。其意味に於て之等軍記本の効果は偉大であるが、一面史實を誤つた事も非常である。近來は正確な史料に依て調査を進め、又は已に發表をしてゐる人々も二三に留まらない。それ等の人々の大部分

は郷土歴史家と軍人で、箕輪城を各々專攻の方面から觀察をしてゐる。所謂盾の両面から研究してゐるのであるが、其他に之を側面から又は之を横斷して觀察する事も必要であらう。自分は必しも其適任者ではないが、少しく異つた方面から箕輪城の觀察を試みた。

第二項 箕輪城史概要

第二章以下、箕輪城の各論を記す以前、其概要を記す事とする。

最初の箕輪城主長野氏は、平城天皇の皇子阿保親王の第五子在原業平の後裔として知られてゐる。業平の子業重は上野國司に任ぜられ群馬に居住したとも傳へられてゐる。承久頃當地に箕輪太郎師政が居住したといふは、恐らく長野氏の先祖であらう、箕輪城址から發掘した墓石中康元元年の銘あるのが發見されてゐる之を見ても長野氏が此地に土着したのはかなり古い事である。長野氏累代中、著しく知られる様になつたのは、業平二十八世の孫と傳へられる乙業の代からである。乙業の居所は濱川の館であると傳へられてゐるが或は箕輪であるかも知れない（覺堂曰、長島氏の談に乙業が箕輪に住んで居たと古記録にありと云ふ）乙業の子尙業は山内の上杉顯定に仕へ其執事となつて箕輪に居を構へ、後に室田に鷹留城を築いて移つた。其子憲業及び信業は共に父の意を繼ぎ、箕輪、鷹留の二城を守つた。信業の子業政は信濃守と稱し、當時平井城に在つた上杉憲政に仕へ、殊に智勇兼備の將として著しかつた。業政は放縱度なき憲政を諫めたが、遂に其言容れられず、憲政は天文二十年平井城を捨て、越後の長尾景虎に依つた。憲政去つて後も獨り箕輪に止まつて、城郭を修理し、砦城を築き、北條、武田氏の爲に備へ、故主の爲に奮闘した。

武田信玄が上州に出陣したのは、天文十五年十月上杉憲政と碓氷峠に戦つたのを初めとする。其後天文、弘治、永祿と數回に亘つて出陣してゐる。憲政が越後に赴いても、其宿將であつた長野業政は、益々城郭を嚴にし、強兵を養成して、侵略軍に備へてゐる。従つて當然起らねばならないのは、長野氏對武田氏の合戦である。武田氏は利を以て業政を引入れんとして、容れられなかつた。そこで次に來るのは武力を以ての征

服である。然し當時の名將信玄が用兵、攻城の優秀なるを以て著しい甲州流の軍法や、百戦練磨の甲兵を以てするも、遂に業政の本據箕輪城に一步も突入する事が出来なかつた。然し天は何時迄も長野氏の爲に幸福を與へなかつた。永祿四年、四圍多端な折に業政は、若年の次子右京進業盛を老臣藤井豊後守元忠(元忠友忠は異名同人が)に托し、爲すべき多くの仕事を残して卒した。家中の重臣等と議して、秘密にしておいた業政の喪は、遂に信玄の知る所となつた。永祿六年(或は九年とも云ふ)必勝を期した武田氏の包圍軍の爲に、悲壯な落城を遂げた。

長野氏の滅亡後、武田家の武將内藤修理昌豊が城代となり、城郭の改造をしたが、後保渡田の砦を修理して之に移つた。後其子外池が繼いで城代となつた。天正十年三月武田氏の亡後、織田信長は瀧川一益を厩橋城に置き、上野を管理せしめたが、此時箕輪城を人質を置く爲に使用したといふ(覺堂曰、土地の口碑には一益は同年六月本能寺の變に依り、瀧川一益上洛後は、小田原北條氏の屬城となつた、天正十八年北條氏滅亡し、徳川家康の關東入國となり、井伊兵部輔直政が十二萬石を領して城主となつた。井伊直政は大いに城郭を修造した、現在の城址及び地圖は當時改造後の物である。大手方面の西明屋、搦手の東明屋の城下町は、井伊氏に依て造られた物であらう。井伊氏は當城が要路を離れる事遠い爲に(或は徳川幕府の内命もあつて)城を廢して高崎城を修理して移つた。之が慶長三年で、其後は星霜更に三百三十年、荒廢にまかせて現在に至つた。直政は慶長五年關ヶ原の大勝後、石田の居城した佐和山城に移り住んだ。其子直勝の代、慶長九年に彦根城を新築して移り、其弟直孝の代に至つて完成した。

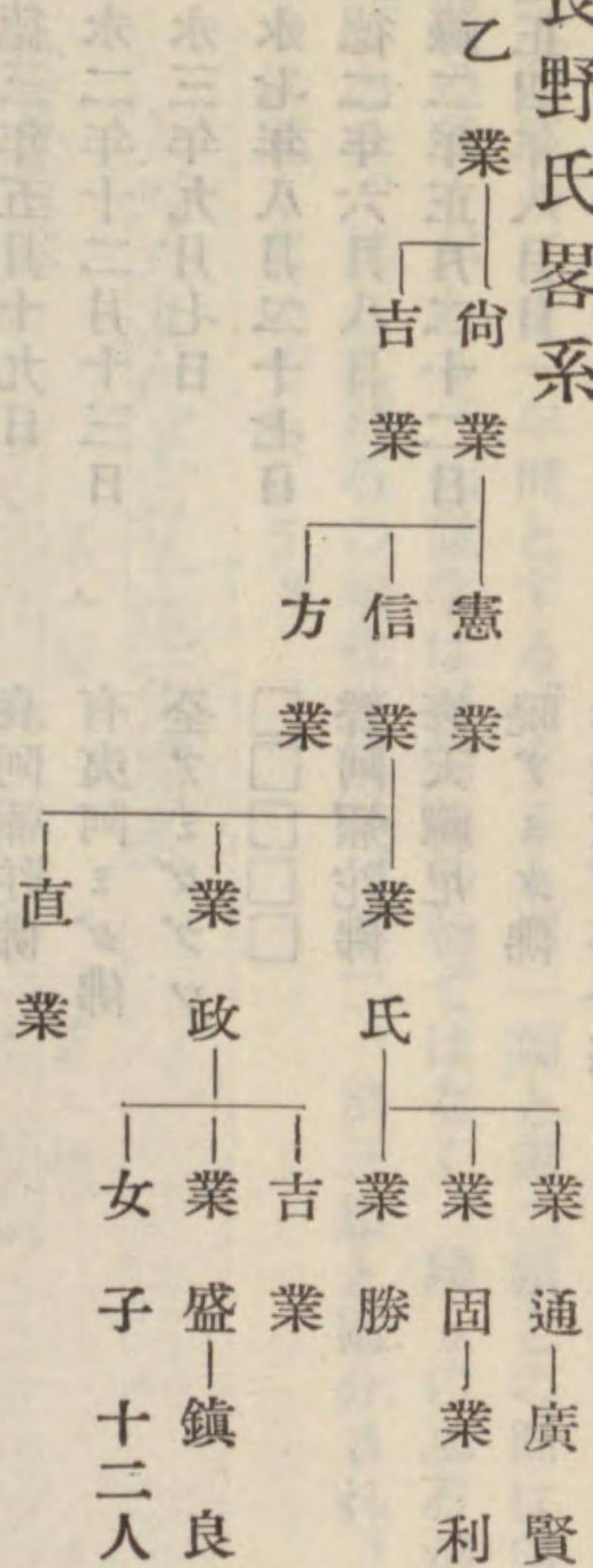
第二章 長野氏略傳

第三項 長野氏系圖

箕輪城主長野氏は平城天皇に出づと傳へられてゐる。長野氏系圖に、平城天皇の皇子阿保親王は上野の大

守に任ぜられ在原の姓を賜はつた事、親王の第五子が業平で上野介に任ぜられた事等が記されてある。又業平の五男左衛門太輔業重は上野國司に任ぜられ、吾妻郡長野原に住して長野氏を名乗つたとの説もある。又東鑑に箕輪太郎師政なる者が在つて、之を箕輪長野氏の祖となす者もある。業平二十八世の孫を乙業といひ之が長野氏中興の祖である。

長野氏畧系



乙業の居館址は群馬郡長野村大字濱川字道場の北方であるとし、其南に居館を構へたのは、一本に依れば乙業の男隆業であると傳へてゐる。此一本は乙業と尙業との間に、隆業、業次、業末、業經の四代を入れてゐる。其何れが是なるかは今俄に斷定する事は出来ないが、濱川道場附近には濠址もあり、附近を館と稱し長野氏數世の居館であつた事は、察するに難くない。

其後尙業(一本に業尙)は濱川館が守戦に不利な爲め、室田に鷹留城を築き次で長年寺を開基したと傳へられてゐる。其後長子憲業に傳へた。憲業は後箕輪城を築き、當城は後弟信業、鷹留城は信業の長子業氏が嗣いだといふ。之に依ると箕輪築城は永正九年で憲業の代となるが、一説には其弟信業の代として、築城年代を大永六年としてゐる。此二説は築城者及び其年代に相違はあるが、鷹留城を本城として後箕輪城を支城として築き、更に箕輪を本城として鷹留城を支城とした事になつてゐる。

業政は信業の後を嗣ぎ箕輪城主となつた。信濃守と稱し、智勇兼備の將であつた。其死後業盛が嗣ぎ、永祿年中武田氏の爲に落城した。一説に尙業の子信業は後に憲業と改稱したので、其長兄の憲業とは異名同人であるといふ。然し之は別人と看做すべきであらう。

第四項 濱川に於ける長野氏

濱川館に於ける長野氏は乙業を以て祖としてゐる。然し居館附近の來迎寺に於ける長野氏累代の墓碣に依れば、此説に疑を挟む事も出来る。來迎寺の墓碣三十基餘の内、年號の判明せる物を列記すれば、

至徳元年七月十七日 美珍眞禪尼
 明德三年五月十九日 哀阿彌陀佛
 應永二年十二月十三日 有夷阿ミダブツ
 應永三年九月七日 全アミダブツ
 應永七年八月二十七日 □□□□□□
 寶徳二年六月八日 聲阿彌陀佛
 長祿二年正月二十二日 修天禪尼
 寛正四年八月日 曉アミタ佛
 寛正六年十月十日 奉造立石塔一基
 明應七年四月十七日 明茫禪定尼
 明應九年十一月二十六日 頓アミタフツ
 文龜三年二月二十日 聲アミダブツ
 永正十六年四月五日 奉造立塔廟屬開床亡

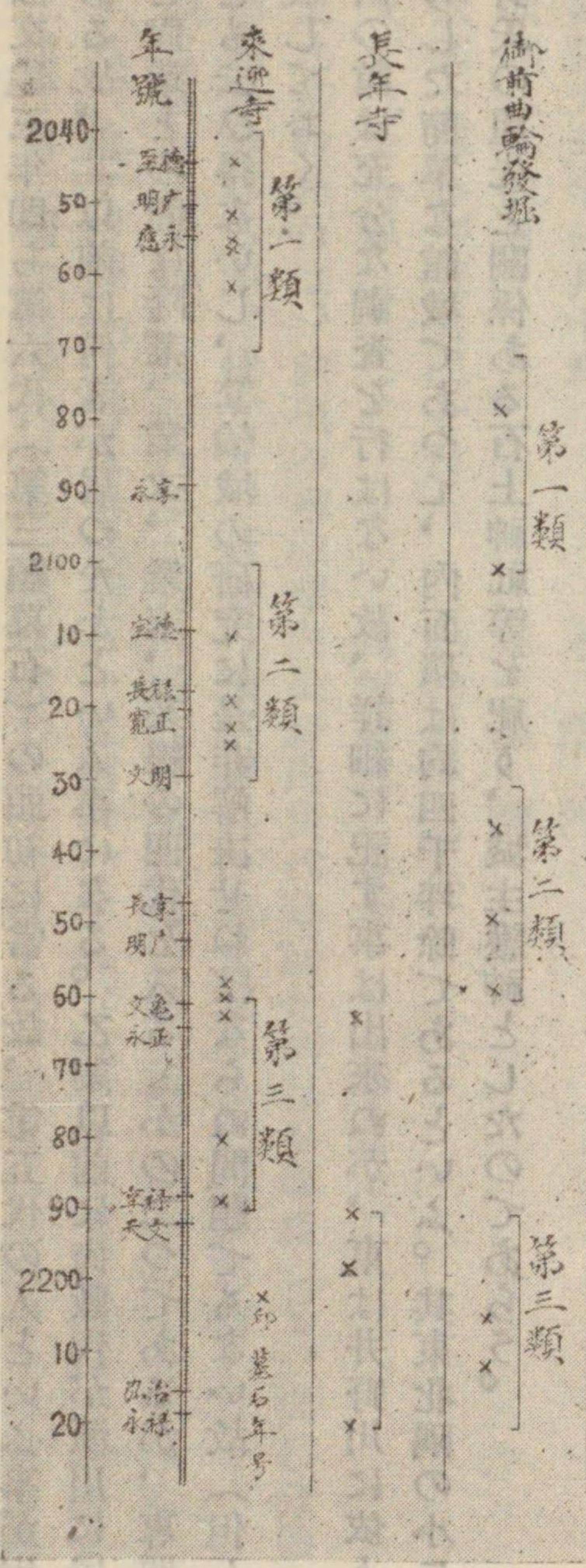
享祿二年十二月十三日

材一アミダブツ

以上十四基は全体の約半数に及んでゐて、現在碑文の判讀し得る物の大部分である。従つて以上十四基に依て全体を推察する事も大なる誤りは起り得ない事と考へる。此假定の下に次の如く推論を進める。

碑面の判讀し得る十四基を年代順に整列すれば、其年代が大略三個處に集合する事に氣が付と、即ち第一類は至徳元年から應永七年迄十八年間に、第二類は寶徳二年から寛正六年迄の十六年間に、第三類は明應七年から享祿二年迄の三十一年間とする。すると第一類と第二類との間は四十八年間に、第二類と第三類との間は三十二年間の隔りがある。此數字は絶対的の物ではなく、残りの墓石が判讀し得れば、其數字に變動のある事は明かである。然し其墓石の年代が第一、第二、第三類と區分され、其間に三十年前後の隔りのあるべき事は信ずるに難くないであらう。

長野氏累代墓石年號一覽圖表



四七〇年、第三類を一五〇〇年から一五三〇年迄と、各類を三十年間と看做せば、其間もやはり三十年間となる。そこで第一類を假定第二代とすれば、第一代は紀元一三五〇年の觀應元年から一三八〇年の康暦二年

に至る、三十年間となる。第二類は第四代、第三類は第六代となる。此假定累代に依る時は、乙業の子と稱せられ、山内上杉顯定に仕へ執事となつた尙業は濱川の館から室田鷹留城に移城した事になつてゐるが、其死亡は文龜三年即ち第六代（第三類墓石）の頭初に當る故、第五代の人といふ事が出来る。次に第四代は乙業である故、其以前は何者が居つたかといふ事になる。乙業以前に尙數代が濱川に居住したとするか、又は乙業と尙業との間に隆業、業次、業末、業經の四代を入れるか、かの二つであるが、専門違ひの自分としては目下何とも云ひ得ないし、箕輪城の研究に是非解決せねばならぬ問題でもない故（但し自分に取つて）宿題として残しておく。

濱川の館は充分な調査を行はない故、詳細に記す事は出来ぬが、東は井野川に依り、西南北三面に一重堀を廻らした簡単な館城であつて、内面積は約四千坪餘であるといふ。其東北隅の小丘を石尊山といふは、城主長野氏の祖先と關係ある石上神社等を祀り、城主護神としたのであらう。

第五項 箕輪に於ける長野氏

箕輪に於ける長野氏は、永正九年憲業の築城又は大永六年信業築城以後居住した事になつてゐた。然し昨年九月箕輪城内御前曲輪の舊井戸底から發掘されたる多數の墓石は、何を語る物であらうか。御前曲輪は本丸の北に當り、其北方廣濶をへだて、城中最高所に一郭があつて、里人は玉木山と呼んでゐる。之等郭の使命は後に城郭の項に詳細に記す事とするが、玉木山は靈置山で、城主累代の墓石を安置した所であらう。御前曲輪は當時の城郭としては城主の持佛堂の在つた所で、永祿の落城直前に、先祖の墓石を敵の爲に辱めらるゝを防ぐ爲に、靈置山から持佛堂に移し、更に庭内の井戸底に埋めたのであらう。それが三百六十餘年の後發掘されたのである。之等と同型式の墓石は、城南の法峰寺境内にも發見され、附近の人家にも靈置山から移した物が散在するし、城地の東北石上寺東方の窪地からも多數發掘せられた。従つて昨年御前曲輪の井戸底から發掘された墓石は靈置山に集めた物の全部ではない。又靈置山の墓石は箕輪附近の長野氏關係の墓

石の全部ではない様である。思ふに長野氏が箕輪城増築の折、附近にある先祖の墓石を集めて靈置山に安置したのであるが、それが全部ではなく、石上寺關係の物は舊石上寺の墓地即ち稻荷曲輪に在つた爲、其他の物を築城學上之とほゞ同地位にある靈置山に移したのであらう。（後章參照）又石上寺内の墓石は後に寺が現在の地に移轉した時、共に移した物であらう。次に井戸から發見された數十基分の墓石中、碑文の判讀し得る物を列記すれば次の如くである。

應 永 四 年 盛 勝 忠

應 永 二 十 四 年 正 月 七 日

永 享 十 一 年 卯 月 二 日

文 明 八 年 二 月 二 日 逆 修 妙 祐 祥 譽

延 德 元 年 十 一 月 十 日 本 淨 門

八 日 明 應 八 年 四 月 果 源 精

天 文 十 四 年 午 五 月 二 十 日 如 法 海 淨 上 人

天 文 二 十 一 年 爲 信 業 墓 （文字少しく明確を缺く）

以上九基の墓石は、前項の來迎寺内長野氏累代墓石と同じく取扱つて、同じ分類をする事が出来得やう、之は四類に分れるが、便宜上、最初の飛び離れた康元元年の墓石は別格として、次の應永四年から永享十一年迄の三基を第一類、文明八年から明應八年迄三基を第二類、最後の天文十四年と同二十一年の二基を第三類とする、之を附圖『長野氏累代墓石一覽圖表』中に、來迎寺の墓石同様に列記すれば、第一類は假想累代の第三代、第二類は第五代、第三類は第七代に相當する。即ち濱川來迎寺の累代墓石中缺けた部分は、箕輪城内から發見された墓石に依て完全に補足する事が出来る、以上の現象を如何に説明するか。之を永正九年又は大永六年初めて箕輪に築城したとすれば、其靈置山に

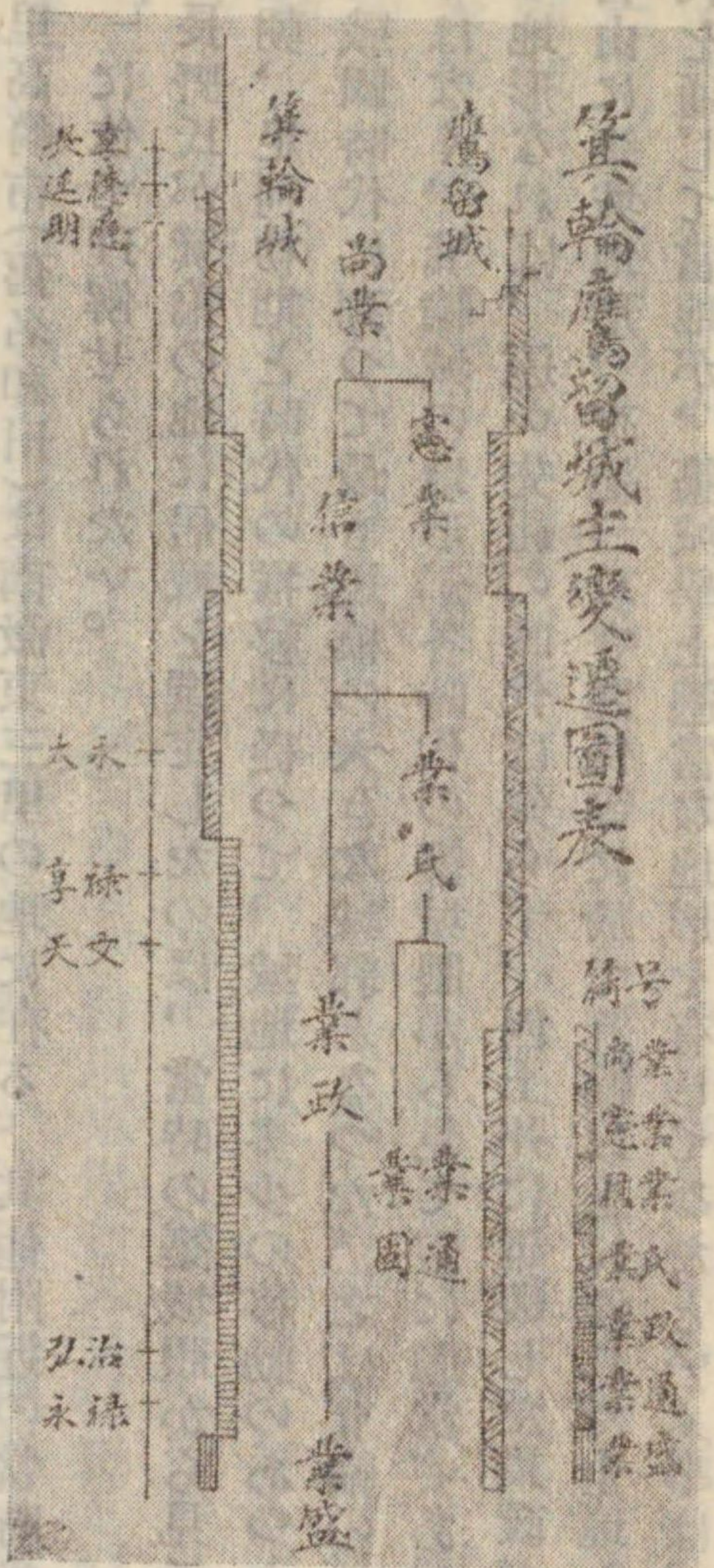
安置した數十基の墓石は來迎寺から運搬した物とせねば説明出来ない。長野氏が來迎寺から墓石の一部を運搬するとすれば、適當な撰定が行はれた物と看做さなければならぬ。其撰定さるべき墓石は長野氏累代の當主及び密接な關係を有する者の墓石に限られておらねばならぬ。然るに其結果は『一覽圖表』に現はれた通り、年代の差が著しく現はれてゐるだけで、外に撰定の要素は全然認められない。そこで自分は、箕輪城内發見の墓石は來迎寺から移轉した物ではなく、箕輪に在つた物を靈置山に集めた物であると主張する。然らば何故に古い長野氏の墓石が箕輪に存在するか。之は箕輪に於ける長野氏の歴史が古い事を物語つてゐるに外ならない。現在箕輪町西明屋の八幡宮は、文明六年長野氏の建立と傳へられてゐて、境内に文明六年の一對の石燈籠中其一基を残してゐる。其外石上寺入口にも延徳三年の石燈籠を一基存し、尙境内にも之と同時代と思はれる年號の判讀し得ない石燈籠を残してゐる。法峯寺境内からも本年正月永徳四天甲子□月八日の墓石が發見された。其外詳細に調査すれば當時の金石文は箕輪町には他にも多數發見される事であらう。そして之等は何れも長野氏の残した物であらう。

『一覽圖表』に依て直ちに想像し得らるゝ事は、長野氏が箕輪に居住した年代は、濱川よりも古くとも新しい事はなく、一代交代位に居を移したのではあるまいか。或は一代交代といはずとも、長野家當主の意のままに或は箕輪、時には濱川と居館を移したのではあるまいか。其祖在原業平が東國歴遊の折、特に箕輪に永く足跡を留めた爲に、之を記念する爲、石上神社を建立したとの説も、一笑に附する事は出来ないと思ふ。又石上寺の建立等も可成古く、石上寺記の如き普通の縁起類と一所に、無價値な物として捨て去る事は出来ない事と思ふ。

第六項 箕輪及び鷹留城主としての長野氏

尙業が濱川の館を守戦に不便なりとして、居館を移した事は已に記した。而して尙業最初に築城したのは箕輪城で、後に支城として室田に鷹留城を築き、移り住んだ事は第三章に於て記す故、茲には單に其事實の

記載のみに止めておく、尙業は鷹留城を築いて之に退き、双林寺三世に歸依して長年寺の開山とし、文龜三年二月二十日卒して、長年寺に葬つた。長年寺慶岩長善と諡した。



尙業の鷹留引退後、箕輪の本城は長子伊豫守憲業が嗣だ、後永正九年の頃箕輪及び鷹留の二城を増築した。又保渡田、高濱、濱川等に支壘を設けて、箕輪城の防備を嚴重にした。後弟信業を鷹留城から招き其跡を續がしめ、自らは吾妻郡猿ヶ京の故城を修築して居住したが、同十一年(或は享祿三年)戦死した。

信業は尙業の次子で、初め禪正忠、後信濃守と改めた。父尙業の後を受けて鷹留城を守り、後兄憲業の後を嗣いで箕輪に居城した。天文二十年十一月七日卒し、南方長宗と諡し、長年寺に葬つた。信業が箕輪城増築の折、城の鬼門に當り一寺を建立し、布留山石上寺と稱した。(覺堂曰、石上寺記及び過去帳には業平の建立とあると聞けど、遠かに信じ難し)之は大和國石上寺に模して、祖先在原業平の靈場となし、兼て城内安全、武運長久を祈願した所である、故に此寺を鬼門寺と呼ぶと傳へて居る。

信業が箕輪城に居住して後は、其長子業氏が鷹留城を嗣いだが、天文七年四月病のため卒した。長年寺に葬り、以山長傳と諡した。

業通は業氏の長子で、父の死後鷹留城を守り、二弟業固、業勝と共によく其任を遂げた。其後の行動は箕輪落城の章に詳述する。

業政は信業の次子で、信濃守と號し、父の跡を嗣ぎ箕輪城主となつた。永祿四年六月二十二日卒した。車

郷村大字富岡の長純寺に葬り、實相院一清長純と諡した。之より先、業政の長子吉業は天文十三年平井城主上杉憲政に従ひ、河越に於て北條氏康と合戦の時、重傷を負ひ歸城して歿した。従つて業政の死後は次子の右京進業盛が嗣ぎ、箕輪落城と共に自害した。

第二章 箕輪城址考

第七項 箕輪城の位置及地勢

箕輪城は群馬縣群馬郡箕輪町の中央部に在つて、町の最も繁昌な西明屋ニシアカヤの北端に接續してゐる。榛名山は其西北三里の地に在つて、東南二方は平野となつてゐる。城地は海拔約二八〇米突あつて、西は榛名南麓の善地平とは白川の斷崖を以て相對し、北方金鋪平とは、緩傾斜に連絡してゐる。前橋市(舊名厩橋)は東東南三里高崎市(舊名和田)は南微東三里の地に在る。其他附近の當時の城砦との關係は第一圖「長野氏城砦配置圖」に依て理解せられたい。

長野氏が箕輪の地に居城を撰定したのは、當時の築城眼から見て至極適當といはねばならない。鎌倉、南北朝、足利初期と時代の推移に従つて、城地に多少の移動のあつた事は第四章に於て記す通りである。而して戦國時代に到つて最も規模の大きな城郭となつた。之は箕輪の地が長野氏代々の居城地であつたが爲のみではなく、箕輪城の地形が各時代の築城眼から見ても常に適當であつたが爲であらう。もし城地として不適當の地形なれば、遠い先祖の時代は知らず、西上州に雄視した業政の時代には、廣い自己の勢力範圍に於て、自由に築城地形、交通、攻守關係等に於て箕輪以上に優れた土地を撰定したと見るべきであらう。斯く各時代を通じて當地が、築城學上適當な地形を有してゐたといふ事は、特筆大書すべき事である。

城地附近の地形は第二圖「箕輪城址略測圖」に圖示した通りで、現在の地形に依つて築城以前の地形を推測する時は、第四圖「箕輪城山築城以前の地形推定圖」の如き物となるであらう。以下此二種の圖に依て城

地の地形を記す事とする。城地は榛名山麓の一部に位し、杉ノ澤方面から南方へ緩傾斜をなしてゐて、靈置山の邊から再び高くなり、西北—東南に長さ丘をなしてゐる。此丘の主軸(最高所)は東南に延長し、次第に低くなり、玉木山から八丁の地が最も低く、再び高くなつて椿山の小丘を造つてゐる。椿山は東西一丁、南北二丁、城地の最高所より降る事四十五米、約百五十尺であるが、周圍より高さ事十五米約五十尺ある故、足利初期に城地とする事も出来、戦國時代に本城の出城とするにも充分な規模である。

本城の地は海拔二八〇米以上で、東西及南面は急傾斜をなし、他の二側面は緩傾斜をなしてゐる。海拔二五〇米以上を城地の主体とすれば、長約五町、幅二町餘となる、之から南に一枝丘を出してゐて、之と前記主軸の延長即ち椿山方面への枝丘との間に灣狀凹地を造つてゐる。此中に又一枝丘を出して灣狀地を二分してゐる。今假りに東方の大凹地を法峯寺凹地、西方の小凹地を大手凹地と名付ける。城地の西側は白川が流れ、其兩岸は數十尺の斷崖となつてゐる。白川東岸と大手枝丘との中間は一帶の高地をなして南に延長してゐる。此高地は幅約二町南北への延長約十町で、東方の西明屋人家の位置よりも約二十尺高い、之を廣小路丘と名付ける。此丘と椿山との中間の凹地に椿名ノ沼があつたと稱せられ、其址は今に深田として残つてゐる。城地の東方には、南に流れる二條の小川があつて、之は當城の防禦には使用せらるべき物である。井伊氏時代の箕輪城の城下町中、搦手方面の東明屋の人家は兩川の間に挟り、大手城下の西明屋の人家は之と廣小路丘との中間に置かれてある。即ち之が東方面の防禦線をなしたのである。西は白川の斷崖に依つてゐるが、廣小路丘の南終端で其斷崖の高さも半減されてゐる。従つて此點を當城の外防禦線とする事が出来得やう。最後の北方は緩傾斜ではあるが、次第に高くなつてゐる。箕輪城として最弱點である故、築城に當つて相當此方面の缺點を補ふ様な設備をしてゐる。

第八項 城址

現在の箕輪城址は井伊氏時代の箕輪城である。世に箕輪城跡圖として傳はる物は、其製作年代は知り得な

いが、其原本は井伊氏が高崎へ移城後間もない頃の繪圖及記録等に依て作圖した物であらう。然し此原本は現在見當らず、第二の原本とも稱すべき物が箕輪町に傳はつてゐて、之は明治年間に寫した物である。第六圖「井伊氏時代の箕輪城圖」は此第二の原本に依つた物である。以下此第六圖と第二圖とに依て、遺跡としての箕輪城を論ずる事とする。

箕輪城は余の分類表中「丘城」に屬する物である。其牙城を丘上に設け、北方新曲輪から搦手に迄、南方鍛冶曲輪から大中門址迄の帶曲輪等は當城の外郭とも稱すべき物であるが、之を丘下の平地に設けた所は「平山城」と看做し得ない事もない。然し牙城の郭配置法は丘城の特色を示してゐる故、余は丘城中に編入して置く、已に記した様に、城地の最高所は丘の東北側に偏して之が主軸と一致してゐる。此線に沿ふて牙城の中央部に本丸が置かれてゐる。本丸の北に御前曲輪、南に二ノ丸が一直線に配置され、周圍及び各郭間は空堀に依て限られてゐる。此中御前曲輪が最も高く、本丸、二ノ丸と段々緩かに低くなつてゐる。御前曲輪の北側から前記三郭の西側を包んで、一段低く一列に郭が並んでゐる。之を北方から擧ぐれば、最も地形高く御前曲輪の北及び西側を包む物は通伸曲輪であつて、空堀をへだて、一種の郭馬出があり、又空堀をへだて、藏屋敷がある。藏屋敷は南半は一段低く石垣を以て境されてゐる。東北方面は一段低く、空堀を境として北は通伸曲輪から二ノ丸迄の側面を守つてゐる。其最北端は一段高く稻荷山と呼んでゐる。此附近は郭中最も廣く、稻荷曲輪と呼んでゐる。稻荷曲輪は南するに従つて、外側に折邪マヒツを設けて段々其幅を減じ、本丸、二ノ丸の東北側に於ては帶狀をなしてゐる。此帶狀郭と牙城との間には空堀ある故帶曲輪と呼ぶ事も出来るが、其高低の差二十尺以上なるに比べ堀の深さ十尺に及ばない故、之は腰曲輪と呼ぶのが適當であらう。此中間の堀は箕輪城大増築の時堀つた物で、其以前は單に腰曲輪であつた物と考へられる。通伸曲輪の北方には空堀をへだて、一小郭がある、之は城地中の最高所で、玉木山と呼ばれてゐる。玉木山靈置山で長野氏が祖先の靈を此處に祀つた物であらう。城地の最高所なるが故に、之を敵に奪取せられては籠城に不利多く之に物見を置く時は東西北の三方の遠望が自由である故、此所を物見臺とし防備を嚴重にした物であらう。此

東北側は一段低く腰曲輪を廻らし、其外周の空堀の外には丸馬出の址を存してゐる。其遺跡は不用意に通過すれば見逃す位であるが、徳川末期の繪圖に依れば其址も明瞭で、里人は今尙三ヶ月堀と呼んでゐる。之を以て見ても當時如何に此玉木山の物見臺を重要視したか判明する。

二ノ丸の南方には角馬出し形式の一小郭があり、之に並んで藏屋敷の南側を包む帶狀郭がある。此二小郭の南側には一郭があつて、中央から土居に依つて東西に分割されてゐる。其東方の物は城圖に木俣と記されてある故、之を木俣曲輪と名付け、其西方一段低き部分を木俣下曲輪と呼ぶ事とする。木俣曲輪の東邊は稻荷曲輪の延長した腰曲輪と接続してゐる。之から丘は二分して椿名枝丘と大手枝丘となつてゐる。東方の大手枝丘との間には堀切りを設けてある。此枝丘は緩傾斜を以て椿山の方に低くなつてゐる。その爲此方面の防禦方法として、五條程のホリキリを造つて、七個の小郭を豎に並べてゐる。其東西兩側は腰曲輪を一重乃至二重に設けて、各郭間の連絡に便してゐる。この様に堀切りを以て郭を分つ時は、其間の交通は一度堀切りへ降り、腰曲輪へ出て又次の堀切りから郭内へ入るといふのが普通である。之から一段低くなつて、又高くなつて椿山となるが、其間に現在道路となつてゐる所は或は往時の堀切り址かも知れない。椿山は長野氏時代には出丸として使用した故、内側即ち西側中段の腰曲輪を通つて連絡を取つた物であらう。

又一方大手枝丘は木俣下郭から南に分岐した物で、此方は前者に比して幾分急傾斜である故、堀切りに依らずに階段狀にして數個の小郭を設けてある。之も東西二側面には二條の腰曲輪を設けてある。之から分岐する小丘との間には城門址と見るべき物があり、其兩側は防禦上最も力を致してゐる様に見受けられる。長野氏時代の當城の大手は城全体の郭配置から論じて、此方面でなければならぬ。

現在法峯寺の所在地は、椿名、大手兩枝丘の中間にある凹地で、前即ち南方は崖を以て低地と境され、後背部は二重の腰曲輪を城地の間に設けてある。此腰曲輪は城内から此地に降るにも、又椿山砦と大手門附近との連絡にも使用される物である。寺内腰曲輪の下方の池には現今でも水が満たされてゐる。用水に缺乏してゐる當城が之を利用し、此處に水ノ手の郭を設けた事は察する事が出来る。

下段藏屋敷から西に降ると鍛冶曲輪に出る。之は鍛冶屋の居つた所とかで、今に鐵滓を出すとの事である。之から一、二條の腰曲輪が出て、城の西側を圍んでゐる。鍛冶曲輪から平地に降る所に左右に石垣を積んだ城門址があるが、之が内大手門であらう。平地に降るとすぐ城地と白川との中間が南北に長い帶曲輪状をなしてゐて、其内に一條の用水が流れてゐる。之は城内唯一の用水路で、白川東岸の中腹を開鑿し、上流から用水を引いた物で、城内の用水は此外は前記の水ノ手の郭の用水及び郭内少數の深井戸及び空堀底に設けた井戸から取つて用ひた物であらう。此用水路は長野氏時代の物と考へられる。第六圖に依ると前記城門を出て南すると一城門があるが、其遺跡は判然しない。之から少し南すると、此帶狀郭を横斷して白川岸まで堀切つた水路の址がある。之が城門址の一つで、其位置から云へば第六圖のコトウ門に當るのであるが、其南に白川河原に降る城門址がある所を見ると、第六圖中コトウ門の北方に在る城門の様にも考へられる。又コトウ門に相當すべき城門址は、此門址の南には精査しても見受ける事が出来なかつた。又此邊に堀址の様な址を見る事が出来ない故、前記の水堀址が圖中のコトウ門で、白川河原へ降る城門址は其南に在るべきを、第六圖に於て前後轉倒したのではあるまいか、白川河原へ降る門址は通用門と呼ばれてゐるが、兩側に石垣を積んで、非常に幅の狭い物で、埋門イミン又は不明門と稱する形式に屬してゐる。此白川へ降る埋門は、井伊氏時代には通用門として勿論使用したであらうが、長野氏時代にも之から白川を渡り對岸の金敷平の方に出て更に車鄉村富岡の長野左京亮直業の居城と連絡を取る上にも必要な事である故、廣小路丘にあつて同じく白川河原に降る人切通し及び馬切り通しと共に、長野氏時代の物であらう。

大手門址はコトウ門址から二町半程南に堀切りがある。此外方に不規則な外樹形式の一郭があつて、遺跡と地圖とよく一致してゐる。此大手口の形式は他に類を見ない珍しい物で、廣小路丘を一つの折邪オリヒサを付けた二重の堀切りで仕切り、其中間を同様に一ヶ處折邪を付けた空堀連絡した物で、後の空堀で仕切られた西方を外升形に見立て、東は道具屋敷と名付けた屋敷構へとしてある。之は井伊氏の時代に大手を移轉してから築造した物で、長野氏時代には第三圖の様に外側の堀切りだけあつて、廣小路方面からの敵を防禦した物であらう。

搦手方面は開鑿が進み田となつて、遺跡は大部分壊された故明かでないが、大体第六圖の通りで間違ひない事と思ふ。二ノ丸から土橋を降つて腰曲輪に出て、右折して再び坂を降ると馬出し形式を取つた一郭に出られる。二ヶ處に城門を開き、東の物は外郭に出られる物で之が搦手門である。此の門は新曲輪への通路であつて、兩者共に第六圖に依る時は樹形門の形式を取つてゐる。殊に新曲輪口の城門は、樹形内を内側の腰曲輪の高い所から、堀をへだて、射る事が出来て、江戸城の外櫻田門の形式を一寸思ひ出させる物である。樹形城門は永祿の頃已に考案されてはゐたが、長野氏がかかる樹形型式を採用したか否かは疑問である。従つて井伊氏か古くも武田氏の時に築造された物ではあるまいか。此搦手郭とも稱すべき一郭の北に一郭があつて、新曲輪と呼んでゐる。之は玉木山、稻荷曲輪等を包み、當城の北方を防禦する第一戦線の郭である。新曲輪といふ名稱から推すと井伊氏の築造の様にも考へられるが、之は長野氏が最も新しく増築した郭と看做すべきで、其理由は第四章第十六項に記す。搦手門外、新曲輪の東方にも一二郭があつた様見受けられるが、遺跡地の開鑿が甚しく進んだ爲、其郭の位置形状等を推定する事が出来ない。此部分は井伊氏時代には必要のない所故、永祿頃長野氏の増築した物であらう。

第九項 繩張り

箕輪城の各郭の配置等に就ては前項に記した故、繩張り即ち築城術の方から再び論じて見様。當城で最も注意すべきは牙城の繩張りである。御前曲輪、本丸、二ノ丸と三郭を豎に並べ、東側に腰曲輪、西側に帶狀曲輪（現在は四個郭に分割されてあるが）を設けた事は、第四圖の如く東北方が急傾斜で、西南方が緩傾斜をなす地形では足利中期以後に於ては極めて普通の事である。本丸を中央に設けたのは、北方に高所玉木山があり、之から一段低くはなるが又段々高くなつてゐる故、此方面からの攻撃を恐れた爲であつて、左もなければ御前曲輪の邊に本丸を設け、稻荷曲輪を其北方に廻らして腰曲輪を設けたであらう。

御前曲輪は本丸の北方を防禦すべき郭であるが、位置は當城の最も奥に位して、所謂袋郭フクロケルを爲して他郭への交通はない。或は之から空堀に降つて他の郭へ行く設備は或は有つたかも知れないが、それも本丸との境の空堀から更に西の深い空堀に降つたのであらう。此郭の西側面中央部に、空堀内に突出した方形の石垣で積んだ個處がある。之は橋臺と稱へられて之から通伸曲輪に橋があつた様傳へられてゐるが、之は恐らく橋臺址であらう。長野氏時代の山城等は所謂「堀内道」ホリウチミチを盛んに使用してゐた物で、現に當郭と通伸曲輪との中間の堀への入口及び稻荷曲輪と玉木山との間の狭くなつてゐる部分には城戸キドが有つた様に考へられる故、此方面から侵入した敵が通伸曲輪に昇り、又は其間の堀を通つて當郭と本丸との間の空堀から昇るのを防ぐ爲に、其要路たる空堀中に突出して橋臺を設け、横矢を射るには有り得べき事である。御前曲輪内には、戦記に依つても城主の持佛堂があつた様であるが、足利時代の武將の館にも、城主居所の北方に、或は別に一郭を設けて持佛堂を安置した例は多い故、當城も此例の様に本丸の北方の一郭即ち御前曲輪に持佛堂を置いたといふ事も眞實の事と考へられる。又本丸が政廳の所在地たるに對して、之は所謂大奥即ち城主の家庭的生活を營む所であつた事とも考へられる。

本丸は牙城の中心に在つて、此の御前曲輪に對して南に二ノ丸を置いてある。二ノ丸との間は土橋で、其右方に折邪フレヒナミがあつて「袖の樹形」の形式を取つてゐる。門前に歪形四邊形の空地があるが之は一種の外樹形城門であつて、往時は周圍に柵を建て、木戸を設けなどして、何等かの防禦裝置を施した物であらう。又西方にも一門を開いてゐるが、之は半ば土橋で半ば板橋とし、其下方を通路とした物と思はれる。此城門の前方には馬出郭ウマデノクワと看做すべき物がある。之は第三圖と第五圖を對照して見れば判然する所で、第五圖の三ノ曲輪の帶狀を爲した所を二條の堀切りで仕切つて、其中間の郭に内郭から城門を開き、前記二條の堀切りにも橋を架け城門を設ければ、馬出郭が出来る。此種の馬出しは戰國時代以後に其例の稀でない所であつて、此場合は長野氏の築造(實は改築)と看做すべきであらう。

二ノ丸は東西南三方に城門を設けてある。東方は搦手口であつて、一度腰曲輪に降り、左すれば稻荷曲輪

に續き、右すれば腰曲輪を通つて木俣曲輪に連絡する。少しく右して左折し腰曲輪を降る所に又城門があつて、更に降れば搦手の郭馬出しウマデに出る。南面の城門は長野氏時代の大手筋に當つてゐて、門外に角馬出し型式の一小郭がある。西の城門は南に片寄つて設けられてゐるが、之は鍛冶曲輪から藏屋敷下段の北側に出て右折して上段との境の石垣の下を通り、更に右折して二ノ丸との境の空堀の際を通つて城門に入る様に道路を屈曲させて、藏屋敷上ノ段及び二ノ丸から横矢を射る爲に特に其位置を撰定した物である。而して「井伊氏時代の箕輪城圖」に依ると、此城門の南脇即ち二ノ丸の南隅に櫓があつた様に記されてゐる。此櫓は御前曲輪西側の櫓と共に西方を防禦する物で、彼が直下の空堀内通路のみならず直前の通伸曲輪内を掃射するのに對し、是は二ノ丸、藏屋敷上段の防禦線と共に藏屋敷下段に侵入した敵は十字火を降らせる爲の外、二ノ丸南城門外の角馬出し郭に横矢を加へ、又は城南の物見等を兼用してゐる物で、櫓として樞要の位置を占めてゐる物といふべきである。

本丸の西側城門を出ると一種の馬出し郭がある事は已に記した。之から南、北兩側に城門を開いてゐる。南の城門は藏屋敷上段に通じ、此上段との中間には石垣があつて分割され、其間の城門は東方即ち本丸に近い方に設けてあるが、之は下段に入つた敵が更に上段に入る時になるべく長く石垣の下を通過させて石垣の上から横矢を射ると同時に、城門際に於ては堀向ふの本丸及び二ノ丸からも横矢を送らせる爲である。馬出しの北方の城門は通伸曲輪に通じてゐる。之は御前曲輪の西、北兩面を包んでゐて、其北部は御前曲輪と同等又は少しく高い。此郭は城内最高所たる玉木山を敵に奪取せられた場合に、御前曲輪以下を守る爲の重要な使命を持つてゐる故、其北方の土居の如きも城中本丸に次で高い物であつたらしい。此郭と玉木山との間には深い空堀がある故、彼處から直接此郭内へ侵入する事はないが、敵は玉木山を占領すれば、其高所を利用して此郭を掃射しつゝ、一方兵を空堀内から送つて此郭を占領し様とするのは必然である。此場合に當郭では東方の稻荷山と双方から十字火を玉木山の敵に加へて應戦し、一方兩郭から兵を出して空堀内を進む敵兵を夾撃するの舉に出でなければならぬ。然して當郭から内側の空堀内への通路は少くも二個位存在すべ

きてある。

玉木山は即ち靈置山であつて、長野氏累代の靈を奉安した所である。而して此地は城内の最高所なるが故に、前項に記した様に種々の防禦工事を施してある。此地に物見櫓を設けた事は恐らく事實であらう。北方の腰曲輪の前方空堀の向ふに丸馬出しがあるを以て見れば、之から新曲輪へ出入出来た物と思はれる。然し一方此腰曲輪から内側の空堀内へ降る事も出来た物と見なければならぬ。

稻荷曲輪は牙城の北東方面を防禦する爲の腰曲輪である。新曲輪を敵に奪取されば、此腰曲輪は牙城に比して著しく低い故、御前曲輪、本丸等は敵に其側面を露出する事となる。故に新曲輪は敵手に占領されても、此郭を死守して本城の防禦を完全にし、玉木山、搦手馬出郭方面からの應援隊と共に期を見て當郭内から出撃し、新曲輪内の敵を全滅させねばならない。稻荷曲輪は北方が最も廣く、此處に一の城門を開いて新曲輪への通路としてゐる。其西北隅に玉木山及び通仲曲輪と相對して稻荷山がある。之は天然の地形でなく堀を穿り土を盛つて特に築いた物と思はれる。之は鼎立した三個所の高台に依り、當城の最弱點である北方を防ぎ、玉木山が敵手に落ちた後は、通仲曲輪と呼應して御前曲輪を守らん爲の重大な使命を持つてゐる。其他稻荷山は東に稻荷曲輪の城門、北に丸馬出しを眼下に見下して、之等へも横矢を充分に射掛ける事が出来る。又當郭の東北側新曲輪に面する方は、水堀を用ひ、堀巾の廣大な事、深き事、折邪の完全な事城内第一等である。之に反して西南方本城との境の空堀は非常に淺く、本丸の此方面の土居は特に上巾を廣くして多少の屈曲を附け、下の稻荷曲輪に横矢を送り得る様に努めてゐる。是等を見ても、當城主が如何に北方の防禦に力を盡したか、理解出来やう。

新曲輪は玉木山、稻荷曲輪の防禦線では不足を感じ、更に一步進んで此方面の外郭としたのであらう。此種の郭は味方に取つては攻防共に必要で、敵は之を占領しても大した利益なく、否反つて郭内の狭い地に侵入して行動の自由を缺き、此隙に乗じて城内數箇所から出撃して、此郭内の敵に大打撃を與へるといふ、生殺與奪の郭、或は捨曲輪とするのが本來であつて、長野氏も恐らく此點に意を用ひた事であらうが、郭内に

如何なる装置を施してゐたか、完全に開墾せられて遺跡の證すべき物がなく、唯玉木山、稻荷曲輪、搦手馬出郭等から此曲輪に城門を開く事に依り、其事を推論するのみである。新曲輪から城外への城門も勿論有つた事であらうが、其位置を決定する事が不可能である。

二ノ丸南城門を出ると、土橋があつて角馬出しに接続してゐる。井伊氏時代の圖には西口だけが設けられてゐるが、他の馬出し（本丸の西、搦手玉木山の丸馬出し等）と比較して、初は恐らく東西に城門を設けた物であらう。武田氏の時代には完備した角馬出しの型式を取つた物であらうが、長野氏時代から存在したか否かといふ事は決定し得ない。永祿以前に關東方面で武田氏以外の者が角馬出しを使用した事は確證のない事である。恐らくは長野氏時代には此方面が大手筋であつた爲に、二ノ丸城門外に何等かの防禦設備を施して馬出し様の物としてゐたのを、後に武田氏が修理して角馬出しとしたと看做すべきではあるまいか。此角馬出しの西に續いて短い帶曲輪があつて、内郭の藏屋敷から横矢を掛け得る様にしてある。此南は木俣曲輪で上下二段に分れてゐるとは已に記した。此南は左文字の乙字形の堀切りがあつて城南の二枝丘と絶縁されてある。此堀切り型式は廣小路丘の堀切りにもあつて、足利時代中期の丘城に好んで用ひられた形式である。此堀切りの南の二枝丘の主軸に添ふて多數の小郭を配置した事は、當縣では未だ實見しない所で、稀有な繩張りとして擧げる價值があると思はれる。此兩郭は中央の水の手の曲輪を保護すると同時に、西方の數郭は舊大手口から侵入の敵を防ぎ、東方の數郭は椿山砦と本城との連絡を取り、椿山へ兵を送り、或は椿山を敵に占領された時に、此方面からの敵の侵入を防禦する爲に必要な物である。従つて是等の小郭を並置する繩張りは、椿山に出丸を構へると同時に設けらるべき物で、之を長野氏の増築と看做すのが至當であらう。

現在法峰寺の境内は北に城山を負ひ、東西を又丘にて圍み、唯一の南方は椿名沼を以て守り、それ自身已に要塞堅固の土地である。三ノ輪太郎師政が承久年間當地に居住してゐたとすれば、其館は此法峯寺の境内でなければならぬ事は、第四章第十項に記す所であるが、長野氏時代に此處を水の手の曲輪として、之から城内の用水を汲んだといふ事が一部に傳へられてゐる。それは徳川時代の軍書『手鑑』の第七卷城取の

一、扇之繩之事 水之手扇ノ繩要ノ櫓圖彙ニテミルヘシ。上州箕輪長野信濃持城水ノ手如此トル。故ニ甲州用來ヲ是ヲ扇ノ繩要ノ矢倉ト云、云々

とあるのは之である、其圖に依て見ても水の手曲輪を扇形に取り、其最奥即ち扇の要に當る所に水櫓を設けて、之から水を汲み揚げる様にしてある。然しそれは後世の事で、長野氏時代に要の水櫓が存在したかどうかは判然しないが、その圖中に櫓のあるべき個所に現在も池がある事は事實である。水櫓の有無は別としても用水に不便を感じてゐる當城で此部を大切に、万一敵に奪取せられる事を恐れ外方に防禦工事を施した事は事實であらう。斯くすれば其區域はほゞ現在の法峯寺の境内と一致し、附近の地形から此地が扇を擴げた様になる事も考へられ、之から暗示を得て甲州流の「水ノ手の郭、扇の繩」たる繩張りが生れた物と考へられる。此扇の繩、要の櫓は徳川時代の城取の各流派でやかましく論ぜられた所で、其起原が當城に在つて未だによく保存されてゐる事は喜ぶべき事と思ふ。

搦手方面は遺跡の保存不充分の爲、往時を推察する事の出来ないのを遺憾とする。井伊氏時代の當城圖に依て其大略を知るより途がないが、之とても井伊氏時代の物で、長野氏時代には更に外方に幾間の防禦工事が施されてあつた事は察するに難くない、搦手の遺跡が破壊されてゐるのに對して、井伊氏時代の大手筋は比較的よく保存されてゐる。藏屋敷上下郭の境界の石垣、之から鍛冶曲輪に降る所の石垣は當城中の白眉である。此邊は長野氏時代には餘り重要な個所ではなかつた。もし石垣を築く必要があれば、當時の大手筋が搦手口或は北方稻荷曲輪の邊に其勞力を費した筈である。從て之等の石垣は井伊氏に依て築かれた物であらう。井伊氏時代には、舊大手筋は殆んど問題とされてゐなかつた。そして廣小路に大手口を設けて、其道筋に修築を行つたと見るべきであらう。然し鍛冶曲輪や其前後の腰曲輪は長野氏時代から存在した事は確實であるが、井伊氏は之を使用しなかつたであらう。次に用水に就て記せば、前記法峯寺の水の手の郭の外、井戸及用水溝がある。井戸は昭和二年御前曲輪で

發掘された物で深さ七丈余あつた所を見れば、井戸一個掘るにも非常の勞力を要する故、郭内には其數は割合に少く、大部分は空堀底に穿たれた物であらう。又遠く北方から溝を堀つて用水を導いてあるが、之は平常使用すべき物で、籠城の際には敵に水路を止められる恐れがある。水ノ手の用水を止められて當城が落城したとの説は、一應尤もらしくはあるが、城外から流れ込む用水に頼つて籠城する様な不用意の長野氏でもあるまいと思はれる。

第四章 箕輪城變遷考

第十項 法峯寺城郭時代

尙業が濱川の居館を捨て、箕輪に城地を選定した以前、其先祖が居館を構へてゐた事は已に記した。又一説には、承久の頃三ノ輪太郎師政が居住したといふ。承久元年は西紀一八七九年で、昨年城内から發掘した最古の墓石は康元元年二月九日で、西紀一九一六年に當る。從つて康元の墓石は承久を去る三十七年で、もし三ノ輪太郎居住説を眞とすれば、彼も亦長野氏の遠祖であると看做す事が出来得やう。當時の居館は勿論戰國時代の城郭と比較すべき物ではないが、當時已に長野氏の祖先は此處に根據を有し之が他日の大箕輪城を造築するの因となつてゐるのを見れば、此居館も箕輪城變遷考の筆頭に記す價値は充分ある。

三ノ輪太郎の居住年代を承久頃と限定してもよい。又其前後數十年を取つて漠然と定めてもよい。當時は築城法として別に定まつてはあらぬが、其居館を構へる個所の地形の選定には、ほゞ一定の方針があつた様である。延暦十三年都を京都に遷す時の詔に、「此國山河襟帶自然爲城云々」との語がある。東西北三方に山を廻らし、南の一方が開けてゐる。此方面には巨掠池と宇治川があつて、山河が自然の城となつてゐる。之は京都の地形であるが、頼朝の居を構へた鎌倉の地も又之に似てゐる。玉葉に記す「鎌倉の城」も「頼朝の城」も鎌倉の地形を指したのであらう。以上は大規模な例であるが、鎌倉時代から南北朝にかけて、地方豪族の小

居館址には、鎌倉を縮小した様な地形の地に館を設ける事が普通であつた。左右及背面を山に依り、正面が開けた地形を選んで、其最も奥（鎌倉で云へば八幡宮の在る所）に城主の居を構へ、其左右に家臣の居宅を設ける。そして開けた一方の往來に木戸を重ねて設ける。之が山地に依つた當時の城地選定の最も普通の仕方であつた。

此點から當時の居館址の候補地を物色すると、唯一つ現在法峯寺の境内がある。此處は箕輪城の丘を背にして其南方に位し、丘は東に走つては椿山に至り、西は西明屋の人家と白川との中間の丘に接續してゐる。即ち東西北三方は丘に依て境され、南方は深田（當時は此深田は椿名の沼か）に依て防禦されてゐる。此中間正面に在るのが現在は法峯寺本堂であるが、之を城主の居館とすれば、此地形は鎌倉時代前後の地方豪族の代表的居館といふ事が出来る。余が箕輪城の創立を鎌倉前後となし、當時の居館址を現在法峯寺の境内に求める所以である。一説に城の形が箕の手に似てゐる故箕の輪と稱へたといふ、其真否は明かでないが、城下を山下又は箕ノ輪と呼ぶ事は古い時代の城には往々あるが、山下は城下が山下に在る爲、箕輪は古い城の多くが主として前述の如く、箕ノ手の如き地形の所に設けられ、其箕の口の方に城下が在つた爲と考へられる。故に箕輪なる地名は、三輪太郎師政の居館の地形から起り、其城下町の名稱となつた物で三輪太郎の三輪姓も此地名から起つたのであると考へたい。箕輪三の曲輪城主三の輪太郎師政などと記してある本もあるが、本城、二ノ曲輪なくして三ノ曲輪の有り得べき筈もないし、承久頃三ノ輪などといふ名稱があつたとも思はれない。ミノワー三ノ輪—三ノ曲輪と轉訛した物か。或は又、箕曲瀨と記してミノセと讀ませる様にミノワを箕曲輪とも書き、後誤つて箕ノ曲輪と書き、更に三ノ曲輪と轉じ、遂に箕輪城の三ノ曲輪に、太郎師政が居住したといふ様な話しが生れたのであるかも知れない。

第十一項 椿山城郭時代

箕輪城の東南の丘續きの地にある椿山を、長野氏が城郭として使用した時代があるか否か、之を明かにす

る事は目下不可能である。勿論全盛時代の箕輪城には、此椿山を山城^{デジロ}即ち出丸として使用した事は明かて、此處に陣を取つた記事もあれば、現在土居、郭等出丸を設けた遺跡が残つてゐる。然し之を全部業政時代の出丸の遺跡とする事は、一應考へ直さなければならぬ。

椿名山の箕輪城に對する軍事上の地位は、別に記す事とするが、其東側と西側とは繩張りが異はねばならぬ、殊に椿山の西には深田又は沼があり、其西には本城の大手が開かれてある。北は底丘が延長して本城に連絡し、南に突出し、東南から來るべき敵に對して其東側面を露出してゐる事となる。従つて椿山の出丸は、東及南方に郭を列ね、少くも二重の腰曲輪を東側に設け、西方は一條の腰曲輪を設けて南、北郭の連絡に便すればよい。元來出丸は本城に近い要路に在つて、敵の攻城作業を妨害し、味方の出撃に便宜を與へる爲に設けられる物である。従つて其繩張りも本城に次いで工夫せらるべき物である。

然るに椿山の遺跡を調査すると（實測する事を忘れた爲、圖示する事が出来ぬが、之は後に補ふ折もあらう）山の最高郭に古墳があつて、横穴式石櫛の天井石を露出してゐる。此地が出丸の中心郭で、物見の場であつた事と思はれる。此北には階段状二郭を並べて、本城の丘地と堀切りに依て絶縁してゐる。南方は墓地となり、又は土を取る爲に發掘して著しく原形を損してゐる故明かでないが、四個の小郭を丘の延長線上に即ち南北に並列してある。各郭には低い土居の遺址も認められる。東西兩側面には狭い腰曲輪各一條を廻らした様であつて、東側に殊に防備の薄弱な點を見出す。

諸處の砦を落され、敵に箕輪城を包圍された時、第一線に立つて大手及び搦手方面の敵を牽制する物は、此出丸でなければならぬ。此重大な使命を有する出丸の繩張りも、箕輪城を築いた手際に比べて大分の見劣りがある、そこで氣の付いたのは、「椿山は以前城郭として何者か居住して居たのを、業政の時代に箕輪の出丸に利用し、多少の手入れをしたのではあるまいか」といふ事である。

長野氏の祖先が承久の頃法峯寺の位置に居を構へてゐたであらう事は已に記した。後長享延徳の頃、尙業か箕輪城を築いた。其間、長野氏累代中濱川の館に居住した者は別として、當地へ居住した者が尙業の直前

迄、法峯寺の地に居館を構へてゐたかは疑問である。現在の箕輪城の地は要害堅固である。然し之は現在の様な規模繩張りにて於て初めて地形の利、繩張りの妙を發揮し得るのであつて、以前の小さな城郭に在つては其擴大な地形は寧ろ有害であると云はねばならない。築城法は時代に依て巧拙がある。然し城地の地形はそれ／＼城の規模と調和の取れた所を選定してゐる。それ故もし、後に長野氏が法峯寺の居館を離れ、他に居を構へたとすれば、それは現在の城山の地ではあり得ない。必ず椿山の地でなければならぬ。尙業が濱川から移つて築城した箕輪城も、或は此椿山の地であるかも知れない。

此椿山城郭説は(出丸に使用した事は明かであるが)今迄何等記録や口碑傳説にも聞かなかつた處である。今迄箕輪城及び長野氏を研究した人は多かつた。然し之等先輩から、本項の記事に就て何等得る所がなかつた。それとして此新説を、附近の地形と繩張り變遷史上から論ずる事とした。従つて城主とか年代とか、或は規模とかに就て何等数字的記述を爲し得ないのを遺憾とする。然し、椿山に城郭が置かれ、其時代が足利時代の初、中期であるとすれば、其形式は丘續きの方を一重乃至二重に堀切つて、其最高處を本城とする。椿山の古墳のある所が本城で、此山は南方に緩傾斜である故、此方面に三四個の小郭を丘の軸の方向に並べる。山の大きさに比べて高さが高く、丘も上部が廣くない故、各郭の間は堀を掘らず階段を付けて防禦をする。土居は無くてもよい。東西の二側面は中腹に各一條の腰曲輪を設け、南北郭の連絡に便するといふのが、其當時の此様な地形に對する築城法である。

第十二項 尙業の箕輪築城

從來箕輪城の築城は、尙業の子憲業の永正九年築城説、及び信業の太永六年築城説の二説であつたが、自分は前項に於て、長野氏が箕輪に居館を構へたのは、はるか其以前であつて、鷹留城よりも古い時代であらうと記しておいた。今當時の築城學上から再び論じて見やう。初め濱川の館に居住した尙業は、山内上杉顯定の執事であつた。兩上杉氏が隙を構ふるに及んで、守戦に

便利でない濱川の館を捨て、他の要害の地に其根據地を定める事は當然である。そこで長享二年或は明應年中に、室田に要害を選んで鷹留城を築いたといふ。尙業が白井双林寺の三世曇英慧應に歸依し、室田に長年寺を開基し、文龜三年卒して同寺に葬つたのを見れば、其事實に無理もない様に思はれる。然し、何が故に尙業が室田の如き山間の避地に居城を設けたか。當時室田は已に濱川の長野氏の勢力範圍であつたかも知れぬが、領地の中央部ではあり得ない。當時の長野氏が全く孤立の位置に在つて、たゞ自己を戦禍から救ふのみであれば、此僻地に居城を構ふる事に相當の理由もあるが、上杉顯定の執事としての尙業は、中央と全然無關係ではあり得ない。従つて濱川を去つて新たに選定すべき城地は、領地の中央部に在つて、要害も堅固で、平井城白井城等との連絡の充分な所でないならぬ。而して當時武將の城郭は、已に館城の様な簡單な物ではなく、小規模ではあるが獨立した小丘又は丘の末端を堀切つて築城した。

以上の點から考へても、尙業が濱川の居館を去つて、最初に選定すべき城地は箕輪であつたらう。殊に箕輪は其先數代の居館を構へた所で、長野氏對領民の關係は濱川と少しも異なる所がなかつた事と思はれる。箕輪に本城を移せば、領内の統御、東方の敵味方との策戦行動等も充分に行はれる事である。即ち濱川を去つて箕輪に本城を構へ、此頃から使用され初まつた「館城に對する最後の據戰場としての要害城」の意味を多分に含ませて、他方には西方の砦とし、又は自己の隱居所として、簡單な城郭を室田に築いたのであらう。従つて室田の鷹留城は尙業の築城した物であらうが、それは當時の箕輪城に比しても簡單な物で、本城の西方を防禦する一砦城に過ぎない。而して其創築年代は勿論箕輪城より後で、尙業の卒した文龜三年よりも以前、即ち明應年間であらう。此時の城地は前項に記した様に、城山の地としては地形が少しく廣大に過ぎる様である故初め椿山の地に居住したかも知れないが、後には城山の地に簡單な築城をしたのではあるまいか。第四圖は現在の地形に依て、箕輪城を築く以前の地形を想像して書いた城山の地形圖である。圖中の等高線に依て知り得る様に、海拔二八〇米の線内が長さ二町余、巾二十間に及んでゐる。之から東北側面と西北方は急傾斜で、東南及び南側は緩かであつて、海拔二七〇米線の處から二六〇米線にかけて又急傾斜となつ

てゐる。此二七〇米線内を城地とすれば、長さ四町余、巾一町余となつて、尙業時代の城地として過大でもない。當時の城は他に多數の實例が判然してゐる。試みに其大略の繩張りを記せば、山丘の續いてゐる方面に堀切りを設けて城地を高い土地から絶縁し、丘上が細長く比較的平坦である故、丘の主軸に沿ふて郭を並べて造り、急傾斜の側面には一段低く狭い腰曲輪を設けて堀は堀らないで置く。緩傾斜の方面は平面に引ながらして巾廣い郭を造り、各郭の間には空堀をほつておく。牙城から出て緩傾斜の方面は郭の巾も廣い故、此方面へ大手を設ける。

以上の様な當時の築城法を念頭に置いて、第四圖の地形圖を参照しつゝ、第三圖即ち永祿頃の箕輪城圖から必要な部分だけを取れば、第五圖の如くなる。此圖を長野尙業時代の箕輪城と推定すれば、丘の北方地續きの部分を堀切つて、背部に本城、二ノ曲輪等を圖の如く並べ、北方急傾斜の所に一段低く腰曲輪を設け、南は緩傾斜面であるが故土取土盛りをして、三ノ曲輪を帶曲輪狀に築く。本城、二三郭の間には圖の様に空堀を掘り、東南の枝脈との間には堀切りを設けて此方面からの敵を防禦する様にし、南方に大手を設ける。斯くすれば當時の他の城址ともほゞ共通の繩張りとなつて、之を後に數回増築して永祿頃の箕輪城が生れたと考へる事が出来る。村老雜記の内、箕輪物語に次の様な事が載せてあるといふ。箕輪城は初め尙業公居られた時は、城内狭くありしが、憲業の代になり、大永年中元の城を本丸として増築あり、實に大普請にて、諸方の村々より人夫集り、四年目に成就せり。云々。此文はどの程度迄眞を傳へた者か判然しないが、往時已に此様な説も行はれた物と思はれる。尙業は又業尙とも呼ばれてゐる故、尙業の子憲業の時に大増築が行はれたとすれば、それは大永年間であり得ない。元の城を本丸として増築とあるが、之は元の城地を本城（即ち牙城で當城の場合は御前曲輪本丸二ノ丸等）として其周圍に増築をしたと解釋すべきであらう。

第十三項 憲業及び信業時代

尙業の子伊豫守憲業及び其弟信濃守信業時代の箕輪城が、今の城山の地であつた事に就ては、惣ての説が

一致してゐる様である。唯或人は憲業と信業を同一人であるとして、伊豫守憲業は尙業の嫡子で、初め信業と稱し上杉顯定の子憲總に仕へ、長尾爲景を討つて功があり、憲總の偏諱を賜つて憲業と改めたと稱へてゐる然し余は伊豫守憲業は永正十一年吾妻に於て卒し、信業は天文二十年に卒した物としておく。（憲業、信業が別人にしても又異名同人にしても、當城に於ける此期間尙業の卒した文龜三年から、次の大増築が行はれ業政が城主となつた大永六年迄である點には變りはない。）

前期の當城主尙業は、明應年中室田に鷹留城を築いて之に長子伊豫守憲業をして守らしめた。文龜三年尙業の死後憲業は箕輪城主となり、弟信業をして鷹留城を守らしめた。當時の箕輪城は前項に記した第五圖の如く小規模の物であつたらう。それに憲業が大改修を施して、やゝ見るに足る規模としたので、其年月は永正九年と傳へられてゐる。憲業は父尙業の後を繼いで上杉顯定の執事となつてゐた。顯定の弟房能越後府内城に居住してゐたが、永正六年其臣長尾爲景と戦ひ、越中雨溝に敗死した。翌七年顯定は爲景を越後長森ヶ原に討つて敗死し、其子憲房は上野に歸つて平井城に籠城した。時に長尾伊玄景春も上杉氏に叛いて爲景に應じ、兵を沼田に出し、北條早雲又之を援くるに至つた。斯くして憲房は僅かに平井城を保つのみとなつた後長尾景長憲房を迎へて顯定の嗣となし、管領と稱し平井城に居らしめた。斯かる状態であつたが爲に、憲業も周圍に適應する爲、居城及び砦城を嚴重にした事は當然といはねばならない。

永正九年當城の増築が相當大規模の物であつた事は、前項の箕輪物語の記事でも知り得るが、どの程度に行はれたかを遺跡の上に指示する事は不可能である。然し試みに云へば、新曲輪及び搦手の水手の郭等は未だなく、椿山や廣小路方面の臺地も未だ城内に取り入れられてなかつた事と思ふ。してみれば、第五圖中三ノ曲輪の西南一段の低い所に郭を設け（鍛冶曲輪の邊）南は丘全体を城内に取り入れ、法峰寺東西の丘にも築城設備を爲し、各郭間の空濠も新に掘り或は更に幅廣く深くした事であらう。此時は腰曲輪も多數に設けて城地の防禦と郭間の連絡に使用し、南方椿名の沼の如きも防禦の第一線として利用した事であらう。従つて當時増築後の箕輪城は現在の遺跡から椿山及び平坦地に在る部分を除いた位の規模の物であつたと考へられる。

憲業は本城の外、砦城たる鷹留城にも大增築を行つた。そして更に保渡田、濱川、高濱等にも砦を築いた。之より先、厩橋城(前橋城)は前橋風土記に依れば、延徳元年室田鷹留城主長野三河守尙業の子・左衛門尉宗賢が築いた事になつてゐる。其築城年代は恐らく明應以後の事であらうが、其初代城主が尙業の子・長野方業であつて、二代道安、三代道賢と續いた事は確實である。此當時の城地は現在の前橋城址と石倉城址との中間、今は利根川の河原に當る所であつて、利根川は東方廣瀬川の邊を流れてゐた時代である。従つて厩橋城は長野氏(恐らく尙業か)が自領の境目に築いた境目城と看做す事が出来る故に當時の箕輪城は、本城にて本城に長子憲業が居住し、西南一里半の鷹留城に次子信業が居城し、東南約三里の地には三子方業が境目城を築いて守つてゐた事となる。當時白井城、蒼海城(元惣社村)の兩長尾氏と長野氏には同系統の者、城の西北は榛名山を負ふてゐて此方面からの敵は考慮するの必要を認めない。従つて若し砦を築くとすれば唯一つ残された南方でなければならぬ。此時長野氏が本城と厩橋城とのツナギの城として保渡田に砦を構へ、其南濱川及び之と鷹留城との中間高濱にも、それ〴〵砦を築いた。之は東は利根川、南は烏川が當時の長野氏の勢力範圍であつたが爲に、防禦線をこゝに求め、その根據地として、以上の砦を設けたのであらう従つて永正頃の長野氏の勢力範圍も、之に依つてほゞ推察する事が出来やうと思ふ。其後憲業は箕輪城を弟信業にゆづり、鷹留城は信業の長子業氏が繼ぎ、自らは吾妻郡猿ヶ京の故城を修築して移住して、永正十一年戦死したと傳へられてゐる。晩年の憲業が鷹留城から更に前進して、吾妻郡に入つて居城を構へた事は此方面に領地擴張の意味からは適當の處置と思はれるが、猿ヶ京迄前進した事は決して策を得た事とは云ひ得ない。一説に大笹に居を構へたと傳へられてゐるが、之なればまだよい。然し當時の憲業としては斯く深入りせず、大戸附近に堅固な根據地を造る様にせねばならなかつたのであらう。此時から業政の時迄城郭としては殆んど變化がなかつたと思はれる。

第十四項 業政時代(長野氏全盛時代)

此時代は大永六年から初まつて、業政の卒年永祿三年(或は四年)迄續き、それから落城迄は業政の次子業盛の代であるが、築城の點から云へば殆んど變化がなかつた物と考へられる故、便宜上落城迄を當時代中に含ませて置く。世に「大永六年業政箕輪城を築く」と傳へられてゐるのは、已に記した如く事實ではない。業政が父信業の後を嗣ぎ當城主となつた年代は明かにし得ないが、大永年間と認めて大過なからうと考へる其後間もなく當城を増築した物とすれば、それは大永末年から初めて、其後も必要に應じて城郭の修理を行つた事であらうが、それは現在の遺跡のみでは判定出来ない故、之等を一束として當時代に箕輪城がどの程度迄擴張せられたかに就て、推測し得る所を記さう。又當時各所に行はれて、業政も亦當城に採用した處堅固の城、大城郭主義に就ては、第五章に記す事とした。

業政は信業の次子、其性豪勇にして智略があり、且つ武略にも長じてゐた。長野家の威名を遠國迄轟かしたのは此時であつた。時に平井城に在つては上杉憲房卒して、其子憲政が管領職を嗣いでゐた。業政又父祖の職を襲ふて憲政に仕へた。憲政暗愚凡庸で佞人の甘言を用ひ、失政多く將士の離散する者多く、小田原の北條氏康又北進して境を侵し、後ち居城を捨て、越後に奔り、長尾景虎を養子とし之に管領職、上杉の系圖家寶等を譲り、遂に平井上杉氏は亡ぶるに至つた。業政は其諫言の聽かれざるにもかゝらず、凡庸の憲政によく仕へ、武藏岩槻城の大田三樂齋等と力を合せ、或は小田原北條氏或は甲斐の武田氏等と戦ひ、主家亡びて後も當城に籠城して臣節を完ふした。由來戰術は武器の改良に依て進歩し、攻城具の發達に依つて攻城法が改められ、更に築城法が之に適應する様に改良されるのが普通であつた。然るに我國の戰國時代に於ては一部には築城術の進歩に伴つて、攻城法が改良せられる様な傾向もあつた。當時に在つて戰術築城術に關し一頭地を抜いてゐた武田氏の築城法が、非常な速力で關東、信州、濃尾地方に傳はつた事は、今日城址調査の上から判然した事である。殊に業政の如きは此影響を受けたであらうし、又自らの實戦の結果考案した所も少くない事と考へられる。

第三圖は武田氏の屬城となつた永祿六年以後の築造にかゝると思はれる部分を、現在の遺跡から除去した

必要部分で、當時代に業政の修築に依つて完備した箕輪城と考へる事が出来る。其記述は簡單ではあるが第三章第八項及び第九項に盡されてゐる故、此處には省略する事とした。唯當時の増築工事中特に注意すべき個處は次の數項であらう。

- 一、新曲輪の地を郭内に取り入れ捨曲輪とした事、
- 二、玉木山及稻荷曲輪の防禦を完全にした事、
- 三、水ノ手の郭を法峰寺の所に設けた事、
- 四、通伸曲輪と藏屋敷との中間に馬出しを設けた事、
- 五、横矢を有效ならしむる爲に腰曲輪を數多く設けた事、
- 六、椿山に出丸を構へ、之と椿名の沼をへだて、相對照の位置に在る廣小路丘の一部を城内に取入れた事
- 七、水ノ手の郭の東西兩側を圍む丘地に數郭を設ける場合、東方は堀切り、西方は階段を付け、地形の變化をよく利用してゐる事。

其他時々の籠城に當つて設けた、應急の防禦工事。例へば城門内外の堀、土居等或は道路を横斷する堀切り等は、戦争が了れば不必要であるのみならず、日常の交通に不便である故直ちに取り拂つた物であらう。從つて斯かる臨時築城的工事に對しては、現在遺跡調査の上からは、何等の資料をも探し得ない事を遺憾とする

第十五項 武田氏時代

永祿六年箕輪落城の後、其臣内藤修理昌豊を城代とし、其手勢五十騎の外、新に降つた附近の士二百騎を加へ、合せて二百五十騎の大將として附近を統治せしめた。此時の箕輪城は信州に於ける海津城(今の松代城)と其位置を等しくし、武田氏上州經營の根據地となる物である。之を城郭の性質から分類すれば、境目城であつて且つ番手城を兼ねた物と思はれる。其後昌豊の子外記が城代となつた。

境目の城は味方の根據地から遠く敵地に近くある故、最も早く敵に攻撃される。其時すぐ落城しては何に

もならない。一日も長く敵の兵をそこで喰止めて、味方の後詰めの兵を待つて、敵の策戰の妨害をせねばならない。味方の援軍の來る迄或は味方に萬端の應戰準備の整ふ迄、最後の一人となるまで籠城せねばならない。兵書手鑑の城取の卷に「境目ノ城ノ取形ハ先陽中ノ陰ニ取心ノ者也、陽中ノ陰トイフ者ハ外曲輪ノ働ノ自由ニ取此所ハ弱ケレ共味方ヨリ突テ出ルニ利合カヨシト云心也、二ノ曲輪ハ陰ノ繩ヲ兼テ取モノ也、是ハ防守ヲ第一ニス云々」とある。此意味は境目城は外郭は出撃に都合のよい様な繩張りとして、内城は籠城專一にして、味方の出撃には都合が悪くも敵の攻撃にも又都合が悪く、少數の人數で持久戰を取るに都合のよい様な繩張りとするとの事である。初め敵に包圍せられた時、城内からの出撃に不自由なれば、敵は少數の人數を残して境目城を押へ、他の主要部隊は前進する事になる。味方の援軍の到着の後れた時、城内將卒の討死が多くなれば、勢ひ内城に籠つて持久戰を取る故、内城は籠城専門の堅固な繩張りとする。又番手城も各境目城を統轄する重要な役目を持つてゐて、籠城と出撃と兩方を兼ねた繩張りてなければならぬ。

此重要な境目、番手の兩城を兼ねた城として武田氏が箕輪城を撰んだのを見ても、如何に當城が堅固であつたか、察せられる。武田氏は他の城を占領して之を自己が使用する時には、必ず繩張りを改めた。此例は信州に最も多いが、當縣に於ても倉ヶ野城、高崎城、石倉城を初めとして其例が少くない。其改めた部分の内、最も多いのは丸馬出しを造る事であつて、前記三城郭も又丸馬出しは武田氏が占領直後に増築した物と考へられてゐる。其特色ある丸馬出しが、當城に於ては三ヶ月堀の名に依つて残つてゐる。其位置は玉木山の北方新曲輪内で、當城として最も重要な個處である。從つて余は他の多くの例に従ひ、此丸馬出しのみは武田氏に屬して後に増築した物と考へたい。(現在の所天文以前に丸馬出しの築かれた確證はない。)此丸馬出しは玉木山の北方空濠を渡る土橋直前に設けられた物で、直徑約十間の半圓形をなし、其周圍に低い土手を設け、更に其外に空濠を掘つた物で、左右に城門を開いた物と考へられる。馬出しとしては比較的小さな物であるが、之は狭い所に設けた故であらう。此外武田氏に依て修理された所も在る筈であるが、それ等は遺跡の上からは判斷が付かない。後ちに城代内藤昌豊は保渡田の砦を修理して之に移つた。之は武田氏の勢力が次第

に東方に擴張されたに就て、箕輪では其統御に不便を感じた爲、中央に近く居を移した爲であらう。然し保渡田の砦は極めて簡單な物で、之を以て番手、境目兩城を兼任する事は到底不可能である。従つて保渡田の砦は内藤氏平常の居住地で、一朝有事の際は箕輪城に籠城する準備は常に出来てゐた筈である。故に此時は當城は保渡田の砦の要害城であつたと看做すべきである。

天正十年武田氏滅亡後、其領地は織田氏に屬し、厩橋城に居城した瀧川一益の統下に在つた。同年續いて本能寺の變が起り、瀧川氏去るに及んで小田原北條氏の屬城となつた。然し此間には當城を修理すべき折もなかつた事と思はれる。

第十六項 井伊氏時代

天正十八年小田原城の落城に次で、徳川家康の關東入國となり、其臣井伊兵部少輔直政十二萬石の居城となつた。以前とは異なり徳川時代となつては、防戦を主とする城郭は殆んど不必要で、政治の中心、城主の居館としての城郭が必要であつた。そこで現在箕輪町の主体をなす西明屋、東明屋の城下町(西明屋、上芝、東明屋、矢原に跨る)も出来、廣小路の丘上にも武士の居宅が設けられるに至つた。又城郭にも石垣を城門其他に使用し、郭内も整美され、居心地のよい城となつた事であらう。斯く當城が當期に到つて全く以前の特色たる防戦堅固の特色を失ひ、住宅化した事は著しい變化である。其後徳川氏の内命に依り、慶長三年和田に移つて高崎城を修造し移住するに至つて、當城は全く廢城となつた。

井伊氏時代の箕輪城が如何なる規模を有してゐたかは、第六圖に依つて其大略を知る事が出来る。此圖の由來に就ては知り得ないが、其原本が徳川時代に出來た物で、相當信を置くに足る物である事は已に記した此圖と第三圖即ち長野氏時代の圖とを比較して第一に注意すべきは、御前曲輪北方の玉木山が城郭として用ひられなかつた事である。次に水ノ手の曲輪に法峰寺が出来、其東西兩丘には、單に堀切り、階段等を細線で圖示したのみで、之を曲輪として使用しなかつた事、及び椿山を單なる小山として椿名神社を祀つてある

事である。又長野氏時代に多數設けられた腰曲輪が廢され、鍛冶曲輪も唯大手口の一通路として用ひられ、何等の防禦設備のなかつた事である。之等は長野氏時代に重要であつた繩張りが、此圖に曲輪として記されてないのは、此時代の築城眼から見て又四圍の状況から見て、其必要を認めなかつた爲に之を省略した物と思はれる。(圖中太黒線にて示した所は土居、石垣等の防禦線を表はした物で、長野氏時代の圖に在つて當圖にない場合は、其個處の土居を廢した物と見る事が出来る。)此圖は遺跡圖と對照しても判る通り、當時の圖としては比較的よく書かれた物であるが、北方新曲輪を簡單に記したのは、之も又當時必要なく有つても都合はない故そのまゝとしてゐた、従つて之を圖示するに當つても他の郭の如く正確に書く必要もなく、圖の様に粗雑に記した物ではあるまいか。又搦手口の柵形は恐らく當時増築された物であらう。

次に著しいのは特殊形式を持つた大手門の築造である。之は當時の築造にかゝると認むる外なく、大手柵形の白川岸の所に圖中「丸口張」と記してある。之は柵形の周圍に築いた土手上に設けた一種の扉であらうが如何なる構造を持つてゐたか知り得ない。此大手筋を井伊氏時代になつて造つた事の傍證ともなるべき物に「コトウ門」がある。何故にコトウ門と名付けたか、又如何なる文字を當てるかに就ては、今迄尤もらしい説明を聞く事が出来なかつた。之は虎韜門と書くべきであらうと思ふ。孫子吳子と並稱される六韜三略中六韜は文韜、武韜、龍韜、虎韜、豹韜、犬韜、の六篇に分れてゐて、其虎韜篇の文字を取つた物と考へる。其理由は、徳川時代の兵法家は、隊の組方、戰鬪、陣營其他に陰陽五行説や何かを盛んに引張り出して、色々附會した説を立て、強いて兵法を難解の物としてしまつた。築城に於ても又同じで、殊に地形の撰定には随分やかましい事を列べてゐる。例へば武教全書城築の條に、地形を撰事として、「繁昌の勝地を知る事」-四神相應の地形の事」等が書いてある之が説明として、「繁昌の地形と云は、北高く南低く、北南へ長く、東南西に水あるを用る事」とあつて、當箕輪城の地形にもよく合つてゐる。又四神相應の地形の事として、「兵法云東有小河田澤謂青龍、南有流水謂朱雀、西有道名謂白虎、北有山林謂玄武」と記してある。此内「西有道名謂白虎」とある様に、西に新たに大手道を付けければ、之は謂迄もなく白虎である。而して「コトウ門」は西

の道中の主要な城門である故、白虎と密接な関係がある。又城門は當時虎口トラグチ（又は小口）と稱へた故、虎に縁は充分にある。そこで兵書六韜の中から、虎韜篇の名を取つてコトウ門としたのではあるまいか。之に對して東方には龍韜門を設けたかも知れない、然し今ではコトウ門以外には城門の名の傳はつた物がない故、如何とも知り得ない。

當時の建築物に就ては何等知る所がない。三重櫓があつたと云ふ。井伊氏時代なれば恐らく有つた事であらう。然しそれが御前曲輪に在つたか、二ノ丸の西南隅に在つたかは明かにし得ない。玉木山又は法峰寺東方の丘上に天守臺が、あつたとの説もあるが、當時は此邊は使用しなかつた故、もし其傳説が眞であるとすれば、長野氏時代に物見櫓を置いた跡であらう。城門に關しては、高崎城の本丸と二ノ丸との間の槻木門が當城の大手門を移した物であるといふ。之は大門、小門を合せて六間許りて、天井が「ハネ天井」となつてゐて敵の侵入した時二階からも攻撃し得る様になつてゐたといふ。之を以て見れば少くも大手門は渡櫓門で大門が三間、左右に一間の小門を設けた當時普通の形式の物であつた事が察せられる。其外の城門、櫓、家屋等も高崎へ移轉の時、大分運んだ物であらう。

最後に附記しておく事は、箕輪城の繩張りが彦根城と類似してゐるとの事である。井伊氏が當城から高崎城に移り、更に江州佐和山城に轉じ、後間もなく彦根城を築いた故、彦根城は當城をモデルとして造つたと考へるも無理のない事ではあるまいか。彦根城は甲州浪人早川彌惣左衛門幸豊が繩張りした物であつた故、當城の構造に就てもよく知つてゐたであらうし、井伊氏は勿論居城してゐた故、其繩張りは完全に判つてゐた筈である。彦根城が當城をモデルとした程類似してゐるかと思ふに、彦根城の實測をする時、余には認められなかつた。成程素人目から見れば大分似てゐる所もあるかも知れないが、それは地形に依つて左右される所、築城の目的から云ても年代に大差がなく、地形も類似してゐれば、其繩張りは似て來るのは當然である、即ち兩城間に類似して居る繩張りは、同時代、同地形の惣ての城に共通な繩張りであると思ひべきであらう、城の構造が殆んど同じく、唯規模に大小の差が認められる様な物は、戰國時代には多數ある事で、此等と比較すれば、箕輪・彦根・兩城には共通點が認められないと云ふてもよい位で、却つて彦根城の幾多の進歩した形式を認める事が出来る。

箕輪城考(下)

福島 武雄

第五章 長野氏時代箕輪城の防備

第十七項 沿革史上に於ける箕輪城の位置

箕輪城が城郭變遷史上及び築城學上如何なる位置にあるか、之を他の城郭と比較する事は、當城の價値を知る上に於て必要な事である。依て此項に於ては當城が本邦の城郭中の如何なる位置にあるかを、簡単に記するとした。

之を沿革上から見ると、我國王朝時代には特殊の城郭があつた。當時はアイヌの城郭即ちチャシは別として、内地には城らしい物は造られず、奥羽地方及び筑紫地方に邊境防備の爲の城郭が發達した。之は相手が東北地方では蝦夷、筑紫地方では朝鮮支那等の對外的の物であつて、事ある時は附近に居住する人民を收容保護する必要があつた。従つて其制法も著しく異つてゐて、朝鮮方面の影響を多分に受てゐる。當時我國獨特の物としては、遠く稻城イナギの様な臨時築城があり、後には蘇我馬子父子が居館に防禦設備を施したのが原因で次の時代の館ヤカダが流行するに至つた物と考へる。此時代は邊防柵城時代とも稱すべき物で、次に來たのは豪族居館時代である。之は平安朝末から南北朝頃まで、鎌倉時代を中心とした其前後である。此時代には多數の小豪族が各地に割據してゐて、各々自領を開拓してゐた。當時は眞の城郭として認むべき物は少く、多くは前代の館の引移して、自己の居館の周圍に堀を穿ち、附近に一族郎黨を居住せしめ、もし敵の侵す事があれば、之を要路に迎へて防戦をしたのである。居館であるが故に日常生活に不便な山上の堅固な所には造る事が出来ず、山に依つたとしても平地に近い所で山を背に負ふか、或は三方山に圍まれ南一方が開いてゐ

る様な土地を選んで、其正面の奥に館を構へたのである。次は南北朝から室町時代迄で、主に山城を好んで用ひた。此時代にも平地には前代と同じ様に小豪族の居館があつたが、大豪族は其根據地を固める爲に、一族の居館を要所に配して防禦するといふ様な傾向が見え初まつた。之は築城沿革史上大切な現象である。前代は未だ小豪族の開墾殖民時代からやうやく定住時代に移つた時で、領地は必ずしも一ヶ所に纏つてをらなくともよく、其一族も分散して居た。然るに當時代には領土主義が大分明瞭になつて来て、其領土と一族の居館の配置にも一定の關係が見られる様になつた。之と同時に戦争が絶へず行はれる様になり、戦術にも多少改良が行はれ、今迄の居館は防戦に不備な點が多いので、戦争の時は居館を出でて附近の山に依る事になつた。之も城郭と見做す程の繩張りが施されたのではなく、自からは高い山上に居つて、麓から昇る敵を眼下に見下して、防禦する爲に山頂及び附近の要所に平坦地を多少造り、之等を連絡する道路を造つたに過ぎぬ、従つて當時の城は繩張りといふよりも、味方が高い所に居るといふ事が必要な條件であつて、殆んど人工を加へずに天嶮を利用した。それ故當時代は一に天嶮主義城郭時代と名付けておく。

次の時代は戦國時代であつて、室町時代の末に當り安土桃山時代も此内に含まれた方が、城郭沿革史上からは便利である。此時代は先の天嶮主義に對して、人工主義でいつた所に著しい相違がある。たとへ天嶮に依つても、そこに守戦に便利な築城法が施されてゐる。之は享祿天文頃から著しく現はれた所で、天正末まで及んでゐる。當時代末期には安土城、大阪城、小田原城の如き大城郭も現はれたが、之等はむしろ例外として次の大名居城時代に屬さしめる方がよい。次の時代は江戸徳川時代であつて、大名居城時代とも稱すべき物である。幕末文化文政頃からは本邦獨特の築城法にも著しい繩張りの上の變化が起り、他方には外國の陵堡築城を模した物が現れた。戦國時代に最も著しい特色は人工主義築城術の完成であるが、之と同時に城下町が發達し初めた。城下町の發達は徳川時代が最も著しいのであるが、大城郭には當時から用ひられ、本縣下に於ても平井城、白井城、八崎館には可成發達した物が見られ、箕輪城に於ても廣小路方面の城下町は長野氏の設けた物と考へられる。

以上を表記する時は次の如くなる。

- | | | |
|----------|--------------|-------------|
| 一、石器時代 | (1) チャシ時代 | (石器時代以降) |
| 二、王朝時代 | (2) 稻城時代 | (上代) |
| | (3) 邊防柵城時代 | (奈良—平安時代) |
| 三、武家時代前期 | (4) 豪族居館時代 | (鎌倉時代) |
| | (5) 天嶮主義山城時代 | (南北朝—室町時代) |
| | (6) 人工主義城郭時代 | (室町—安土桃山時代) |
| 四、武家時代後期 | (7) 大名居城時代 | (徳川時代) |
| | (8) 陵堡築城時代 | (幕末) |

以上の内、箕輪城の沿革は已に記した様に、豪族居館時代に其緒を發した。此時代は今の法峯寺の地が其居館跡であらう事は已に記した。次の天嶮主義時代には別に見るべき築城法も考案されてゐない故、其初期は以前からの居館をそのまま襲用し、後には椿山に居を移したかとも考へられる。其次の人工主義城郭時代には現在の城山の地に移つてゐた事は明かて、繩張りの進歩と城主の勢力の擴張と共に、次第に大規模複雑な城郭となし、永祿年間に最も擴張された。其後武田氏の有となつて多少の改築が行はれ、次に大名居城時代には井伊氏が居城し、城下町の如きも此時に至つて完備した。

即ち箕輪城は之を沿革史的に見ても、武家時代の前期豪族居館時代から、天嶮、人工主義時代を経て後期の大名居城時代に迄及んでゐる。しかも城主が縣下に於ける最も有力なる豪族で、後には大大名であつた爲其城郭變遷上にも見るべき物が多數ある事は、已に前章にも記した所である。加ふるに各時代の築城眼から見て適當な地形が、一ヶ所に存した事は當城をして、よし多少の移動と増築とはあつても、永い城地としての生命を與へた所以である、即ち箕輪城は、規模の大なる事、繩張りの複雑なる事、堅固なる事、城下町の發達せる事、史蹟の多數に有する事等々の他に、複雑なる地形を有し、且つ其地形が各時代の築城眼よりし

て適當と認められ其時代獨特の築城設備が施され、各時代の様式を一個所に於て見得る點に於て、全國に於ても最も稀らしい城郭であると考へる。之れ予が當城の調査に非常な興味を感じた理由で、調査數年にして未だ満足すべき結果の得られないのも亦之が爲である。

第十八項 砦城の配置

長野氏の箕輪城は前項に記した様な著しい特色のある外、之を中心として自己の領土及び其一族の領土に大小數十の城砦を配した事も又注意すべき現象である、此種の築城方法は戰國時代に好んで用ひられた方法で本縣下に於ても平井城、白井城等は何れも數十個所に砦を配置して防戦に便してゐる。第一圖は長野氏に屬してゐた大小城砦中有名な物を圖示したのであるが、之のみでも四十餘城に及んでゐる、之は單に當時流行の築城形式を模倣して、所謂所堅固、國堅固の城を構へんが爲のみではない。長野氏が當地に居館を定めたのは遠く鎌倉時代で、其由來する所頗る古い、従つて他の俄に領主となつた人々に比べて、君臣の關係も非常に密接な所がある。之に加へて長野氏は農政に非常に力を注ぎ、田圃を開墾し灌漑用水を通じ、民を教育し愛撫する所が多かつた。従つて領民は長野氏を推戴する事厚く、皆その居に安んじて稼業に精勵する事が出來た。之は一種の精神的築城であつて、武田信玄の所謂「人は城、人は石垣、人は堀、情は味方、仇は敵なり」といふ歌の意味を實行したのであつた。これ長野氏が小田原の北條氏、甲斐の武田氏、越後の長尾氏の間介在して、凡愚の上杉氏に仕へよく久しきの間、孤忠を完ふし得た所以である、長野氏が各所に支城を配したのも、單に當時流行の築城法に依つたのみでなく、上記の様に自己及び一族の領地領民を保護せんが爲であつたと考へられる。

〔注〕「兵書」吳子の中、治平の條に次の問答がある。武侯、問うて曰く、兵は何を以て勝つことを爲す。起對へて曰く、治を以て勝つことを爲す。又問うて曰く、衆(人の多數)に在らずや、對へて曰く、若し法令明かならず、賞罰信ならず、金すれども止まらず、鼓すれども進まずんば、(金を打つても軍が止らず鼓を鳴し

ても軍兵が進まなければ)百萬ありと雖も、何ぞ用に益あらん。所謂、治とは居るときは則ち禮あり、動くときは(敵に向つて)則ち威あり、進めば當る可からず、退けば追ふ可からず、前却(前進退却)節あり、左右應に應じ、絶ゆ(斷絶す)と雖も陣を成し、散ず(散亂す)と雖も行を成し、之と與に安く、之と與に危く(安危共に處る)、其衆合ふ可くして離る可からず、用ふ(之を用ひて戰ふ)可くして疲らす可からず、之を往く所に投じて、天下、當る莫し、名づけて父子の兵と曰ふ。之れ又長野氏の理想であつたと考へられる。

長野業政は男子吉業、業盛の外、十二人の女子があつて、何れも附近の城主に嫁してゐる。之を表示すれば次の如くて、何れも支城中の重要な地位を占むる所の城主である。

- 一、小幡尾張守内上 小幡城主、小幡尾張守信定
- 二、小幡圖書殿内上 國峰城主小幡圖書助景定
- 三、武州忍成田殿内上 木部宮内少輔定朝
- 四、木部殿内上 大戸城主大戸左近兵衛
- 五、大戸殿内上 和田(高崎)城主和田業繁
- 六、和田殿内上 倉ヶ野城主金井淡路守景秀
- 七、倉ヶ野殿内上 濱川内上 濱川城主
- 八、羽尾殿内上 厩橋(前橋)城主
- 九、濱川殿内上 鷹巢城主
- 一〇、厩橋殿内上 室田鷹留城主
- 一一、板鼻依田殿内上 室田鷹留城主
- 一二、彈正忠業通室 室田鷹留城主

右の内、三の武州忍城主は縣外であり、八の羽尾氏(覺堂曰、こは吾妻郡羽尾村今の長野原町大)も予の知らざる所である故、之を略して他に十氏が業政の女婿である。其外安中城及び松井田城主は何れも安中氏を名乗り、業

政と深い關係があつた。(或書には之等をも女婿としてゐる)。又白井城主及び惣社の蒼海城主とも重縁の關係があつて、長野氏の勢力範圍は第一圖に見る様に可なり廣い物であつた。

第一圖に依て支城配置の概略を記せば次の如くである。本城たる箕輪城は榛名山東南麓に依り、北は山を負ひ東と南は平地、西に白川が流れてゐる。東南方面には已に前章に記した様に、保渡田、濱川、矢島、北爪等の各砦を設けてある。西は室田に鷹留城を築て此方面の中心とし、本城との間に富岡、久留馬、白川の各砦を配してあり、更に吾妻郡に入つて大戸に砦を設けてある、東は厩橋城を中心とし、南に和田城を置き其中間に大類及び島名に小砦を設けた、以上で東は利根川、西は榛名山、南は烏川に依て境せられた平地を守る事が出来やう。之は厩橋との間に蒼海城、東北に白井城があつて、何れも長野氏と重縁關係を有する故益々其防禦を完全にする事が出来る。碓氷郡に於ては松井田城と安中城が中心となつて第一線に立ち、之に板鼻の鷹巢城を繋ぎの城とし、更に後閑、禮應寺、雉郷等の砦を配してある。其南は餘地峠方面には下仁田の鷹巢城を配し、和田城の前衛たる。倉ヶ野城との中間鐮川に沿ふて、宮崎、富岡、庭谷、本郷、奥平、鹽川、馬庭、山名、木部、根小屋等の砦を配してある。又多野郡では小幡城と平井城とを中心として、其間に岡本、峰、上野、白倉、天引、長根、吉井、一郷山、新堀、深澤、金山等の砦を置き、更に藤岡、高山等の群馬郡碓氷郡多野郡等に多く見受けられる。吾妻郡方面にも又屬城が有つた事と思はれる。

當時長野氏の敵は小田原の北條氏及び甲斐の武田氏であつて、他は意とするに足らない者であつた。しかも上杉謙信は越後に在つて其背後を救ひ、白井長尾氏又白井城に在つた故、長野氏としては唯南を主とし、其東西を守れば事は足りたのである。北條氏の上州侵略は兒玉から平井城方面に出るか、或は佐波から厩橋へ出るのであつた。前者に對しては神流川があり鮎川があり、更に鐮川及び烏川があり、重要な城としては平井城、倉ヶ野城、和田城等がある。後者には利根川があり、之を渡れば蒼海城があり、更に南の倉ヶ野和田城等と北の白井城等から挾撃する事も出来る。又勢多郡赤城南麓には上泉、大胡、山上、膳等の諸城があり、其他の白井城關係の城をも利用する事が出来る。

武田氏は北條氏と協力した場合を除いては、信州方面から侵入し、其通路も碓氷峠と餘地峠が最も多く、十石峠を通過する事は少い。之は信玄としては碓氷峠に出るのが最も都合よく、比較的速かに箕輪城に行く事が出来るからである。内山峠及び餘地峠からは之に次て便利であつて、下仁田から宮崎へ出れば東に北に自由に侵略する事が出来る。十石峠路は峠を越えてから約十里神流川の峽谷を通過せねばならず、沿道に物資も少く、糧食の運搬にも不便を感じる事は明かである。即ち「孫子」の「糧を敵に因る」事が出来ない。其結果は「孫子」軍争篇の「軍に輜重無ければ則ち亡び、糧食無ければ則ち亡ぶ」事となる。加ふるに此峽谷の道路は狭く、大軍の輸送は勿論、兵の進退に自由を缺く。街道の要所には城砦もあり、下仁田、小幡、吉井方面から奇兵を以て其後背を撃つ事も出来る。従つて東上州又は北武州へ出る場合は別として、此方面は武田氏に取つて便利な街道ではない。又武田氏の北信州に於ける根據地は今の松代即ち當時の海津城である故、此方面から上州に侵入するには鳥居峠を越えるのが最も近い、之は吾妻利根兩郡に出るには便利であつて、又大戸から南下し烏川の上流に沿ふて降れば、直ちに鷹留城の側面を襲ふ事が出来る。不意に之を落城させて、單兵急に箕輪の本城を衝けば、松井田、安中、和田、厩橋城等の援兵の來らざる内に、之と雌雄を決する事が出来やう、従つて此方面も長野氏に取つては、碓氷、餘地峠と共に警戒を要する方面である。以上の侵略の諸線に對しては長野氏が如何なる防禦方法をとつたかは、第一圖の城砦配置圖に依つても大略を知り得る事であらう。

第十九項 砦城の興廢

次章に箕輪城戰記を記す前に、其支城中の主要なる物に就て簡単に記し、其攻防の使命をも並記しやう。

一、厩橋城

長野氏が築城當時の厩橋城は、現在の前橋城と石倉城との中間利根川の中央に位して、利根川は其東北方

廣瀬川の邊を流れてゐた。従つて利根川西の境目城であつたが、後に洪水に依て利根川が現在の地に移る様になつて、城は東側に移り、西側に残つた郭の一部は更に修理されて石倉砦となつた。従つて河東に移つて後の當城は勢多郡の上泉、大胡、山上、或は漆久保、箱田、眞壁、八崎等の白井關係の諸城砦と連絡を取る中心地となつた。又其南の上、下川淵村の諸砦も厩橋城を衝かんとする北條氏に備へる爲に利用したかも知れない。

一、鷹留城

箕輪城と共に已に記した所であるが、吾妻から侵入する武田氏に對しては大戸砦を其第一線とし、當城を以て第二陣とし此處で喰止めて、松井田、後閑方面からの援軍と挾撃するに便利である。又南方から來る敵に對しては烏川防禦線の根據地であつて、對岸の雉郷、禮應寺砦等と呼應して、安中、松井田方面に出撃する事も出来る。或は南から侵入して倉ヶ野、和田城を落し、濱川、保渡田の砦も落ち箕輪城を包圍されても當城が堅固であれば白川、富岡其他の砦と呼應して白川以西の地を死守し、折を見て安中松井田の兵をして敵の退路を斷たしむる事も出来る。

一、松井田城、安中城

松井田城は松枝城或は小屋城と云ひ、代々安中氏の居城であつた。安中越前守忠政は大永五年封を續ぎ、永祿二年野尻に築城して安中城と稱し、其子左近太夫忠成をして守らしめ、共に長野業政に屬してゐた。松井田城は碓氷峠を越えて來る武田に對しては第一線に當り、第二線の安中城と共に重要な位置を占め、北方山中の後閑城は後閑伊勢守信純居城し、鷹留城との間の繋ぎの城として地の利を得てゐる。又餘地峠を越えて北甘樂の平野に侵入した場合には、此二城は小幡城と敵を挾撃する位置にある。

一、鷹巢城

板鼻町の背後の山上にあつて、碓氷川に臨んだ斷崖の上に其出丸を設けた。武田氏の家臣依田六郎居城と傳へてゐるが、此依田氏は業政第十一女の女婿依田氏であらう。其地形も武田氏には必要のない所で、安中城

の次の關門であつて、鷹留城及び本城との繋ぎの城として、又は若田原に合戦を行ふ場合に、敵を牽制するに便利な地形である。従つて依田氏は從來長野城に屬し、長野氏滅亡後武田氏に降り、武田氏はそのまゝ依田氏を板鼻に居住せしめたのであらう。其地形は碓氷の平野を一望の下に收め得る故、物見臺としても使用せられた事であらう。東横野村下間仁田の天王山は、長野氏の烽火臺であつたと傳へられてゐるが、之は其位置から云ふても又時代から云ふても斯くあるべき所で、松井田及び宮崎、富岡方面の物見の結果を此處に受て、更に鷹巢城の物見臺を受け、更に箕輪城に傳へた物であらう。此外烽火臺は各所に在つた事と思はれるが、調査不完全のため其確證を得ない。

一、和手田城

和田城は高崎市に在り、現今の高崎城は徳川時代に増補した物で、永祿頃の和田城は規模も小さく、今の牙城の邊がそれであらう。代々和田氏を名乗り、山内上杉家の家臣であつた。和田業繁は上杉氏に屬し、長野業政の女婿となつて、箕輪城の支城として其南方の要害として重きをなした。(三十騎と傳へてゐる。)和田城は烏川と碓氷川との合流點に位し、四通八達の樞要な地であつて、箕輪城南方の關門と稱する事が出来る。後世井伊氏が箕輪城から和田城に移つたのも、極めて適當な處置であつた。

一、倉ヶ野城

倉ヶ野城は烏川北岸に在つて、代々倉ヶ野氏居城し上杉氏に屬してゐた。後淡路守景秀の時、業政の女婿となり、箕輪城に屬した、之は南方から侵入する敵に對しては第二線の防禦線となり、和田城及び之が支城の下の城或は島名、大類砦と共に利根、烏川の中間の地を防ぎ、小幡平井方面からの敵に對しては、對岸の木部、山名、等の砦と呼應して鎬川で防ぐ事が出来る。(三十七騎)

一、木部城

業政の女婿木部宮内少輔定朝居城し、其館は木部村内に在つて、其要害城は山名の山上にある。之に續いて根小屋城があり、更に馬庭と奥平の砦で鎬川の内側の山中を堅める事が出来る。

一、小幡城、國峯城、下仁田砦

業政の第一女婿小幡尾張守信定の居城である。同族であつて相婿たる小幡圖書助景定は、國峯の城主であつたが折合が悪しく、信定湯治にて留守中之を取り、自ら小幡城主となつた爲、信定は甲斐の武田氏に走つた。依て信玄は五千貫を與へて、後に内山峠を越えて下仁田との中間西牧に砦を築いて守らしめた。之等の城は碓氷郡に於ける松井田城と同じく、甘樂郡の平野に於ける根據地であつて、餘地峠を越えて侵入する武田軍に對しては、第一線が下仁田の砦で、次が宮崎及び富岡の砦である。富岡迄侵入した敵は、北するには小幡城があり、之を攻むれば背後から松井田、安中城から援兵が来る。又東方には鍋川沿岸に庭谷、本郷、鹽川等の砦があり、更に南の高地には當城の西に岡本、東には上野、白倉、天引、長根其他の砦が一系列に配置されてある。此鍋川平野の關門に當るのが小幡及び國峰城である。業政が信定、景定を婿とし、其關門を守らしめたのは極めて策を得た所で、何れも天文年間の築城であらう。又餘地峠路第一の關門たる下仁田の鷹巢城は、其一族小幡三河守景守の守る所であつた。

一、平井城、金山城

平井城は上杉氏の居城で、天文二十年城主憲政は越後の長尾景虎の下に走り、城は北條氏の手落ちたが翌廿一年謙信の手にて奪取し番城とした。然し此地は上州の南端に在つて交通にも不便、且つ附近に高地があつて要害にも悪しき爲、厩橋城を之が代用とした。其後長野氏に屬してゐた。其西南方の金山城は平井城の要害城である。當城は以前上杉氏の居城であつた爲、其東を流れる鮎川の東及び西岸に二十有餘の砦を配してゐる。川東の藤岡城、河西で新堀城は其最も有名な物である。當城は上毛全體に號令する爲には片寄り過ぎてはゐるが、箕輪城の境目城として北西方面を深澤、新堀、金山等の諸砦で守り、東南方面の敵を防ぐ爲には堅固な城といふ事が出来る。元來平井城は南方から来る北條氏の爲に築いた物で、神流川を第一の外濠とし、鮎川を第二の城濠とし、此方面のみを考慮して造られた物である故、長野氏は之をそのまま使用する事が出来たのである。

一、其他、主なる城に就て城主名を記せば

大戸城	大戸八郎	(降)	二十騎
雉郷城	里見河内	(落)	
禮應寺砦	赤見藤九郎	(落)	
藏人砦	島崎藏人	(落)	
北爪砦	北爪土佐守	(落)	
久留馬砦	長尾五郎景忠	(落)	
白川砦	白川五郎滿勝	(落)	
富岡城	長野左京亮直業	(落)	
矢島砦	矢島久右衛門	(落)	
後閑城	後閑伊勢守信純	(落)	六十騎
島名砦	永井豊前守	(降)	
大類砦	大類伊勢守	(同)	
藤岡城	澄井右馬亮	(落)	
深澤砦	駒井右京	(降)	
新堀城	多比良豊後守友定	(落)	
一郷山砦	安部中務元友	(同)	
鹽川砦	菅沼大膳介之常	(同)	
吉井砦	番城か	(降?)	
長根砦	長根右馬助	(降)	五十騎
庭谷砦	庭谷左衛門	(降?)	

奥平	奥平氏 (落)
白倉	白倉左衛門尉宗任 (降) 五十騎
富岡	大熊伊賀守義成 (同)
宮崎	小幡山城守虎盛 (降?)
高山	高山四郎 高定 (降) 五十騎
井田	井田八郎 (同) 四十騎

(此外は畧)

第二十項 砦城の利用

前項に列記した城砦は長野氏屬城の全部ではない。永祿三年箕輪城に於ける『軍評定着到帳』の人名から見れば群馬、碓氷、多野、甘樂、勢多の各郡に渡り更に多數を見出す事が出来るが、茲には唯其一部を擧げたに止まる。又其大部分は永祿頃の物であるが、其以前に屬してゐた永祿頃には已に他に屬してゐたものもある。又其内には簡単な居館例へば木部城の如き物から、搔上城式の物も多い。然し支砦の内にも木部の要害城の如き大規模の物もあり、新堀、長根の如き大永前後の代表的築城の手法を示す物もある、又長根砦の如き物は一種の物見臺と稱すべき物で、同じく長野氏に屬してゐたらしい神尾三河守居城の眞壁城勢多郡を連想する様な砦である。又多胡村の城山の如き高山にある物、或は小幡の城山と麓の城との關係も興味ある調査資料である。倉ヶ野氏が後に武田氏に屬して繩張りを改めて、其改めた個所の判然してゐる事等も、城郭研究の好資料を呈供する物である。斯く長野氏に屬した數十の城砦は、之等を惣括して或は個々の物として我徒に取つて興味ある研究題目であるが、未だ調査も不完全ではあり、徒らに記事の膨大となるのを恐れ割愛することとした。

之等各城砦の配置は大體前記の通りであるが、其内小なる物は除き重要な物に就て、其配置が軍事上不適當であるとの説をなす者がある。此説に依れば「安中城を造るべき費用を以て松井田城を完全にし、小幡

附近の城を造らずに、下仁田に堅固な城を構へる様にし云々」といふ事である。之は一理ある所で、長野氏が之等の砦を全部新たに築くとすれば、或は斯くしたかも知れない。恐らく之に近い配置方法を取つた事であらう。然し之等は何れも以前から築いてあつた物で、長野氏は之を女婿とし或は他の方法に依て味方に付けた者である。其内重要な地點を占めてゐる城に對しては、長野氏自ら其城の軍事上及び政治上の事項に關係した事であらう、又其城主の乞を入れて新たに砦を築いた事であらうが、之とても其城主の希望もあり、領土の關係もあり、箕輪城の攻防に便利な爲にばかりは出来なかつたのであらう。従つて此様な砦城の配置は長野氏自身にとつても不満足の事であつたであらうと考へる。例へば鑄川沿岸の小搔上城の如きも餘り必要なものではない又其南の丘陵に並んでゐる小城も、それ自身はそれ／＼築造當時の面影を存して、要害も悪くはないのであるが、之等を合せて平井城の北美土里村邊か、山名邊かに大きな城を築くか、或は鷹巢、和田倉ヶ野等の各城を増築したかつたであらう。然し彼等は長野氏が碓氷、甘樂方面に勢力を延ばし、松井田、小幡、平井城等をも屬城とした爲、彼等自身を保護する爲に長野氏に屬したのであらう。従つて之等の配置が戦術上適當でないとして、それは長野氏の築城眼を疑ふ理由にはならない、こんな十把一束の小砦(といふ思はれる)中にも次章に記す様に、一郷山、新堀城等の小さな城を守つて、武田氏の大軍に蟻螂の斧を振つて立ち向ふ氣なげな人達も居つたのである。之等は長野氏の築城眼を云々すべきではなく、徳の力の及んでゐた一例ともなるのではあるまいか。

次に長野氏が之等の砦を利用した一二の實例を擧げて見やう

一、永祿二年春武田信玄亂入の時は、箕輪城と松井田城との繋ぎの城としての安中城の増築が完成しない内であつたといふ。信玄は其將飯富虎昌をして安中城を攻めしめ、自ら和田城に向はうとして八幡村に陣を布いた。之は安中松井田の兵を押へる爲に飯富を安中に殘し、大舉和田城を陥落せしめて箕輪の本據を衝き、遊軍は烏川北岸に在て南部からの援軍を防がんとす計畫であつたと考へられる。もし之を逆に行けば、安中

松井田二城の外、後閑、鷹巢、雉郷等の砦に煩らはされ、更に鷹留城と正面衝突をなし、和田城の援軍に後路を断たれる患ひがある。こゝが長野氏にとつて有利な地形で、武田の軍を此方面に導く策戦を建てたのであつた。其點は軍記の記載不備で、且つ之を補ふ文書にも乏しい故、明かにし難いが、其大略は次の様であつたらしい。業政は安中城からの報告に依て自ら援軍を指揮し、烏川を渡つて信玄が八幡村に陣を布いた事を知りて碓氷川の北岸に在つて對陣した。一方奇兵を出し安中城を迂廻して信玄の後陣を討ち、縦横に蹂躪して武田の陣の整はぬ内に急に兵を返し、安中から里見に出て、雉郷の砦に入つた。翌日信玄は和田城攻撃を中止し、業政を追ふて雉郷の砦を圍み、砦内に入れば城兵は無く、業政は己に對岸の鷹留城に入つてゐた。信玄が其將山縣昌景に鷹留城を攻撃せしめた時は、業政は城主長野業通に計を授けて、自らは箕輪城に歸つてゐた。其後鷹留、箕輪兩城に相當の合戦があつたが、背後に和田、倉ヶ野、松井田等の諸城が嚴存してゐる故、圍みを解いて歸國した。之は業政が信玄の軍をよく牽制して、和田城を保つと同時に、地理不案内の地に敵を導く策の成功した爲である。此時の八幡村の信玄の陣所は明かでないが、上の記事及び地形等から云ふても、若田原（烏川と碓氷川の中間の高地）ではなく、碓氷川の南、八幡村の鼻高邊ではあるまいか。斯くすれば信玄侵入の経路も明かて、一方に安中城の押へを置き、和田城を攻撃するにも順當である。

二、永祿三年二月、信玄は其將板垣信方、跡部勝資、長坂長閑、小宮山昌行等に箕輪城を攻撃させた。城外に多少の出撃を行つた後、業政は固く城を守つてゐた。而して松井田、安中、和田城等の兵をして敵の背後を襲はしめ、敵退かんとする時に城兵追撃して、高濱附近で破つた。高濱砦も此時活動した事であらう。

三、永祿四年四月、信玄其子義信と共に、二萬餘の兵を以て侵入した。鷹留城主長野業通は其弟業固に命じ秋間方面に出撃させた。業固退いて雉郷砦を守り、更に退いて鷹留城に入り、烏川を境して彼我相對峙した。一方信玄は若田原邊から烏川を渡り、白岩、高濱の砦を攻落して、箕輪城に迫つた。本城は業政死して、其子業盛は二月謙信に従つて相模に行き、老臣藤井豊後守友忠が守つてゐた。友忠城を守り、機を見ては出撃し大いに寄手を惱ませた。此時保土田砦の援兵は白岩の砦を復し、和田城の援軍は高濱砦を復し、更に松井

田、安中の援軍と共に敵の背後を断つた。又守將友忠は土民をして敵の輜重を焼かしめ、夜に入つて雨を冒して城内の勇將下田大膳昌勝、青柳金王忠家等は手兵三百餘人を以て信玄の陣に夜襲を行つた。依て信玄は之を避けて（信玄は夜營陣には最も注意して、殊に敵地に入つての夜營故當夜の警備は特に嚴重であつたと考へられる。）烏川を渡り、八幡村に退いて遂に甲州に還つた。此場合は鷹留城からの支軍業固の指揮する一隊の牽制が思ふ様に行はれ、和田、松井田、安中等の諸城も充分に其効果を擧げる事が出来た。之も長野氏が烏川碓氷川等の山間の地形をよく利用した爲である。孫子に『夫れ地形は兵の助けなり。敵を料りて勝を制し、險阨遠近を計るは、上將の道也。此を知りて而して戦を用ふる者は、必ず勝たん。』とあるが、業政も亦上將であつた。

第六章 箕輪落城

第二十一項 小幡城の陥落

小幡城主は業政の女婿小幡尾張守信定の居城で、信定は其一族等と長野氏に屬してゐたが、相婚圖書助景定等との仲悪しく、永祿三年信定の入湯中（草津温泉とも云）急に其居城を襲ふて取り、景定が替つて城主となつた。之は信定、景定の不和を利用して、小田原の北條氏康が反間の策を用ひて、信定の降書を偽作し景定に示し之を誘はんとした。こゝで景定が信定の降書を業政及び謙信に示し、信定入湯の隙を見て居城を襲ふたと傳へられてゐる。そこで信定は止むを得ず甲州に走り、信玄に其窮狀を告げた。信玄大いに喜んで信定に五千貫の所領を與へ、南牧に砦を築いて居らしめた。

永祿四年（或は五年）信玄一萬餘の兵を率ひ余地峠を越えて、南牧の砦に到着した。信定に景定の性質を問へば、信定が『景定は勇あれども俄かに事に應ずるの才なく、周章する氣分である』と答へたので、信玄は一策を内藤昌豊に授けて、間道から進み奇計を以て景定を走らせ、信定をして本領に復せしめ遂に甲府に

歸つた。信玄が内藤に授けたといふ策は、甲陽軍鑑等には如何にも有りさうな事で、奇兵の一例として甲州流兵法でよく例に取つて教へた所であらうが、實際あつたかどうかは疑はしい。箕輪軍記等でも同じ事で、戦記としては當時軍の神とも云はれた信玄が奇策を授け、何等勞する所なく景定を城から追ひ出す所などは誠に面白い事ではあるが、事實そんな事が出来たであらうか。今其一節を上州治亂記から抜記すれば

(前略)時に永祿六年二月十二日、上野國を攻めんとて、一萬三千人を引率し、甲州を出發あつて、餘地峠を越え、南上州南牧の砦に着陣遊ばされ、尾張守信定を招き、信玄尋ねられけるは、足下の相婿圖書助が氣象は、如何とぞありければ、信定申上げ、るは、抑圖書助が儀は、器量も力も人に勝れ、武勇等倫を恥ぢざる大剛の者にて候へども、事に驚き周章仕る天性にて候と申しける。信玄聞召して、扱は術こそあらんとて内藤修理亮昌豊に下知を加へ、小荷駄馬一疋に、挑燈二ツ宛附けさせて、馬追の工夫にも、松明一本宛持たせ、旗本にては、竿の先に挑燈を結付けて置き、此挑燈に火を附けて、旗本より差上げなば、汝が請取の小荷駄馬の松明に、火を附けて、高き所へ追上ぐべしと示し合せ、既に軍勢の手分をして、松井田、安中、箕輪三ヶ所に配當して、後詰をさせじと押へ置き、旗本脇備へ、數千の兵を進ませ、嶺の城に押寄せて、相圖の挑燈差上げしかば、内藤修理亮之を見て、小荷駄共の挑燈松明一時に燈させて、高き所へ追登せて、関を哄と揚げしかば、圖書助大に驚き、敵若干の大勢なれば、防ぐとも叶ふまじとて、城を開いて落行きける甲州勢追討亂放、終に嶺の城を乗取りけり (下略)

以上は上州治亂記の記事であるが、他の戦記も大同小異である。此子供だましの様な記事は、興味本意の戦記本にはよいか知れぬが、之を眞に受て軍事上から批評などされては城主の圖書助景定に氣の毒である。下仁田の境目城は、其鼻先の南牧に敵方の境目城を築かれては、益々其責任が重くなり、監視の役目も充分にせねばならない。信玄が南牧の砦に一泊して、大軍を指揮して小幡城へ進むのを、呑氣に構へて知らん顔をしてゐる事もあるまいし、此由を小幡城及び松井田城へ傳へない事もあるまい、如何に武田氏が兵の神速を尊んだとて、此策戦は夜に入つててなければ行はれない。従つて小幡城内でも充分戦闘の準備は出来てゐ

た物と見做さなければならぬ。又下仁田砦も宮崎砦も無事に通過したとしても、武田方が松明を以て子供だましの示威運動をやつたのは、城山からは何れも谷一つをへだてた向ふの山でなければならぬ。平城か平山城で、敵が突然城濠近く現はれたらば、城内が周章狼狽するかも知れぬが、小幡城の様な高い山城では對岸の火も同様で、たとへそれが突然であつても、ゆつくり籠城の準備をする事が出来やう。又此城を圍んで松明を點じて攻め立てれば、東北二十町餘の上野の物見砦から白倉、天引、長根等の城砦にそれ／＼傳へる事が出来る故、次の日には援軍の來る事は明かな事である。

以上は城主圖書助景定が、從來傳へられた様な小供だましの策略で、城を捨て、逃れたのでない事を辯護したい爲に特に記した。然し景定の努力の甲斐もなく落城した事は事實である。そして信玄は信定を城主として入れておいて、續いて行ふべき南上州攻略及び箕輪城攻撃の根據地としたのであらう。此年は或は永祿四年といひ、又六年と傳へてゐるが、次項に記す南上州攻略の前年である事は明かであるから、五年の末ではあるまいか。

第二十二項 甘樂多野各支城の攻略

之は永祿五年秋とも翌六年正月二十日とも云ふ。信玄は三萬五千餘人を引率して甲府を發し、餘地峠を越えて北甘樂に入つた。小幡城は已に其旗下小幡尾張守信定の居城となり、峰、岡本等の砦も之に屬してゐたと考へられる故、比較的容易に侵入する事が出来た。信玄は小幡城に入り、軍を分つて一は一ノ宮、富岡等を降して松井田、安中城等に備へ、上野、白倉、天引、庭谷、等の各砦を降した。又一軍は天引から分れて多胡村城山の麓から大澤に出て、猪ノ田から日野金井に越え、平井城を降して藤岡城を攻撃した爲、城主依田幸成も城と共に降伏した。

それから道を轉じて入野村に入り、一郷山の砦を攻めた。此砦は安部中務尉之友が其士卒三百餘人と共に死守したが、用水の缺乏と城山燒失の爲、數日にして落城し、籠城の士卒、婦女子、共に大部分死亡した。

信玄は更に其東北の新堀城(或は多比良城)を攻めた。城主多比良豊後守友定は、士卒と共に討時防戦の後、城を自焼して自刃した。(之を一本に二月十二日夜と傳へてゐる)

新堀落城の後、深澤、吉井の砦を降し、河内城主牧野丹藏英一、鹽川城主菅沼大膳助之常の許に使者を遣し降伏を進めたが、彼等應じないため之を落城させ、更に長根、本郷等の諸砦を降した。又鑄川を渡つて奥平馬庭を降し、更に木部、山名、根小屋砦等を陥れた。木部城主木部宮内少輔定朝は城と共に自害し、其室即ち業政の女は走つて箕輪に來り、更に榛名に至り湖水に身を投じたと傳へられてゐる。こゝで碓氷川以南の諸城砦は殆んど全部武田氏の有に歸した。

此武田氏の侵入が永祿五年であるか、六年であるかに就ては確證がない。又箕輪落城に就ても永祿六年説と九年説とがあるが予は石倉、和田、厩橋城等の關係から永祿六年説に従つて置く。小幡城の攻略を永祿五年十一月とすれば、之に續いて當然起るべき北甘樂、多野の諸城砦の攻略は、永祿六年正月であつた方が都合がよい。それは武田氏の小幡城攻略は甘樂、多野への侵略の前提であり、又北甘樂多野への侵略が完全に遂行されば箕輪城も危い事となる。従つて長野氏は信玄の甲州引退後、直ちに小幡城を陥落せしめ、信玄の根據地を破壊せねばならない、此點を考へて翌六年早々侵入したか、或は小幡城が長野氏から攻撃を受け援軍として翌六年正月に上州侵入となつたか、何れにしても本項に記す所は、小幡城攻略に續いて行はれた物と見做さなければならぬ。

それ故もし箕輪落城を永祿九年とすれば、六年から九年迄四年間、南上州の諸城砦を陥れたまゝで、箕輪城を其儘として置た事となる、又長野氏も本城の外、鷹留、松井田、安中、厩橋等の各城が完全に残つてゐるにも拘わらず、山名、平井、白倉、小幡等の諸城砦を回復する事なく、敵の爲すがまゝに放任してゐた事となる、たとへ業政死して子業盛が若年であつても、藤井豊後守を初めとして業政時代の忠臣はそのまゝ生存してゐたのである故、業政時代の信玄との合戦の様子を見ても、斯様な事は全然有り得べき事ではない従つて永祿六年以後に於て長野城が小幡氏を取かへした事實は發見されない限り、箕輪城は永祿六年、信玄

が南上州攻略の餘勢を以て一氣に攻落せしめたと考ふべきであらう。

第二十三項 松井田城安中城の落城

信玄が木部、山名、根小屋の各城砦を陥れた後、烏川を渡つて倉ヶ野、下の城、和田城等を陥れたと傳へた記録もある。然しもし和田城を攻略したとすれば、松井田、安中城へは已に押への軍兵を備へてある故、和田城を根據地として、直ちに箕輪城を衝くのが便利であらう。又他の説の様に、永祿二年乃至五年に和田城及び倉ヶ野城が信玄に降つてゐたとすれば、信玄は松井田、安中の爲に押への兵を置いて、甘樂多野の諸城砦を攻むるの愚をなす筈がない。彼は小幡城に少しの兵を残して倉ヶ野城と共に、其中間の諸城砦に備へ、松井田、安中にも押への兵を配置し、自らは富岡から小野村を通つて八幡村に出て、烏川を渡つて和田城に入るべきである。斯くすれば餘地峠を越えて一日の行程で和田城に入る事が出来る。又小幡城に入つて一日の休息をしても翌日は和田城に入り、更に濱川の砦を陥れて、一舉に箕輪城に迫る事が出来る。それを何をして苦しんでか甘樂、多野等の餘り大局に影響を及ぼさない小城を、順次に攻落し、松井田城及び安中城を苦戦をして陥しぬれ、或は鷹留城を南から攻め、若田原で兩軍が合戦をする必要があらう。即ち余は永祿六年の信玄の軍の行動から見ると、和田倉ヶ野二城は未だ長野氏に屬してゐた事、及び甘樂多野方面では上野白倉から木部城迄を攻略し、倉ヶ野城と和田城には及ばなかつた事を主張したのである。

甘樂、多野兩郡を確實に占領した後、今迄は單に押への兵のみを置いた松井田、安中二城の攻撃を開始した。安中越前守忠政の守る松井田城には、飯富兵部少輔虎昌、淺利式部少輔義胤、小宮山丹後守昌友、城の伊庵、同舍弟忠兵衛、原與左衛門尉勝重、市川梅印の六將が向ひ、安中左近太夫忠成の守る安中城へは、甘利左衛門尉晴吉、小幡尾張守信定、原美濃守虎胤、曾根内匠助正清の四將が向つた。又内藤修理亮昌豊、山縣三郎兵衛昌景、小田彌三郎正教、馬場美濃守信房の四將は箕輪城に向つたと傳へられてゐるが、箕輪から松井田城への後詰を出したり、鷹留城方面に盛んに援軍を出した所を見れば、内藤、馬場等は松井田落城以

前は箕輪城攻撃に参加せず、信玄の旗本と共に八幡村鼻高附近に陣を張つてゐた事であらう。

安中城は城主忠成が能く防戦したが、城の堅固でない事と、彼我の兵力の差甚しい爲、遂に和を請ふて降つた、信玄は之を許し、小宮山丹後守を安中城代とした。又松井田城は城も堅固である上、城主忠政は飛道具を用て善く防戦し、期を見ては屢々出撃を試み、敵に多大の損害を興へた。然し敵の多人數に比べて味方は少く、次第に討死し、殘兵も又疲れ果て手負多く、箕輪城からの後詰の望みもなき爲、遂に城は陥つた。信玄は其跡に淺利式部少輔を城代として入れ置き、兩城の攻撃軍を併せて、いよいよ箕輪城の總攻撃を試みる事となつた。

安中、松井田兩城の陥落は、少くとも三日は費された物と思ふ。此二城は箕輪或は鷹留城からの援軍の到着するまでは、城を死守せねばならない。然るに箕輪からは軍評定に手間取り援軍の派出が後れた爲、兩城ではいよいよ後詰の援軍を待つ望みを失ひ、遂に和を乞ふた物と考へる。今其の距離から考へても、三四日を経て後詰がなければ、降参するの無理はない。又本城との距離が更に遠ければ、四五日間は援軍を頼んで最後の一人となるまで防戦したであらう。予が兩城の陥落に三日乃至四日を要したと推定する理由は此處にある。其三四日間、別働隊たる内藤、馬場等四將の兵が、爲す事なく遊んでゐた筈もなく、箕輪城を攻撃したとも考へられない。戦記や記録の不備の爲、之等の部隊の消息を明かにし得ないが、初め小幡城に入つて更に部隊を分ちそれ／＼の任務に就た時、此部隊は平井、新堀城方面の諸城砦の攻略に向つたのではあるまいか。

信玄の軍勢が松井田、安中兩城を包圍したと聞き、箕輪城内では軍評定が行はれた。下田大膳等援軍を送る事を主張したが、牛尾平八郎之に反對し、評議は三日を経て遂に決しなかつた。神尾圖書、白川五郎等手兵を連れて松井田城救援に向ひ、矢島久左衛門、青柳金王も亦之に續いた。已に兩城の陥落した事を聞き、止むを得ず後閑長門の守る後閑砦に籠城した、兩城の包圍軍合して此砦を攻めた爲、遂に砦を保ち難くなり各將は手兵をまとめて箕輪城に歸つた。此時箕輪城内の軍評定が援軍を送る事に速かに決したらば、松井田

方面の合戦は餘程長野軍に有利となつたであらう。彼れ牛尾の非援兵論は(一) 目下の箕輪城は業政時代に比べ兵數が少く、附近からの來援も當にならぬ。従つて寡兵を分つて兩城を援ふよりも、衆を以て本城を守る方がよい。(二) 寡い城兵を援軍として派遣して、彼の大軍に當らば味方の死傷多き事は必然である。斯く寡兵を更に少くしては本城を守る事も出来なくなる。といふのである。一應尤もの様であるが、皮想の見たる事をまぬかれない。武田の大軍を本城に引受けて、花々しく討死をする約束なれば或は策を得たのかも知れないが、當時の長野氏としては、少しも多く武田軍に打撃を加へ、一日も永く防戦して武田軍を不利益な状況に陥れねばならない。甘樂、多野の諸城砦は陥落しても、安中松井田城もまだ防戦中で、倉ヶ野、和田、鷹巢、鷹留城の有力な諸城も嚴存し、厩橋、蒼海、白井の諸城も長野氏の爲に應援の勞を惜む者ではない。又越後に救助を求める事も不可能ではない。それにもかゝらず、徒らに籠城主義を取つて安中、松井田兩城を救ふ事なく、敵をして難なく碓氷川を渡らせた事は非常な不利益であつたと考へられる。

第二十四項 鷹留城の攻略

安中城陥つて後、松井田城は落城が後れた故、或は未だ防戦してゐたかも知れぬ、内藤昌豊、山縣昌景、馬場信房等は、碓氷川を越え安中から秋間に出て、山を越えて烏川の南岸に陣を張り、北岸の鷹留城と相對した。鷹留城主長野業通には業固、業勝の二弟がある。業勝先づ弓隊を北岸上に配して防がせたが、寄手中の那波無理介等遂に川を渡り、小幡信定等も亦川を渡つて攻めた。業固も二百騎を率ゐて突出し、業勝等と軍を合せて逆襲した。奮戦數刻の後、業勝は討死し、業固は敵を川南に退けて城に入つた。

翌日は箕輪からの援軍を待つて、城を固く守つてゐた。午後に至り甲軍の飯富兵部、小宮山丹後等が下流を渡つて箕輪城に向つた事を知り、援軍の望みを失ひ、城を枕に討死せん事を期した。茲て業固先づ出撃し山縣昌景と銚を交へ、業通も亦山縣を追ふて出撃した。甲軍では内藤、馬場の兩隊が業通等を圍み、小幡の一隊又來り加はつた爲、城兵大いに苦しんだが、利根木の一隊が小幡の後背を撃ち之を走らした爲、業通、

業固等僅に脱するを得た。殘兵をまとめて城に歸らんとすれば、城は炎焔に包まれてゐる。一騎馳せ來つて城内に内應者在つて、水路を絶ち火を放つて遁れ去つたと傳へた、止むなく生殘の敗兵を集めて、夕陽を背にして、箕輪城に入つた。

此日或は翌日、那波無理之助は手勢二百五十餘人を卒ひ、烏川を渡り鷺坂常陸之助長信の居住を攻めた。向坂は箕輪に詰めて、留守居の家臣が防戦したが及ばず、遂に箕輪に引退いた。向坂は箕輪より家臣を連れて迎へ撃ち、安藤九郎左衛門も亦百餘人を率ひて來援し、白岩觀音堂の邊で合戦したが、戦ひ利なく安藤は討死した。青柳金玉、新波新右衛門等二百餘人を卒ひ來援したが、己に安藤の討死後であつた。即ち無理之助の軍を衝き、大いに之を破り、無理之助は烏川を渡つて退き、青柳等も又箕輪城に入つた。

鷹留落城の事は箕輪城程詳しく記してない。之は云は、箕輪落城の附録とも見做されてゐたからで、同系統の戦記中此項を缺除してゐる物も往々ある。此城の攻撃は松井田、安中城の包圍軍とは別な一隊、即ち内藤、馬場等に依て行はれた。戦記に依ると少くとも二日間は此攻撃の爲に費されてゐる。八幡村鼻高の信玄の本陣を出發した日を加へて少くとも三日或は四日を費してゐるかも知れない。戦記には非常に華々しく書いてあるが、元來此様な山城の合戦は、攻城にせよ籠城にせよ目立たない物である。最初の一日は勿論城兵の半數位は城を降つて、烏川を夾んで對陣し、若し之が破れれば籠て戦つたであらう。然し一旦兵を城内に收容すれば、仲々大規模に出撃する事も出來ず、又城の四方から攻め寄せる事も不可能である。少數の城兵が機を見て問道から出撃し、城内から之に應援する程度の小競合ひ位で終始し、相當の持久戦が行はれたのではないかと思ふ。此時は和田城も陥らず、信玄も八幡村に陣を張つてゐたであらうから、内藤、馬場、山縣等の部隊を此城に牽制する事は、箕輪城から和田城を救護し、或は次項に記す様に若田原方面に出撃する場合にも、非常に有利である故、城主業通も持久策を取つた事と考へられる。落城の直接原因は、或は戦記に記す様に内應者のあつた爲であるかも知れないが、攻城開始の翌日であるとは餘り早過ぎる様な氣がする城内に内應者を造る事は、以前から計畫してなかつた場合は別問題として、急に矢文や何かで招いても、目

前の利益だけでは仲々應ずる者ではない。そこで普通攻城者の取る手段は、最初は普通に攻めて急に落城の見込がなければ嚴重に包圍し大兵を以て示威運動をし、更に能ふ限りの強襲を行つて退き、再び沈黙を守つて嚴重な包圍を續け、城内の兵をして恐怖の念を起さしめておいて、次に矢文其他の方法に依つて利を以て内應を進めるのである。従つて當城の場合もやはり、此様にして内應者を造つたのではあるまいか、別書に「武田晴信攻めあぐみ、降將小幡尾張守重定(實は信定)を召し謀を問ふ。重定謂ひけるに城中に男蟹谷眞光といふ者候、之に賄はば必ず二心を生じ候はん云々」とあるは此間の消息を傳へたもので、信玄も攻めあぐみ力攻めの不可なる事を知り、内應者の力を借りて落城させたのではあるまいか。

那波無理之助も此攻圍軍中に在つた故、安藤九郎左衛門との合戦は鷹留落城後の事であらうか。又攻城中とすれば、箕輪からの援軍として安藤が來援中、遊隊の那波が之を迎へ撃つた物とも見られぬ事もないが、落城後園みを解いて、向坂の砦を攻めた物と解釋した方が、更に合理的ではあるまいか。

第二十五項 若田原の合戦

若田ノ原は八幡村分に在つて、碓氷川の北岸、板鼻鷹巢城の東北十數丁の地にある高原である。丁度信玄の陣所八幡村鼻高と碓氷川をへだて、相對し、箕輪城の攻防兩軍に取つて重要な地形である。之は東西二十町、南北約十町に及ぶ高原で、西は天神山の麓に續き、東南は平地より高き事三十尺乃至五十尺である。原の北部は、中二町乃至五町の一段高い小丘が東西に連續して、此原を護る城壁の如き觀がある。従つて北岸即ち烏川に面した方は、平地より高い事六七尺に及んでゐる。其西南には板鼻の鷹巢城があり、東北の突端には劔ヶ崎の高地がある。此高原を信玄に占領される時は、和田城及び松井田、安中城からの來援も餘り効果がなく、箕輪方面から烏川を渡つて攻撃しても、北方の天然の城壁に依つて防ぐ時は、此地を占領する事は困難であらう。又信玄が此高原を占領すれば、こゝを根據地として、箕輪城或は鷹留城を攻撃するに、非常に便利がよい。従つて武田氏としては若田原を一日も早く占領し様とし、長野氏としてはこゝを占領さ

れば、退いて烏川で防ぎ、高濱、本郷、白川の丘陵地及び濱川邊の砦で防いで後、箕輪に籠城するより途はない。實に此若田原は箕輪城及び鷹留城にとつては、南方の咽喉であつて、敵に奪はれたくない所である。板鼻の鷹巢城は武田氏が箕輪城に備へる爲に築いたと傳へられてゐるが、此城は地形から見ても南方から攻めては實に難攻不落とも云ひ得るが、若田原から北に廻り、天神山の方面から平押しに攻めれば、一留りもなく落城する様な繩張りである。もし武田氏が箕輪城を押へる爲に築く必要があれば、箕輪城からの逆襲を防ぎ、又は之を攻撃するに便利な點から、當然若田原北方の丘陵地に築くべき筈である。従つて鷹巢城は若田原を護り、安中方面と連絡を取る爲に、長野氏が築いた城でなければならぬ。

斯く若田原は長野氏に取つて重要な地點であるが故に、信玄が鼻高へ着陣したと聞いて、兵をこゝに送る事は極めて適當な處置である。又戦記に記した信玄の陣所の八幡村がモシ若田原邊であれば、其後に若田原の合戦は行はれなかつた筈で、鷹留城の攻撃軍が安中から秋間を通つて烏川の南岸に出る必要もない筈である。従つて若田原の合戦は、安中松井田城等が落城し、和田城も勝頼等に依つて陥落し、鷹留城も落城したが或は暫時にして落城する事が決定し、いよいよ箕輪城總攻撃を開始する前に、信玄の本營を北に移す爲に、各城の包圍軍を集めて若田原の占領を企て、箕輪城からの派遣軍と衝突したのであらう。

和田城攻撃に就ては長野記に、晴信の男勝頼が其補將原加賀守と共に和田城を攻め、城主新兵衛尉朝常を降した事が記してある外、他の戦記は餘り記してない。従つてこの攻防戦の様子は知り得ないが、やはり數日を要して落城させ、其包圍軍は直ちに引返して、若田原の合戦に参加した事であらう。

若田原の合戦は、箕輪記其他に依ると次の如く記されてゐる。(次の文は各書に依り多少の出入もあり、又誤りもある故、予の取捨訂正した所もある。)

同廿日、兩軍若田原にて勇戦す。青柳金王忠家二百餘人を卒ひ、内藤修理亮昌豊の備を突き破る。小幡尾張守信定手兵三百餘人にて、青柳が勢を切崩す。白川五郎満勝、下田大膳昌勝二百餘の人数にて、小幡が備を切り崩す。甲州勢の内、三卷勘解由、井伊彌左衛門三百餘人にて、横合より白川、下田の勢を切崩

す。藤井豊後守友忠、同孫藏忠安、高濱六郎業方等手勢五百餘人にて、甲州惣軍中に駈入り、縦横無盡に切崩す。甲州勢人雪崩を打つて散亂す。依て内藤修理亮昌豊下知をなし、悉く軍を安中へ引けば、城兵も亦勞れて箕輪へ引上げたり。

以上の如く此合戦は、他に比してや、詳しく記してはあるが、それが全部ではあるまい。甲州方の諸將中之に表はれてゐるのは、内藤、小幡、三卷、井伊の四將に過ぎないが、此外勝頼、原等和田城を陥しゐれた諸將も参加してゐるし、他の部將も大部分参加してゐた事であらう。長野方では執權の藤井豊後守を初め、同姓孫藏、下田、白川、青柳、高濱等の有力な諸將が奮闘してゐるのを見れば、其他に記録に洩れた者を見越して、恐らく城兵の半數以上が此合戦に参加した事であらう。之を見ても、如何に長野氏が此合戦を重要視し、亦諸將が奮戦したか、察せられやう。

斯くして若田原合戦の第一日は、双方共相當の打撃を受けて各根據地に引揚げた。然し此合戦は長野方としては、甲州軍が他に有力な敵が現はれて、自己防衛上軍勢を引揚げる必要が起るか、或は箕輪に籠城せねばならぬ悲境に陥る迄、繼續せねばならぬ筈である。従つて戦記には其後の記載はないが、其翌日又は翌々日頃、若田原に於て再び合戦を行つて、遂に武田軍の爲に完全に占領されたか、或は鷹留城等の陥落の爲本城と若田原との連絡を敵に依つて斷られた爲、若田原を斷念し、遂に全軍籠城に決定したのではあるまいか。即ち若田原の合戦は一日限りで終るべき性質の物ではない。

第二十六項 箕輪城の包圍

長野方が必勝を期した若田原の戦局も有利に開展せず、其側面を護る和田、鷹留の二城も陥落した爲、業盛は本城に籠城するの止むを得ない場合となつた。そこで武田方は各所の兵を集めて箕輪城の總攻撃を開始し、積年の失敗を一舉に取り返さうとした。

信玄の箕輪城攻撃の時の陣取りは明かでないが、長野記に依れば、上郊村生原カミサト（箕輪城の東南東二十餘町

の所にあるに陣取りした様である。之に依ると、信玄の旗本の左右に那波無理助、城伊庵、市川梅印等が陣し、小幡信定は遊軍として別に陣してゐた。大手即ち中内出方面には飯富虎昌、山縣昌景、馬場信房、小宮山昌友等が陣を布き、搦手方面には武田勝頼を將として之に原加賀守を介添とし、内藤昌豊、原隼人正、淺利義胤等をして攻撃せしめた。又一方小山田信有、穴山信良、土屋直村、諸星豊後、曾根政清等の諸將は大戸、三ノ倉、其他の諸城を降して参加し、其部署は不明であるが。或は箕輪城の西方、白川の對岸ではあるまいか。

此日の合戦は、戦記類に依れば、搦手の大將勝頼の部將淺利義胤が、城の北方を迂回して船尾山麓に陣營を設けた。城内からは藤井豊後守の部下二百餘人が之を衝き、更に下田、高橋、梶山等の援助の下に、淺利の兵を破り。また其輜重を焼いた。内藤昌豊來つて淺利を援ひ、城中からも田口業祐、金剛家綱、大久保成家、山田茂方、八木原爲範等出撃し、奮戦數刻の後、兩軍退いた。戦記に於ける記載はこれ限りである。又こゝに注意すべきは、今迄の戦記は勿論現代人の當城に關する論文中にも、箕輪總攻撃と此船尾山麓の合戦とを同日なりとし、即日花落した事にしてゐる。之は今迄の戦記類が此説を記してあつた爲、記録に忠實な人々が又此説に従ふのも當然であるかも知れない。然し當城が僅か一日で落城する事は、今迄の籠城の經驗もあり、武田の攻城法も充分に體驗してゐる故、それに對する防禦も充分注意して行はれた事と考へる。又城の規模、構造等を見ても、守城の諸將の顔振れを見ても、たやすく陥落するとは考へられない。例へば前記の如く、船尾山麓の淺利内藤勢と合戦數刻に及んでゐる大久保、高橋、梶山等が、其日の初めに大手筋で山縣馬場等の攻城軍と奮戦し、藤井豊後守も椿山方面で轉戦し終に戦死してゐる。籠城の各部將が一日の内、度々其受持口を變更するが如き事は有り得べからざる所である。従つて今迄の戦記中一日分に記載しある所は少くとも其間に一日以上の時の経過がなければならぬ。従つて今迄の戦記には、船尾山麓に於ける淺利對藤井の合戦の外は、記載洩れとなつたと考ふべきである。又この時藤井豊後守がかなり遠方まで出撃してゐる所を見ると、他の搦手、大手方面に於ても、武田軍の包圍が餘り進捗せずに、防禦軍は何れも城外で

戦つた物と思はれる、城の東南々方十餘町の地に内出の地名の残つてゐるのは、大手筋に向つた山縣馬場等の陣を城内から襲撃した爲に、打出の地名が残つたのではあるまいか。

長野記に「晴信忽ち備を收め、山縣を第一軍とし、馬場之に次ぎ、山田(小山田か或は小宮山か)を三陣となし、進で城に迫る」とあるのは、打出の陣を引拂ひ、大手口の攻撃に當り部隊の編成を攻撃に便利な様に變更し、山縣、馬場、小宮山()の順に進んだ事を示すものであらう。戦記には山縣軍と矢島久左衛門外城内軍との、大手門外に於ける激戦が記してある。其次の條によれば、激戦數刻の後、主將業盛の前に藤井豊後守が來り、味方の敗戦と手兵の過半が討死し、落城の迫つた事を告げ、土肥大膳、清水玄蕃等も又搦手の外郭の陥つた事を報告してゐる。そこで主將以下訣別の杯を傾け、各々必死を期して敵に向つた。藤井豊後守は手勢を卒ひて出撃し、椿山を占領して之に據つてゐる勝頼を襲ひ、勝頼と組討したが、補將原加賀守勝頼に應援して豊後守を討取つた。土肥、清水も小宮山と戦ひ、主將業盛も城南に牙旗を建て信玄の旗本と相對した。城内からは原田、花房、道寺、櫻井等が信玄の左陣を衝き、赤石、神尾等は右陣、矢島、上泉伊勢守等は信玄の旗本を攻撃した。馬場信房は主將業盛を狙ひ、互に激戦あつて後、城内に退いた。業盛は本丸に入つて最後の酒宴をなし、家臣の防ぎ矢を射てゐる内に、御前曲輪にある持佛堂に入つて自刃した。防ぎ矢してゐた將士も之に習つて自刃した。其外城外に在つて防戦してゐた將士は、城陥つて後それ／＼浪人した。

此時自刃した人々は、下田大膳、白川勝滿、青柳忠家、鷲坂長信、高濱業方、清水玄蕃等を初めとして、七十餘騎に及んだ。浪人組は上泉伊勢守、神尾圖書等を初めとして多數あつて、其内甲州方に召し抱へられ箕輪城代内藤修理助昌豊の旗下に屬した者が二百餘騎に及んでゐる。業盛の婦人は逃れたといひ、又信玄に捕へられたとも傳へられてゐる。又業盛の一人當年二歳の龜壽丸は、藤井孫藏忠安、青柳忠勝の二人が護り吾妻方面へ落ち行き、其子孫繼續すとも云ひ、又然らずとも云ふ。鷹留城主長野業通、弟業固等は逃れて、祖先の遺業の恢復に努めたが、業通は志を得ずして歿し、業固は武田氏を狙つて志を遂げない内に武田氏亡

び其の子孫下仁田に歸つて居住したと傳へられてゐる。

箕輪落城の翌日、信玄は元總社の蒼海城を陥し、石倉城を降して歸國したと傳へられてゐる。箕輪攻城中に於ける蒼海城、石倉砦、厩橋城等の動靜は、戦記に依て知る事は出来ないが、全然無關心である筈はない。又之と重縁の關係にあつて、武田氏とは常に敵味方の位置にある白井城も之を傍觀してゐたであらうか。居城の位置から云へば、當然白井城に屬すと思はれる神尾圖書などが、箕輪城に入つて奮戦してゐる所を見ると、幾分援兵も送つた物ではあるまいかと考へる。蒼海城も箕輪から來て攻撃し、其日の午後には落城し、續いて石倉城をも陥しゐれた様であるが、之も戦記傳説類の不備の爲てはあるまいか。蒼海城は戦國時代の城としては、其規模に比し、他の同じ位の城に比較して、著しく繩張りが幼稚である。然し繩張りの幼稚な事はそのまゝ、容易に落城する城といふ意味ではない。方郭並列式とも稱すべき物で、各郭間の救援、出撃等に非常に不便であるが、其代り敵の侵入に對しても不便が多い。堀を埋めて突入せぬ限り、仲々數時間に陥ぬれる事の出来る城でない。石倉城は後に馬場信房が繩張りを改めた。其他長野系、長尾系の城に就ては軍記に記してないが、此時落城したと看做すべき物がない事もない。

第二十七項 箕輪城攻守策戰概要

前項には専ら戦記類に依て攻城、防戦の状態を略説したが、之を現在の遺跡から推測すれば如何であらうか。巻頭の附圖及第三章以下の文に依て見る通り、堅固な此城にも北方に弱點が一個處あつた。西方は白川と其斷崖で防ぎ、尙ほ城山との中間に帶曲輪(井伊氏時代の大手筋)があつて、西と南方に兵を出すに便してゐる。南方は正面が椿名沼で、其周圍も深田であつたらうと思はれる。従つて西は白川との中間の帶曲輪から續く廣小路丘陵及び、東は椿山と沼地との中間は單獨兵の外、通過が不可能である。従つて大手筋の攻撃軍に取つては、椿山と廣小路丘との占領が最も必要である。因つて長野氏は前者には砦を設け、數條の腰曲輪に依て城内との交通及び防禦に便してゐる。又後者に對しては、丘陵南端の要地に、箕輪四家の筆頭下田大膳

の屋敷を構へてゐる現在其子孫下田恭介氏の宅地。又此丘は白川方面には約三十間を距てて二條の堀切りを造つて、河原に出られる様にしてある。其内・北の堀切りは「人切り通し」と呼び曲尺形をなし、南の物は「馬切り通し」と云ひ川岸に直角に眞直に堀である。之等は白川への通路で、見通しを防ぐため曲尺形に曲折するのが普通であるが、南の一つは乗馬隊の通交に便する爲に、直線形とした物であり、何れも主要目的の外丘陵の堀切りの代役をも兼ねる物である。東方は白川に代るべき大河斷崖はないが、城山の下に堀を廻らして帶曲輪を造り、其外に天然の二條の川を少しく加工して防禦線とし、更に東明屋の北方即ち搦手口の東北に、石上寺を初め數個の寺院を配してあるのは、戦時に出丸に代用する考へてあつたと思はれる。北方のみは地形上、最も防備薄弱の所であるが故に、玉置山及び稻荷曲輪を堅固にし、更に新曲輪の堀を城山から遠く掘つて防禦してゐる。

故に攻撃軍の取るべき策戰は、南方は廣小路の丘陵と椿山砦を第一に占領し、此方面及び搦手方面からの攻撃に依て、城兵の大部分を牽制し、同時に北方からは新曲輪を占領し更に出來得る限りの強襲に依て玉木山の占領を企てねばならぬ。玉木山は堅固ではあるが、それへの應援は稻荷曲輪から出來るのみである故、新曲輪から稻荷曲輪を攻撃しながら強襲すれば、不可能でもあるまい。玉木山は牙城からは孤立してゐるが城内の最高所である故、鐵砲の掩護の下に稻荷曲輪を占領する事も困難ではあるまい。次は之等から通伸曲輪及び御前曲輪に矢鐵砲を射掛け、其掩護の下に空濠内から突入し、一方稻荷曲輪から搦手口(二丸外)を攻撃するのが順當であらう。大手方面からは北面程簡單には城内に侵入し得ない。然し以上は、箕輪城の繩張りを充分研究して後の計劃であつて、當時武田氏にどの程度迄、當城の繩張りが知られてゐたかは問題である。武田方に傳はつた敵國の城砦中、本縣の物は石倉城、倉ヶ野城、鷹留城、鷹巢城、板鼻城、後閑城等であつて、武田氏の手になつたと思はれる箕輪城の圖は、不幸にして予の所藏中にならぬ故、如何なる程度迄調査したかは判然しない、何れ武田氏の事故、落城迄に數年間苦心した箕輪城の繩張りに就て、相當の研究した事であらうが、本丸、御前曲輪、二ノ丸、或は通伸曲輪から藏屋敷、鍛冶曲輪間の繩張りは、恐らく充

分に理解出来なかつたであらう。それ等は實測して地圖に表せば、餘り複雑とも思はれないが、實地に就て見れば地形に廣狹、高低が著しく、一巡にして其要領を得る事は、恐らく何人にも不可能であらう。此點では予が從來調査した數百ヶ處の城址中、五指を屈する位著しい物である。(本丸と御前曲輪との中間の通路を土橋として北側に設け、其外側に兩郭に共通な上巾の廣い土居を設けた事は、其主な目的は兩郭共通に土居上から、下の稻荷曲輪や腰曲輪を掃射し得る爲ではあるが、其他に之を^{カサシイ}カサシイ土居を外方に設けて内側の様子を見えない様にする事)として用ひ、土居内が如何なる繩張りとなつてゐるかを、城外から豫測し得ない様にする爲であらう。

従つて先に記した様な攻城方法は、如何に武田方が攻城に秀でてゐても、其點に氣付いて初めから此方針で計畫を立てたといふ事は考へられないし、其様な行動を取らなかつたからとて、武田軍を貶すのも無理である。然し長野方では當城の長所弱點共によく理解してゐる故、武田軍が上記の如く、或は之と類似の計畫の下に攻むる物と假定して、防禦を行つた事と考へられる。如何に城内の繩張りを知らぬ者も、城外の地形から察して、北方の新曲輪(戦記類に云ふ外郭)方面に全力を注いで之が奪取を計り、大手方面では廣小路丘陵と椿山砦に、強襲を行つた事は推測出来やう。戦記に勝頼が椿山に牙旗を建てたといふのは、之を占領して攻城の根據地を造り、搦手口の攻撃に便した物であらう。

次に落城の時の戦記中疑はしい事は、終りが非常に簡単に片付いてゐる事である。此種の記事の正確を、戦記類に要求するのは無理であるが、此城は外郭や椿山が陥つたからとて、直ちに自害せねばならぬ事もない。當城の外郭は已に繩張りの項に記した様に、一種の捨曲輪であつて、取られぬに越した事はないが、之を占領されても防戦の方法如何に依つては、反つて敵に多大の損害を與へる物である。又椿山を奪取される事は、大手及搦手筋の味方の連絡には不便であるが、此點から城内に侵入する事は、非常に困難な様に設計されてゐる。討死に依て兵が少く城地が廣くなれば、南は木俣郭まで引退く事もよからう。又更に二ノ丸前まで退いてもよい。御前曲輪、本丸、二ノ丸、通仲曲輪、藏屋敷、玉木山、稻荷曲輪だけでも充分防戦出

來る様に、相互間の郭の連絡は出来てゐる。之だけでも充分に防禦が出来、否、此方が敵には廣い足場を與へず、味方は充分に防禦が出来、其防禦價值は餘り減少しない物と考へられる。之だけでも當箕輪城は縣下百餘の平城、平山城に比べて、防戦堅固な點に於て屈指の物と稱する事が出来やう。此點を注意して戦記を読まれたならば、多少變つた考へも得られやうと思ふ。

結 尾

以上章を分つ事六、二十七項に亘つて記した所は、予の觀察した箕輪城及び箕輪戦記である。從來の説と非常に異つてゐる事は予自身も認める所である。此稿の起草に當つて執つた予の態度は、城郭の部に於ては遺跡の調査を第一とした。之を土臺として築城術變遷の事實を經とし、當時の戦術を緯とし、之に從來の記録類を以て彩色を附けた。従つて從來の戦記録は全然之を無視した場合もあり、之に依つた所もある、其取捨は古代兵學上の常識に依つた考へである。然し實地調査も全般に渡つては不完全であり、記録の蒐集も勿論不充分である。従つて取捨撰擇を誤り獨斷に陥つた所がないとは斷言出来ない。

然し翻つて考へれば、箕輪落城に關する戦記類は、多少の出入はあつても大同小異で、何れも書名は異つても類似の一二の書物から轉寫された物であらう。しかもそれ等の原本が、或は甲州流兵法を説明する爲に都合のよい部分を加へたり、長野氏の最後を悲壯ならしめる爲に、華々しい記事ばかりを拔萃したり、色々の記事が交雜したり、色々の事が行はれて今日に至つたのであらう。而して以上の取捨は必ずしも惡意があつて行はれたのでなく、時には長野氏に非常な好意を以て行はれた事と思ふ。然し其結果は長野氏に取つては所謂最負の引倒しといふ事になつて不利益な事がかなりある。それらは全部復原する事は、到底現在に於ては出来ない事ではあるが、出来る限り此點を補ふべく苦心はしたつもりである。

從來の戦記は箕輪落城を悲壯ではあるが、然し簡単に片付けてゐる。長野記、箕輪軍記等の記事と以上の予の記事とを比較すれば、轉戦の範圍、交戦の日數等に著しい相異のある事を認める事が出来やう。そして

如何に長野氏が防戦、攻撃に秀でゝゐたか、武田軍が之が爲に如何に永年苦心したかは、予の小稿に依つて理解出来やうと思ふ。

予は各種戦記を忠實に熟讀し、記事の連絡なき部分は切り離し、之等を四圍の状況、合戦攻城の定跡的方法に依て推論し補綴し、終始一貫した記載を爲したいと考へた。其試みは不幸にして、豫期の成績を收むる事は出来なかつた。然し此小稿に於て、箕輪城が如何なる變遷を経て擴張されたか。他と比べて誇りとすべき價値は如何なる所にあるか、長野氏の對外攻防禦戦は如何なる組織の下に行はれたか。如何にして滅亡したか。それ等に就て、從來の如く記録にのみ據らない調査の結果の大體は記し了つたと信ずる。

(追記)

永祿六年二月箕輪落城に關する合戦には、殆んど日附を記入してない。之は予の考へては信玄の餘地峠越えから落城迄に要した日數と、戦記に記された日數とが著しく異つてゐる爲、他に確實な文書の發見なき限り戦記に依つて其日を決定する事が全然不可能な爲である。當時引卒した武田の軍兵は、二萬五千といひ三萬と傳へられてゐるが、上杉謙信と川中島に雌雄を決する場合にも斯かる大軍は動かし得なかつたのを見れば、其軍兵は殆んど甲州在住の者のみで、一萬を過ぎる事はなかつたのではあるまいか。當時小幡信定の手兵はどの位であるか判然せぬが、恐らく百騎位の物であらう。それに信玄が前年(永祿五年末)甲州へ引揚げの時、五十騎乃至百騎を援兵として殘し、萬一長野方の攻撃に備へたであらうから、それを合しても約二百騎即ち千數百人に過ぎなかつたであらう。従つて諸處轉戦の間に其位の人數は討死又は負傷し、箕輪城總攻撃の時は恐らく一萬人足らずであつたらう。之に對して箕輪籠城の兵は籠城前に多少の負傷、討死はあるが鷹留城、後閑城其他から參加した兵も幾分ある故、其前年と比較して著しい差がなかつたと見るべきであらう。永祿三年正月の箕輪城内に於ける軍評定着到帳に依れば、普通の騎馬武者四百八十三騎で、他に數騎乃至數十騎の手勢を卒ゆる大身の砦主格の者及び之に準ずる者が百四十一人と記されてゐる。之を一騎六人と見做

せば前者は二千八百九十八人となる。後者は平均五騎の手勢を有する者と見做し、且つそれ等が五人の率を有する物とすれば、武士が八百四十六騎となり、卒を入れて五千七十六人となる。合計七千九百七十四人、約八千人となる。之が永祿三年正月の軍評定の時の着到人數である。一書に業政を千騎の大將と記してあるが、之で見ると七千人位かと思はれる。業盛の代になつて少しく減少しても五千位の兵は有してゐたであらう。又箕輪城位の規模となれば、千や二千人では守り得ない故、少くとも四千人位はあつたであらう。堅城に依つて決死の兵が防戦すれば、其倍數位の包圍軍があつても大いに苦心を要した事と思はれる。

次に武田勢一萬人が甲州を出發してから、落城迄の日程を考ふるに、十數日は費してゐると考へられる。其内譯は、甲州から餘地峠を越て南牧岩迄三日、小幡城迄一日、小幡城内軍評定及び諸將の手配に一日、松井田落城が四日、之が參加して若田原合戦に二日、箕輪城包圍と城外の合戦二日、陥落迄二日都合十五日を要した事になる。此數字は全く予の想像に過ぎない物であるが故に、落城迄に要した日數を十數日と概算に止めておく。落城が戦記類に傳ふる様に、二月二十二日であるとするれば、甲州出發が二月八日前後、小幡城に入つたのが十二日頃となる。一書に新堀城攻撃が十二日夜と記してあるが、之を基礎として日程を算出する事も危険であらう。要するに陥落迄の日數は不明であるが、戦記の如く短時日に落城した物とは考へられない。

(昭和三年七月十八日)

箕輪城考(畢)

箕輪城址と先史時代

箕輪城址は榛名山の尾崎に突出した高臺で、西南には白川の流れを帯び、三方は見晴して、背後には榛名山が巍然として控えて居る。誠に形勝の地であるとは言ふまでも無いが、大古時代の人類も矢張り斯う云ふ形勝の地を擇んで居住を定めたので、特に高臺を唯一のものとして居たのである。

此の事實から箕輪城の築造されるズット以前、即ち石器時代から此の高臺には人類が居住して居たとを證せらるゝのである。吾徒は現在二ノ丸址の畑地から石斧並に繩紋土器片を拾得したのであるが、土地の人も拾得した人がいくらかあると云ふとである。法峯寺の裏山でも發見したとがあり、椿山の邊でも採收した人もあると聞いて居る。要するに先史時代の遺跡としては勿論、原史時代としても尙ほ進んで調査研究すべき興味豊かなる土地であると思ふ。(覺堂)

長野記

一
 潔水清儀平

長野伊豫守石上業尙は其先、在原業平より出づ、業平の第五男左衛門太夫業重、上野國司に任ぜられ、來て吾妻郡長野の原に住す、因て以て氏とす。業重の孫業國に至り、石上姓を賜はる、業國十六世の孫業康、又上野國司に任ぜられ、來て群馬郡濱川に住し、世々官職を襲ぐ。

業尙は業康三十一世の孫にして、山内管領上杉顯定に仕へ、其執事となり、功績亦多し、顯定は房顯の子にして憲顯七世の孫なり。

是より先き、鎌倉の主、足利持氏、室町將軍の旨に背く、顯定の祖父憲實之を諫む、持氏怒て顯定を殺さんとす、顯定遁て長野郡平井に據る、持氏來り圍む、憲實急を室町に告ぐ、室町乃ち兵を發し、憲實を將として持氏を討たしむ。

持氏敗れて永安寺に蟄し和を請ふ、憲實爲めに死を宥さんことを請ふ、將軍義教聽さず、持氏終に自殺す、憲實乃ち君を弑するの名を負はんことを恐れ、持氏の影前に自殺せんとす、從者の爲めに刀を奪はれ果さず、髪を剃り國清寺に退く。子憲忠を召し力士を伏せて待ち殺す。

弟房顯立つ、義教既に薨じて義政其弟政知を遣はし房顯及扇谷定正に命じ成氏を討しむ、政知到れば房顯既に卒す。是に於て顯定軍に従ひ、定正と共に政知を奉じて、成氏を古河に攻む、千葉、小山、結城、宇都宮の諸族、成氏に羽翼す、十一歳にして陥り和す、此軍業尙功多し、因て上野四郡を賜ふ。

顯定平井に在て八州を管領し、威亦た盛なり、定正相模の大場にあり、其臣太田道灌、才略あり恩威を播

こす、顯定の將士背て定正に歸する者多し、顯定之を憂ふ。業尙策を獻じ反間を縱て、道灌材武にして士志を得たり、遂に定正の下たらずと云はしむ、定正恐れて道灌を召し、浴を命じて槍士をして之を浴室に殺さしむ、顯定大に喜び、定正を撃たんとす、業尙諫て曰く、曩に道灌を殺さしむるも臣深く之を悔ゆ、支族を截つは自ら家を弱むるなりと、顯定聽かず、兵を帥ゐて長享元年相模に入る、定正援を成氏の子政氏に請て防ぐ、我が軍利あらずして歸る。

二年伊勢長氏我を攻めんと欲す、定正を勸め共に來て上野に入る、我が軍復た利あらず、是より戰陣虚歲なし。

是に於て業尙其居城濱川は、守戰に便ならざるを察し、嶮を撰て榛名山の尾崎なる室田に城き、遷りて之を鷹留と稱す、後又た箕輪に城き徙りて自ら老し、鷹留を長子方業に讓る。

文龜三年二月二十日業尙薨す、方業も亦た次で卒す、次子信業立つ、信業勇武にして弓を善くす、父に繼て上杉家の執事となり、伊豫守と稱し、憲業と改む。

初め顯定の弟房能越後にあり、其臣長尾爲景之を補佐す、後に隙あり相戦ひ房能再溝に敗死す、永正六年顯定、子憲總と共に爲景を討して、以て其の仇を復せんと欲す、憲業先鋒たり、撃て爲景を走らす、因て越後を徇ふ。

七年爲景其將高梨攝津守と來て憲總を椎屋に攻む、顯定來り援て長森に戰死す、我が軍利あらずして歸る、憲業大に士木を起し、箕輪、鷹留を増築し、長子業氏三河守を鷹留に置き、次子業政信濃守を箕輪に居らしむ、又た吾妻郡猿ヶ京の故城を補ひ、自ら老して此に居る猿ヶ京或は大笹と云ふ已にして業氏病て薨す、因て其子業通繼て鷹留に居る、是に於て支城の政多くは業政より出づ、業政才略諸將に冠たり。

此の時、上杉憲總既に薨じて、子憲政管領たり、憲政初め心を政に留め、業政の材武を愛し、上野の旗頭を命じ、手づから金廳と良治來國行の刀とを賜ふ、業政の威名近國に聞ゆ。

幾許も無く憲政漸く驕惰なり、閩中に溺れて事を見ず、嬖臣菅野大膳、上原兵庫事を専らにし、政漸く亂

る、業政病て箕輪に蟄し居たるも、仄かに之を聽き、強て病を起し厩橋に赴き、女婿長尾謙忠と計り、俱に平井に至り謁を請ふ、兩嬖相謀り憲政に説て婦女を深閨に匿し、力めて節儉を装ひ、以て業政、謙忠を引く、二將並び進んで曰く、近年關東大に亂れ群雄争ひ起る、而して其俊傑なるは、相模に氏康あり、甲斐に晴信あり、越後に謙信あり、駿河に氏親あり、皆其志天下にあらざるはなし、君其間にありて武備漸く緩ぶ、盍ぞ速に計を定めざる、憲政曰く、皆新たに興るの小家なり、何ぞ意とするに足らん。業政曰く然らず、猛獸も一小蝸に命を奪ばれ、強將も一小婦の爲に國を危うす、君は八州の主にして、今其二州を北條氏に蠶食せらるゝものは何ぞや、氏康且つ懼るべし、況んや智勇なる彼の謙信、晴信の如きをや、兩雄の未だ兵を我に加へざるは、彼れ其境相接し連年兵結んで解けず、未だ他に向ふに違あらざる故なり、即今急なるは氏康なり、然りと雖も君の患ひは外敵にあらず蕭牆の内にありと辭色頗る勵し、憲政遽かに起て内に入る。

業政、謙忠、涙を掩ふて退き、之を長尾意玄に謀る意玄曰く、曩に本間近江、井俣左近、卒長となつて功あり、近年管内鹿を殺すを禁ず、菅野、上原、禁を犯せども吏敢て咎めず、本間、井俣之を獵す、吏告て邑を收め、蟄居せしむ、此二士を遣はして外、敵情を探らしめ、而して内に嬖臣を逐は、如何、業政曰く、善し、是に於て意玄竊かに二氏を召し計を授け、往て北條氏に仕へ、以て敵情を諜せしむ。

二士居る事二歳、歸りて意玄に告げて曰く、臣等氏康の人となりを見るに深沈にして其胸中測る可らず、剛なるが如く柔なるが如く、禮節ありて威嚴あり、其士を用ゆる賢愚老少皆其器に適す、閑暇あれば書を讀み或は刀槍を學び、以て年少を誘獎す、故に人々奮て爲めに死を致さんことを願ふ、我が上杉氏の將士、欺を通ずる者多しと、意玄之を憲政に告ぐ、憲政恐れて之を兩嬖に謀る、兩嬖曰く、早雲は伊勢乞兒なり、今川氏の力を借りて伊豆を取る、氏康は其微賤の子孫にあらずや、而して歌詠を好み頑童を親みて武事を知らず、獨り根來法師のみ用ふるに足れるのみ、我を以て彼に比すれば、將士の多きこと彼に三倍す、且つ關東の豪傑、我が威徳に服すると久し、管領一たび駕を出せば北條氏は忽ち馬蹄の塵たらんと、憲政大に喜て曰く、意玄予を誑かせりと、遊戯宴樂初めの如し。

諸將士憲政に見えて、往て氏康を征せんことを勸む、憲政既に駕を命じ、而して寵妃に暫時の別れを惜み、或は糧食の乏しさに遇ひ、或は敵の強剛を聞きて恐怖し、軍を止むると再三、關東の人はより猶豫する事を稱して管領出軍と云ふ。遂に親政を止めて扇ヶ谷と和し、北條氏に備ふ。

天文十三年、今川氏親使を使はし憲政と小田原を狭撃せんことを請ふ、憲政諾し業政を召して告ぐ、業政諫めて曰く、氏康は智將なり、猥りに彼と兵端を開くと勿れ、且つ彼我相比するに糧食孰れか足り、將士孰れか練れる、將た軍卒孰れか多き、皆我が及はざる所なり、假令我の彼れに優れりとするも、彼は其勢ひ日々に盛なり、我は其威衰ふるのみ、夫れ物は盛に進むときは爲す事毎に福となり、衰に向ふときは計皆謬りて禍となる、願くば君今川氏の約に隨ふ勿れと、憲政曰く既に諾せり、業政曰く、若し諾せば一將を堺に出して敢て戦ふと勿れと、憲政聽かず、業政頻りに諫て止まず、憲政曰く、予が心已に定まる、汝武人の家に生れて戦を恐る、乎、汝既に毫したり、予は汝と共にせず、汝速かに邑に還れと。

業政涙を掩て退き、人に謂て曰く、山内家の衰頹此戦にあり、其滅亡五年を出でずと、時に氏親進んで駿河の長窪を圍む、氏康即ち北條綱成に命じて河越を守り、以て憲政を防かしめ、親ら長窪に向ふ。

綱成は勇將なり、其旗黄色にして八幡の二字を大書して號とす、當時黄八幡の威名八州に聞ゆ。

十四年憲政扇ヶ谷朝定と大軍を率ゐて河越に到り城を圍むと數重、意に必ず略取するを期す、我兵戦を挑めども綱成固守して出でず。

諜者歸り報じて曰く、氏康援を古河の城主足利晴氏に請ふと、憲政諸將と議す、意玄曰く、晴氏來らば臣請ふ之に當らん、謙忠曰く、待て戦かはんよりは寧ろ進で其備へざるを撃つに如かず、臣請ふ往て撃たん、業政太田資正と坐を隣す、因て資正に私語す、資正領づき即ち曰く、待て戦ふも往きて撃つも同く士卒を勞せしむるのみ、宜しく使を遣はし招ひて以て我が軍に加ふべしと、諸將皆之を善とす、乃ち使を遣はしたるも晴氏依違して之に答へず。

資正乃ち才智の能く辯説するものを撰び、難波田彈正、小野因幡の兩士を得て再び之を遣す、兩士往きて

晴氏に説て曰く、伊豆、相模は公の嘗て領する所にして既に早雲の爲に蠶食せられ、遂に武藏、下總に及び公をして今日の窮蹙に至らしむるは其志八州にあり、而して今日公を尊ぶものは、公の兵を借りて上杉氏を亡さんと欲するなり、彼れ今日上杉氏を亡さば、明日必ず公に迫らん、今河越陥らんとして未だ陥らざるものは關東の將士兩端を抱て其心定らざるを以てり、公一たび大旗を進めて陣に臨まば、衆心一定して河越を拔んと必せり、河越拔けば勢に乗じて小田原を滅し、公を鎌倉に復し、兩上杉首を駢べて相仕ふと昔日の如けん、願くば公之を計れと、晴氏曰く善し、即ち衆を盡して河越に来る。

憲政、朝定大に喜び、晴氏を迎へて戦を議し、敵の糧道を絶つ、氏康遙かに之を聞きて曰く、吾れ往て援はん、只恐くは河越の城兵我れを待たずして死せんことを、誰か往て吾が計を告る者ぞ、綱成の弟辨千代甫めて十八歳、進み請て曰く、願くば臣に命ぜよ、假令敵の爲に捕はれ、拷問に罹り死すとも、臣敢て言はずと氏康曰く、往て乃ちの兄に語れ、長窪の圍既に解けたり、吾到り援ふて兩上杉を破らんと三月を出でず、決して出て戦ふと勿れ、城を守りて我が克つを待てと。

辨千代往て上杉氏の號を着け、單騎我が陣前を過ぐ諸軍之を見て我號なるを以て敢て咎むるものなし。薄暮城門に款を納る、城兵其面を視て片扉を開き之を容る、氏康諸將を殘して國の四疆を守らしめ、僅かに五千人を帥て親ら來り援ふ、我が軍晴氏、朝定の兵を合せて十萬と稱す、氏康心を計り我に驕らしめ、其虚を撃たんと欲し、伴つて和を請ふ、諸將皆曰く、我が十萬草木悉く兵なり、氏康の兵を見るに僅かに四五千に過ぎず、氏康我が大軍を見て遽かに恐怖するか、今之を聽すは計にあらず、撃て之を殲すに如かず、業政曰く、氏康性敏捷なり、我が大軍を知らずして來る者にあらず、又た彼れが如き大膽、何ぞ遽かに大軍を見て怖れんや、察するに彼れ和を請ふものは伴りならん、之に對するに兩策あり、其一は我も亦た伴り聽して三公少しく軍を退け、臣と資正とに命じて夜急に彼れが歸路を襲はしめ、火の起るを見れば諸軍之を返撃せよ、是れ伴りを以て伴りを撃つものなり。其二は彼の請に乗じて和を聽し軍を旋さば、一卒を損せずして事平ぎ且つ請者は彼にあり、聽すものは我にあり、恩威自ら我に歸せん、意玄も亦曰く、君今駕を此に致すものは

今川氏の請に由らずや、而も氏親約を破て既に敵と和す、君獨り何ぞ勞するや、和を聽るして軍を旋すに如かずと。

然るに菅野、上原、常に諸將の功を忌み、其建議を妨げんと欲し、並び謂ひて曰く、氏康寡兵を以て目前にあり、之を撃たざるは掌中の物を棄るに似たり、何ぞ我が大軍を以て一撃に粉塵せざると。時に斥候還り報じて曰く、氏康出て入間川の南岸に陣すと、憲政乃ち兵を進め之を河北に迎へしむ、氏康我が軍の出るのを望み見て戦はずして走る、我が軍大いに笑ふ、氏康旬餘を経て又來る、我が軍進て流れを濟らんとす、氏康復た走る、我が軍箠を敲て笑い罵りて曰く、伊勢の丐兒走れり、何ぞ是の如く怯弱なる、寧ろ出てざるに如かずと。

諸將議して曰く、豎子怯弱なり、復た出ると能はず若し出るとも復た走らんのみ、相顧ること勿れ、菅野上原、得々然として曰く、臣初より彼が怯きを知るのみと、憲政諸將を顧みて曰く、汝何ぞ進まずして退くや、明日予れ親ら出て豎子を虜にせん。

業政默然として退き、書を憲政に上りて曰く、臣今日唇を掩て退席するものは、陣中敵の間諜あらんとを恐るればなり。臣聞く恐怖驚愕して走る隊は其氣同じからずして隊伍必ず亂ると、氏康戦はずして走ると再三、其隊伍未だ嘗て亂れず、其伴りて弱を示すこと知るべし、請ふ君彼れが計中に陥ること勿れと。

業政即ち自ら己の營に歸り、士卒を誡めて曰く、甲を釋くこと勿れ、鞍を卸すこと勿れ、又暮に逮て兵卒に命じて代る／＼營の四周に燎を照らし、將士に更る／＼之を巡視せしめ、其警戒最も嚴なり。

是に於て氏康も亦た謀者に問ふ、謀者曰く、敵中皆言ふ、豎子復出るも走らんのみ、相顧ること勿れと、氏康曰く可なり、夜に至り兵を勸し、親ら之に謂つて曰く、吾れ聞く戦の道は、衆も必ず勝とせず、寡も必ず敗るゝにあらず、只士氣の和せると和せざるとにあり、吾屢々上杉氏と戦ふに、我が一人は敵の十人に當る、今我れ寡なりと雖も力彼に倍す、勝敗は今夜に決せん、汝將士之を力めよと。

其兵士に各々白布を鎧上に掩ひ結ばしめ約して曰く、白からざる者は敵なり乃ち斬れ、斬るとも首を執て

猶豫すること勿れ、首を取る間には尙ほ數人を斬るべしと、令畢り兵を帥て出づ。

北條氏の斥候馳せ返り、途に氏康に遇ひ報じて曰く獨り憲政の遊軍山溪に據るもの四周に燎して兵士皆甲を裝ふ、又左翼後尾の兩隊も亦た聊か警戒あり、餘は皆暗然として眠れりと。氏康嘆じて曰く、山溪に據るとも遊軍にあらず長野なり、後尾は長尾、左翼は太田ならん。此の良將ありて憲政之を使ふこと能はず、是れ我が幸なりと。乃ち將士を顧みて曰く、汝等吾が嚮ふ所に從へと、直に朝定の營を衝く、朝定の軍大いに亂れ、全く爲す所を知らず敗れ潰ゆ、朝定虜にせらる。

憲政其の喧噪を聞き初めて事の急なるを覺り出て戦ふ、隊伍整はず、敵の軍群り來る、憲政防ぐこと能はず殆んど危し。業政來り救て曰く、白を見は乃ち斬れと業政の長子吉業年甫めて十六、馳て戦鬪の中を貫き憲政を救ふ、憲政間を得て走る、吉業縦横奮撃、槍柄血の爲に滑か也、捨て、刀を執りて戦ふ、左手四槍を被る、業政の老臣藤井政安馳來り扶けて退かしむ、天漸く微明なり、氏康軍を收めて退く、難波田彈正、小野因幡等皆戦死し、我が軍死傷多く、八州の豪傑即夜敵に降る者實に百二十人、時に天文十五年四月なり。

本間近江單騎止り戦ふ、軀幹甚だ偉なり、九燈を竿頭に聯ね釣し以て背號となす曰く、吾れ之を以て我が君の暗愚を照さんと、敵將大道寺駿河と戦ひ之に九燈を授けて曰く、吾復た用ゆることなし、子用ひて號となし善く北條公に仕へよと、乃ち自刃す。大道寺九燈を號旗とするは此に始まる。

翌日憲政の廳下敵の寡きを聞きて大に悔ひ、其疲れに乗じて撃んと欲し、再び河越に到れば氏康既に軍を收めて松山城に入る。

諸將議して或は松山を攻んと云ひ、或は河越城を圍まんと云ひ、議論決せず、北條綱成、城内より討て出で、自ら士卒に先だちて呼て曰く、勝たり、我が軍驚き見て曰く、黄八幡なりと、前軍潰走して中途之に支へられ進むこと能はず、業政之を見て部下を率ゐて綱成を追ふ、及ばず、綱成も亦松山城に入る。

茲に至て憲政令して圍を解て歸る、晴氏も亦た古河に歸る、吉業歸て箕輪にあること三旬、創大に劇しく終に死す。

是歳春、武田勝信、信州戸石城を攻め、其將甘利昌連、横田忠量敗死して大に潰ゆ、別將山本晴幸、謀を以て漸く之を破り、兵大いに疲かる、憲政其弊に乗ぜんとす、業政亦た諫む、憲政叱して曰く、曩に河越の役、汝が徒らに敵の美を語て兵士の勇を毀ふ、爾來言を吐くこと勿れ、業政猶争ふ、憲政遂に聽かず。九月二萬騎を帥ゐて碓氷嶺を越ゆ、晴信其將板垣信方、眞田幸隆及び幸隆の子昌幸を先鋒とし、親ら之れに繼ぐ、憲政復た大いに敗れ歸り、勢逾々微なり。

舊記に云、天文十四年武州河越攻めの時、業政退去の旨を管領に諫れども承引なく、遂に敗軍に及びける然れども業政の軍踏み止り、敗軍を集め防ぎ矢を射る、嫡子吉業は槍を執て防ぎ、憲政を落しまいらす、吉業も手創を負ひ本國箕輪に歸り、後終に空しくなれり、夫れより管領の威光は漸く衰へ、東上州は北條氏に屬す、管領未だ前敗に懲りず、甲州攻めを議す、業政頻りに諫むれども聽かず、天文十五年九月二十九日、平井出陣、信州と上州との境なる笛吹嶺に對陣せしかども、遂に敗れて威光愈々衰ふと。

二

天文十九年三月晴信、吾妻郡に入る。業政の父憲業迎へ戦て利あらず、流矢に傷つきて退く。時に氏康、今川氏親の子義基と婚し、義基に就て晴信に請て曰く、氏康、上杉氏と戦ひ未だ志を得ず、復た軍を出して上野を取らんと欲す、願くば君先んずると勿れ、晴信之を聽す。

二十年三月、氏康其將北條綱成、同善九郎、福島孫市、同伊賀守を先隊とし、六州の兵を帥ひ、自ら中軍にあり、來て平井を攻めんとす。憲政聞て急に兵を募る。長野業政、太田三樂、小幡重貞、同景定、安中忠政、長尾謙忠、曾我兵庫、白倉宗純、金井小源太、猪股左近、小幡景宗、依田幸成、後閑長門守、和田兵衛膳備中守、桐生直綱、山上氏秀、大胡信綱、横瀬成繁其外長野、澁川、足利、佐野、赤井等悉く平井城に集り、兵を出して氏康を半途に防ぐ、我が軍利あらずして城に入る。

次日本庄某、三田某來る、復た一戦して城に入る。城中人多くして糧食乏し、業政憤りて上原兵庫を責む兵庫之を菅野大膳が罪とし、菅野は上原が怠りとす、業政益々憤て二人を斬らんとす、諸將之を救けて席を

避けしめんとす、二人震栗して起つと能はず、僅に葡萄して退く。

敵軍四面戦を挑めども我が軍固く守り出でず、既にして敵退ぞき去り、諸將も亦散じ歸る。是より諸將北條に内通する者多く、上杉氏益々窮す。上原、菅野、曾我、三田、本庄等、憲政に勸めて遁れ去らしむ、憲政妻子を捨て越後に走る。

八月氏康復た來り攻む、城兵或は遁れ、或は出て降り、敢て防ぐものなし。老臣小幡三河守を欺き降を勸む、三河守、憲政の子龍若丸を奉じて出て降る。氏康、其將神尾次郎左衛門に命じ、龍若丸を小田原一色の松原に斬る。憲政の庶子憲勝走り去る。

憲政の平井城に在るや京より柳霧、松霧、桃霧、櫻霧、藤霧と云へる五人の白拍子來り、其外板井家の美人、志津家の美人來り居り、鄭聲野に充つ。是れ武人武を忘れ、終に自滅を招く所以なり。

氏康、北條綱成を牙城に置き、其外郭を毀て吾妻に入る。憲業舊創發して防ぐと能はず、終に自殺す、時に十一月七日なり。

業政、箕輪にありて諸將を指揮す、其幕下には國峰城主小幡尾張守重貞、同圖書頭景定、木部城主木部宮内少輔、大戸城主大戸三河守幼名和田城主和田新兵衛尉朝常幼名倉賀野城主倉賀野淡路守熙時、厩橋城主長尾小平治景連入道謙忠、安中城主安中左近太夫忠成、岡本城主岡本兵部少輔持村、皆業政の女婿也、鷹留城主長野新十郎左衛門業道、館林城主長尾新次郎景孝、其他鷺坂、道寺、白川、寺尾、高濱、梶山、吉田等なり。

晴信遙かに之を聞き、將士を集めて議して曰く、東上州既に北條に屬し、西上州猶動かざるものは長野信濃守が力なり、然れども上杉憲政既に謙信に因るときは、西上州も亦謙信に歸せんと必せり、寧ろ信濃守を説き降し、以て我が領に加ふるに如かず、皆曰く然りと。乃ち其將眞田幸隆を遣はし降を勸む、業政辭して曰く、武田公の信意亦た善し、然れども吾は上杉の臣なり、主家の敗滅を見て安んぞ二君に仕へんや、卿善く吾が爲に之を公に辭せよと、幸隆之を晴信に報ず。

晴信復た幸隆をして來り謂はしめて曰く、君の山内公に仕ふるや盡せりと謂ふべし、然るに山内公は君を棄て越後に赴く、君誰が爲に義を守るぞ、今西上州の北條に屬せざるものは君の力なり、謙信故管領の譲りを得んとて、口實を以て君を移さば、君如何にして之を防ぐぞ、寧ろ武田公と力を協せ、北條を滅して山内公の仇を復せば如何と、業政曰く、吾之を思はざるに非ず、常に之を近臣に語りて流涕するのみ、然れども我に聊か糧食矢丸のあるあり、之を盡くして山内公を復すること能はずば、是れ我が微運なり、他の力を藉りて主君の仇を復するは吾恥づる所なり、況んや義を捨て二君に仕ふるをや、吾れ武田氏に降ると能はずと幸隆心に業政の義勇を感じて強て勤むると能はず、歸りて之を晴信に報ず。

晴信曰く好し、降らずば予れ往て之を討せん、何ぞ徒らに謙信に翼を與へんと。弘治三年四月、其子義信をして一萬三千に將とし、來り攻めしむ、業政、諸客將を遣はして、之を鬻尾に迎へしむ、我が軍利あらず敵軍も亦退き歸る。

永祿元年、晴信親ら來り攻む、業政會々吾妻山中にあり、間道より進み、夜其營を襲ふて大に之を破る、次日晴信來りて我が陣に對す、業政徐々に退き、敵をして下風に居らしめ、火を放て山野を燒く、敵進むと能はず、遂に輜重を燒耗して去る、業政追はずして歸る。

十月謙信來りて平井城を復し、使を遣はし山内家の舊臣に報じて曰く、山内公、予を以て子とし、記號及び管領職を讓る、予れ是を以て父の爲めに來りて平井を復す、爾來卿等、山内公に仕ふる所を以て予に仕へよと、業政笑て曰く、越後公の功勞最も多し、後日面接之を賀せん、其臣事する所に至りては吾未だ能はずと、使者返り報ず、謙信大に怒り、兵を以て來り攻めんとす、太田資正既に降りて謙信の傍にあり、曰く、業政は頑固の老叟なり、常に是の如し、然れども性善良にして敢て惡むべき者にあらず、明日必ず來り賀せん、何ぞ太旗を勞するに足らん、若し來らずば臣往て蹂躪せんと。

次日果して業政平井に往かんとす、老臣等之を諫む、業政曰く、死せば共に謙信と死せん、汝等憂ふると勿れ、乃ち往て謙信に謁す、謙信曰く、卿昨日使者に向て予に臣事すると能はずと言ひしは實か、業政曰く

然り臣聞く、父其の家を子に讓らんとするときは、先づ其老臣に謀り、而して後に天子或は將軍に告て其許を得ると、況んや管領職の如きは、室町將軍の任ずる所にあらずや、父も私に讓ると能はず、子も私に受くると能はず、只京師の命に因るのみ、然りと雖も山内家恢復の一事に至つては、臣亦た公の指揮に隨て先鋒せんと、謙信笑て曰く、資正の言の如く、卿は固陋の頑夫なりと、因て酒を命ず、宴畢りて業政辭し歸る。謙信軍を越後に還す。

業政、其女婿安中忠成に命じ、安中の砦を増築して城と爲さしむ。永祿二年春、土木未だ全からず、武田晴信、其將飯富虎昌をして之を攻めしめ、親ら和田城に向はんとす、忠成急を箕輪に告ぐ、業政親ら往て援けんと欲し、出て烏川を渡る、斥候返り途に報じて曰く、晴信來て八幡村に陣すと、業政進みて晴信と對し山を負て陣す、晴信敢て動かさず、對陣すると半日、時に疎雨臻る、業政軍を倒せにして尾より退き、山陰に入り漸く見えず、敵軍皆以爲らく雨を避て退くと、晴信疑て曰く、彼の山中に雨を避くべき城砦のあるを聞かずと、乃ち斥候を出す、斥候未だ還らず、我が軍轉じて急に敵の後陣を撃つ、晴信陣を改め整へんと欲すれども及ばず、業政縱横に蹂躪し、急に兵を擧て退く、晴信漸く軍を整れば、業政既に安中より里見村に至り、雉郷砦に入れば日已に晩る。

次日晴信雉郷砦を圍み、意に必ず業政を獲んと期す、兵士堡を攀て内に入れば、業政は曉に出て既に鷹留城に入る、只だ僞旗のみ風に翻つて復た一人を見ず、晴信嘆じて曰く、業政は何ぞ是の如く速かなる、乃ち山縣景昌をして來りて鷹留を攻めしむ、業政乃ち城主長野業道に計を授て箕輪に歸る。

業道、弓手を壁上に列し頻りに射る、敵軍互に人の後背に潜れて矢を避く、時に利根木内藏介、矢島久右衛門、三百騎を率ひ山路を廻り、急に敵の背に出て奮戦す、敵兵大いに潰え退く、我が兵之を追て烏川に逮ばんとす、矢島急に令して曰く、背水の敵は追ふべからずと、乃ち引て城に入り、爾來固く守て出ず。

晴信、其將内藤昌豊、馬場信房をして箕輪を攻めしむ、我が將藤井安政(豊後守)花形民部等五百餘人、城南の小丘に出づ、信房之を見て五百騎と共に追ひ來る、藤井、花形兵を引て退く。信房軍を返せば、藤井、

花形復た出づ。此の如くする事數回、敵敢て追はず、疲れて丘山に息ふ。白川五郎、青柳治部、遽に林を出てて蹂躪す、敵軍大に亂る、我軍退いて城に入る、信房の兵之を恥て柵下に蟻集す、城兵一矢をも放たず、敵兵柵を毀て堡に登らんとす、壁上急に木石を轉じ放つ敵軍死傷多し、内藤昌豊城門に迫り、高濱業昌、下田昌勝突出して戦ひ、白川、青柳繼で出づ、共に利あらずして退く、内藤、馬場、相謂つて曰く、長く陣中に日を送るは客軍の厭ふ所なりと、乃ち晴信に請ふて軍を旋す。

三

三年晴信復た來りて上野に入る、其將板垣信方、跡部勝資、長坂長閑、小宮山昌行等をして箕輪を攻めしむ。時方さに正月にして春雪連營を壓し、寒氣刺すが如し、業政兵士に酒を與へ煖を取らしめて曰く、煖なりや、皆曰く既に煖を覺ふ、曰く煖を得ば出て戦へと、衆皆突出して敵營を衝く、敵兵飢寒して鬪ふと能はず、跡部か軍潰え走る、小宮山か軍其の後にあり、令して鎗鋒を我に傾け悉く雪上に鋸坐せしむ、我が軍進むと能はず、板垣が軍我を横撃す、双軍雪を蹴て戦ふ、我が軍利あらずして退く、爾來固く守つて出でず、時に安中父子、和田朝常等、敵の糧道を絶ち、敵將に退かんとす、我が兵追撃して大に之を高濱に破る。

長野業政病篤し、嗣子氏業を近づけ謂て曰く、乃父年來矢石を侵すものは、只だ故の管領を平井に復せんと欲してのみ、然るに志遂げずして終に今日を以て一世の期とす、豈に憾みなからんや、汝乃父の志を繼ぎ、四方の敵を退け、以て再び山内家を興せ、且つ謙信は義に背く者にあらず、汝隔心あると勿れ、天運若し助けずば只死あるのみ、敢て敵に降て家名を辱かしむると勿れと、又た藤井政安を顧みて曰く、汝右京進(氏業)を襁褓の裡に養育し、爾來十七年、未だ嘗て補佐を怠らず、軍陣亦た勉む、而れども吾未だ厚く報ずると能はず、常に心にありと雖も兵禍餘暇なく、民疲弊して國用足らず、因て時を移せり、爾後吾に代りて勉めよと、言畢りて瞑す、時に永祿三年甲申六月廿二日也、實相院殿一清長純大居士と諡し、室田町長年寺の後山に葬る。業政在世の日、城外の富岡村に一寺を創立す、即ち長年寺と同じく曹洞宗なり、業政老て長純と號す、因て此寺を長純寺と稱す。爾來男子は長年寺に葬り、婦女は悉く長純寺に葬ると成れり。

舊記に云ふ、上杉憲政、越後へ落ちける後は、孤立する者は只武州岩槻の太田美濃守入道三樂齋と、上州箕輪の長野信濃守業政のみなり、爰に甲州の家臣眞田彈正幸隆、武田晴信の内意を受け、業政へ甲州歸伏の旨を申し遣はすと雖も、業政義を守り承引なく、晴信然らば箕輪を攻め滅すべしとて、度々來り攻められけれども、城落ちざりければ、業政の老夫今に死すべし、死して後に攻め取れとぞ云れける。

相州兵亂記に云、長野業政は近國無双の良將也と、信なる哉、其君臣相信ずると膠漆の如し、寡兵孤城を守りて四隣の大敵敢て來り侵すと能はず、曾て上杉憲政に仕ふるや、忠言以て諫を献じ、忠戰以て功を建つ、而して憲政暗愚にして用ふると能はず、遂に國を捐て走る、猶之を復せんと欲し矢石を侵して怠らず死して後止む、嘗て美人を薦むる者あり、業政之を卻けて曰く、吾は國家を以て美人を買ふ者にあらず、吾をして彼の楚襄の覆轍を踏ましめんと欲するか、乃ち女を上る者を逐ふ。又憲政敗走の後、其嘗て愛玩せし所の夜光の玉と、尺餘の蜀光錦とを以て業政に上る者あり、業政納れずして曰く、一顆の珠玉は國家の暗を照すと能はず、一尺の錦繡は一士の甲に充つべからず、一民の寒さを禦ぐに足らず、吾之を何とかせんと、又た嗣子に與ふる書に云ふ、文所以麟崇徳、武所以虎隆威、信所以君均恩、義所以臣高忠、儉所以國永榮と、嗚呼其言其行、國君の龜鑑たるに耻ぢず。

○吹寄集に云、開基長善庵主、數多男子ある中に、長子方業は、左衛門太夫と稱す、若きより病身にして室田に居られしが、後に濱川にて病死あり。次を信業とし、武畧兄に勝ざるを以て家名を繼ぎ、箕輪の城主たり、此君を長宗庵主と稱へ、男子四人あり、長を三河守業氏とし、室田にて卒し、次を信濃守業政とし、長純庵主と稱へ傳りぬ。

○落葉集に云、業尙二子あり、方業、憲業とす、次男憲業武畧兄に勝れるを以て家名を繼ぎ、憲業四子あり長子三河守業氏、室田に支城を築きて自ら居り、鷹留城と名づく、次子信濃守業政、箕輪に住み是を長純寺の開基と稱し侍りぬ。

○正友雜記に云、伊豫守業尙は、管領顯定に仕へ、長尾氏に繼て執事と成り、濱川の城主なりしが、濱川よ

ろしからずして鷹留に城き、又箕輪に隠居城を築き、親から箕輪に住み、濱川、鷹留には子供を配り置かれ文龜二年逝去の折、人々惜みけり。

○吹寄集に云、信業は精兵にして弓の達人なり、矢來三尺二寸を射れりと云ふ。管領憲總公の御意に叶ひ、諱の一字を賜り憲業と改められ、後に流矢の創にて天文二十年の霜月、吾妻にて逝去せられしとぞ。

○村老雜記の内、箕輪物語に云、箕輪城は初め業尙公居られし時は、城内狭くありしが、憲業の代になり、大永年中元の城を本丸として増築あり、實に大普請にて、諸方の村より人夫集り、四年目に成就せり。人夫ども集りて、先の君の代と異り、今の君の代に至りて備役十倍せりなど怨み語りしとぞ。

○正友雜記に云、業政は管領家無二の忠臣にて、憲政も初めの程は能く政務を勉められ、業政を執事とし、萬事相談あり、上州の旗頭を命じ、來國行の大刀と金の采配を手づから賜はりたり、云々。

四

永祿三年、長野右京進氏業、始めて立つ、時に年十七、老臣藤井豊後守政安之を補佐す。然れども四方強敵多きを以て、父の喪を發せず、亦た家臣の賀を受けず、

九月、謙信再び小田原を攻め、大に氏康を城外に破り、捷を越後に報じ、憲政を迎へて厩橋の牙城に置き自ら外郭に居る。

四年正月、八州の將士集り、正を賀す、氏業も亦た到り賀す、然れども父の喪を告げず、病あるを以て代つて賀を受くと稱す。

二月、謙信七十六將を部署して進んで相模に入る、其兵十五萬と稱す、太田資正、小幡憲重先鋒たり、長尾意玄、長野氏業之に繼ぐ、氏康敢て出でず、謙信進んで鎌倉に入る。

五月、晴信其子義信と共に二萬騎に將として先づ鷹留城を攻む、城主業通其弟業固に命じて之を秋間山に迎へ撃たしむ、業固利あらずして退き雉郷砦を守る敵亦た砦を攻むると急なり、業固守ると能はず棄て鷹留に歸る、敵烏川に迫る、我が將矢島久右衛門、利根木昌安、神尾圖書弓手を指揮して頻りに亂射す、敵敢て

前まず、箕輪の援兵上泉伊勢、花形民部、高橋隼人等來り集る、水を隔て對陣す、晴信路を異にして高濱白岩の砦を陥れて曰く、長野の軍揮はざると、此の如し、信濃守の死せしと知るべし、好し進んで箕輪を取れと、敵軍遂に前む、箕輪には氏業曩に謙信に隨て鎌倉に入る、老臣藤井政安之を守る、次日晴信牙軍を移さんとす、城兵長尾某、二百騎と共に出て之に攝す、晴信之を拂はんとすれば退き、捐れば又躡す、内藤昌豊怒て長尾を追ふと二十町、遽かに伏兵起て神尾傳内、安藤九郎等林間より内藤が横を撃つ、内藤が兵驚き潰え、僅に殘兵を纏めて退く、時に和田城の援兵高濱砦を復し、保土田の援兵白岩を復し、安中、松井田も亦た援兵を送りて敵の後背に出づ、敵軍退きて去る、藤井政安、沿途の土民に敵の輜重を焼かしむ、敵大に狼狽す、夜來雨急なり、咫尺を分たず、我が將青柳今正、下田政勝、八木原爲範、道寺左近等三百餘人、枚を啣んで之を追ひ、敵營に近き急に銃を發つ、晴信豫め此の夜襲あるを知りて、敢て驚かず、我が兵亦た伏あらんことを恐れて退く、晴信糧を失ひ且つ我が多寡を知らず、曉間烏川を渡り、碓氷郡八幡村に退き、自ら大聖寺の佛宇に入りて雨を避け、遂に甲斐に還る。

謙信此時鎌倉にあり、鶴岡祠に詣づ、氏業及び氏業の姉婿忍城主成田長康從ふ、謙信性狷獫なり、長康の祖曾て源頼義に姻戚たり、乃て長康馬を祠前に立て頼義の故事と稱す、謙信從使に命じ、長康を馬より曳き下し、拳を以て撃たしむ、長康憤り告げずして去り、北條氏に降り、謙信の武藏府に來るを待て尾撃す、謙信輜重を捨て走る、氏業も謙信の暴なるを視て心に快らず、是より謙信を助くる志全く絶ゆ、然れども面に見はさず、比時關東の將士、多くは謙信に叛いて氏康に降る、謙信厩橋に入り、憲政を奉じて越後に還る、氏康進て厩橋を取る。

厩橋城は惣社の長尾氏の屬城なり、氏康又た白井を陥れて歸る。

六月、氏康來て又白井を攻む、謙信報を得て即ち發し、間道より進み、前鋒を以て曉間北條氏の前軍を撃つ、戰酣なる此に牙軍を以て親ら氏康の本營に當り、後を以て轉じて敵の背を撃つ、氏康敗れ退く、謙信白井、厩橋を復して越後に歸る、是より先き、氏康屢々北甘樂郡を侵せども小幡の一族固守して未だ志を得ず

仍て反間を以て小幡尾張守重定が、降書を偽作して、以て小幡圖書介景定を誘はんとす、景定は多胡郡長根の城主なり、重定は甘樂郡國峰の城主なり、秋畑山に支城を築き居る、之を峰の城と稱す、重定、景定並に長野業政の女婿なり、景定其降書を見て、其の偽書なることを知らず、驚いて謙信に獻ず、謙信大いに怒る時に重定は草津温泉に浴し、未だ之を知らず、謙信往て國峰と峰の兩城を攻て一夜に陥る、景定に命じて峰の城を守らしむ。

重定急變を聞き、大に驚きしも歸ることを得ず、使を馳せて氏業に宛を訴ふ、謙信途に使を捕へて重定の在る所を問ふ、使者言はずして死す、氏業猶未だ知らず、重定待つ事三日、遂に氏業の救はざるを怨み妻を去らんと欲す、妻曰く、妾良人に仕ふること茲に七年、未だ嘗て貞節を失はず、嘗て聞く婦人は良人の家を以て己れの家とす、故に嫁を以て歸と呼ぶと、何ぞ阿兄の爲に良人に貳心あらん、況んや二人の幼兒あるをや、今良人に放たれて往て何くにか歸せん、只死あるのみと涙を含て刀を執る、重定即ち刀を奪ひ遂に妻子を挈げて浴地を出づ。

氏業聞て大に驚き、叛狀の實否を糾さんと欲し、索れども得ず、重定途に於て從者を去る、老僕秋田某強て隨ふ、長兒を携へ幼兒を懷き、雨に歩み霜に寐ね、箕笠に面を匿し、芒鞋竹杖、萍流すること數月にして甲州に到り、武田晴信に悲哀を告ぐ、晴信長野野氏を窺ふこと久し、因て大に喜び信州日向の地五十貫を賜ふ。

十一月、重定を先導として余地嶺信濃の佐久郡余地村より上野の甘樂郡熊倉村に通ずるの地なりを踰へ、南牧に營す、因て問て曰く、圖書介は如何なる性質なるや、重定對へて曰く、勇ありと雖も頓かに事に應ずるの才なし、晴信曰く善し、乃ち内藤政豊に計を授け、重定が僕秋田某を郷導とし、山路より向はしめ、又重定を前鋒とし、甘利晴吉之に次ぎ板垣信形を後軍として追手へ向はしめ、日夕城下に達す、城兵出で防ぐ、已に薄暮に及べども兵解けず、景定益々兵を出だす、板垣數百の提燈を後軍に點ず、忽ち内藤が軍之に應じて城後の山頭數千の炬火輝き、鬨聲峰壑を動かし、敵軍群り入る、城兵防かずして驚き潰え散ず、景定城を棄て走る、是に於て晴信命じて重定を復し、上總介と命じ偏諱を與へて信定と稱せしむ、時に晴信も國峰を下だして城内にあり

(時に長年寺第七代受連和尚到て寺内禁暴(制)の書を誦ひ一紙の印章を得て歸る)

晴信、内藤昌豊、原隼人を以て小幡信定に謂はして曰く、卿我れに因て以來功なきに非ず、然れども卿長野右京之進は我が敵たるを知て、今猶其姉を妻とするは我に貳心あるかと、信定曰く、是れ何と謂ふことぞ臣武田公の恩を被ること少からず、豈敢て貳心あらんや、只常に粉骨碎身以て萬分に報せんと念ふのみ然りと雖も臣舊地を出るの日、荆妻を去らんと欲す、荆妻刀を執て死せんとす、因て已むことを得ず挈えて出てたり、而して萍流の間、笠篋杖鞋、雨に歩し霜に寝て、辛々苦々を避けず、臣聞く貧時の妻は去る可からずと如何ぞ之を去るべけん、是臣が忍びざる所なり、若し命に隨て去らば、復た刀に死せんか、或は道路に飢死せんこと必せりと、二將還り報ず、晴信其の情を察し肯て強ひず、後に信定の女を、弟信繁の子左馬介信豊に妻はす。

五年冬、晴信復た余地嶺を踰へて甘樂郡に入る、其軍五萬と稱す、小幡信定之を迎へて先導す、此時小幡國峰、峰の城は信定之を領し、軍を分て庭谷、天引、白倉、富岡、一の宮、岡本、上野等を下し、前軍綠野郡に入り、平井を下し、藤岡を圍む、城主依田下總守幸成、城を以て降る、幸成は長野三河守の女婿なり、後に武田氏の爲に二股城を守りて徳川氏に抗す、幸成死して子信蕃は徳川氏に仕ふ、木部城も陥り城主宮内少輔自殺す、宮内少輔は長野信濃守の女婿なり、婦人長野氏道路に萍流し、終に榛名山に到り湖水に投じて死す。

晴信此時多胡郡千か原に營し愛馬電駒を失ふ、大に惜み、爲に延徳寺に供養し、米錢を丐兒に賑す、晴信親から臨み和尚に問ふて曰く宗派は何なるぞ、對て曰く眞言なり、曰く何に因て千部の名起れるや、曰く古來經堂に千部の藏經あるを以て名く、曰く開基は誰れぞ、曰く創立主及び年月日詳かならずと、晴信營に還り、新井喜惣治、中村三五右衛門を遣はして、寺僧に糧を借らんことを請ふ、和尚曰く、今日糧に乏しきを知らば、昨日何ぞ丐兒を賑はすや、兵將は是の如く算に疎き者か、我れ人に貸すべき糧なしと。

使者更に金を以て糶買を請ふ、和尙許さずして曰く、武田公は人を殺して患へず、却て馬の死を悲しむ、吾れ是の如き人に一粒を與ふると能はずと。使者返り報ず、晴信怒て寺を焼き、其寶器銅屋等を掠め去る、今猶甲府城壁を表飾せるは此の銅屋なりと云ふ、後に永祿九丙寅年三月十八日、其の馬を埋めたる地に馬頭觀世音を安置し堂を建つ、今猶其地を電駒澤と稱す。

五

是に於て晴信、其將飯富虎昌、淺利義胤、小宮山昌友、城伊庵、市川梅印を以て松井田城を攻む、又甘利晴吉、原虎胤、小幡信定、曾根政清等を以て安中城を攻む、我將士箕輪に會し議す、下田昌勝曰く、安中松井田は我が戍なり、往て援はざるべからず、牛尾平八郎曰く、今日の勢や故の信濃守の時と異なり、此寡兵を分て彼兩城を援ふ、何の補ひかある、寧ろ衆を盡して此城を守り、一卒をも亡ざるを要す、昌勝曰く諸城相應援して我が西上州を守るは先君の遺誡にあらずや、今日唇の亡ぶるを救はずんば明日齒の寒さを如何と、平八郎曰く、此寡兵を以て彼の練熟の大軍に當らば士卒を失はんと必せり、寡の上に寡を加へば明日何を以て此城を守らん、白河五郎、神尾傳内曰く、援はざるは義にあらず、何の敵を恐るゝとか之あらん、平八郎曰く、彼兩城猶十餘日は保つべし、徐かに之を計るも可なりと、議決せざると三日、神尾、白河の兩將自ら手兵を以て往く、矢島、青柳の二將も亦之を聞き繼て往く、先軍後閑の砦に到る、後閑の斥候歸り報じて曰く、兩城既に陥り、越前守氏は安中名は忠政は松井田城を枕に戦死す、左近大夫忠政の子忠成は安中城を以て敵に降ると、我が四將悔恨止むなし、乃ち後閑砦に入る、時に兩城の敗兵來り加りて曰く、城主援兵を待つと三日遂に來らざるを憤り、或は死し或は降ると、四將切齒して曰く、彼の牛尾の怯豎子に誤れりと、時に兩城の敵合して後閑砦を圍む、遂に保つと能はず砦陥り、砦主後閑長門降る、援軍の四將大に士卒を失ひ箕輪に歸る。敵將内藤昌豊、山縣昌景、馬場信房、那波無理介、小幡信定等、夜秋間山を越へ烏川に臨み陣し、流れを挾て鷹留城に對す、時に正月元日なり、新春を賀する鶯語も、馬蹄の響に驚き、街村の老少も椒杯辛盤を捨て遁る。

城主長野業通二弟あり、業固、業勝とす、業勝出て卒長新井某に命じ、弓隊を岸上に列し防がしむ、敵將無理介先づ流れを亂して來る、我弓手亂射すと雖も無理介衆を勵まし單騎槍を揮て岸上に登る、我が將利根木昌安、遙に見て呼て曰く、新たに渡るの敵鋒は緩めて防ぐべし、新井令して隊を改め建んと欲すれども、敵兵群り渡り我が軍に混じ彼我分かつべからず、新井恐て敵中に戦ひ、鞋斃れて自ら其紐を踏み躓き倒る、敵兵奄ひ撃つ、新井左手に塵を執り、右手に刀を抜て之を拂ひ、起て跣足に敵六騎を斬り、終に死す、利根木馳せ來り、二百騎と奮戦して敵卒を川に擠とし長年寺に入る、無理介追來て寺を圍む、小幡信定も又水を渡り來り、業固城樓より臨み見て、敵に降りたる貳た心の尾張奴を斬れと、二百騎を卒めて突出す、重定戦はずして走る、業固之を捐て業勝と軍を合して長年寺の敵を撃つ、業勝初めより無理介を狙ふ、敵の隊を貫き馳せ刀を揮ひ、或は戦ひ或は斬り殆んど無理介に近く、敵軍蟻集して業勝が馬を圍む、業勝十九騎を斬り馬斃れ、鎧上の箭箠の如し、鎧堅なりと雖も流血淋漓、終に敵中に死す、業勝勉めて戦ひ無理介を追て退く、次日、城中箕輪の援軍を待て出でず、日午に至り斥候還り報じて曰く、今朝敵の後軍飯富虎昌、小宮山昌友下流を渡り箕輪に向ふと、業通曰く、兩城各々敵を受く、只此城を枕に死せんのみ、將士聞て奮ふ、業固出でんとす、田島時吉請ふて共に出づ、山縣昌景山上にあり、遙に之を見て騎を駢べ馳せ下る、田島時吉急に令し、槍隊に各々其鐵を地に貫き、鋒を傾けて敵を待たしむ、槍間又た銃隊を配賦す、敵騎塵を蹴て來り我が槍鋒に迫れど入る事能はず、我が鋒齊しく縦つ、敵の前驅之を逐て斃れ、後驅狼狽して走る、業通も亦た出て來り、業固を助け逃るを追て進む、内藤馬場が兩軍我を左右より夾撃し、山縣返り戦ひ小幡も亦た來り加はり、我が軍其の中に圍まれて大いに苦闘し、業通業固殆ど危し、富田貞泰、神宮正義長男智則戦死し田島、矢島大いに奮闘し、利根木が軍、來て小幡が後背を撃つ、小幡が軍潰え、業通、業固僅かに身を以て脱するを得たり。

我が軍死傷多し、田島、矢島、利根木の三將、業通兄弟を護して小丘に息ふ、時に後背を顧れば城樓に炎上る、兩將馳せ歸らんとす、一騎來り報じて曰く、男蟹谷眞光、小幡信定と謀を通じ、水路を絶て城樓に

火を放ち遁れ去る、因て火を防ぐに由なしと、業通兄弟切齒して暫時默然たり、相顧るに従者僅に數騎、甲冑破れ刀刃鋸の如く、日已に夕陽なり、敵已に散じて到處死屍の散亂するを見るのみ、下り烏川に飲せんとす、偶々男蟹谷真光が遁れ去るに遇ふ、斬て之を水中に投じ、牙を丘上に建て、敗兵を集めて箕輪に向ふ。舊記に云、武田晴信攻めあぐみ、降將小幡尾張守重定を召し謀を問ふ、重定謂ひけるに城中に男蟹谷真光といふ者候、之に賄は、必ず貳心を生じ候はん云々。又云、長野新十郎左衛門業通、同彈正忠業業固爰を詮度と戦ひけれど續く軍勢も無く、甲も冑も散々に切りなされ、氣力も疲れ、夕陽に及びて敗軍を集め、鷹留城に歸んとすれば、真光が遁れ行くに會し、捕て室田川に切て落せり。(室田川は今の滑川のことなるか) 敵將那波無理介、問道より白岩に出づ、我が箕輪の將安藤九郎、三百騎を署して之を堂坂(堂坂は白岩觀音前か)に防ぐと雖も利あらず、士卒大半を亡ひ、馬斃れ、身數槍を被り流血淋漓たり、自から己れの指を嚙て觀音堂の板壁に血を以て一種の和歌を書しける。

一説に曰く、信玄箕輪城を攻むると前後九年の長きに渉る、然るに業政克く守りて一城をも抜く能はず、依りて或時白岩の觀世音に祈願して曰く、一擧箕輪城を抜かしむれば七堂伽藍を新築し、永代保存料として黄金三千枚を寄進すべしと、誓ひ了つて堂塔を燒き拂ひけりと。其時晴信は素志を得ざりしも後終に箕輪城を陥落せしめしを以て、現今存在せる堂宇を新築し、黄金三百枚を寄進せりと云ふ、時の黄金は一枚の價十兩なりと云ふ。

老の身は何地の土となるとても

君が箕輪に心留むる

歌を詠じて終に奮戦して死す、殘兵堂塔民屋より出て戦ふ、敵兵火を觀音堂に放つ、炎焔一時に上り忽ち灰燼となれり。噫、役の行者の開基にて觀音出現の靈場も終に烏有に歸し了んぬ。現今の堂宇は其後武田氏の再建する所と云ふ。

青柳今正、新波新九郎來り援ふ、安藤は既にして及はず、徒らに堂塔の灰燼を見るのみ、二人大に悔恨し

率ゐる所の卒二百人をして無理介の軍を衝しむ、敵小勢と侮り却て大に敗れ走る、我軍之を追ふ、敵烏川を渡りて逃る、内藤、山縣之を知らず、青木が原に陣す、青柳、新波等轉じて内藤の陣を撃つ、陣潰え山縣來り援ふ、我軍退きて其銳鋒を避く、那波が軍再び來り陣す、我將白川五郎、下田昌勝之を撃ち、敵の別隊三枝某、伊井谷某等四百人、我が背に出づ、我が軍亦利あらずして退く、晴信の男勝頼、其補將原加賀守と共に和田城を攻め、城主新兵衛尉朝常を降し、來て青木が原の陣に合す。

六

晴信亦た一牙營を攻め、佐野を過ぎ

音に聞く佐野の舟橋來て見れば

名のみ流るゝ烏川かな

斯く一首の歌を詠じ來て生原に陣す、急に軍を配し飯富虎昌、山縣昌景、馬場信房、小宮山昌友をして追手に向はしめ、男勝頼に原加賀守を附し搦手の將とし内藤昌豊、原隼人之正、淺利義胤をして其先鋒たらしめ、那波無理介、城伊庵、市川梅印は晴信の左右に陣し、小幡信定は遊軍とし別に陣す。小山田信有、穴山信良、土屋直村、諸星豊後、曾根政清等は、大戸、三ノ倉、倉ヶ野等の諸城を降し、後軍に達し四面皆敵なり。松井田、安中、木部、和田、鷹留は悉く陥り、我に應援する者なく、只孤城を守るのみ。城兵も亦業政在世の日と異なり、或は北條に歸し、或は武田に降り、城内僅に千五百人に過ぎず。

氏業諸將と防禦を議す、神尾圖書曰く、往時は諸城砦の應援ありと雖も、今既に悉く陥り、只だ此の一城を残すのみ、寧ろ固守して使を越後に馳せ、謙信の援を待て戦ふに加かずと、寺尾備前守は曰く、故信濃守業政の在世と異なり、支城悉く陥り、將士或は死し、或は叛き、今此の僅少の殘兵にして、孤城に餘命を惜み、遽に援を他に請ふは、却て世の笑を受けん、寧ろ主君は晴信と牙を合せ、我輩は部軍と奮戦して死せんのみと、藤井政安、赤石豊前並び進て曰く、我先君元より上杉氏に對し忠諫忠戦、身思を焦勞して厭はず、然るに管領愚にして遂に國家を破り、走て他人に因り、却て我先君の忠義なるを臣視せず、今我が幼君誰れ

が爲めに死せん、寧ろ甲斐に降り家を保全するに如すと、満座之を聞て驚愕し相目語して曰く、昨日我が主家の基礎たりし剛勇義直の忠臣、今何ぞ遽に怯夫となるやと、聲涙共に下る者あり。

時に神尾圖書憤然として眼を瞋らせ刀を按して曰く、汝既に先君の遺命を忘れたるか、今敵を見て俄かに怖氣を生じたるか、祿を偷める賊なり、余れ先づ汝が首を斬て、以て後の誠とせんと辭色頗る勵し、氏業急に圖書を制して曰く、汝が姑く怒りを停て予が言を待てと、乃ち起て内に入り、故の信濃守の神牌を奉じて之を座上に置き、親ら拜禮す、藤井、赤石も亦た次て拜禮す、衆其意に達せず。

時に兩士あり、牛尾平八郎を縛し來る、氏業叱して曰く、汝平八郎我が家に臣事し、先君汝に賜ふ處亦た薄からず、然るに汝恩を忘れ、却て國峰の尾張守と謀を合せ、機密を敵に泄らし、遂に我をして今日の不利を致さしむ、實に主を賣る賊なりと、平八郎懼伏して亦た一語なし、氏業手づから之を斬り、刀を收めて衆に謂つて曰く、去年松井田、安中敵を受く、我れ之を援はんとす、而るに此賊奴、頻りに議を拒み、期を延しめ、兩城遂に陥る、是れ汝等の知る所なり、因て予れ人を遣はし其家を探らしむるに、果して敵と應答書三紙を得たり、故に捕へて獄中に繋ぎ、今日稠坐の中に斬るのみ、又豊後(藤井)豊前(赤石)二人、坐上に降を説きしものは、予が命ずる所にして、衆中又た平八郎の如き者あらんとを恐れ、其心底を探りしなり、而るに衆心鐵石の如し、予れ甚だ悦びに禁えずと、満坐再び驚き且つ氏業の明に畏服す。

時に敵將淺川右馬、轉じて船尾山腹に營を設く、藤井政安部下二百人を出して右馬が營を攻む、右馬我が小隊なるを侮り鼓譟して來る、我が軍或は戦ひ、或は退き、敵を林傍に誘ふ、右馬覺りて急に兵を招く、兵聞かずして進む、我が將下田、高橋、梶山等、遽かに林を出て敵の横腹を衝く、藤井の兵亦た殊死して戦ふ時に城上狼烟上り、忽ち船尾山に煙起る、右馬之を顧みて曰く、營焼けたりと、即ち還り救はんとすれども兵結んで解けず、右馬が軍皆心輻重にありて戦ふ心なし、遂に潰亂し、輻重も灰燼となる、是れ藤井が謀策効を收めし也。

偶々内藤信房來り援ふ、我が將田口業祐、大久保成家、金剛家綱、山田茂方、八木原爲範來り加はり奮

戦時を移し、兩軍死傷多し、既にして我が軍退き息ふ。

晴信忽ち備を收め、山縣を第一軍とし、馬場之に次ぎ、山田を三陣となし、進て城に迫る、山縣が部將小菅五郎、兵卒を部署して堡下に蟻附す、城上より大石を放轉し、敵死傷算無し、山縣繼て迫る、城上亦た弓銃を連發す、敵矢丸を竹楯の陰に避く、神名、町田、大久保、矢島、佐野、市川、高橋、白川、梶山等、突出して山縣が隊を衝く、山縣が部下大熊朝秀、三科形幸、廣瀬景房、早川幸憲、猪子才藏、和田嘉助等、皆勇を以て聞ゆ、共に楯を出て闘ふ、才藏奮戦して我が軍を馳せ貫き、城門の柵下に近き、丸の爲に脇を傷き倒る、我が兵争て首を取らんと欲す、三科形幸馳せ來り、才藏を救はんとす、我が兵才藏を捨て形幸に當る廣瀬景房繼て來り、才藏を肩に負ひ退く、我が兵亦た是れを追ふ、景房即ち才藏を其僕に委し、自ら返戦す大熊朝秀も亦た刀を揮て我が軍に入る、我が兵之を獲んと欲して朝秀に迫る者六人、朝秀縦横に馳せ戦ひ、遂に悉く之を斬り去らんとす、奮闘中誤つて背旗を落せしも未だ知らず、我が兵之を執り、高く揚げて曰く汝背旗を欲せば來り闘へと、朝秀顧み始めて己れの背旗なることを知り、其提げたる首を従僕に投じ、再び返戦して背旗を奪ひて去る。

朝秀初め多五郎と稱し、長尾謙信の家臣なり、謙信性猖獗にして人を侮る、朝秀怒て去り、後沙門となり大峯熊野に月詣す、因て自ら氏を大熊と改め、字も又た平藏と改め武田晴信に仕へ山縣が部下にあり、晴信今日の朝秀の勇を賞し、備前守とし輕卒の七十五人を預け、小幡山城守が妹と婚せしめ、旋軍の後に遠州小田の城代に補せしむと云ふ。

我が將矢島久右衛門奮闘して敵軍に混入す、敵の部將八ッ波隼人鐵鎧を揮て矢島に迫る、矢島奪て八ッ波を搏殺し、首を斬て左手に之を提げ、右手に彼の鐵鎧を揮て退く、藤井政安馳せ歸り、氏業の前に跪て曰く我が軍利あらず、死する者半を過ぐ、落城愈々迫ると、土肥大膳、清水玄蕃、亦た還り報じて曰く、搦手の外郭既に陥ると、氏業酒を呼て之に賜ふ、氏業の室上杉氏、銚子を執りて勸む、政安曰く、臣不肖を以て先君の高徳を蒙り、君を襁褓の裡より奉育し、茲に十有九年、懷ふに一夢の如し、今日溝水に飲せんとして水

面に臨み、髭髪の霜色に驚く、老來微功なく恩波の深さを如何ともなし難し、今日の落城、實に臣が罪なり從來未だ膝下を離れずと雖も、臣先づ死して君を黄泉に待たん、君は一戦の後城中に自刃あらんことを希ふ是れ今世の訣別なりと、涙を含て再び杯を傾く、満坐首を垂て敢て仰ぐ者なし。

氏業起て親ら一衣を執り來り、又た近臣に命じて緋緘の甲冑を出さしめ、兩つながら政安に賜り曰く、是れ故の信濃守の着る所なり、先君死するの日、遺言して予れ死する後は、豊後を父とし愛せとのたまへり、今汝此衣を着、此甲冑を着て死せよと、政安拜謝し乃ち之を着て出づ、又大膳、玄蕃に各々一刀を賜ふて曰く、是れ我が家に傳ふる所なり、兩刀孰れが鋭きや之を敵中に試みよと、二人拜舞して出づ、政安は城外に散驅して常に武田父子を狙ふて未だ遇はず、晴信の男勝頼、年甫て十八なり、補將原加賀守は去て城門を攻め、勝頼數百騎を率ゐる牙を椿山に建つ、政安之を見て百數騎と衝き入り、二十一人を斬り、牙邊に轉戦し或は近き或は遠かり、勝頼を誘き出さんとす、勝頼固より勇を恃む、政安が甲冑の美なるを見て、長野の一族ならんと思ひ、單騎馳せ來り、政安を斬らんとす、政安刀を捨て、赤手に勝頼と馬上に相組て共に騎より墜つ、政安乃ち吾右手を捕へて後背に牽き倒す、政安之を見れば加賀守なり、勝頼起て政安を刺す。

土肥大膳、清水玄蕃、並び奮て小宮山が軍を衝く、小宮山が部將林田傳内、大山出雲迎へ闘ふ、出雲は大膳が刀下に斃れ、傳内は玄蕃に殺さる、出雲が部卒槍を執つて大膳に當る大膳其槍を奪ひて之を殺す。

時に城主氏業出て牙旗を城南に建つ、晴信も牙旗を出して遙かに對陣す、我が牙陣より原田左衛門、花房兵庫、道寺久輔、櫻井伊奈介等、出て敵の左陣を衝く、赤石豊前、神尾圖書は晴信が右陣を撃ち、矢鳥久右衛門、上野伊勢は晴信の牙營を衝く、土肥大膳は脇を射られて斃れしかば、矢鳥、上泉之を救はんとすれば晴信の牙軍より城伊庵、弟資吉、刀を揮て出て來る、上泉之を迎へ闘ふ、資吉刀を墜して上泉が刀下に斃る、伊庵怒て弟の仇と呼び上泉に迫る、金剛秀綱、矢鳥と共に伊庵に當る、伊庵轉戦して首級を腰に繞らし佩ること七級、石に踞して槍柄の撓屈せしを延ばして再び戦ふ、矢鳥迎へ戦ひ、伊庵を掃ひ倒す、伊庵が從者矢鳥が槍首を捕へ奪はんとす、矢鳥刀を抜て斬る、遂に伊庵を逸す。

敵將馬場美濃は、我が主將氏業を狙ひ來る、氏業も士卒に先ち縦横奮戦し、從士佐野十郎等、氏業の馬前に戦死する者四百餘人、赤石安範も傷を負て歩すること能はず、自ら咽に刃して死す、此時氏業は手づから二十八騎を斬り、身數槍を負ひ、白纒の甲冑既に紅に染む、矢鳥諫て曰く、大將は敵中に死するを恥づ、何ぞ城中に歸り自刃あらざると、藤井政安の男朝忠、忠康の二人、氏業の兩轡を執り、牽て城に歸る、矢鳥は敵を防いで城外に死す、氏業城中に還り、衆を集め酒を酌み、

春風に梅も櫻も散りはて、

名のみぞ残る箕輪の山里

歌を詠じ、妻子に訣別し、持佛堂に入り、亡父業政の神牌を拜し、自ら腹を切る、朝忠之を介錯す、其俱に殉死する者は藤井朝忠(主馬介)弟忠満(又次郎)藤木某(近江守)白川滿勝(五郎)高濱業方(六郎)鷺坂長信(常陸介)梶山吉方(因幡守)岸信安(出雲守)寺尾某(備前守)下田昌勝(大膳)町田博方(兵庫介)弟某(源八)八木原爲範(伊勢守)子爲永(源太左衛門)青柳今正(治部之丞)道守信方(左近)弟範康(次郎)高橋一乘(隼人正)田島時吉(源六兵衛)利根木昌安(大内藏介)北爪某(周防守)大久保成康(民部)田口業祐(兵庫頭)小澤友信(次郎)兵衛(又八郎)里見某(文右衛門)中根某(半助)中島某(吉右衛門)岡田某(讃岐守)廣木某(佐左衛門)後閑某(金右衛門)森山某(善九郎)新波某(新九郎)花房某(兵右衛門)兵庫男(櫻井某(兵太夫)男某(伊奈之介)原田某(左衛門)木暮某(丹波守)井伊野某(三左衛門)駒形某(伊豆守)高關某(吉右衛門)藤田某(今七)明屋某(三良左衛門)劍崎某(市兵衛)矢鳥某(源之丞、久右衛門男)花形某(清助)神尾某(傳内)長沼某(友藏)安藤某(又十郎)阿保野某(小平治)等六十餘人に及ぶ。實に永祿六年二月廿二日なりとす。(是等殉死者の後裔は今尚箕輪町、久留馬村、車郷村、室田町、里見村、長野村等を始め各處に散在せり)。

氏業一男あり、歳甫て二歳、藤井政安の男忠康(孫藏)青柳清勝(彌左衛門)抱懷して匿れ去る、其死する所を知らず、或は云ふ、子孫繼續すと、上泉伊勢守、金剛秀綱は晋の豫讓、我國の景清たらんことを欲し、

遁て桐生の城主大炊介に因て自ら潜む、或は云ふ、忠康清勝、幼君を補佐し徳川氏に因ると、秀綱、伊勢之を聞て往て隨ひ、天正十年四士幼君を奉じ、家康に隨ひて天目山の役に仇を復すと。(今猶井伊家に同姓二家あり、柳原家に同姓一家あり、恐くは其子孫ならん)

氏業の室上杉氏は、故の扇ヶ谷頼良(定正男)の女なり、妙齡十八、芳顔美態、櫻桃容を耻ぢ、楊柳姿を嫉む、當時美人の聞あり、幼兒の安否を氣遣ひ農家に潜む、晴信聞て之を物色し、金を以て之を購はんとす、人之を告ぐる者あり、獲られて甲斐に到る、晴信納れて妾と爲さんと欲し、人をして説かして曰く、夫人何ぞ慮を謬るや、抑も武田公は東國の大豪にあらずや、今日の勢威故の管領家と雖も對比しがたし、若し公の深室に入らば榮華心の如けん、衆の望むと雖も得がたき所なり、且つ長野氏も既に黄泉の鬼となる、夫人誰れが爲に徒らに苦節を守るぞ、上杉氏曰く、妾聞く忠臣は二君に仕へず貞婦は二夫に見へずと、妾が亡夫右京進(氏業)は、故の山内管領の臣たるを以て武田公屢々降を説くと雖も終に二君に見へずして公の爲に殺さる、妾其の寡婦となり、奚んぞ敢て二夫に見へんや、曩きに箕輪に死すべきを誤て虜へられ爰に到る、豈恨みなからんや、汝妾が爲に之を辭せよと、晴信復た人を以て強て誘はんとす、上杉氏曰く、妾は死して貞を守るを知る、生て身を汚すを知らず、我が長野氏の家訓は、男女を分たず不貞不忠の者を容れず、況んや仇の臣妾たるをや、武田公は之に反して人に不貞不忠を勸めて以て臣妾とするか、若し妾を愛せば幸に一刀を賜へと、使者強ゆること能はずして去る、晴信聞て大いに怒り、終に上杉氏を殺す。

又一説には、晴信氏業の室上杉氏の容色を知り、部下に命じて是れを需め妾たらしめんと欲す、夫人之を知りて民家に隠れ忍ぶ、たま／＼晴信の部下之を知りて迫る、夫人逃れて三の倉村に至り長野原に赴かんと欲す、敵の迫まる急なるや、到底追る能はざるを知り遂に自刃して死す、今尙三の倉村字下郷に長野氏室の墓あり、後世村人此地を稱して限り坂と稱へ長野氏の室の靈を祭れりと。
應留の長野業通は其の身を匿し、終に長野原に至り死す、弟業固は信州に到り、窃かに武田氏を狙ひ、匹夫の姿に身を窶し、次郎左衛門と改稱し、上諏訪に寓し遂に志を得ず、元和三年五月十三日死す、孫利左衛門上野國に歸り、下仁田に住す、末裔今猶遺ると云へり。(完了)

長野業正

館林藩岡谷繁實著
「名將言行録」所載

覺堂曰、本篇・業政の政を特に正を以て充てしは、其の主・上杉憲政の政の字に諱む所あつて然る乎、儒禮にては其の親と其の君の諱名に觸るゝを避くるは通常の儀禮たればなり。

伊豫守憲業の子、信濃守と稱す。上杉憲政に仕へ箕輪城に住す。永祿四年十一月二十二日卒、年七十一。

業正、資性温和、恭謙にして智勇絶倫、能く士民を撫愛し、隣國に交接せり、關東の諸將一旦上杉家の政道を疎み、面々の在所に引籠り、平井へ出仕せざりし輩も、業正に耻て非番當番の怠りを謝し、年始八朔の太刀馬を贈答するに至れり、偏に管領中興の運を聞かんこと遠からずと、人皆相賀するに至れり。

眞田幸隆が父幸義、村上義清と戦ひ討死しければ、幸隆、上田を去て箕輪に來り、業正に依頼せり。幾程もなく、山本晴幸が薦めに依り、武田晴信に仕へんとし、密に箕輪を去らんと欲し、勞る所あればとて出仕を止めて、引籠り我家人にも容易に對面せず業正之を聞き使を以て言はせけるは、今度の御所勞、尋常醫藥の治すべきにあらず、當國甘樂郡の奥餘地の峠を打越

て、良藥を求めらるべし、今日明日の中に思ひ立るべしとて、馬ども多く引立たり。幸隆大に驚きながら去らぬ體にもてなし、御志の程忝なく存候得共、所勞以ての外大事にて、中々出立べうも覺え候はずと答へしかども、業正、御所勞大事の様に承はり候へ共、療治の爲めに一日も早き方こそ然るべけれ、と促がせしかば、幸隆も此上はとて其の曉出立し、下仁田に至れる比、馬ども多く荷を負はせて出來るを見れば、皆我家具なり。其の跡より己が妻や、家僕杯ある限り打續き來れり。是はと怪み問へば、左候殿の立出給ふ跡に續き、長野の老臣二人來て業正の仰せ候とて、斯く出立たせ此文は追及び候はん所にて殿に參らせ候へと申て渡し候なりと言ふ。幸隆披き見れば、甲斐に武田信玄あり、若き人に又有間敷弓執なり。但し箕輪に業正があらん限りは、左右なく碓氷川を越て馬に草飼はんと思ひ給ふべからず、速に本領

に歸り入り給はゞ、隣交を忘れ給ふこと有間敷由杯、細々と書たり。幸隆も業正の心中耻か敷思ひ斯くあらんと兼ねて知りたれば、打明けて語ふべきに、包みしことこそ拙なけれ、と馬を止めて暫時はイめり。然れども引返すべきにあらざれば、夫より甲斐にこそは行きてけり。

天文十五年、上杉幕下の諸將武田晴信が村上義勝と戸石に戦て負け軍せしと云ふことを聞き、武田家を攻亡さんと議したりけるに、諸將皆此議に同じける。業正一人暫く思案して曰く、某情々思案を廻らし候に、當時上杉家は、武備末に成りて弓箭の道を取失ひたるかと存するなり、其故は纒かなる北條氏康、武略賢く數度の合戦に勝利を得て關八州の諸士多くは彼の幕下に屬し、日々に強大に成り、當家は月々に衰微せり、此上は面々力を盡し北條に攻潰されぬ様の謀こそ肝要なるに、何ぞや構はざる武田の家に向て、鉾楯を起し益なき戦を好み給ふは人々の心に野狐の入り代りたるに候はん、武田家に對し軍し給はゞ必ず味方の敗軍ならん故、如何となれば信玄十八歳より以來、數度の戦に一度も敗北の名を聞かず、去る戸石合戦にも多勢討死すと雖も、芝居を去らず首實檢まで致し歸陣せり。

敗北の名を汚すことは義清に在り、敗軍に芝居は踏まへられぬと云ふことは、各の知らるゝ所なり。然るを信玄の負け軍杯と評することは近頃武道不案内の至りなり。是皆戸石の戦に見崩れ裏崩れして甲州の腰抜拂に逢ひたる臆病者共、當國へ狼狽へ來りて惡しく誘るを、各實と心得られ、うか／＼と武田を攻潰さん杯とは思も寄らず、各は味方の戦負て敗走せば、早速信玄の幕下に従はれんことを掌を指すが如し、斯く申す某は子孫は知らず、命のあらん限りは武田の幕下には得こそ參るまじけれ、と罵て席を蹴立て義輪にぞ歸りける一座の人々何れも茫然として暫し言を發する者なかりしが、長野なかりせば、軍は出來ぬものかとて、倉賀野六郎を大將として、見田、上田等の人々二萬三千餘人を率ひ、十月六日武田勢と碓氷峠に戦ひ、大に敗走せり。果して業正の言の如し。同十日信玄甲府に歸陣せし跡に、板垣信形を十二月朔日まで殘し置けり。是は業正のみ働き出でず、殊に大剛にして弓箭功者の侍大將なれば、若し打て出んかとの慮なりといふ。

憲政、佞臣菅野大膳、上原兵庫を用ひ政に非義多し業正之を憂ひ、履々諫むれども聽かず、終に士民の恨み重なりしかば、北條氏康の爲めに平井を追落されて

越後に奔りぬ、去れども業正心を變ぜず義輪に在り、氏康及び武田晴信と取合、八ヶ年に餘り屈せず。晴信、上杉輝虎が越中に向ひし虚に乗じ、義輪城を攻む。業正一族及び上杉譜第の舊臣と共に楯籠る、城は名に負ふ名城なり、籠りし人々は上杉譜第の舊臣にて名を惜む者共なれば、甲軍之が爲めに打負て、手負死人五百餘人に及べり、去れども、味方は一人の討死もなく、其上堀一重も破られず、甲軍毎度の軍に利を失ふ。此上は力攻にせば味方損するのみなり、重ねて謀を以て城を取るべしとて、軍を引て歸れり、其後度々攻來りしかども、業正撃て之を敗れり。

峰の城主小幡尾張守信貞は、業正知音にて上杉譜第の臣なりしが、同姓圖書助と不快起りしより、折々晴信に通ず、業正之を聞き、永祿二年五月、信貞草津温泉へ行きし不在を窺ひ、峰の城を襲ひ取て圖書助を以て城主と爲す。信貞、甲州へ參り晴信に仕ふ。

業正と太田資正のみ、衰弱せし上杉家に仕へて志を變せず、憲政の爲めに力を盡せり。其他の諸將は悉く氏康に服従す、故に二人今時無雙の名將と南海西海にまで響き渡れりとぞ。

眞田幸隆、既に羽尾に退老し、偕業正が舊恩に謝せ

んと欲し、永祿四年羽尾を發す。時に業正今年七十一老病に侵され、平常は煩ひ勝にて容易には人に面會することなく、籠りてのみ居たりしが、一日客あり來るべし、其用意せよと事々敷營ましむ。日比誰かは爰に訪來るべき怪氣なることやと言ひし程なり。偕眞田が參りて候と言へば、業正手を拍ち斯くあるべしと、兼て思ひしことよ、とて頓て對面し昔今の物語をし、偕業正曰く、上杉家の運能くも盡き果て、候ぞや、御身の此義輪に在りし時、申し、この候ひしを用ふる者のなかりし程に、終に武田の謀臣と爲し信濃の國は上杉先祖の國なりしを、伐り取られて候なり。此上野も遅くか早くか人の國なり、業正年積りて七十に餘れり、餘命幾くもなし、同くば他人へ與へんより心知りたる御邊に渡し申さんこと憂が中なる喜びと申べし。但し此義輪の邊より東南に掛けては争ふ人多くて、然も四戦の地なり、容易く守り難く候はんが、抑々此義輪より良に當りて利根郡とて四方峰々立籠て、中に川副の良田あり、吾妻郡に續きたる地なり、之を計略あられ候はゞ、信濃なる本領の藩屏とも申すべきなりと幸隆聞て只今の程何人の所領にやと問ふ、業正聲を低くし、某が養女の夫にて沼田上野介景康と申すなり景

康今年四十一と覺えたり、色に溺る、程の思慮なき者にもあらざりしが、近き頃金子美濃守と曰ふ者の姪なりとかや、筋なき女を召使て夫が腹に出生せし男子を平八郎景義と名付て寵愛する儘に業正の外孫と云、且は嫡子なる景久を打籠めてあるかなきかに爲すは、終には家督と爲す間敷底意と知られたり。斯くては沼田の家亡なんこと遠からずと思はれぬ、業正之を取んと難しとも思はねども、某の齡既に今年に極まりぬ、又我子等の力に及ぶべしとは思も寄らず、偕こそ御邊に避け渡し參らするなれ、夢疑ひ給ふなど懇に勧めたりければ、幸隆色を正し、座を下りて禮を爲し、此年頃疎意なりし怠りを責め給はざるのみならず、却て一大事を托し給ふ、御心の廣さ更に譬ふるに物なし、去らば是より沼田へ打越て方便を運らし、又こそ見參に入らめとて義輪をば立出てにけり。竟に子安房守昌幸が時に至て沼田を取れり、是は幸隆兼ねて業正が教に隨ひ謀を爲し置きしが故なり。

敵に降參すること勿れ、運盡きなば敵に打向て潔く討死せば、我爲めの孝養、何事か之に過ぐべきと、切齒して卒せり。老臣共喪を翌年の秋まで秘すると雖も終に甲州に漏れ開ゆ。晴信大に喜び同六年二月二十二日義輪を攻て之を陥る。去れども手負死人甚だ多し、是業正平生士を養ふの致す所なり。業盛今年十八、城陥り之に死す。晴信西上野を取らんと欲し、八ヶ年の間度々軍を出せしがとも、取ること能はず、業正の死するに及びて、漸く西上野を取れり。

業正、歌連歌を善くせり、或時業正の家臣某民家より妻を娶る、一日此妻髪を結ける窓の向に五六尺計りの蛇の出ける、此女男を呼ぶあれ、御覽候へ、をうこのせいなる蛇出候と言ければ、男之を聞き田舎婦を貰ひ、箇様の言葉遣ひ、中間に聞かれなば物笑なるべし、と言て親許へ戻しける。其妻一首の和歌を壁に張付けて去る。其歌に曰く「萬葉の、歌の言の葉、なかりせば、思ひの外の、別れせまじを。」と此男之を見て合點ゆかず、此事人口に膾炙す。業正聞て其男を呼出し尋ねければ有りの儘に申す、業正聞て偕々耻敷こと哉、萬葉集に「陸奥の、千引の石と、我戀と、になわはをうこ中やたえなん」。斯の如くありてをこ棒のこと、を歌にをうこと讀めり、然るに鄙しき言葉とて離別致しなば、末代まで我等の耻なり、早々右の媒婦人を頼み、訖して呼び返すべしと言付て、右の如くに呼返しけりとぞ。

文獻上の箕輪

前橋圖書館司書 佐藤 錠 太郎

◎日本地理志料

村岡良弼氏の著で極めて簡單ではあるが、長野郷を説き箕輪莊を述べてある、郷、莊のことを記してあるものはこの書以外に見當らない。

長野 乃奈加 按片岡郡有長野郷、蓋長野連所居、利根郡又有長野

牧、鎌倉淨智寺應永十年文書、上野國長野郷西柴、二十三年文書、長野郷簸輪本郷、堯惠北國紀行、浴伊香保温泉一數日、去訪長野顯忠于長野營、上野志、長野方廢、箕輪城墟、在明屋村、長野氏世據此、是因地爲氏也、按圖亘東明屋・西明屋・上柴・下柴・松澤・善地・富岡・白岩・白川・本郷・神戸・三子澤諸邑、曰箕輪莊、豈其地耶。

東鑑仁治四年條、有箕句師政、蓋長野氏祖也、相州兵亂記、上杉長臣長野業政、居上州箕輪城、振威近國、本姓在原、業平之後、其族有岡本・厩橋・和田・小幡、芦田諸氏、上杉憲政之姪越後、尙屬輝虎、與武田・北

題目は如何にも嚴めしく研究的に見ゆるかも知れぬが、内容は唯箕輪に關して記述ある書籍名、又はその一部を順序もなく書き並べたるに過ぎないのである、さは言ふもの、貧弱なる書庫内にはさまで多くの箕輪關係書なく採し出したのは僅かに三十種ばかりでそれも恐らく皆な人の知れる處のものであらうと思はれる然しかゝる機會に集め置くは他日誰人かに幾分かの便宜を與へることが出來やうと考へたからである。

思ふに箕輪は長野氏によりてその名を知られ長野氏は箕輪によつて武士の面目を飾つて居る、さればその文獻としてもその多くは長野氏の興廢史であり戦記であつて擧ぐる處の諸書殆んどこの範圍を出て居らない唯、日本地理志料は郷、莊の一端を記し上野名跡考其他二三に椿名神社の事を語つて居るに過ぎない、而して唯一、山吹日記が紀行として異彩を放つて居ることを述べて前置とし、以下拔書を列べることにする。

條「相抗云、其上方爲三榛名山、祀典所謂榛名神社在此、山上有湖、周凡一里、稱三榛名湖、萬葉集所詠伊香保海即此。名跡志云。善地村有三群馬地、有三重川、是郡名所起、附存備攷。

◎上野名跡考

富岡正忠氏の著で上野の名跡を論考したる貴重なる郷土資料の一であるが、長野氏の祖につきて論考し且つ榛名神社につきてその考察せる處が述べてある。

箕輪故城

永祿年中、長野信濃守業政居る。業政は其の先在原業平の裔といひ傳ふ、然れども未たしかなる據なし、一説に高階氏の末也と云。在原系圖を見るに業平の子棟梁と云、二男師尙、三男滋春と見ゆ、師尙は高階茂範の子となり、滋春は高階峰緒の子となる、去れば在原高階は同流也、但し業平の裔、東國に有事は聞えぬども、在次君滋春、甲斐の國へ行とて、信州みのわのむまやにて歌よみし事、大和物語に見ゆ。

長野氏は信濃國みのわと云所より移るといへども未詳、石上寺といふ氏寺今に存す思ふに大和國石上在原山光明寺は業平の葬地也、玉葉集に從三位爲子

かくばかり其の名のこりて在はらのむかしの跡を見るもなつかし
按に長野は上野の名跡なるべし。國府・長野郷と北國紀行に見えたるも、今の小碓新波の邊也。東鑑承久の

榛名神社

○榛名之誤也、今榛名山と云「西撮」今滿行宮大權現ト云「先代本紀」云、双槻宮上毛國秦名山峰權現元湯彦友命也云々「萬葉」上野防人ノ歌「いかほろのそひのはりはら我さぬにつさよらしもよたへとおもへは」○信友按、コノは原ト榛原のハリト地名ヨシアリ「國帳」正一位榛名大明神○榛名山滿行大權現ト云フ、社説一曰、元湯彦命、一日、中イザナギノ尊イザナミノ尊、左右國常立尊大己貴命○信友按、尾張愛知郡針名神社アリ「姓氏」十二檜前舍人連大明命十四世孫・波利那乃連公之後也。

◎上野國志

この書は毛呂權藏氏の著である、箕輪に關すること頗る簡なれども郷土資料としては見逃すべからざる書物なるが故にこゝに掲ぐ

箕輪故城

大永六年五月長野伊豫守信業これを築く
長野氏は在原業平の裔なり、天文十一年四月其子信濃守業正後改左衛門大夫月二十一日信業死す、室田長年寺に葬る
英雄にして忠義あり、上杉家に事て、終始志を渝へず
信玄西上州を覬覦すること八年度々手痛戦ありといへども、業正存生の内、遂に手に入るることあたはず、永祿四年六月二十二日古戦録に永祿五年十一月とあり業正卒す、葬長息左京亮業盛、父の遺命を守て、志を變せず、同六年正月

役・箕輪太郎師政父左近大夫關東に軍忠有り、依て武藏國多摩横野を給る由見えたり、是等や彼祖とも思はる内伊加保神社大月並榛名神社小等説

按に伊香保神社は、延喜式に名神大社にして、月次の奉幣ある宮居也。榛名の神社は小社にて月次の例幣も無之、然るを今、一山をすべて榛名山とし、且つ榛の字を榛に作るはいかゞぞや。されば今の人、凡温泉の地のみ伊香保と思へり、中世何れの御時かくなりけん式・萬葉の歌等によりて見れば、今の榛名山は都て上古の伊香保といひしなるべし榛名より下す風をいかほ風とし今の沼をいかほ沼と云にても知るべし扱伊香保・榛名の兩社は皆一所に有しと見ゆ、いかにといふに上古大社には必ず御贄の封戸を寄られし事なり今の神戸村、是伊香保の神の御贄なるべし、小社には封戸有し例も見えざれば也、かくて伊香保の神名、轉して榛名にかたつき、今それさへ榛名と書也、又思ふに里宮は上古は麓の村にありしなるべし、扱古道は猶箕輪口なるべし按に善地、宮澤などといふ里又箕輪に榛名山など云處あり

◎神名帳考證

榛名神社に關すること上野名跡考に記せること前の如し之に因みてこゝに神名帳考證より榛名神社の分を抜書す、この書は伴信友の著なり、今は伴信友全集よりとれり、

信玄大に兵を擧げて、上州を劫略し、諸城を屠る、終に箕輪を圍む、業盛死を分とし防戦す、孤城守ること不能、二月二十二日、城遂に陥る、業盛自殺す、時に年十八歳、

城陥る、信玄内藤修理をして監たらしむ、爰に行脚法如と云ふもの修理に調して業盛が死骸を乞ふ、修理之を與ふ、法如これを井出村の東徳院今の大圓寺に葬る銘に

新稱院箕山法輪大居士 石塔立願主法如

永祿六甲子歲二月二十二日御年十八歲

俗名長野右京進業盛、長野十三代

信玄即内藤修理昌豊を城代とし、西上州七郡を掌しむ修理は保渡田に居住す修理長篠に戦死の後は番城となる、箕輪には番兵を置く天正十年、瀧川上州入國の時、先づ箕輪に入る、後に北條が一族右衛門氏堯が持となる。

御入國の時、井伊兵部少輔直政、十二萬石にて此を賜る、後に城を高崎に移して、箕輪廢す、此城榛名山の尾崎を取敷て、箕手の形に作りたる故名づくと云。

◎上州故城壘記

著者の誰人たるを知らず、上野國內七十餘箇所の城地につきて築造の年代城主の變遷を記し守禦攻戰の概要を述ぶ、

箕輪城に關する記述あれども、前記上野國志と大同小異なれば、書名を掲ぐるにとどめて省略す。

●上野國志

上野國志に二あり、一は前記の毛呂氏の著で、こゝに掲ぐる飯島平藏氏著である、而してこの書は毛呂氏の國志に後る約六十年、寶曆の著、殊に其記述も毛呂氏の國志に及ばざれども、世人この書を知るもの少きやうなれば、敢て録することとせり。

箕輪古城

當城は榛名山大權現の山尾崎を取て、箕輪手形に似たれば爲其名。

天文年中、上杉家譜代士、長野信濃守業政、居之。

同二十年八月、上杉民部太輔則政越後に退き給ひし後も猶當城は不落、業政病死以後三年目、子息右京亮の時滅亡す。

永録六癸亥年三月、武田信玄、攻落之。

西上野に七年の合戦ありしも此長野家の故也とて、信玄怒て信濃守が女房子供皆々殺之。

弘治三丁巳取合、永録六癸亥迄七年目に落城なり、其跡に

武田信玄士、内藤修理之介友昌、居之。

天正十年、織田信長士、瀧川左近將監一益、居之。

北條氏政士、内藤大和守、居之。

同十八庚寅年ヨリ當御家士井伊兵部少輔直政(十二萬

石)居之。
箕輪太郎師政、承久の亂に關東に軍忠あり。

●上野志

何時、何人によりて著れるものなるを知らず、而してその記すところ難難なれども参考とすべし、こゝには上野志料集成より取れり。

箕輪城は、本名明屋といふ。

舊記にいふ、榛名明神の山を形取り城を築く。其形箕手の如し、依りて箕輪と號す。

元基榛名明神此所に鎮座す、十二社の内、今社を失す此處に榛名の山といふ處あり、今稻荷の宮あり、正一位を授く、法華堂といふ處あり、是は神事祭司の地と見ゆ、此城を高崎に引く時、法華堂も彼の地に移さむとして、先づ椿町に堂を立て小寺を建立し法華寺と號す井伊掃部頭江洲佐和山へ引移る時、堂社共に残らず彦根へ引移すと見えたり今箕輪法華寺とて日蓮宗あり。同三の曲輪城主、三の曲輪太郎師政、承久年中の頃居住、管領上杉の家臣、其後、長野信濃守業政居住す長野氏はもと在原業平の枝裔なり、又高階ともいふ、長野家初は、信濃の國伊奈郡の内、箕輪といふ處に居住す、依りて當國に移ると雖も舊名を用ひ、箕輪を號す、氏寺は今の布留山石上寺是なり、今高崎なる布留

山石上寺は之を移せる寺なり。

●山吹日記

山吹日記は日下部勝美氏が、天明の頃上武を旅行した時の紀行である、その箕輪城趾を尋ねては、其有様を語り城の構造を述べ、而して史實によりて戦の跡を顧み、長野業政業盛父子に及んで居る、今日箕輪城趾に遊ぶものをして尙百數十年前と異なるなきを思はしむるものがある、更に榛名神を考へその傍なる古墳に及び、さてはデ、バ、石の傳説にまで及んで居る。

箕輪の城にいたる、畠の中に男ひとり居たり、これなんよく知りたりとてそれにあないをさす、此男こまやかにさへずる、そがいふまに、西門の趾よりぞ登る、いと高くから堀三重なる上に今一重めぐれる所もあり、おほよそ武藏なる須かやの城ばかりもあらん近き世の事なればやぐらの臺などが土もまだ崩れず猶有しながらに家士の住居せし跡もあり、と其姿残れり、西南の方は壁をたてたるやうにて登るべくも見えぬ高さ上のなみたてる木々のこがくれにかほとりのうらなき居るも何となく心ありがほに聞なされぬ。見おろす下に山河のめぐり流るゝいみしう早し、水のひんかしに流るゝを見よとちさしてたに内郭のあひだに石二つあり、かの男が云ふ、去いつ頃高崎との仰ありて、庭のたて石にせんとて運はせ給ひけるに、一夜

のうちにまた歸りきたればおしみ給ふよとて其の後かくて候なりとぞ、この城の固めを思ふに、さしも猛き甲斐勢が攻め飽くみたるもことわりと見ゆ、されど東の方なる道は思の外になとやかにありくるもいとやすし、藤井豊後守友忠物見すとて沼のあたりを廻りしとある何處にか有りけん今さる沼もなし、若しくは此の下の方法峰寺のあたりに昔有りけるやらん、長野左衛門太夫業政は、上杉の家によく仕へし人なり、彼家管領職を失ひける後も猶まめ、しうのみものして、武藏の岩付なる太田三樂齋とむげに裏なく互に扶け合ひけり、さはいへど其子左京亮業盛が時、永禄六年二月二十二日つひに甲斐の信玄の手に城落ちて十あまりの城皆降り從ひぬとかや、此城は榛名明神山の尾崎をさりて築きかまへたり、其の形箕の手に似たれば名づけたるよし箕輪記兵亂記等にいへり、東の方より望み見ればげにさる姿にみゆめり、彼山より五六里ばかり距たれど猶そのをさきなりけり、さるを關東兵亂記に榛名と云へるは書きまかへたるならんと思へど、延喜式にも椿名の社と有、頭註の説もて思へば一つ山のこと、聞ゆめれども、此すこし東の方に椿山ありと聞けば尙ありとかにも多す、さて殊更に詣てぬるは我れい

の此方にももらかならぬひたけさなめりかし、山傳ひをして七八町ばかりやきぬらん、城の方よりや、低くき木立の茂りあひたる中に伊勢大神宮と申して祠あり神殿に一座おはします、其下に例の石室にやあらんと覺えて端つかたのくづれより僅かに石なん顯れ見ゆるもし誠にさるものならば人ををさめし所なるべし、石室作りてし昔の世は式社などはわきて嚴めしうおはしけんをいかにぞや葬などすべきことあらんや、しかのみならず是はなかく城山のをささなるものをよしやそれと城をせむると切くづして今はかくなれるにかされど名にあふ山を武田家の一つの力もてかくまでいかでかはせん、あるは此あたりの山にもとおはしけるを近き頃こゝに移したりけるにやあらん、或はかの石室のごと見ゆるさはあらぬにやあらんとかくににつけて大かたは榛名のかたまされるに似たり、矢原の名主は是より歸りぬ、明屋といふは箕輪の町なり、酒あきなふ家を下田喜左衛門と云ふ云々。

箕輪戦記の諸書

箕輪城の戦記は長野氏の活躍記であり奮闘記である、而して最も悲壯を極め讀む者をして思はずも涙を拂は

しむるものは實に長野氏の没落記である、これが戦記として第一に

◎箕輪軍記 (群書類從第十三輯に收む) を推さねばならぬ、更に

◎關八州古戦録 (史籍集覽第五に收む) を讀むべきである、群馬郡總社釋迦尊寺住職釋泰亮氏が輯録したる「傳説雜記」中の

◎箕輪記 (上野志料集成第二に收む)

は箕輪軍記とその記述殆んど相似たるも、前記二書と相並びて箕輪戦記の書として、擧げねばならぬものであらう、尙ほ

東鑑、甲陽軍鑑、相州兵亂記、和田記、鎌倉大草紙、鎌倉九代記、武田三代記、北條五代記

の諸書には長野氏戦記の一端が記されて散在して居る元より精粗いろ／＼であり、又悉くを正確なる史實と認むることは出来ぬであらう、然し箕輪城及長野氏の興廢を研究する上には逸してはならぬこと、思はれる一々其の記述を引用することは煩に堪えないから、書目だけを掲げるに留む。

長野氏傳の諸書

箕輪城記は即長野氏の傳記であり、長野氏の傳記は即箕輪城記であると謂ひ得るであらうが、兎に角二三を擧ぐることにする。

長野氏傳記として第一に擧げねばならぬものは、飯田忠彦氏の著なる、

◎野史

である(同書武臣列傳第一百五十五卷) 大日本人名辭書も野史より之を採つて居る、然し野史は其根據を箕輪軍記によつて記述してあるから、やはり根柢は箕輪軍記であると謂はねばならぬ、今煩を厭はず掲ぐることにする。

長野業政。或作上野群馬郡蓑輪城主也。姓在原氏。右近衛中將業平之後。父曰信業。或作高政稱伊豫守。大永六年

五月。城蓑輪居焉。業政稱信濃守。勇且智慮。上杉氏

追憲政。登庸倭侍。家掟悖戾。士民愁苦。天文二十年

三月。憲政終韓越後。而北條氏康與武田信玄爭戰。

八年餘。業政強勇不屈。信玄欲下野。拔蓑輪城。業

政女婚和田城主和田友綱。厩橋城主長尾景連。岡本持

村。國峯城主小幡信貞。及下定。木部實一。倉賀野宗

重。安中忠誠。上杉氏遺臣長尾景孝。景家。小幡長宗。

芝田行成等戮力。據守蓑輪。信玄率兵二千餘來攻。

城中縱弩蜚矢。禦戰不撓。甲軍死傷者五百餘人。收

師而去。信貞率兵一千餘。據國峯城。與業政通謀。

押禦甲人。與其族下定不協。竊通信玄。誘其師。

永祿三年五月。信貞浴溫泉。業政與下定通謀。乘

虛。取國峯城。令下定鎮之。信貞携弩特甲州。四

年三月。信玄帥師一萬五千五百餘人。次南牧島本軍

議。分兵壓松井田安中蓑輪等。圍攻國峯城。内藤昌

豊爲先鋒。附提燈于馱馬。人手齎松炬。登高阜。

發。闕。下定遽驚。棄城脫走。是夏。業政以病。遣囑子

業盛。曰。我多年不願身命。對敵四面。偏欲再起上

杉氏。而不。能。我命逼旦夕。如不起。則築埋一里

塚。莫建塔婆。修佛事。子亦對敵必莫降。以死爲

要。是孝養也。是年六月。終死。子業盛。稱右近進。父

歿。與藤井元忠議。秘喪。次年秋。信玄傳聞。促兵。永

祿六年正月。帥師三萬五千。拔服良一郷二城。及吉井

河内等九寨。進伐屠牧野英一于河内。菅野聞之。據

于鹽川城。略與平等地上杉氏所保城寨四十二處。皆

尋陷。二月。甲師來圍。城中戮力拒戰。業盛老藤井友忠

與信玄子勝頼戰死之。城中死傷者多。業盛勢竭。終自

殺。時十八歳青柳忠家或作宗高下田昌勝寺澤範安等殉焉。城陷。業盛有二一男。生僅二歳。藤井忠安、青柳忠勝懷之。而走三于吾妻。不知其所終。

◎名將言行録

野史に次いて推さねばならぬのは岡谷繁實氏の著である、同書第二卷には長野業政の言行を叙して餘す處なきが如し(全文別項にあり)

◎長年寺記

長年寺は長野氏の菩提寺である、從て同寺の記録は長野氏の家系を語るものとして長野氏系譜とともに文献中の一に加ふべきであらう。(余未だ長年寺記の原本を見ず、書寫されたものである、從て原本と異なる、茲に掲ぐるは、長年寺記として點あるやを知らず暫らくこゝに之を記す)

長野伊豫守憲業父ヲ業尙ト云フ、其先平城天皇ノ孫在原業平ヨリ出ヅ、業平ノ五男左衛門大夫業重、上野國司ニ任ゼラレ、吾妻郡長野原ニ住シ、地名ヲ以テ氏トス、之ヲ長野ノ祖ト云フ、其子業國更ニ石上姓ヲ賜ハル業國十六世ノ孫、康業上野國司ニ任ゼラレ、群馬郡濱川ニ住シ世々相襲ク、康業三十一世ノ孫業尙ニ至リ明應年間濱川村ヨリ、徙リ下室田鷹留ニ城キ居リ、其子憲業後チ箕輪ニ城キ徙リ、業政相襲グ。云々
大正十四年、岡部福藏氏

◎上野人物志

を著はせり、同書中には長野憲業、長野信業、長野業政、長野業盛四氏の傳を載す、記すところは簡であるが要を得て居り、参考とすべきであらう。

其他

以上述べた外に、文献といふべき程のものではないが、

齋藤 惇著 上野國名跡概略

堤 辰二著 上野史談

岩神正矣著 小學上國志

等がある、何れも箕輪及長野氏の事蹟について記されて居る、就中小學上野志には長野業政を無雙の良將なりと稱し、業政の逸事として次の如く叙して居る、嘗て嬖人某、美人を以て進む、業政之を卻けて云ふ吾は國家を衒ひて、美女を要するものにあらずと即ち命して、某を逐はしむ。又憲政の越後に敗走するや其會て愛玩せし、夜光玉と蜀錦とを以て、業政に上つる者ありけるに、業政之を納れずして曰く、一顆の珠玉は、國家の暗を照らすと能はず、一尺の錦繡は一民の寒を防ぐこと能はず、吾之を何とかせん

と、其言行概ね此くの如し。

この他、最近刊行されたるものに群馬縣史あり群馬郡誌あり、共に參案すべき資料とすべし、又齋藤平次郎の著長野氏興廢史あり、箕輪に關する文献の一たるを失はず、曩者邑樂郡館林町の人蓮沼吉衛氏「延喜式内上野國十二社巡拜紀行」の小著をなす、その箕輪なる椿名神社の條に於て、その舊蹟の狀を叙し、而して曰く、

今や縣社榛名神社に合祠せしと雖、延喜式内神名帳にある上野國十二社の一たる由緒正しき椿名神社の舊蹟なり、茲に建碑の一を止めざるは聊か懷古の情抑へ難き感なき能はず。

と、暗に箕輪町民に建碑を促すもの、如し。

蕪雜粗莽の責を甘受しつゝ、この稿を終らんとして、豊國義孝氏が編する「上毛及上毛人」を見る、同誌中に左の諸項あり、また有力なる文字である。

自第四號 至第九號 長野記

第十一號 長野信濃守業政及其子右京亮業盛古塔

第十五號 箕輪城主長野氏の子孫に就いて

(津久井省巳氏)

第五十七號 西毛と長野家 (早川 流石氏)

第二百二十七號 箕輪城址 本丸御前曲輪古井戸出土五輪塔 金石文に就いて (内山留一郎氏)

以上て余が知つて居る諸書の大部分は述べ終つた、これ等の諸書の中には其所説の一致せざるものあり、また誤謬もないとは斷じ難い、然かもこれ等を纏めて考察し精選したとも云ふべきものは百田東伍氏の大日本地名辭書であらう、而して同氏の研究は更に精細をつくして居ると思ふ、故に其の煩を厭はず、同書に載するところをこゝに抜載してこの稿を結ぶ。

◎大日本地名辭書

箕輪 今村名に呼び、西明屋、東明屋、芝、矢原、金鋪平等の大字あり。長野氏の城壘に箕輪の名ありけるより著る。其城址は即西明屋に在り、濱川の西北一里、箕、古書或は蓑、籓にも作る。

明屋の龍門寺は、井伊直政の中興、寺領五十石を給して、其廟墓を置きし所也。又石上寺あり、布留山と號し、箕輪の古城主、長野氏の氏寺とぞ。近世は高崎城下にも石上の別院あり、各十餘石齋田を有して舊寺號をつたへたり。

名跡考に、東鑑仁治四年の條に見ゆる「箕勾太郎師政薨

去承久三年勳功賞、拜領武藏國多摩郡荒野、是父左近大夫政高、加井延作、於勢多橋、抽軍忠訖」とあるを引き、此師政、政高はやがて箕輪長野氏の祖先かと云へど信じ難し。武藏國にも箕輪の地、二所存す、上野國に援引すべからず。長野氏の事は、相州兵亂記に上杉の長臣箕輪の城主長野信濃守業政は、武勇威勢ありて、近國無雙の良將なり、在原業平朝臣の後胤にして久敷上州に住、一族門葉其數あり、所謂岡本、厩橋、和田、小幡、芦田等なり、此城は榛名大明神の山の尾崎を取て、城郭にしけるが、旗の箕の手に似たれば、箕輪と號す、今上杉家衰たりといへども、猶武州に岩槻の太田美濃守資正あり、上州箕輪に長野信濃守業政居て威を振ふ、武田信玄は箕輪退治に出馬して五年まで攻めしかども、竟に一度も不打負、武田攻めあぐみて、引退云々。關東兵亂記に、箕輪長野は、在原氏にて、其寺を布留山石上寺といふと載す。此長野氏は本姓石上朝臣なりしにや、其事早く永正六年宗長紀行に見え、

濱川並松別當は、俗に長野姓、石上なり、上野國多胡郡辨官府碑文銘に曰、大政官二品穗積親王、左大臣正二位石上尊、此の文系圖にあり、

と載す。並松とは並榎の焉馬にして、濱川の南なる並榎村熊野別當護國寺なるべけれども、長野氏の一族と知られたり。然るに名跡志に、三代實錄、仁和二年石上朝臣並松從五位下と云ふ人を引きしは、牽強のみ。又兵亂記に「在原姓にて、其氏寺を石上寺といふ」と述ぶるは、大和國石上寺を一名在原寺と稱へしにつけて、長野氏時代に、其事を引きて設けたる氏寺ならん（名跡志云、箕輪の石上寺今はなし、里人に問ふに、武田氏箕輪陣の時、兵火の爲に煙となりて、寺社の跡は田となれりと云へり）○蜷川親元日記に「寛正六年長野万壽丸元服、公方様御宇被下、政高也」とあるは此長野氏にあらずや、又鎌倉大草紙には、長野周防守同宮内左馬助など上州一揆の交名ありて、當國の名家たり。

房州様、當地箕輪御在城附而、我々令得御介抱四刻、其方不退、御藥等神妙に進上、依之爲氏邦御内意、合藥之儀、龍覃助言、自分をも別而懇意、殊一兩月醫書悃望之間、臨讀之契介申候條、口名字之一分に有之、醫道之米□□内訴之所、雖遠慮之儀候、右之旨趣、難默止之間、承染筆頭條、仍如件、

天正十一癸未年五月十六日

糟尾法眼壽信(花押)

糟尾養信齋參(新武風土記)

此文書に據れば、天正十一年の頃には、小田原北條より、氏邦(安房守)を差遣して、箕輪を鎮守せしめたり○史學雜誌云、甲鑑、信玄が始めて西上野に討ち出でたるを天文十八年となせるは疑はし、此の方面に着手せるは永祿以後の事なりとす、永祿二年九月長野業正の守れる箕輪城を圍みしが、志を得ずして歸れり、次て同四年十一月には、小幡白國等の諸城を攻め、六年十二月には倉賀野、木部地方を侵略せり「上州長年寺古善筆録」

今歲永祿乙丑、春二月七日、涓而爲吉日良刻、任天道之運數、引茲甲兵於上州利根河西之日、先詣諏訪上宮明神、其意趣、殆箕輪之城、不經十日而擊碎散亡者必矣、奥太刀一腰有銘、孔方十縑、並神馬一疋所令進納也、神威猶有餘、惣社、白井、獄山等四邑、阪屬掌握、奏凱歌歸樂安泰則、於神前請清苾芻衆、讀五部大乘經、以可奉報神德焉、急々如律令

維時永祿八年乙丑二月吉辰

信玄(花押)「守矢文書」

箕輪城は榛名山趾に據りて構へられ、塹壁深固、糧食

豊富なり、加之守將業正驍勇にして智略ありしかば、武田氏全く之を陥れしは永祿九年九月に在り、十年三月、長年寺僧受連が記録に、永祿九年九月二十九日箕輪落居之上云々とあるを、前掲の願文と參照すれば、甲陽軍鑑に永祿六年二月、箕輪落城とせるは、誤なること言ふをまたず、

箕輪城址 今箕輪村大字西明屋の椿山に在り長野氏の故墟也、○名跡志云、金石私志に、箕輪八幡宮、石燈籠臺石に文明六年の銘あり、○甲鑑云、永祿六年、上州箕輪椿山にて、勝頼公十八歳の御初陣に、長野が内にて覺の、藤井豊後物見に出て歸るを、追懸組討に被成、其義飯富兵部殿見給て、御館へ深く隠し候。

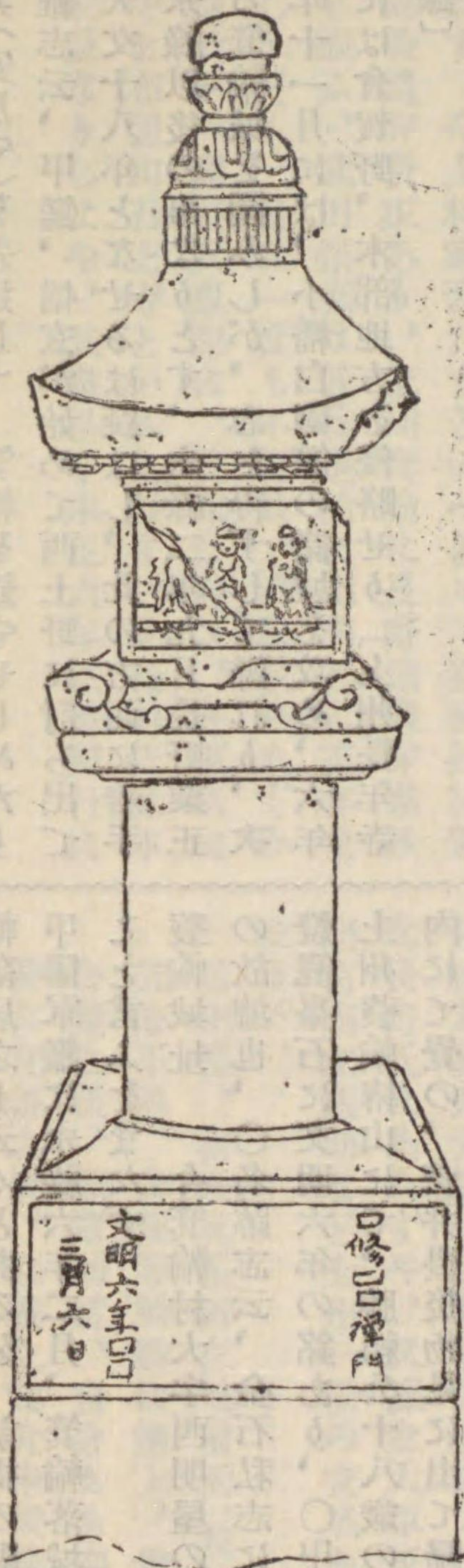
○管窺武鑑云天正十年六月、瀧川一益上洛せんとする砌。越後の藤田が沼田を攻むると聞き、箕輪の内藤大和守、彼是催して沼田へ後攻仕る、又云、天正十八年小田原陣の時、箕輪の内藤大和は北國勢の勇氣に懼れ降參して城明渡す、○天正十八年、徳川家江戸入部の初め、井伊兵部直政は、上州の鎮將として、西上野十二萬石を賜り、箕輪を居城とす。箕輪軍記は長野氏の戦史也、軍記に「信玄群馬郡折原村(今(の)生)へ着陣、陣所を構へて、一萬五千人にて、みのわの城を圍む、南

は日波の櫻林、イ子の森、東は保渡田中の郷、今宮、成出の村、小鳥、井出の郷、西は高濱、白岩、愛宕の原、北は阿曾山、相馬か嶽、舟方山、桃井が原、野尾か嶽」云々。
名跡志云、北國紀行に「文明十八年の九月晝に、長野陣所、小野景頼がもとにて、暮秋時雨、堯惠たが袖の秋のわかれのくしのはの黒髪山ぞまなくし

くる、」
此歌下野の黒髪山にはあるべからず、まのあたりの山をよめると聞る也、いづれの山か知らねど、糞輪のあたりに黒髪と呼し山ありしに疑なし、伊香保の沼より西に硯嶽、北に黒髪嶽、二嶽、東に相馬嶽最高しと云へり。
(終)

□箕輪町八幡宮境内の石燈籠

こゝに圖示する如く、文明六年の文字を刻す、文明は即ち後土御門天皇の御宇、足利義尙將軍の時たり。その六年より今昭和三年に至る正に四百五十五年前なりとす。總丈約六尺九寸火袋の佛像は凸刻、其他の文字は凹刻、圖に示す如く火袋の破損せるは惜むべし。臺石の文明



六年の下は甲午ならんと察すれども右方の三字は全く讀み難し。此の社殿の前面にあたりて往時は古墳ありたりと云へど、今は其の形跡を留めず。(本圖は中西紫雲翁の寫生にかゝる)



箕輪に並長野氏關係の古文書

箕輪町 長島類藏

覺堂曰、長島氏嘗てより同地方及び長野氏關係の古文書等を謄寫して藏せらる、今請ひ得てこゝに掲出するとせり、素より事の當否は深く考慮の暇なく、只是の如き古文書の存在するをを紹介するの微意に外ならず、尙ほ文中文字の不明なるものは□□を以て充てたり、請ふ之を諒せよ。

◆左記は箕輪町本明院主故増田省一氏の所藏せし古文書の寫しなり。

景行天皇御願所

内式椿名神社豊城入彦命(人皇十代崇神天皇の皇子)勸請、美濃守業平朝臣再建公儀御札獻上

- 井伊掃部頭殿
- 同兵部少輔殿
- 松平右京亮殿
- 酒井安藝守殿

右五ヶ所御札獻上
御朱印地

當院開山

慈覺大師

水草山三輪寺本明院

權少僧都法眼

權大僧都法印

- 一、椿市は在原にあり、今原と云、海拓榴市は三輪にあり、此兩市は在五中將業平卿、貞觀年中大和國椿市を爰に移し、土農工商賣買、國のよえき(富益か)實に業平卿の御才徳なり。
- 在原、今は矢原といふ。三輪 今箕輪といふ。
- 一、西芦屋、東芦屋は、當城没落の後、和田村へ町家引移して皆明屋敷と成、よつて東明屋敷、西明屋敷といふ。このこと古證文あり。

◆左に掲ぐるは群馬郡堤ヶ岡村大字管谷福田奠齋業守氏所藏の古文書の謄寫なり。

長野業政の墓
上杉公の□長關東管領執權職長野信濃守業政死するや、室田長念寺、三輪長純寺、菅谷大一寺の三住職は頭髮を二ヶ所に分ち、御身體大一寺の戊亥□□(數字不明)一堂を立て塚を築て業政の墓とす。四代目長野

□□一翁權大僧都元得法印と云ふ、祖先業政の塚と共にす、長念寺と(記者いふ、長純寺の三字脱す。)とは墓を裏山にして此所に頭髮を祭りたり。

永祿四年六月二十一天

實相院殿一清長念居士 長念寺
實相院殿一清長純大居士 長純寺
實相院殿一清長菅大居士 大一寺
右三法名長野業政の□□葬儀の時の御法名なり。

長野業政嫡子長野左衛門大夫吉業、武州川越の戦に手傷負ひ老力に助力を得て其場を去りて三輪に來たり菅谷に小城を築きて別居すと云ふ、(中略)更に名を更め左京進業隆と名乗り相續を其弟に譲り、三輪の戦に三度出陣したりしが、永祿六年小城は火災にかゝり落城す、(中略)同年秋大一寺裏に堀を築き城を堀の内に置く、同七年正月三日、武田の爲に斃る、同十七日菅谷山大喜大禪定門と法名ありて祭祀す。次男甚九郎氏業は兄の相續を引受け、死の□□を覺悟し、祖先の訓を守り(中略)更に名を改めて右京進業盛と稱し、永祿六年亥二月箕輪城二ノ丸にて自害す、年十九歳、頭部を井出に祭り、體部を大一寺に祭り、法名弘稱院箕山法輪居士と號す。

安政六年三月二十一日大一寺本堂内
菅谷山大一寺重法卷之寫
大一寺住職堅者大法印(興榮)

永祿六年十二月二十八日

神明山禪龍寺 的 應(神明山)
長野宇喜重業殿

業政男行先 吉業長男五郎左衛門、神明山禪龍寺開祖。業盛 長男龜壽丸、和田山極樂院十二代となる。二男彈正業正、來光寺善長院開祖。

來迎寺調書に、當國箕輪の城主長野彈正業忠、永祿年間武田の攻落する處となり、菩提寺たる來迎寺々々中、長野累代の墳墓地なる阿彌陀堂に潜居せしと。

鷹留城業氏男行先 長男新十郎右衛門業通、長男俗名右近左吉孫左衛門業廣、越後春日山。

二男大森別當大雲寺開祖然室の門に入る、三男彈正業固上諏訪に住す。四男勝業豊岡に住す。業通男越後業廣二男彦根長純寺開祖。三男上州岡本西法寺住、後沼田小松に住、氏を小松とす。業政の妻、永祿四年三月十五日五十二歳三ノ倉に自害す、外女十二人和田山極樂院に於て自害す。

永祿四年□月□日之事

落城永祿六年二月二十二日也

業盛の男龜壽丸のうば永祿□年三月二十□日極樂院に□□

神明山禪龍寺天正三年萬行山善龍寺と改名

五十五ヶ村名主總代役

福田庄兵衛敬親
藤井倉八岳山
三ツ澤文左衛門
福田宇内業照

長野五郎左衛門殿毛野里管谷城弟宇喜重業殿に渡し生原禪龍寺を内藤修理之助殿と共に開祖し、姓名を福田と改稱し、禪龍寺守監となり修理殿と共に守り宇喜重業の長男禪龍寺に十一歳にて□□し、後小城大一寺裏に移し、堀を堀て小城築造し宇喜重業之を父子と共に守り、(中略)尙長念寺・長純寺・大一寺は特に守護せよと申せり、生原禪龍寺五郎左衛門は堀の内に居し、神佛の道を信神深かりき、吉業殿諸民に慈悲深く、其徳關東天下に聲を諸民明徳様と傳ふ大一寺に明徳様の墓を置き、其の徳高きを的應御禪師より傳へて今法前に謝す。

天正三年三月彼岸中日 的應禪師從僧 慈 應

武田信玄長野家子孫見遣し置く事
内藤修理殿に傳達相成候(神明山)
一先御安心被下度候

武田の指命に依る

禪龍寺記
(以上、菅谷の福田氏所藏文書より寫す)

◇石上寺開基(石上寺過去帳による)

貞觀十六甲午歲在原業平朝臣開基
當寺開山者御室常喜院佛性房眞覺後贈權僧正とあり又「石上寺記」には抑當山者在原業平草創之精舍眞覺僧都開興道場、本尊聖者自然所成金軀土面像業平護持尊容云々、此他は略す。

記者申す、「布留山石上寺記」と題する一篇あり、善地村神澤氏の所に其の寫本を藏す、前年箕輪史蹟保存會にて之を寫し、其の一本を寄せられたれど、今はしばらく之を割愛することとす

◇左は極樂院古文書より謄寫す。

極樂院良雲法印

山門極樂坊前任にて當□□當郡高井村に隱居致居られけるを長野信濃守業政歸依有之、同郡和田山に寺を建立し、西上野七郡諸宗の惣祿職とす、長野没落の後、聖護院道澄親王御末派に罷成、上野國一統修驗の年行事職先達となる。

極樂院二代鎮良

童名龜壽丸、後豊前と改む、長野彈正忠業盛の子にて、永祿六年癸亥二月二十六日箕輪落城の時、家臣藤井孫藏忠安、阿保彌左衛門清勝、龜壽親子を連れ城を逃出けるに、青柳父子防矢して之を助け、和田山に來り成長の後出家となし、一族の菩提を弔ふべ

き由、良雲法印に頼置、青柳金王忠家は瀧澤寺に到り自殺す、藤井・阿保・其外譜代の者共、近在に隠居て、良雲法印、青柳等に心を合せ、龜壽親子を介抱し、龜壽八歳の時出家となす、由之を申すと雖も聞き入れず、良雲法印甲軍の手前を恐れ、足利將軍義昭を頼、御口入れにて聖護院道澄親王の御弟子となし、名を豊前と改め、良雲法印も修験の行を致し聖護院御門跡の御末派となる、夫れに依て叔母婿小

幡尾張守信定の願に任せ、武田信玄寺領等を寄附す良雲死去の後、豊前極樂院を相續し、上野國年行事職先達となり、東照權現様より天正二十年上野國年行事職御朱印を頂戴し、又關原御陣の時、御供仕御黒印頂戴なり、後安保彌左衛門の兄、同苗肥前正親娘を妻とし、子供五人あり、慶長十二丁未三月朔日急病にて卒、行年四十六歳、室安保氏。(以上)

長野氏の裔孫に就て

豊國覺堂

一、吉業の子孫と稱する福田氏

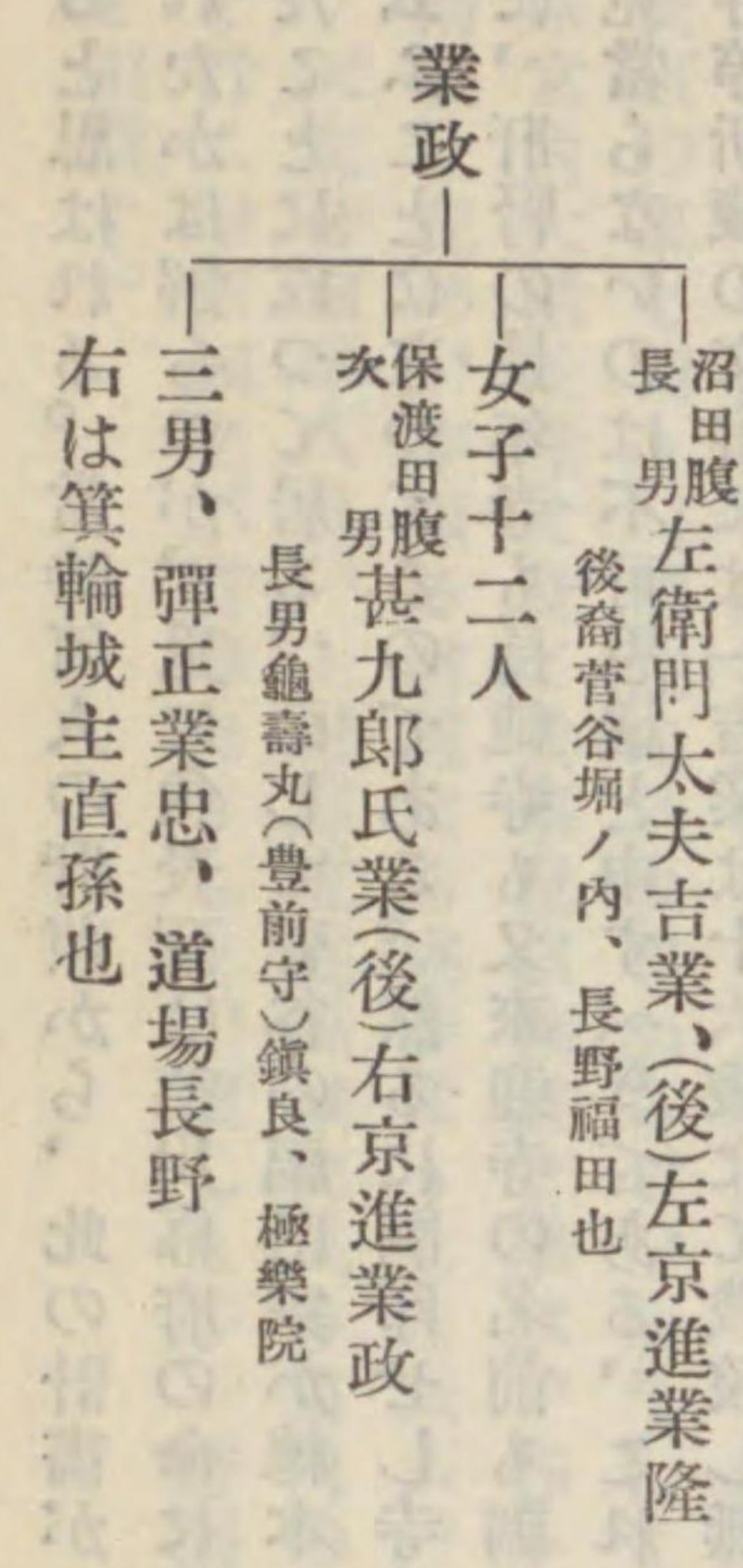
長野氏の末葉と稱するもので從來世間に知られて居るものは、下仁田の長野氏、越後高田の長野氏、菅谷(群馬郡堤ヶ岡村の大字)の長野氏、福田氏の三家で、其他は存否不明である。中に就て菅谷の福田氏——業政の嫡男吉業の裔と稱する——は實は吉業は長年寺文書其他にも「武州川越にて上杉憲政と北條氏康と夜軍の時に手疵を負ひ、箕輪に歸城して死す、月宗長運居士、生年十六歳

無子跡絶」としてあり、多くの史實が皆な之を認めて居るのであるが、獨り福田家の文書だけは「手傷を負うて其場を去り、三輪に來り、菅谷に小城を築きて別居し、更に名を更めて右京進業隆と名乗り、宗家の相續は其弟に譲つた」と記してある。則ち別家はしたものの、血統上からすれば長野氏の總本家と稱して居るのである。然も同家に傳來する古文書——本文の記者は未だ其の本書を見た譯では無いが——現代の福田眞齋業守氏より寄せられた寫本を見るに、左の如く記され

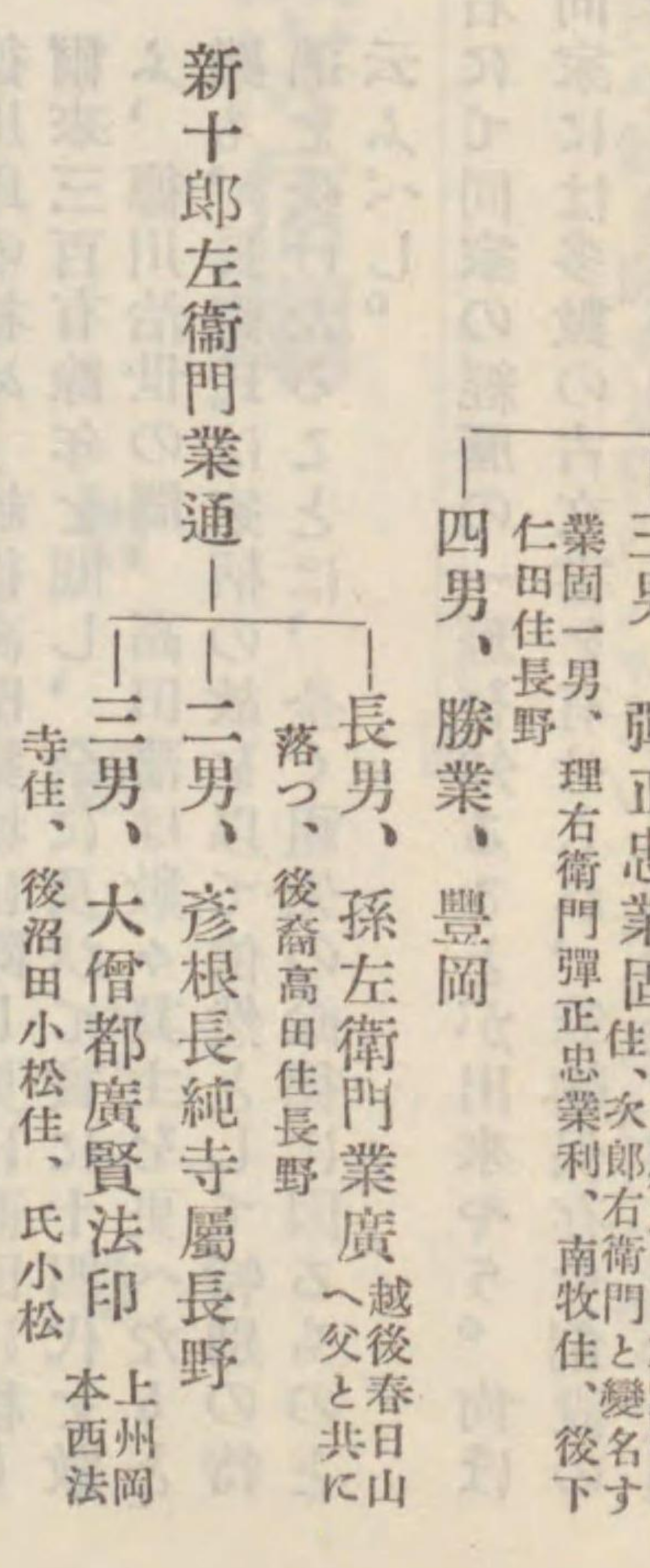
である。此の調査には頗る手数を要した様である。

今般江戸表徳川家に於て、箕輪城主長野業政公直孫御調査方、雙林寺(記者曰、上信越佐四ヶ國の)蒼海に傳達相成候爲、各寺院に於て舊藩士と共に、來迎寺より道場長野家、極樂院より業盛後裔長野、長純寺長年寺より古記録系譜持參、越後高田より新十郎左衛門業通後裔、下仁田より理右衛門正忠業利後裔、彦根長純寺業通後裔系譜持參、徳川家各役人、菅谷・和田山・道場・下仁田・越後・彦根各長野家・雙林寺各關係寺院立席、調査古記録・東明屋石上寺・三ノ倉石上寺・濱川來迎寺各二卷、室田長年寺五卷、菅谷大壹寺三十卷、長純寺二卷、下仁田長野家十卷、菅谷長野福田十五卷、道場長野二卷、越後高田長野一卷、岡本西法寺二卷、舊藩士中より百廿九卷、合計二百卷各家録記異なるも史實より調査の上如件

業平五十三代



鷹留城主 三河守業氏



右鷹留城主直孫なり
右調査徳川御役所へ雙林寺關係各寺院御調査役員一同連印證明奉致置候、若し御役人出張の砌は御取落無之様通達置候以上

長手 長谷寺大秀印(以下寺院住職又は代理者計七十人記名調印は略)
天保九年戊戌八月九日 巳上刻
長野家總本家 福田宇内業照殿
以上如く關係者各々證據書類を持寄り、比較考證一大討議の上、前記の如く決定し、幾通かの文書を調製して各關係者が各々其の一本を取替はせられたものであ

と思はれる。當時何人の肝煎から、此の計畫が行はれたかは解らぬが、兎に角表面は徳川幕府の命に出たことに成つて居る、而して菅谷の福田家が總本家と云ふことになつて居るのである。然るに調印せし寺院中に、肝腎の長年寺も長純寺も又來迎寺の名前も調印も見當らないのは不可思議と申すべきである、これは同寺等所藏の文書には「吉業は十六歳にて戦歿し無子跡絶」と云ふ記録の説を確信し、調印することが出来なかつたのではあるまいか。特に福田家と關係深き大壺寺住職が、當時四ヶ國の祿所である雙林寺住職を動かした、其の勢威に繼り、七十餘ヶ寺の調印を纏め、吉業の死せざりしと、後裔血統の存続して居ることを證據立てんと企てたものではあるまい乎、此の事は世の公論を俟つて決せんことを期す。

因みに、吉業の血統の存否に就ては確信を缺く所なきにあらざるも、右に列記せし系圖に就ては信用すべきであると思ふ、仍て此の系圖書を他の長野氏の總てに援用することとする。

二、越後高田の長野氏

現今東京牛込區二十騎町一七に居住する工學博士長

室田鷹留城主參河守業氏(業政の長兄)の三男禪正忠業固は箕輪落城後、信州上諏訪に逃れ、次郎右衛門と變名し、恢復を計つたが志を得ずして死し、其の長男理右衛門業利は北甘樂の南牧に居住し、後ち下仁田に移り住んだ。其の裔孫に長野見意業一と稱する偉人が

野宇平治氏は高田長野十四代の裔孫であることは何等疑ふべき餘地なきもので氏の自から記する所に依れば

余の家は上州長野氏の後裔にして、箕輪落城に際し業盛の遺孤(これは天保九年八月の會議に於て業通の長男業廣の裔とせしもの正しかるべし。)逃れて越後春日山城に赴き、上杉謙信公に頼りたるに始まる。謙信公が厚く之を保護せしことは、公の善行の一端として傳はる所にして、史料に依つて徵證することを得べし。遺孤長じて長野孫左衛門尉業廣と稱す。時に前管領上杉憲政公は春日城に住し、其所を御館と呼びなし、が、長野氏の邸地は其傍に在りしを以て今猶ほ小字に長野屋敷なる名稱を存すと云ふ。長野氏は後、春日山城下より越後福島城下に移り、徳川氏の初め、越後高田築城に際し更に高田に移り、爾來三百有餘年を閱し、余に及びて實に十四代を數ふ、徳川治世の間、高田藩は數々其主を更へたりと雖も、長野氏は家柄の故を以て依然として特別の待遇を受けたることは、全く祖先の餘徳に因るものと云ふべし。

右にて同家の經歷の一斑を知ることが出来やう。尙ほ同家には多數の古文書を有せられ、箕輪保存會創設の舉あるや其の關係を有する寫眞に解説を附して十數通を寄贈されたと云ふことである。

三、下仁田の長野氏

あつた、此の人が元文二年丁巳二月、其の家系を録して長年寺に納めたものが、現に同寺に存して居る、その胤族が同地方には相當に繁衍して居るやうであるが現今餘り聞える程の人もないと云ふことである。

上泉伊勢守秀綱及武藏守信綱

豊國覺堂

上泉氏は藤原(秀郷流大胡族)より出づ、始め大胡信綱と稱せしが、勢多郡上泉村(今の桂萱村の大字)に居住せしを以て、遂に地名をとつて其氏と爲すに至る、其の屋敷跡今尙ほ存せり。(覺堂曰、前橋、大胡の縣道より僅かに三四丁許の處にあり、余往年來再度實査せり。)武藏守信綱は長野業政に仕へ箕輪に居りて(上泉は山莊とす)貢租の事を司り、補佐の功少なからず、少うして小笠原宮内大輔氏隆に就て兵學及び劍道を學び、各々その精妙を究め、亦頗る書道にも堪能なりしと云ふ。天文廿四年八月、上杉輝虎厩橋城に入り領内の巡檢を行ふや信綱之が嚮導たりしと、歿して子・秀綱家督を相續す。

上泉伊勢守金刺秀綱、信綱の子なり、長野信濃守に仕へ箕輪城に居る。弱冠にして愛洲惟孝の門に入りて陰流の刀鎗を學び、更に工夫潤飾して神陰流(又は新陰流)と改稱し、武名日に揚る。永祿六年、信濃守業盛、武田信玄に滅され、箕輪の將士、殉死するもの多數ありしが、甲斐に屬するものも二百餘人に及ぶ、信玄特に伊勢を麾下に致さんと欲して之を招く、伊勢辞して曰く他州に仕官するは臣の願に非ざるなり、今より諸國を修行して益々其術を研磨せんのみと、信玄強ること能はず、伊勢是より一時桐生氏に頼りしが桐生の家亂るゝに及び、門人神後伊豆・疋田文五郎を従へ、足跡海内

に遍ねし。

曾て群衆一空舎を圍みて周章の状あり、伊勢其故を問へば、一罪人童子を奪ひ質とし此に籠れり、進んで捕へんとすれば彼の兒殺されん、退いて之を守るも良策なし、伊勢曰く、我れ自から一計ありと、適々路を過る僧を招き、我れ云々せんと欲す、請ふ其法衣を借せと、乃ち退て頭髮を剃り、僧衣を著し、手に握飯を持ち、直ちに其家に入らんとす、罪人曰く、我に近づきて害を受くる勿れ、伊勢曰く、諾、但童子の父母その飢に迫るを悲しむ、我れ其哀状を見るに忍びず、代り來て食を餽るのみ、乞ふ之を聽せと、即ち握り飯を童子の面前に投じ又飯を捧げて曰く、君も定めて飢ゆるなるべし、之を食ひて一時を凌げと、罪人乃ち手を伸し之を取らんとするや躍て其手を拉き倒して之を縛し、童子を扶けて出づ、僧讚嘆して曰く、君は眞の豪傑にして劔刃上の一句を悟れりと、その掛けたる伽羅を脱して授く、伊勢喜んで之を受け終身大切に捧持せしが、晩年に及び之を筆頭の門人神後伊豆に與へしと云ふ。(或は云ふ、和田兵齋に傳ふ)

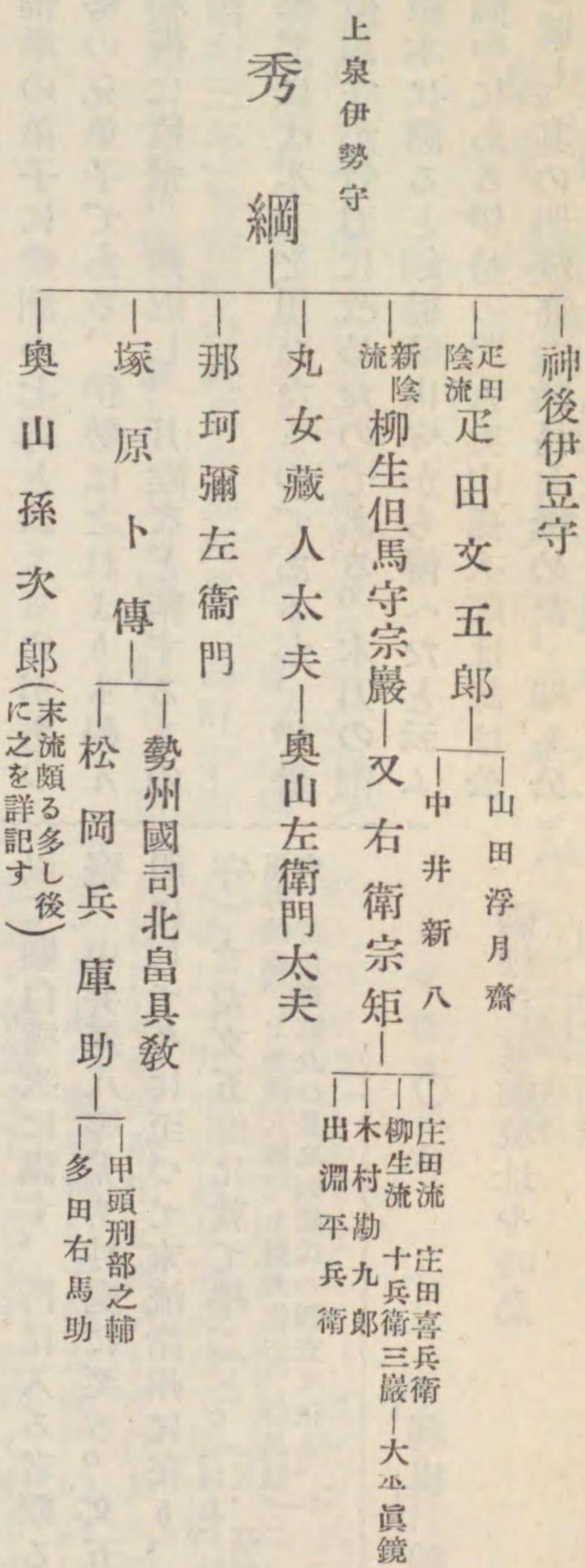
伊勢の劔法四方に傳はり、神陰流の名、都部に籍甚するに至る。秀綱・清洲に至り、信長の家臣に指南し、

又京都に至り、將軍足利義輝に謁し、亦宮中に參内して從四位下に叙せらる。大和の柳生但馬守父子、塚原卜傳、丸女藏人、岡本半助、那珂彌左衛門、奥山孫次郎等、皆其門より出づと、老後歸國し、天正五年病て歿す、享年詳かならず。

(古戦録云、伊勢・和州柳生宗嚴の許に老病し、今に墳墓を遺せりと、後考を俟つ)

武功雜記(三)に曰く、兵法づかひの上手に上泉伊勢と云ふもの、虎伯(一に小伯、即ち正田文五郎のと)と云ふ弟子をめしつれ、和州へゆく、時に柳生氏(但馬守親父)上方にて兵法無類の上手なり、幸と思はれ、上泉を呼んで木刀を所望し見て、心をかしく思つて、上泉と試合を望む、上泉・さらばまづ虎伯とあそばせよと再三辭退す。柳生則ち虎伯とつかひしに、虎伯それにてはあし、とて、三度まで柳生を打、そこにて是非上泉と試合を致したしとのぞむ、上泉辭退しかねて、向ふやいなや、其大刀にては取申とて取る、依之柳生氏大に驚き上泉を三年まで留置、新陰の秘流を傳授す、其後上泉暇を乞て關東へ下る云々。(記者曰、尙ほ三州牛久保にて山本勘介と試合の事を叙すれど今取らず)

神・陰・流・系・圖



上泉氏の一族其他の逸事

▲伊勢守の父は憲繩と云ひ、大胡の城主であつた。伊勢守は代々通り名である、父の名は世間で信綱と書くが憲繩と云ふのが眞である。嘗て上洛して足利將軍に謁し、後ち四方を遊歴し、再び歸洛し其子を引連れて禁裏に參内し、從四位下武藏守に、子は從五位下常陸介に叙せられたことは空前の光榮と稱すべきである。

(覺堂曰、此項尙後考を俟つ)

▲伊勢守秀綱の弟に上泉憲元と云ふ人がある、主水と稱し、武田信玄に事へて武名があつた、武田氏滅亡後京都相國寺々中に幽居して居りしが、幾くもなく會津

城主上杉景勝の家臣、直江兼續が其主に薦め、祿三千石を給せられしが、長谷堂攻の時、軍利を失ひしも憲元一步も卻かず、敵數十人を擊殺して終に戦死せしと傳ふ。

▲伊勢守秀綱は若年にして長野氏十六槍の一人と呼ばれ、殊に安中合戦の時には、上州第一槍と云ふ感狀を貰ひしと、壯年に及ぶに隨ひ、武術も追々上達し遂に箕輪に道場を開いて劍客を集むるに至る、其の盛時には千五百餘名の門人があつたと云ふ。神後伊豆守小笠原玄信、正田文五郎、塚原卜傳などを其の門から出せり。因に流統系圖中に磯端伴藏を脱して居るが之

も確かに門人である。

▲我國の剣道を組織立つたものにしたのは飯篠山城守で、之を大成したのは上泉伊勢守であると申されて居る。伊勢は山城守の高弟で、松本備前守にも學び、愛洲惟孝(又は移香とも書く)の陰流をも學び、勿論最初は其の父君より誨へられ、之を集めて獨創の剣道を完成したのであるが、流名を神陰(又は新陰)流とつけたのを見ても、主に力を得たのは陰流であつたことが推察できる。

▲山城守の流名は神道流である、惟孝は禪宗の名僧で不世出の劍豪である、日向の鶴戸の窟に參籠して鶴戸大權現に祈誓し、權現が猿身を現じて劍法の神秘を傳へ給ふた、惟孝の弟子に愛洲小七郎と云ふものがあつた。即ち伊勢の兄弟子である、伊勢は之れよりも學んだ、陰流の秘術に猿飛、燕返し、月陰など稱するものがある。

▲古來劍を學ぶには木刀を用ひたものであるが、伊勢の門人柳生但馬守が竹刀に改めたのである。木刀の削りやうは其根本に溯ると劍篠崎山守から傳へたと云ふ▲前掲の系圖中にある伊勢の門人奥山孫次郎は諱は公重・休賀齋と號し、其の門流亦た隆昌を極めた、即ち公

重之を小笠原長治に傳へ、長治之を神谷真光に傳へ、真光之を高橋重治(彈正左衛門・直翁と號す)に傳ふ。重治は直心流の劍法と稱す。其門に山田光徳(左衛門尉・一風齋と號す)あり、光徳・直心影流の劍法を起す、光徳の第三子長沼國卿(四郎左衛門)劍法を父に學ぶ、國卿の門に藤川近義あり、近義・通稱は彌司郎兵衛、沼田城主土岐侯に仕へ、劍を學ぶ二十年、遂に其の精妙に達す、江戸下谷に道場を開き、四十餘年間業を授け、及門のもの三千と號す、實に寛政の頃に於ける江戸劍客の白眉たりしと云ふ。

▲足田文五郎は上泉秀綱の甥にして小伯(又は虎伯)と號す秀綱に従て諸州を歴遊し、術の妙旨を極む。後其技を以て關白秀次に謁す、門に入る者頗る多し、山田浮月齋、中井新八等尤も妙處に至る。文五郎は足田陰流の祖にして今に至つて末流諸州に在り、柳生宗嚴(美作守)また文五郎に就て學ぶと。(以上、日本人名辭書、古事類傳、古戦録、上毛偉人傳、上野人物志、群馬縣史、群馬郡誌及び長島類藏氏の調査に依る)

利根 鶴 淵 螢 光

雨細き箕輪城址や時鳥

赤穂 義士 堀部安兵衛かたみの庭園

上毛新聞記者

小茂 田 青 水

群馬郡箕輪町に義士傳中に名高い堀部安兵衛が造つた庭園が今尚ほ保存されて居ると云ふので、記者は四月十三日(昭和三年)箕輪町の祝典に參列後、同町字西明屋の下田恭介氏を訪問し、親しく其庭園を觀せて頂きました。

庭園は餘り大規模のものではありませぬが、園内西南隅には幹の周圍六尺五寸に餘る大楓が一本と外に同四尺七八寸の楓が三本、其北へ數間隔て、並んで居り下には瓢箪形の池に清水を湛え、中央には築山があつて、其上には年ふりたる躑躅が數十株、悠然根を張つて居る、其外に松やマキ其他樹木が如法に植られ、其周圍は土藏と塀とで圍まれ、下は苔むして、見るから随分古いものであるのを偲ばせました。

其奥まつた座敷に於て下田氏の談を聞く、曰く「當家は私て丁度十三代目で、先祖は下田大膳と云ひ、長

野氏の家臣でありました、堀部安兵衛の當家へ參られたのは、三代目下田重兵衛忠矩と云ふ人のころで、安兵衛はまだ中山姓を名乗つて居た頃でありました。安兵衛は越後新發田を浪人して江戸へ出る途中、上州へ來て馬庭の劍客樋口十郎左衛門の許に暫らく身を寄せ劍道の修業をして居られたのであります。

其樋口氏は當時年々一二回は箕輪へ來られ、當家に約二ヶ月位づ、滞在し、當地の門弟に劍道を指南して居られましたとの事で、其記録も多少は残つて居ります。其ころ安兵衛は樋口先生に従つて當家へ來り、滞在して居りましたとの事で、其の時に好むところから庭園を築造して呉れたのであります。勿論安兵衛一人で作つたのではなからうと思ひますが、偶々此の事を聞き込んだとて先に來た人々の内には、此の庭園の築造法は室町時代から元祿時代の方式に因つたものであつて、その頃の遺物に相違ないと種々の方面から説

明され、又立證された方もありました。

□
ですから安兵衛は馬庭と箕輪とて剣道を修業して後江戸へ出て、堀部家の養子となつたことは有名のお断りして、後遂に義士傳中の人となつたのでありませうが

性来赤いものを好んだ方と見へ、平素赤鞘の大刀を携へた事なども講談でよく聞きますが、當家へ残した楓の如き、年々十一月中旬頃は全部が紅葉して美事であり、赤い心を示して居る様にも思はるゝ節があります』と諄々として語られた。

箕輪城址本丸御前曲輪古井戸出土の五輪塔について

(昭和二年十一月發行、上毛及上毛人第百廿七號に掲載せしもの)

金古町 内山留一郎

八月十五日(昭和二年)一兒童の城址遊歩によつて後の平地に大なる凹没を發見し、地下約三尺の石積の古井戸と推せられ、事を父に告げた、史蹟趣味に富む父石川種次郎氏は急遽往視して鑑査すると、まがふ方なきそれと察し、箕輪城址史上幾何かの資料もがなと決意し、私財を抛ち翌十六日工をはじめた、しかし獨力よく目的の行進に支障を來さんことを恐れ、町當局を動かし助力奔命の下に連日掘鑿に餘念がない。

幸ひ當時閑散の身なる我徒も、考古癖に動かされて八月二十八日夕、節を曳く、上原勇作將軍揮毫の日露忠魂碑、蕉芭翁の「夏草や兵ともか夢の跡」碑前がすなはち同井戸なのである、長野業政二十一代目の嫡孫であると自稱する群馬郡堤ヶ岡村字菅谷出身なる石版界の名物男福田眞齋業守君はわざ／＼佐波郡茂呂村の住居より來址されて傍證にこれ日も足らざる有様、城下町箕輪に來ると占先生學士様と尊稱されて大持ての有

頂天であり、あまたの關係古文書古記録を多く收藏され、いかなる人にも閱覽を許さずと豪語し、某館に陣取りて共に事に勵んでゐる。

井戸の石積は地下九尺程あり直徑三尺強、二十八日までに約六十五尺ほど掘鑿した、果然涌水點に達しや、當初の目的に到達したるを以て工を打切り解散することとした。驚くべし、出土の墓石百四十六個、最も古きは康元元年二月九日の陰刻ある五輪塔(皆五輪塔)である、傍らに盛勝忠とあり北條時頼が諸國を遍歴し善政を布き秕政を糺弾し、後ち剃髮して最明寺に入つた年で、昭和二年より六百七十二年前である、次に應永四年十月、應永二十四年正月七日、これには梵字の光明眞言があり、上には梵字キリク・大日・阿闍・阿彌陀

の種子がある。

すなはち唵(歸命)阿護伽(不空)尾廬左曩(大日)麻訶母捺囉(大印)麼尼(寶)鉢納麼(蓮華)入縛羅(光明)鉢羅機多野(轉)畔(善提心金)外に死空生、卯月とあり、光明眞言和讃などを見ると五萬諸經を讀むよりも、この一章を唱すると、それ以上の御利益があつて有難いのだと云つてゐる。永享十一年、文明八年二月二日、逆修妙祐禪譽、伊豫□業守、延徳元年十一月速連門、明應八年四月果源精、天文二十一年、天文十四年五月二十日如法海上人等があり、拓本により精確を企圖したいが、今はたゞ肉眼により、おぼろげながら探查をそのまゝ報告するにとどめ、先輩諸賢の一資料となることを得ば幸ひである。(九月一日夜記す)

箕輪城址古井戸出土其他一巡記

(昭和二年十二月發行「上毛及上毛人」第百廿八號に掲載せしもの)

豊國覺堂

■箕輪城址本丸西の一廓、御前曲輪の古井戸より多數の石塔を掘出した顛末並に其の塔面に陰刻してある文

字などに就ては前項内山留一郎氏の一文を掲げたが、其後箕輪町にては殆ど舉町一致にて史蹟保存會を設立

し既に百數十名の有力者を網羅し、會長には同地の名門下田恭介氏が推薦され、又斯學に造詣ある長島類藏氏が、幹部として活動し、清水町長も之を補け、又同所の地主であり、發掘を遂行した石川種次郎氏も頗る趣味を有し、共に保存の事に奔走せらるゝ由を聞いて居たが先頃下田・長島の兩氏は本縣廳に出頭し、右出土品等を史蹟名勝天然紀念物保存法に據り保存するに付指示を請はんとせしに、生憎大圖主任不在の爲め要領を得ず、其の序にて當會にも立寄られたので、兎に角大圖氏の都合を窺ひ、成るべく同行往見すべしと約したることである。

その結果、十一月廿一日に出掛けることに成つた、同行者は前縣史編纂の八木昌平氏、前前橋圖書館長の櫻井菊次郎翁、同現司書佐藤錠太郎氏、勢多郡誌編纂の原田龍雄氏夫れに新進の築城學者福島武雄氏の諸君で、殆ど斯學の元老を網羅して居るは嬉しく、岩神より一路自動車を驅り、三十分許りて己に身は箕輪古城下の客と成つた。

自動車發着所には前記の下田、長島、石井の三氏等出迎へられ、相要して先づ役場に立寄り清水町長等に面し喫茶一番の後、最も同所の史蹟等に精通せる一吏

員の案内を煩はし、歩すること四五丁にして目的地に達した。

道すがら福島氏は説明する、町に正面する——法峯寺の左手——の處は長野氏時代の大口なるべけれど井伊氏に至りては其の南方の白川に面する處に新たに大口口を設けたる痕は歴然として窺はるなど指呼しつゝ、「コトウ門」石垣の間を過ぎ、鍛冶曲輪を経て二ノ丸の北方崖上に至り、石上寺や龍門寺、扱は又陸軍のバラックを展望し、引返へして本丸跡を過ぎ御前曲輪に至つた、此の一廓は多く花卉を植え、上原將軍の日露役忠魂碑や芭蕉翁の句碑などありて公園の設備が大體成つて居る處であるが、其の西南端の處が今回發掘した古井戸の存するところである。

井戸の事や、掘出した石塔の事は前項内山氏の所報の通りで舊きは康元元年より南北朝を経て、應永・永享・文明・延徳・明應より新らしきは天文廿一年に及んで居る、此の一番新らしい天文廿一年が長野信業——箕輪城を築造した——卒去の翌年で今より三百七十六年前であるが、別項に記した長野氏の裔孫と稱する福田眞齋守氏の鑑定では之が信業の墓石だと云ふことで一行の人々も交る／＼之を熟視し、拓本にも取つて

見たが、「爲信業墓」の四文字が紀年と共に陰刻してあるやうにも思はれるが、どうも未だ斷定するまでの確信を得ないので、之は尙ほ慎重に調査考證するの要あるものと信ずる。若し果して信業の墓石とすれば本城址と共に特に永久に保存且つ崇敬すべきものであらう其他の墓石に就ても將來箕輪史蹟保存會の人々と共に十分研究して見たいと思ふ。

記者思ふに、墓石を七十三尺も深き井底に埋めしは業政の歿後、いよ／＼信玄の威歴甚敷、落城決死を覺悟し、祖先の墳墓を敵の蹂躪に委するを残念に思ひ、城側にありし石上寺若くは他の墓所より運び來りて埋藏せしものと信ずる。

尙ほ一言すべきは、信業は天文二十年十一月七日に卒去した、其の翌年に至つて後人が墓石を建立したから爲の一字を冠したものであらう。併したと以後年に建てた供養塔でも其の卒去の年月を刻するのが通例であるのに、其の翌年になつて居るのは如何なるものであらうか、卒年と共に更に調査して見るの要あるは萬々だ。

此處に於て、福島理學士から此城の構造上に就て大體のお話を承はり、夫れから堀を越えて西方に並立せる靈置山や稻荷山を経て西北方に出て三ヶ月堀（所謂馬出し）の趾を見て東に向つて腰曲輪を一巡し城の搦

手を見、夫れより田圃を越え人家の間をのぼり、長野氏の氏神石上神社の遺跡、夫れから其の隣接地なる別當寺の石上寺に至つた。

寺は城の丑寅の方即ち鬼門に位し、代々城主の祈願所であつたが、慶長三年に井伊氏が高崎へ移城に際し寺も亦隨つて移轉したが、而も箕輪の方も敢て廢寺にもしないで今日に及んだものである。然し事實に於ては廢寺同様で軒傾き戸倒れ、荒涼目も當てられぬ有様だ、處が本尊の五大明王の木像や須彌壇や位牌數基は嘗て寺が祝融氏に災せられた際も、幸に免かれ全きを得たと云ふことで其の像の作者は凡手に非ざる者にとらんだ。是等の木像も具眼者の鑑定を請ひ城址と共に永久に保存すべきものではあるまいか。敢て當事者の一考を望む。

同寺境内には珍らしくも乾達婆明王を安置するお堂があり、其傍に乾達婆の石像もある、此の石像の周圍には無数の小乾達婆の石像がごろ／＼して居る、乾達婆と云ふ處からお婆アさんの姿に彫刻してあるのは滑稽だ。お堂に安置してあるのは流石にそんなことは無い、尙ほ門外には延徳三年の紀年ある輪塔があるが、他にも一二基同時代若くは夫れ以上に舊いらしい物が

見える。

同寺を出て、城の東方にある椿名神社跡や相馬里山神社及び其前の古墳を見、下りて地方の傳説に残る爺石、婆石を瞥見し、其の側である石川氏宅に立寄りて石塔と共に出てしと云ふ腐朽せる短刀の折れ、其他一二點を拜見し茶菓を頂き、更に前方の家に立寄りて金字ありしと云ふ石塔の一部、井戸の箱釣瓶などを拜見し、更に下田會長のお宅を訪問した。

下田家は同地方に名高い素封家であるが、特に著名なのは、其の築山が堀部安兵衛の築造したと云ふので之は我が『上毛及上毛人』にも再三記した處であるが好機會であるので拜見を請ふた次第である。

回庭は天然と池水を利用し又古樹木を應用し、極めて幽邃閑雅の趣きがある。特に楓多く、全く眼も醒めん許りに錦繡燦爛たるものがある、掃除能く行届き、新座敷の清潔、茶味の芳香、相俟つて古人の所謂「塵慮一時盡、清風兩腕生」の快感を覺へた。況んや安信鑑定の本山正筆の寒山拾得の幅や鎌倉時代作の達磨の木像「寶祚筭無窮」の銘ある漢鏡、塚出の寶玉類を拜見して眼福を豊かにし得たるに於てをやだ。此處で銘々携へ行きし辨當を開き、飢を充したが腹の蟲がぐうぐ

う云ふも道理、時は午後の三時近くであつた。

回下田家の隣家なる青柳醫師の家は有名なる清水赤城翁——大橋訥庵の父——の配、即ち訥庵先生の母堂の出た家なるなどを語りつゝ直ぐ其前の金龍寺に至つた、此寺は太田山と稱し、太田の金龍寺が常陸の牛久に移轉した後、更に牛久金龍寺の隱居寺として爰所に建立されたもので、茅葺屋根の兩端には中黒の紋が切付けてあり、本堂裏の竹籬には五輪塔が大小二基建つて居る、想ふに開基なり開山なりが新田氏に縁故あるものであろう。

最後に町の東方に鎮座せる八幡宮に額づき、文明六年の紀年ある石燈籠を撫摩しつゝ、同所が古墳の遺址なるとなど承り乍ら、自動車會社に至り、前記諸君子のお見送りを辱うして歸程についた。時に午後正に五時、折柄ポツ／＼降り出したが澤山の事もなく、孰れも無事歸宅した。因に前記各位の厚意を感謝し、且將來の御奮勵を祈る。

昭和三年十月十七日印刷
昭和三年十月二十日發行

【定價金八拾錢】

群馬縣前橋市南曲輪町十九番地

編輯者兼印刷者 豊國義孝

群馬縣群馬郡箕輪町大字西明屋七百二番地

發行者 下田恭介

前橋市堅町百一番地

印刷所 株式會社前橋印刷所

不許
複製

群馬郡箕輪町

發行所

箕輪史蹟保存會

579
122

